

FUJITSU Software

SIMPLIA TF-MDPORT Pro V81L20

ユーザーズガイド 画面操作編

Windows

SIMPLIA-MDPWI32-04-JP81(03)
2024年3月

まえがき

SIMPLIA TF-MDPORT Proは、ソフトウェア開発保守支援システムの一つとして位置づけられ、汎用機・オフコン・UNIX機・PCとの間で、データやソースの流通を支援するツールです。

本書は、SIMPLIA TF-MDPORT Proの機能および画面の操作方法について記述しています。

本書の目的

SIMPLIA TF-MDPORT Proの機能および仕様について理解できることを目的としています。

本書の読者

SIMPLIA TF-MDPORT Proを使用される方を対象としています。

本書を読むためには、以下の知識が必要です。

- ・ 文字コードに関する基本的な知識 (シフトJISコード、EUCコード、汎用機コード、Unicode等)
- ・ ご使用になるOSに関する基本的な知識

本書の構成

以下の構成で記述しています。

- ・ [第1章 概要](#)
SIMPLIA TF-MDPORT Proの概要について説明します。
- ・ [第2章 機能説明](#)
SIMPLIA TF-MDPORT Proの機能について説明します。
- ・ [第3章 操作説明](#)
SIMPLIA TF-MDPORT Proの操作方法について説明します。
- ・ [第4章 画面説明](#)
SIMPLIA TF-MDPORT Proの画面について説明します。
- ・ [第5章 変換仕様](#)
SIMPLIA TF-MDPORT Proの変換仕様について説明します。
- ・ [第6章 レコード抽出仕様](#)
SIMPLIA TF-MDPORT Proのレコード抽出仕様について説明します。
- ・ [第7章 注意事項](#)
SIMPLIA TF-MDPORT Proの注意事項について説明します。
- ・ [付録A 利用者定義変換テーブル](#)
SIMPLIA TF-MDPORT Proの利用者定義変換テーブルの書式について説明します。
- ・ [付録B 代表的なエラーの紹介](#)
SIMPLIA TF-MDPORT Proの代表的なエラーを紹介します。
- ・ [付録C 使用例](#)
SIMPLIA TF-MDPORT Proの使用例について説明します。

本書の表記について

本書では、説明するうえで、次の略記を使用しています。

「Windows(R) 11 Home」、 「Windows(R) 11 Pro」、 「Windows(R) 11 Enterprise」、または 「Windows(R) 11 Education」	→	「Windows 11」
「Windows(R) 10 Home」、 「Windows(R) 10 Pro」、 「Windows(R) 10 Enterprise」、または 「Windows(R) 10 Education」	→	「Windows 10」
「Microsoft(R) Windows Server(R) 2022 Datacenter」、 「Microsoft(R) Windows Server(R) 2022 Standard」、または 「Microsoft(R) Windows Server(R) 2022 Essentials」	→	「Windows Server 2022」
「Microsoft(R) Windows Server(R) 2019 Datacenter」、 「Microsoft(R) Windows Server(R) 2019 Standard」、または 「Microsoft(R) Windows Server(R) 2019 Essentials」	→	「Windows Server 2019」
「Microsoft(R) Windows Server(R) 2016 Datacenter」、 「Microsoft(R) Windows Server(R) 2016 Standard」、または 「Microsoft(R) Windows Server(R) 2016 Essentials」	→	「Windows Server 2016」
次の製品すべてを指す場合 Windows 11 Windows 10 Windows Server 2022 Windows Server 2019 Windows Server 2016	→	「Windows」
「Interstage Charset Manager Standard Edition Agent」	→	「Charset Manager」
「SIMPLIA TF-MDPORT Pro」、または 「SIMPLIA TF-MDPORT Pro (64bit)」	→	「MDPORT」

また、本書では、次のような表記法を用います。

- 16進数には、“0xXX”のような表記を用います。ここで、“X”は16進数字です。桁数は、必要に応じて、2～8桁になります。ただし、16進数で表記していることが文脈から明らかな場合には、“0x”を省略し、単に“XX”のように表記することがあります。
- 値の範囲には、“X～X”のような表記を用います。範囲には、両端の値を含みます。

記号

本書では、以下に示す記号を使用しています。

記号	意味
[]	画面に表示される文字(画面名/メニュー名/項目名/ボタン名)、およびキーボードのキーを示します。 例:[環境設定]画面、[ファイル]メニュー、[項目名]、[OK]ボタン、[Enter]キー

輸出管理規制について

本ドキュメントを輸出または第三者へ提供する場合は、お客様が居住する国および米国輸出管理関連法規等の規制をご確認のうえ、必要な手続きをおとりください。

登録商標について

本書で使われている登録商標および商標は、以下のとおりです。

- Microsoft、Windows、Windows Server、Microsoft Edge、その他のマイクロソフト製品の名称および製品名は、米国 Microsoft Corporation の、米国およびその他の国における登録商標または商標です。
- UNIXは、米国およびその他の国におけるオープン・グループの登録商標です。
- OracleとJavaは、Oracle Corporationおよびその子会社、関連会社の米国およびその他の国における登録商標です。
- Excelは、米国Microsoft Corporationの製品です。
- Microsoft Corporationのガイドラインに従って画面写真を使用しています。
- そのほか、本書に記載されている会社名および製品名は、それぞれ各社の商標または登録商標です。

なお、本文中では、™マーク、®マークは省略しています。

2024年3月

Copyright 1994-2024 FUJITSU LIMITED

目次

第1章 概要	1
1.1 特長	1
1.2 適用のケース	1
1.3 システム構成	2
第2章 機能説明	5
2.1 機能一覧	5
2.2 文字コード・ファイル形式変換機能	6
2.2.1 文字コード変換機能	6
2.2.2 ファイル形式変換機能	7
2.2.3 レコード抽出機能	8
2.2.4 マスク機能	8
2.2.5 プレビュー機能	9
2.3 レイアウト定義機能	9
2.4 データ加工機能	11
第3章 操作説明	14
3.1 操作の基本的な流れ	14
3.1.1 文字コード・ファイル形式変換	14
3.1.2 データ加工	17
3.2 文字コード・ファイル形式変換	21
3.2.1 起動/終了	21
3.2.2 MDPORト変換指示ウィザード	22
3.2.3 変換仕様の指定	23
3.2.4 レコード抽出	23
3.2.5 マスク処理	25
3.2.6 プレビュー表示	29
3.2.7 変換実行	30
3.2.8 変換エラー表示	31
3.2.9 変換指示ファイルの保存	34
3.3 レイアウト定義	35
3.3.1 起動/終了	35
3.3.2 データ形式の指定	36
3.3.3 既存資産の取り込み	36
3.3.4 項目定義行の追加/削除	39
3.3.5 項目定義の編集	41
3.3.6 集団項目の定義	45
3.3.7 反復項目/配列の定義	46
3.3.8 マルチレイアウトの作成	48
3.3.9 COBOL登録集/DDLの出力	54
3.3.9.1 COBOL登録集の出力	54
3.3.9.2 DDLの出力	57
3.3.10 レイアウト定義ファイルの保存	58
3.4 データ加工	59
3.4.1 データ加工機能を起動する前に	59
3.4.2 起動/終了	60
3.4.3 項目移動	60
3.4.4 項目追加、削除	61
3.4.5 形式変換	61
3.4.6 マスク機能	62
3.4.7 JOIN	62
3.4.8 追加結合	63
3.4.9 コピー句生成	63
3.4.10 連続実行	64
3.4.11 実行結果の確認	65
3.4.12 ログファイルの確認	67

3.4.13 加工指示ファイルの保存.....	69
第4章 画面説明.....	70
4.1 文字コード・ファイル形式変換.....	70
4.1.1 メイン画面.....	70
4.1.2 メニュー.....	73
4.1.2.1 [ファイル]メニュー.....	74
4.1.2.2 [表示]メニュー.....	74
4.1.2.3 [ツール]メニュー.....	75
4.1.2.4 [オプション]メニュー.....	75
4.1.2.5 [ヘルプ]メニュー.....	76
4.1.3 ツールバー.....	76
4.1.4 コマンドボタン.....	77
4.1.5 環境設定.....	78
4.1.6 MDPORT変換指示ウィザード.....	80
4.1.6.1 基本情報 (1ページ目).....	80
4.1.6.2 レイアウト定義情報 (2ページ目).....	82
4.1.6.2.1 データ条件設定.....	83
4.1.6.2.2 レイアウト定義ファイルの生成.....	86
4.1.6.3 入出力ファイル情報 (3・4ページ目).....	87
4.1.6.3.1 キー情報指定.....	91
4.1.6.3.2 CSV情報の指定.....	92
4.1.6.4 変換仕様/エラー情報 (5ページ目).....	94
4.1.6.4.1 Charset Manager環境の設定.....	97
4.1.7 プレビュー.....	97
4.1.7.1 プレビュー.....	98
4.1.7.2 [終了]メニュー.....	98
4.1.7.3 [オプション]メニュー.....	98
4.1.7.4 [ヘルプ]メニュー.....	99
4.2 レイアウト定義.....	100
4.2.1 メイン画面.....	100
4.2.2 メニュー.....	101
4.2.2.1 [ファイル]メニュー.....	101
4.2.2.2 [編集]メニュー.....	103
4.2.2.3 [設定]メニュー.....	105
4.2.2.4 [表示]メニュー.....	105
4.2.2.5 [オプション]メニュー.....	106
4.2.2.6 [ヘルプ]メニュー.....	106
4.2.3 ツールバー.....	107
4.2.4 マルチレイアウト定義指定ダイアログバー.....	108
4.2.5 環境設定.....	110
4.2.6 レイアウト定義テンプレート.....	110
4.2.7 項目定義の編集.....	112
4.2.7.1 項目定義テンプレート.....	113
4.2.7.1.1 拡張設定.....	115
4.2.7.2 直接入力.....	118
4.2.7.3 項目属性の種類.....	119
4.2.7.4 外部10進での符号の種類.....	121
4.2.8 基本情報設定.....	122
4.2.9 データ形式指定.....	123
4.2.10 一括設定.....	124
4.2.11 COBOL解析オプション.....	125
4.2.12 C言語資産解析オプション.....	127
4.2.13 COBOL登録集出力指定.....	129
4.2.14 DDL文出力指定.....	130
4.3 データ加工.....	130
4.3.1 メイン画面.....	131

4.3.2 メニュー.....	132
4.3.2.1 [ファイル]メニュー.....	132
4.3.2.2 [表示]メニュー.....	133
4.3.2.3 [ツール]メニュー.....	134
4.3.2.4 [オプション]メニュー.....	135
4.3.2.5 [ヘルプ]メニュー.....	135
4.3.3 ツールバー.....	136
4.3.4 環境設定.....	136
4.3.5 データ加工.....	138
4.3.5.1 入出力情報設定(データ加工共通).....	138
4.3.5.2 項目移動.....	140
4.3.5.3 項目追加、削除.....	141
4.3.5.4 形式変換.....	143
4.3.5.5 マスク機能.....	144
4.3.6 ファイル加工.....	146
4.3.6.1 入出力情報設定(JOIN).....	146
4.3.6.2 JOIN.....	148
4.3.6.3 追加結合.....	150
4.3.7 コピー句生成.....	152
4.3.7.1 入出力情報設定(コピー句生成共通).....	152
4.3.7.2 項目結合.....	153
4.3.7.2.1 結合項目名設定.....	154
4.3.7.2.2 反復要素設定.....	155
4.3.7.3 項目分割.....	156
4.3.7.3.1 分割項目名設定.....	158
4.3.7.3.2 分割数設定.....	159
4.3.8 レイアウト定義ファイルの生成.....	160
第5章 変換仕様.....	161
5.1 文字コードの変換.....	161
5.1.1 変換パス.....	161
5.1.2 1バイト系コード変換.....	163
5.1.3 2バイト系コード変換.....	163
5.1.4 他社コード変換.....	165
5.2 文字列の変換.....	165
5.3 数値の変換.....	171
第6章 レコード抽出仕様.....	173
6.1 条件値の文字コード変換 (文字属性データの場合).....	173
6.2 条件値の数値変換 (数値属性データの場合).....	174
6.3 複数のデータ条件を設定している場合の判定規則.....	175
第7章 注意事項.....	176
7.1 MDPORで扱えるファイル・データ形式.....	176
7.2 文字コード・ファイル形式変換機能に関する注意事項.....	177
7.2.1 COBOLファイルについて.....	177
7.2.2 CSV形式で扱える引用符・区切り文字.....	177
7.2.3 同一コード無変換について.....	178
7.2.4 Charset Managerの使用について.....	179
7.2.5 レコード抽出機能について.....	179
7.2.6 マスク機能について.....	181
7.2.7 プレビュー機能について.....	181
7.2.8 変換エラー表示について.....	182
7.2.9 変換指示ファイルについて.....	182
7.3 レイアウト定義機能に関する注意事項.....	182
7.3.1 レイアウト定義機能で取り込める既存資産.....	182
7.3.2 レイアウト定義機能について.....	185
7.3.3 DDL文出力について.....	186

7.4 データ加工機能に関する注意事項.....	186
7.4.1 レイアウト定義ファイルについて.....	187
7.4.2 JOINについて.....	187
7.4.3 データ加工機能エラー表示について.....	188
7.4.4 ログファイルについて.....	188
7.4.5 加工指示ファイルについて.....	188
付録A 利用者定義変換テーブル.....	189
A.1 利用者定義変換テーブルの書式.....	189
A.2 定義例.....	191
A.3 指定できないコード範囲.....	193
A.4 利用者定義文字の領域(参考情報).....	194
付録B 代表的なエラーの紹介.....	196
B.1 領域溢れエラー.....	196
B.2 コード変換エラー/正しく変換されない.....	197
B.3 数値部エラー.....	199
B.4 符号部エラー.....	200
B.5 利用者定義変換テーブルに関するエラー.....	201
B.6 マスク機能に関するエラー.....	202
B.7 既存資産取り込み時のエラー.....	202
B.8 レイアウト定義内容の誤り.....	203
付録C 使用例.....	205
C.1 文字コード・ファイル形式変換.....	205
C.1.1 汎用機上の一般ソースからのテキスト変換.....	205
C.1.2 データファイルからWindows上のCOBOLファイルへの変換.....	206
C.1.3 データファイルからRDBローダ型(CSV)ファイルへの変換.....	207
C.1.4 RDBローダ型(CSV)ファイルからデータファイルへの変換.....	209
C.1.5 他社汎用機上のデータファイルからRDBローダ型(CSV)ファイルへの変換.....	211
C.2 データ加工.....	213
C.2.1 項目移動.....	213
C.2.2 項目追加、削除.....	215
C.2.3 形式変換.....	217
C.2.4 マスク機能.....	219
C.2.5 JOIN.....	221
C.2.6 追加結合.....	224
C.2.7 コピー句生成(項目結合).....	226
C.2.8 コピー句生成(項目分割).....	228
用語集.....	230

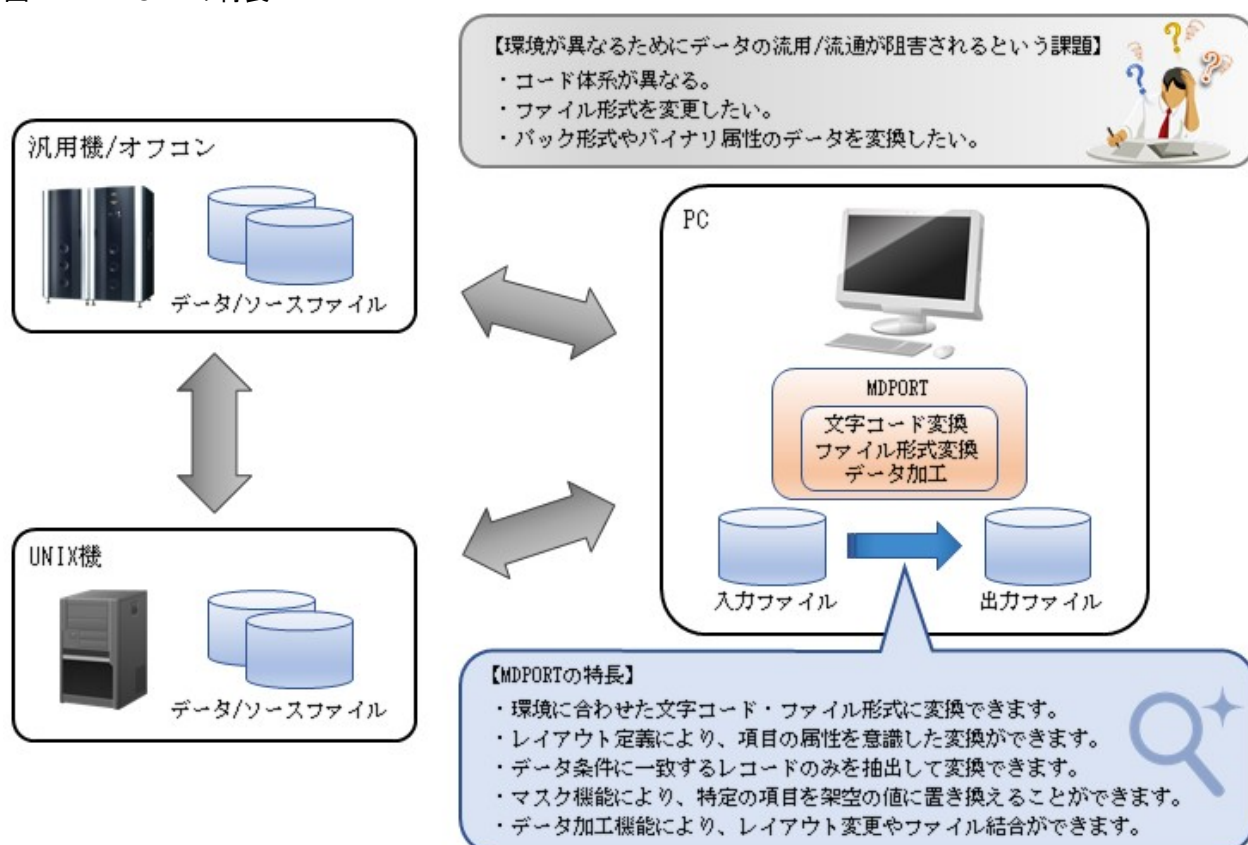
第1章 概要

MDPORTの概要について説明します。

1.1 特長

MDPORTは、汎用機・オフコン・UNIX機・PCとの間で、データやソースの資産を流用させることを目的としており、以下のような課題を解決します。

図1.1 MDPORTの特長



1.2 適用のケース

以下のようなケースでの適用が挙げられます。

- ・ダウンサイジングにおけるデータ移行としての手段
- ・分散開発におけるテストデータの流用
- ・異なるプラットフォーム上のファイル内容の確認手段
- ・データファイルの加工
- ・CSV形式を介しての各種RDBや表計算ソフトとのデータ流通
- ・32bitアプリケーションと64bitアプリケーションのデータ流通

- ・ アライメントの異なるアプリケーション間のデータ流通
- ・ 開発時、システム担当者が運用データ(実データ)にマスク処理を施し、テスト担当者(委託先)にテストデータとして渡す場合 ※1
- ・ 開発時、システム担当者が運用データ(実データ)にマスク処理を施し、データ特性を損なわずにテストデータとして使用する場合 ※2
- ・ 運用時、システム管理者が、データに含まれる特定情報(個人情報等)のみを、秘匿して開示(保管)させたい場合 ※1

※1 適用することにより個人情報漏洩のリスクを低減できる

※2 適用することによりデータの整合性を保持できる

1.3 システム構成

MDPORTのシステム構成図を以下に示します。

図1.2 システム構成図 (文字コード・ファイル形式変換機能)

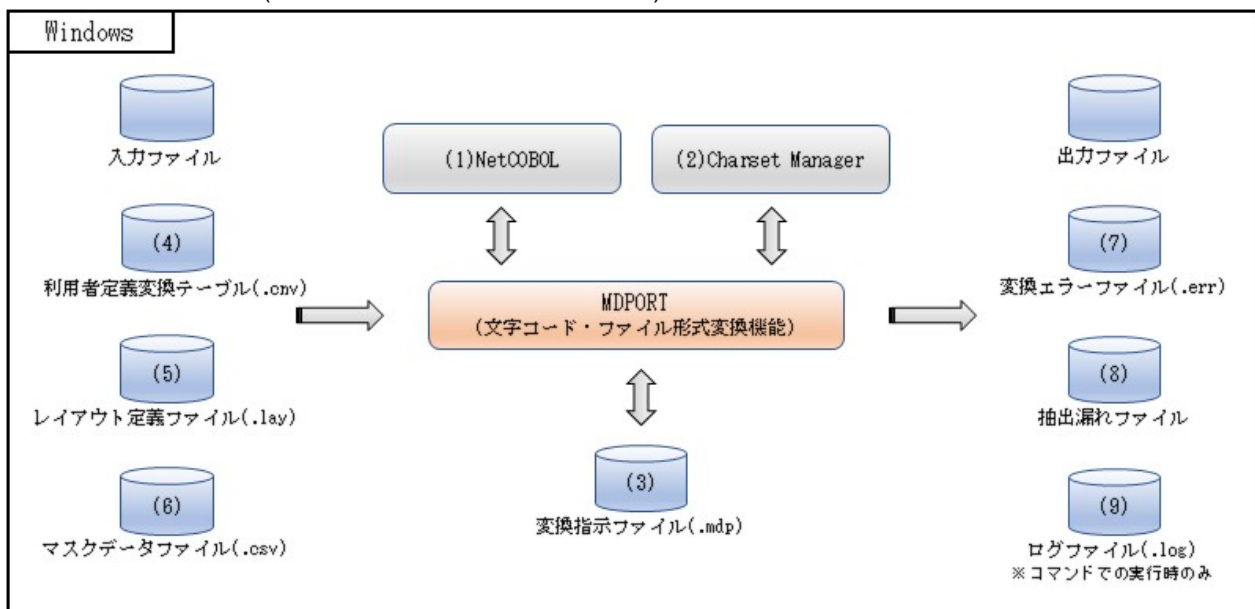


図1.3 システム構成図 (レイアウト定義機能)

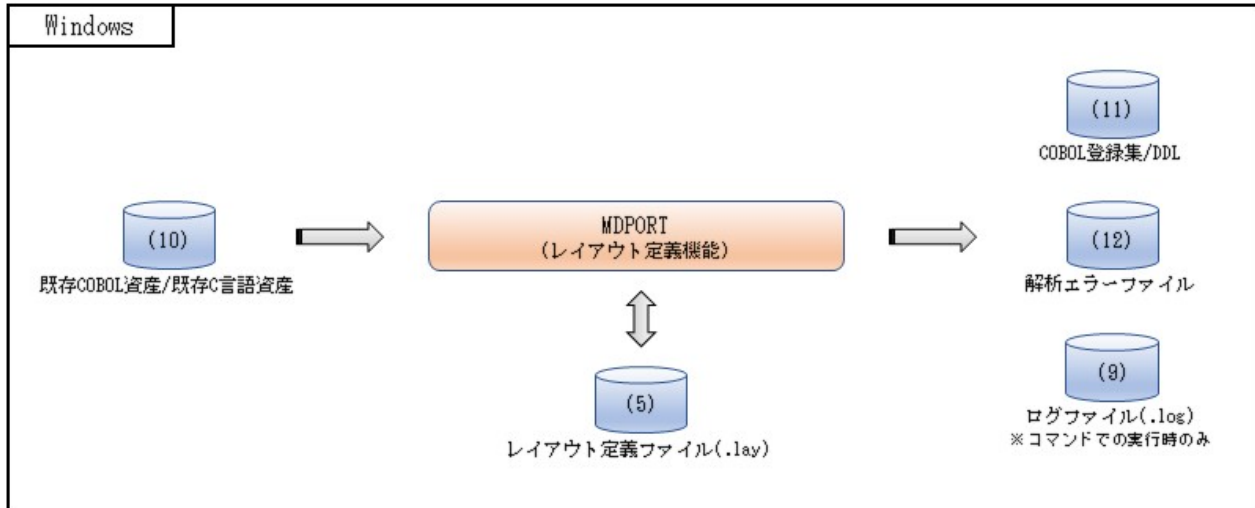


図1.4 システム構成図 (データ加工機能)

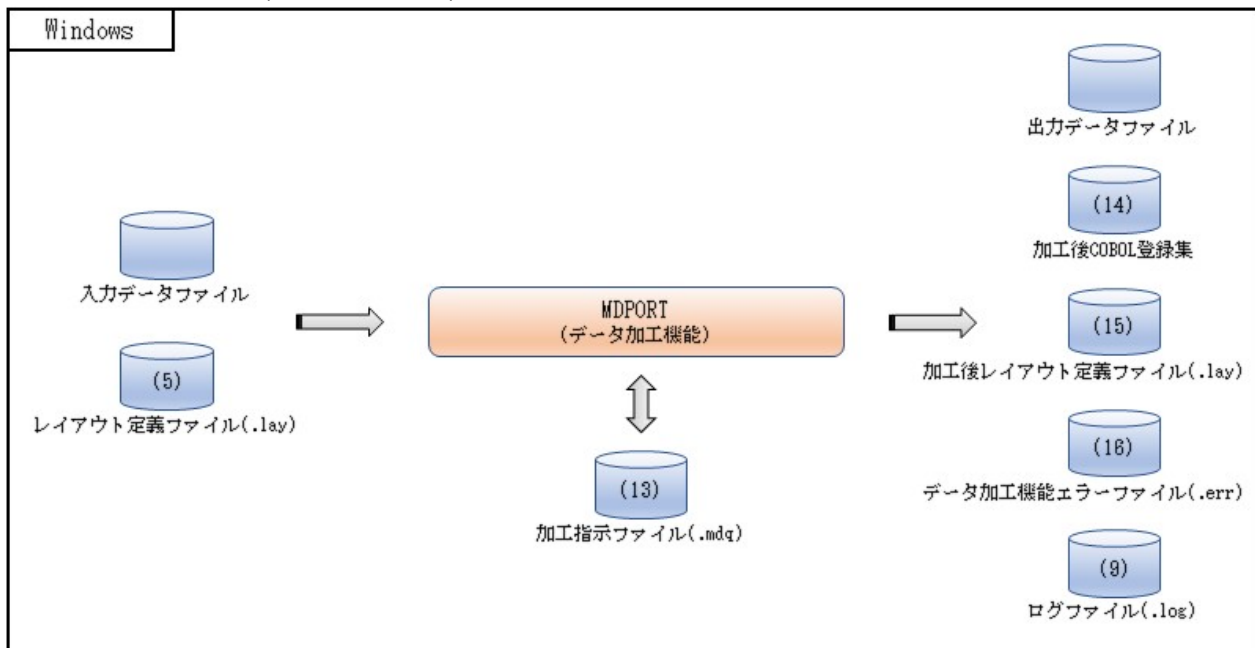


表1.1 補足説明

No	項目	内容
(1)	NetCOBOL	COBOLファイルを扱う場合に必要です。
(2)	Charset Manager	Charset Managerの文字コード変換表の定義に従って変換することができます。 MDPORT側でCharset Managerを使用する指定が必要です。 文字コードの変換パスによって、Charset Managerが必須の場合や、Charset Managerを使用できない場合があります。詳しくは、「第5章 変換仕様」の「5.1.1 変換パス」を参照してください。
(3)	変換指示ファイル	文字コード・ファイル形式変換機能のMDPORT変換指示ウィザードで指定した情報を保存するファイルです。

No	項目	内容
(4)	利用者定義変換テーブル	任意の文字へ変換するための、コードの対応づけを行うテーブルファイルです。 テキストエディタで作成します。 利用者定義変換テーブルの指定は任意です。
(5)	レイアウト定義ファイル	レコードの各項目について、属性や領域長を定義するファイルです。 MDPORTのレイアウト定義機能で作成します。 文字コード・ファイル形式変換機能のデータファイル変換を行う場合に必要です(テキスト変換を行う場合は必要ありません)。 また、データ加工機能を使用する場合にも必要です(データ加工処理の種類によっては、不要な場合もあります)。
(6)	マスクデータファイル	文字コード・ファイル形式変換機能のマスク機能で置き換えたい架空の値を指定するCSVファイルです。 Microsoft(R) Excelまたはテキストエディタで作成します。 文字コード・ファイル形式変換機能のマスク機能を使用する場合に必要です。
(7)	変換エラーファイル	文字コード・ファイル形式変換機能の実行で変換エラーが発生した場合に、エラー情報が出力されるファイルです。
(8)	抽出漏れファイル	レコード抽出機能で、条件に合わないレコードを出力する設定にした場合に、条件に一致しなかった入力レコードが出力されるファイルです。
(9)	ログファイル	バッチ実行機能/コマンド機能の実行時、およびデータ加工機能の実行時に、実行ログが出力されるファイルです(正常終了した場合でも常にログファイルへの出力が行われます)。 なお、画面での変換実行時(データ加工機能を除く)は、ログファイルは出力されません(変換処理の終了後に表示されるダイアログで、変換結果を確認してください)。
(10)	既存COBOL資産/既存C言語資産	既存資産(COBOL資産/C言語資産)の取り込みにより、レイアウト定義を生成するためのファイルです。 レイアウト定義は、既存資産の取り込みをせずに、画面上で直接入力して作成することも可能です。
(11)	COBOL登録集/DDL	MDPORTのレイアウト定義機能で出力されるファイルです。 作成したレイアウト定義の情報から、COBOL登録集、またはDDLを出力することができます。
(12)	解析エラーファイル	既存COBOL資産や既存C言語資産の取り込み時に解析エラーが発生した場合に、エラー情報が出力されるファイルです。
(13)	加工指示ファイル	データ加工機能の設定内容を保存するファイルです。
(14)	加工後COBOL登録集	データ加工機能で、加工後のデータファイルとは別に出力される、加工後のCOBOL登録集(コピー句)です(データ加工処理の種類によっては、出力されない場合もあります)。
(15)	加工後レイアウト定義ファイル	データ加工機能で、加工後のデータファイルとは別に出力される、加工後のレイアウト定義ファイルです(データ加工処理の種類によっては、出力されない場合もあります)。 出力されるレイアウト定義ファイルは、MDPORTのレイアウト定義機能で作成したものと同等です。 なお、バッチ実行時は、加工後のレイアウト定義ファイルは出力されません。
(16)	データ加工機能エラーファイル	データ加工機能の実行でエラーが発生した場合に、エラー情報が出力されるファイルです。

第2章 機能説明

MDPORTの機能について説明します。

2.1 機能一覧

MDPORTには、以下の機能があります。

表2.1 機能一覧

No	機能	概要
1	文字コード・ファイル形式変換機能	<p>文字コードおよびファイル形式を変換する機能です。</p> <p>文字コード変換とファイル形式変換は、一回の変換処理で同時に行うことが可能です。</p> <p>ウィザード形式で、一連の流れに沿って変換指示を行うことができます。</p> <p>それぞれ、以下の機能を持ちます。</p> <ul style="list-style-type: none">・ 文字コード変換機能 異なる文字コード間の変換を行うことができます。 富士通以外の他社コードについても変換可能です。・ ファイル形式変換機能 レイアウト定義により項目属性を意識した変換を行うことで、ファイル形式を変換することができます。 文字コードの変換をせず、ファイル形式変換のみを行うことも可能です。 <p>また、変換を行うにあたり、以下の機能が利用できます。</p> <ul style="list-style-type: none">・ レコード抽出機能 入力ファイルからデータ項目のデータ条件に一致するレコードのみを出力することができます。・ マスク機能 レイアウト定義機能で指定した特定の項目(群)に対して、実データとは無関係のデータに置き換えて出力することができます。 実運用データをテストで用いる際、個人情報(氏名/住所/電話番号/生年月日等)が含まれているため、個人情報流出の危険性があります。 本機能の適用により、個人情報を秘匿して開示できるため、個人情報漏洩のリスクを低減させることが可能です。・ プレビュー機能 事前に変換結果を画面で表示し確認することができます。
2	レイアウト定義機能	<p>レコードのフォーマット情報を定義する機能です。</p> <p>この機能で作成したレイアウト定義ファイルを、文字コード・ファイル形式変換機能やデータ加工機能で使用することにより、項目属性を意識した処理を行うことができます。</p>
3	データ加工機能	<p>データを加工する機能です。</p> <p>「項目移動」、「項目追加、削除」、「形式変換」、「マスク機能」、「JOIN」、「追加結合」の6種類の加工指示が利用できます。</p>

No	機能	概要
		また、レイアウト定義ファイルを入力として、「項目結合」または「項目分割」をして、COBOL登録集(コピー句)を生成することもできます。

参照

MDPORTをコマンドで動作させたり、ユーザアプリケーションに組み込んで(APIとして)動作させたりすることも可能です。

- ・ コマンドの使い方については、「ユーザズガイド コマンド編」を参照してください。
- ・ APIの使い方については、「ユーザズガイド API編」を参照してください。

2.2 文字コード・ファイル形式変換機能

文字コード・ファイル形式変換機能について説明します。

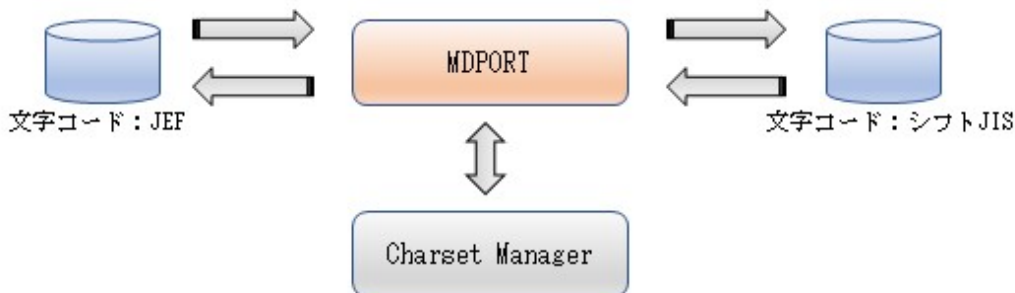
2.2.1 文字コード変換機能

文字コードを変換する機能です。

シフトJIS、EUC、JEF、JIS、Unicode(UCS2 / UTF8 / UTF16 / UTF32)間の相互変換をサポートしています。

また、富士通以外の他社コードとシフトJISまたはUnicode(UCS2 / UTF8)間での相互変換も可能です。サポートしている他社コードは、IBM漢字コード、日立KEISコード、日本電気JIPS(E/J)コード、日本電気AVX日本語コード(シフトJIS変換のみ)です。

図2.1 文字コード変換イメージ



ポイント

システム間の文字コードの管理をCharset Managerで実現している場合、Charset Manager(標準コード変換)を使用した変換が行えます。

また、MDPORTの利用者定義変換テーブルの指定により、利用者定義文字(外字)や拡張文字の変換仕様を任意に指定することもできます。



参照

サポートしている文字コードの変換パスについて

詳しくは、「第5章 変換仕様」の「5.1.1 変換パス」を参照してください。

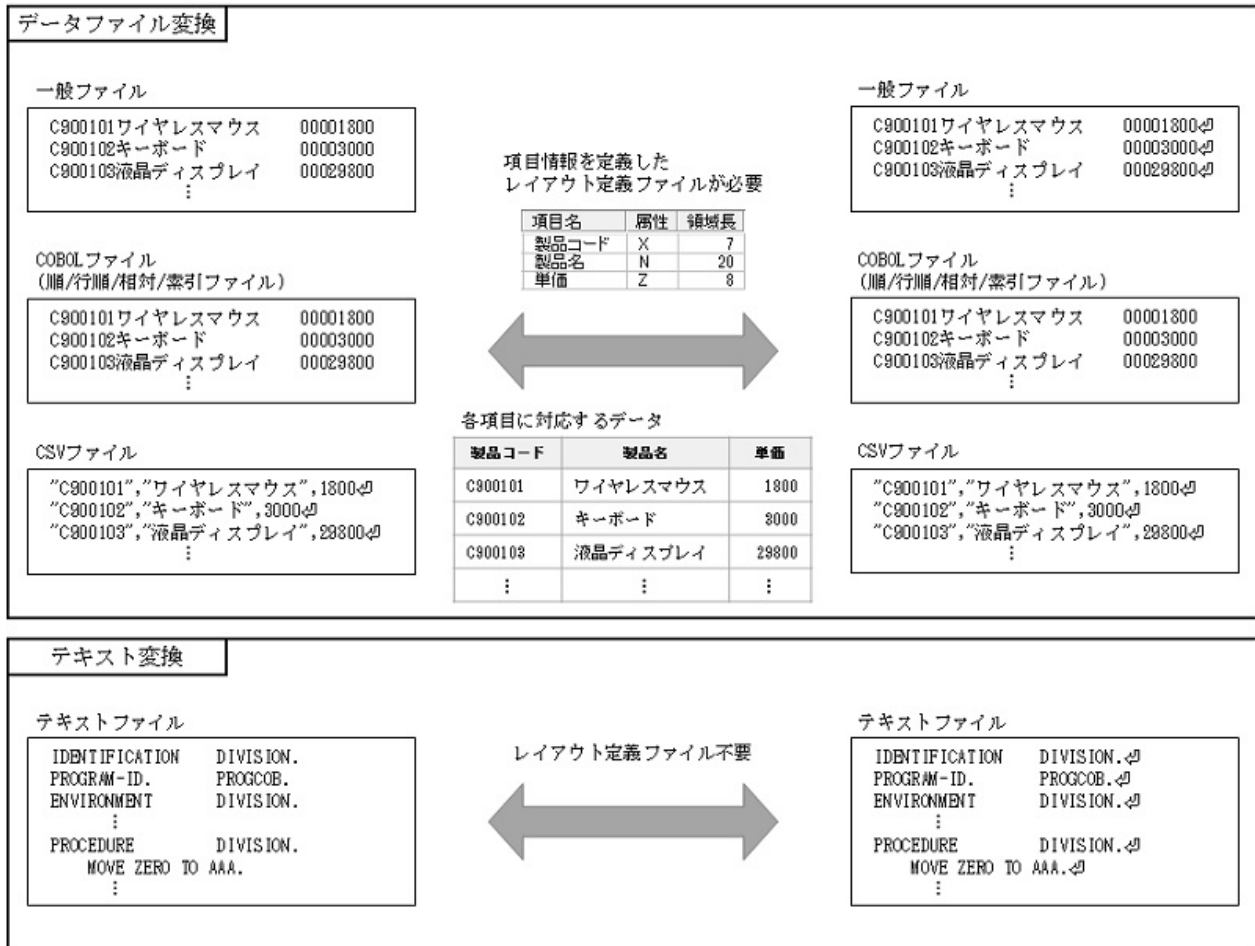
2.2.2 ファイル形式変換機能

ファイル形式を変換する機能です。

MDPORTのファイル変換モードには、項目属性を意識するデータファイル変換と、項目属性を意識しないテキスト変換がありますが、ファイル形式を変換するにはデータファイル変換を使用します。

データファイル変換を行う場合は、レイアウト定義機能で作成したレイアウト定義ファイルの指定が必要となります。

図2.2 データファイル変換とテキスト変換の変換イメージ



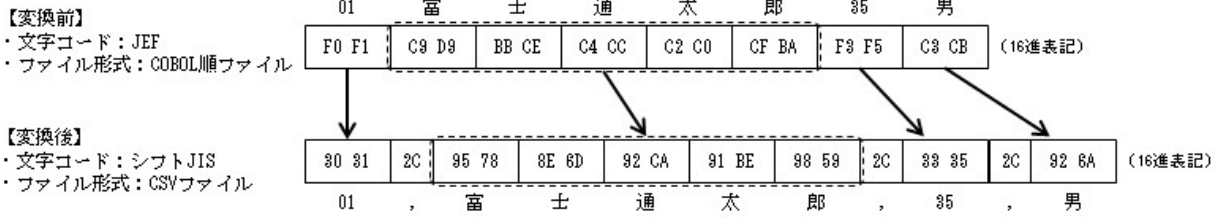
☞ : 改行コード

一般のコード変換ユーティリティではテキストファイルの変換しか行われなため、COBOL特有の内部10進(パック)やバイナリデータの変換ができません。

それに対して、MDPORTのデータファイル変換では、レイアウト定義により項目属性を意識した変換が行えるので、バイナリ形式・COBOL形式(Windows上のCOBOLファイル)・CSV形式の間で、相互にファイル形式変換が可能です。

また、C言語のインクルードファイル中の構造体における、int型のサイズやアライメントを意識した変換を行うことができます。

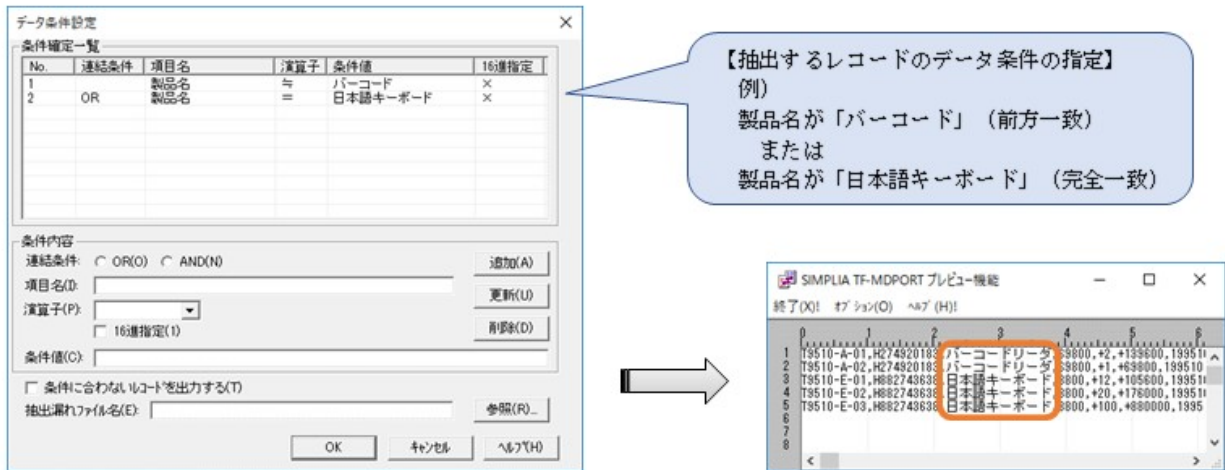
図2.3 文字コード・ファイル形式変換イメージ



2.2.3 レコード抽出機能

入力ファイルの項目に対して設定した、データ条件に一致するレコードのみを対象にして、文字コード・ファイル形式変換を行う機能です。「図2.4 レコード抽出イメージ」のように、データ条件を設定することで、データ条件に一致するレコードのみを出力することができます。

図2.4 レコード抽出イメージ



2.2.4 マスク機能

指定した項目について、入力データとは異なるデータに置き換えて出力する機能です。

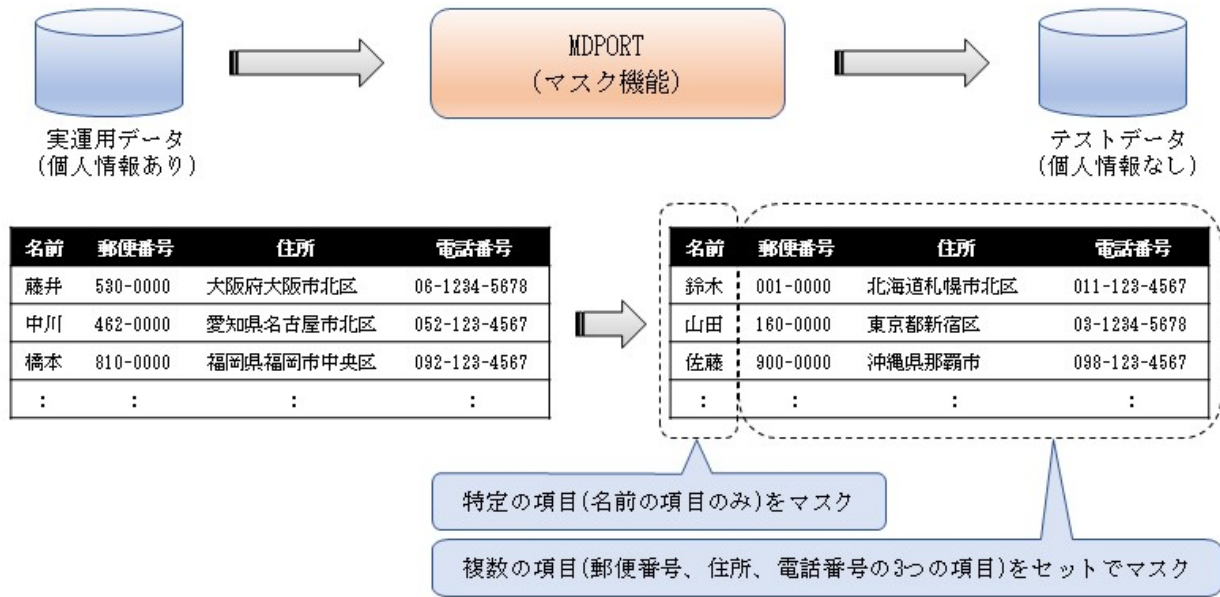
個人情報や機密情報を架空の情報として秘匿でき、テストデータとして利用できるようになります。

特定の項目、または複数の項目について、実運用データの特徴を保持したままマスクすることが可能です。

例えば、「図2.5 マスク処理イメージ」のように、「名前」の項目をマスクすることにより、入力データとは異なる名前に置き換えて出力することができます。

また、「郵便番号、住所、電話番号」の3つの項目をセットでマスクすることにより、変換後のマスクしたデータの項目間のデータの関連性(郵便番号ー住所ー市外局番)を損なわないようにできます。

図2.5 マスク処理イメージ



2.2.5 プレビュー機能

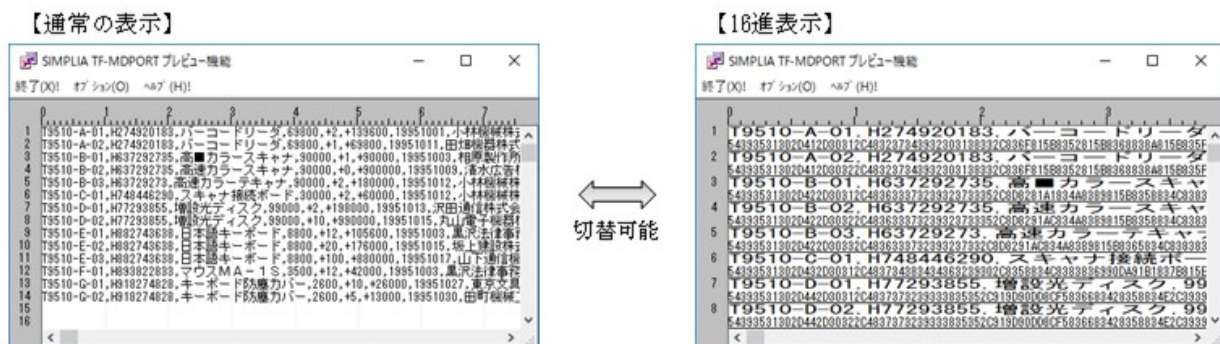
ファイル変換結果を、事前に画面上で確認する機能です。

プレビューでは、先頭レコード100件分の変換結果が表示されます。

文字表記は、出力側コード体系がシフトJISの場合に限って表示できます。

出力側コード体系がシフトJIS以外の文字や、文字以外のデータ値の確認には、16進表示を使用してください。

図2.6 プレビュー表示イメージ



2.3 レイアウト定義機能

文字コード・ファイル形式変換機能のデータファイル変換や、データ加工機能を使用する際に必要となる、レイアウト定義ファイルを作成する機能です。

レイアウト定義の画面で、データ形式、フォーマット情報(入力側/出力側の項目毎の属性や領域長等)を指定します。

既存COBOL資産(COBOL登録集等)や既存C言語資産(インクルードファイル)を取り込んで、レイアウト定義を作成することも可能です。COBOLデータ記述の集団項目の記述やOCCURS句に相当する反復項目、C言語インクルードファイルの配列に対応しています。また、作成したレイアウト定義から、COBOL登録集、またはDDLを出力することもできます。

図2.7 レイアウト定義イメージ

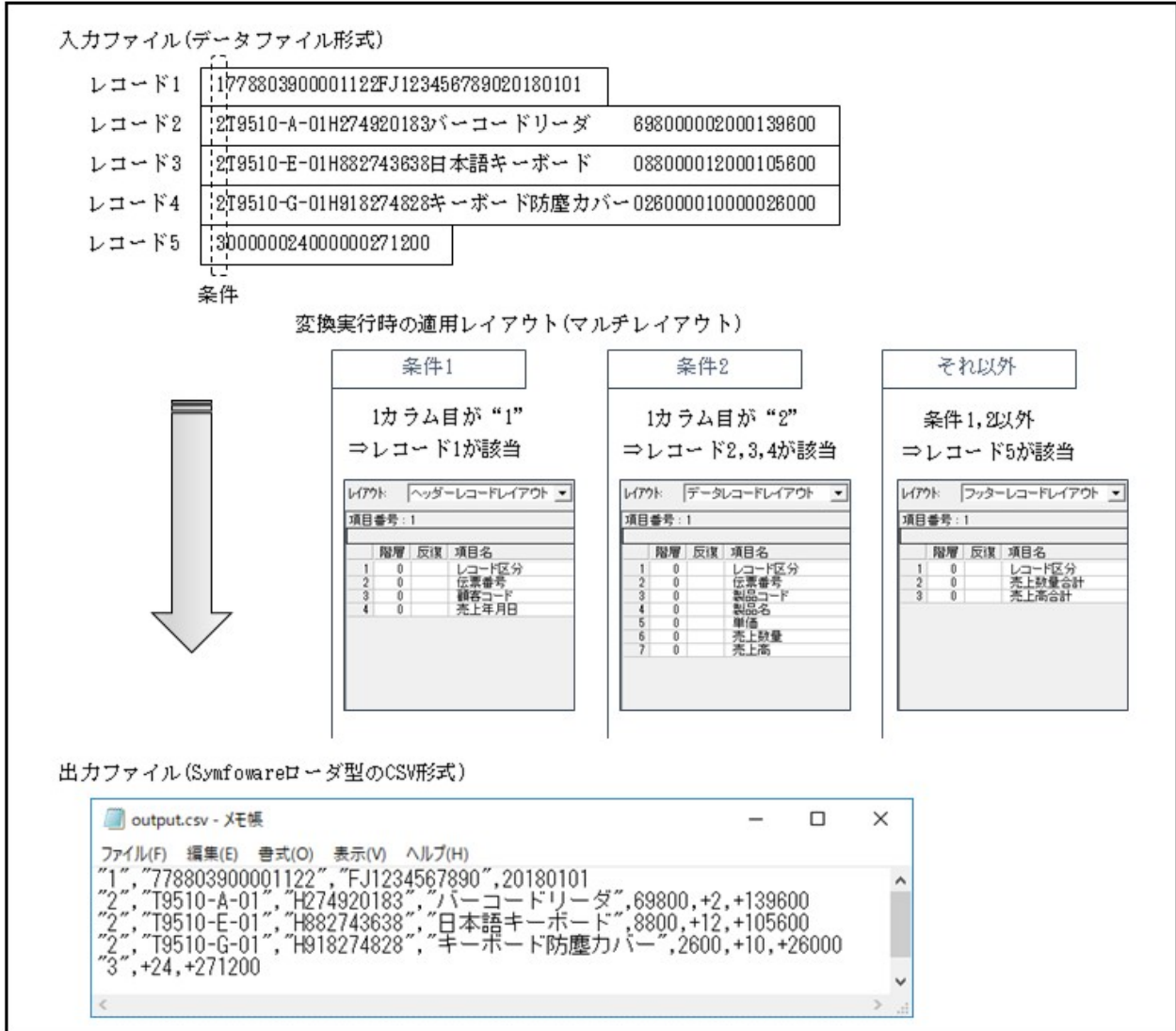
項目番号: 1		項目名: 伝票番号		入力(テキストファイル形式)					出力(CSV形式)					
階層	反復	項目名	属性	符号	位置	領域長	全桁	小数	属性	符号	位置	領域長	全桁	小数
1	0	伝票番号	X		1	10			M					
2	0	製品コード	X		11	10			M					
3	0	製品名	N		21	20			M					
4	0	単価	Z		41	5	5		V					
5	0	売上数量	Z	S	46	4	4		V	S				
6	0	売上高	Z	S	50	9	9		V	S				
7	0	売上年月日	Z		59	8	8		V					
8	0	顧客名	N		67	40			M					
9	0	顧客コード	X		107	10			M					
10	0	都道府県名	N		117	10			M					
11	0	市町村名	N		127	40			M					
12	0	番地	N		167	20			M					
13	0	ビル名	N		187	20			M					
14	0	顧客郵便番号	X		207	7			M					
15	0	顧客電話番号	X		214	20			M					
16	0	出荷予定日	Z		234	8	8		V					
17	0	出荷コード	X		242	10			M					
18	0	運送会社名	N		252	40			M					
19	0	運送方法	N		292	40			M					
20	0	梱包形態	X		332	20			M					
21	0	発送都道府県名	N		352	10			M					
22	0	発送市町村名	N		362	40			M					
23	0	発送番地	N		402	20			M					
24	0	発送ビル名	N		422	20			M					
25	0	発送郵便番号	X		442	7			M					
26	0	受取人氏名	N		449	40			M					
27	0	FILLER	X		489	12			M					

また、マルチレイアウトの定義を行うことにより、複数のレイアウトのレコードが存在する入力ファイルを変換できます。

マルチレイアウトの定義では、レイアウトの適用条件に応じてどのレイアウトを適用するかを指示します。

レイアウトの適用条件に一致しないレコードを出力しないこともできますので、この機能を応用することにより、入力ファイルに対するレコード抽出を行うことができます。

図2.8 マルチレイアウトの定義を利用した変換イメージ



2.4 データ加工機能

データ加工機能は、データを加工する機能です。

以下の加工処理の種類があります。

表2.2 データ加工機能の詳細

分類	種類	概要	入力ファイル	出力ファイル
データ加工	項目移動	1レコード内のレイアウトを変更します。 項目の順番を並び替えることができます。	入力データファイル レイアウト定義ファイル	出力データファイル 加工後COBOL登録集(コピー句) 加工後レイアウト定義ファイル ログファイル
	項目追加、削除	1レコード内のレイアウトを変更します。	入力データファイル レイアウト定義ファイル	出力データファイル

分類	種類	概要	入力ファイル	出力ファイル
		項目の追加や削除ができます。		加工後COBOL登録集(コピー句) 加工後レイアウト定義ファイル ログファイル
	形式変換	項目の領域を拡張することができます。 また、数値属性の項目を、文字属性へ変換することができます。	入力データファイル レイアウト定義ファイル	出力データファイル 加工後COBOL登録集(コピー句) 加工後レイアウト定義ファイル ログファイル
	マスク機能	文字列項目に対して、任意の文字でマスクすることができます。 文字コード・ファイル形式変換のマスク機能のように、項目データの特徴を持った値でマスクすることはできません。 設定が比較的簡単なので、文字列項目を特定の文字に一律で置き換えたい場合に効果的です。	入力データファイル レイアウト定義ファイル	出力データファイル ログファイル
ファイル加工	JOIN	2つのファイルをキー項目の内容に従ってレコード結合します。 INNER JOINまたはLEFT JOINが選択できます。	入力データファイル1 入力データファイル2 レイアウト定義ファイル1 レイアウト定義ファイル2	出力データファイル 加工後COBOL登録集(コピー句) 加工後レイアウト定義ファイル ログファイル
	追加結合	複数のファイルをそのままファイル結合します。	入力データファイル1 入力データファイル2 : 入力データファイル6 (最大6ファイルまで)	出力データファイル ログファイル
コピー句生成	項目結合	レイアウト定義ファイルから、属性の同じ2つ以上の文字列項目を1つの項目に結合し、COBOL登録集(コピー句)を生成します。	レイアウト定義ファイル	加工後COBOL登録集(コピー句)
	項目分割	レイアウト定義ファイルから、1つの文字列項目を2つ以上の属性の同じ項目に分割し、COBOL登録集(コピー句)を生成します。	レイアウト定義ファイル	加工後COBOL登録集(コピー句)

ポイント

複数の加工処理について

複数の加工処理を、同時に組み合わせて実行することはできません(例えば、項目移動と項目追加をしたい場合や、領域拡張とマスク処理をしたい場合、等)。

複数の加工処理を行う場合は、まず先行の加工処理を行い、出力データファイル・加工後レイアウト定義ファイルを、次の加工処理の入力とすることで実現できます。

連続した加工処理が行えるように、データ加工機能には「連続実行」の設定があります。

「連続実行」の設定を有効にすることで、出力データファイル・加工後レイアウト定義ファイルが次の加工処理の入力として画面入力補助されるため、入力ミスの防止や、入力の軽減につながります。

詳しくは、「第3章 操作説明」の「[3.4.10 連続実行](#)」を参照してください。



加工処理イメージについて

「付録C 使用例」の「[C.2 データ加工](#)」を参照してください。

第3章 操作説明

MDPORTの基本的な操作方法について説明します。

3.1 操作の基本的な流れ

操作の基本的な流れについて説明します。

3.1.1 文字コード・ファイル形式変換

文字コード・ファイル形式変換の基本的な流れは、以下のとおりです。

1. 変換対象となる入力ファイルの準備
2. ファイル変換モードの決定
3. レイアウト定義ファイルの作成 (データファイル変換の場合)
4. 変換指示の指定
5. プレビュー機能による変換結果の事前確認
6. 変換処理の実行
7. 実行結果の確認
8. 出力ファイルの後処理

具体的な操作内容を以下に示します。

変換対象となる入力ファイルの準備

MDPORTは一切の通信機能を持っていません。

そのため、汎用機やUNIX機上のファイルを入力とする場合、利用者がファイル転送等を利用してWindows上に持ち込む必要があります。ファイル転送を行う場合の注意として、一切のコード変換を行わないバイナリモード(透過モード)で転送してください。

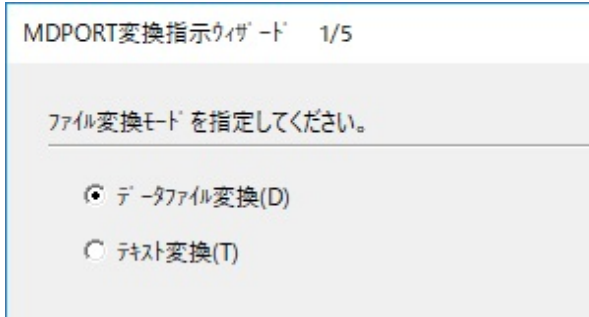
ファイル変換モードの決定

変換するファイルの種類によって、ファイル変換モード(データファイル変換またはテキスト変換)を決定します。

レコードレイアウト(項目属性)を意識して変換を行う場合は、データファイル変換を指定する必要があります。

ファイル変換モードは、MDPORT変換指示ウィザードの1ページ目で指定します。

図3.1 ファイル変換モードの指定 (MDPORT変換指示ウィザード 1/5)



レイアウト定義ファイルの作成 (データファイル変換の場合)

ファイル変換モードがデータファイル変換の場合は、**レイアウト定義ファイル**の指定が必要です。

レイアウト定義ファイルは、データファイルのフォーマットを定義したもので、**レイアウト定義機能**を使用して作成します。

既存の**COBOL登録集**や**インクルードファイル**を基に、レイアウト定義ファイルを作成することができます。変換元または変換先のデータファイルのCOBOL登録集やインクルードファイルを用意しておくと、レイアウト定義ファイルが効率的かつ正確に作成できます。

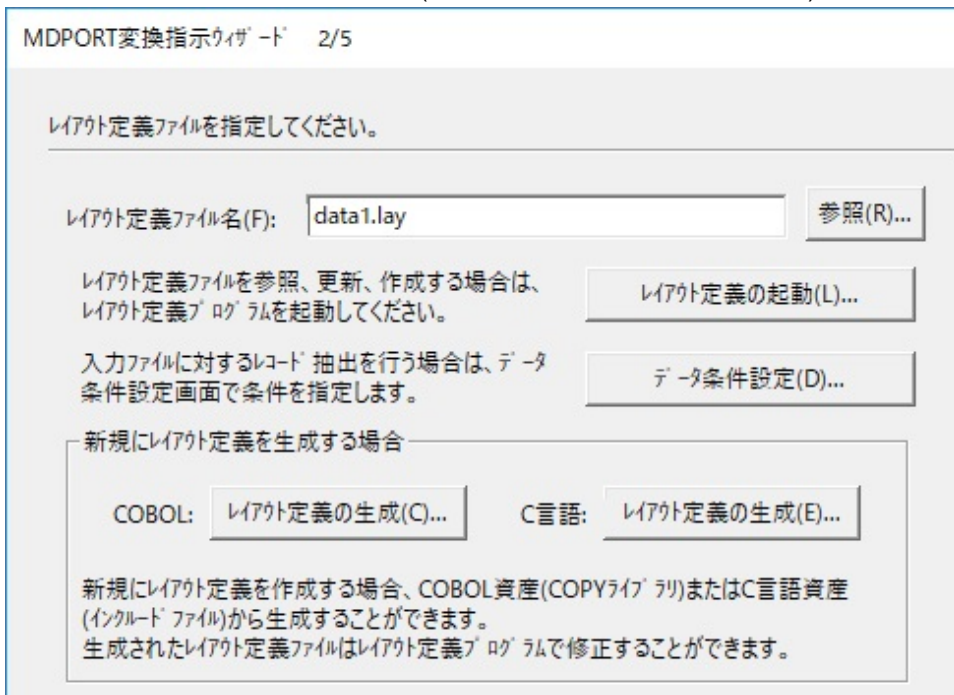
変換対象データに秘匿したい項目が含まれるときは、レイアウト定義の該当の項目に対して、**マスク機能**を適用する指定をしてください。

図3.2 レイアウト定義ファイルの作成

				入力(データファイル形式)					出力(CSV形式)						
	階層	反復	項目名	属性	符号	位置	領域長	全桁	小数	属性	符号	位置	領域長	全桁	小数
1	0		伝票番号	X		1	10			M					
2	0		製品コード	X		11	10			M					
3	0		製品名	N		21	20			M					
4	0		単価	Z		41	5	5		V					
5	0		売上数量	Z	S	46	4	4		V	S				
6	0		売上高	Z	S	50	9	9		V	S				
7	0		売上年月日	Z		59	8	8		V					

レイアウト定義ファイルは、MDPORT変換指示ウィザードの2ページ目で指定します。

図3.3 レイアウト定義ファイルの指定 (MDPORT変換指示ウィザード 2/5)



変換指示の指定

MDPORT変換指示ウィザードで、入出力ファイル等を指定します。

MDPORT変換指示ウィザードで指定した変換指示内容は、**変換指示ファイル**として保存することができ、再実行が可能です。

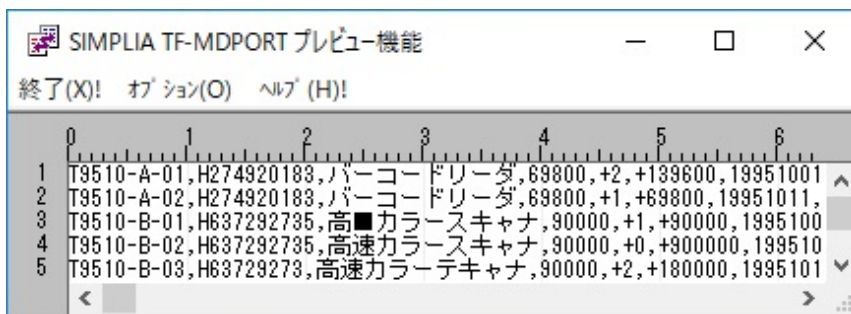
図3.4 変換指示の指定(MDPORT変換指示ウィザード 3/5, 4/5, 5/5)



プレビュー機能による変換結果の事前確認

必要に応じて、**プレビュー機能**を利用することで、すべてのレコードを変換する前に、変換結果を画面上で確認することができます。

図3.5 プレビュー



変換処理の実行

MDPORT変換指示ウィザードで設定した変換指示内容で、変換処理を実行します。

図3.6 変換実行



実行結果の確認

変換処理の終了後に表示されるダイアログで、入出力レコード件数とエラー発生件数を確認します。

変換エラーが発生した場合、[変換エラーファイル](#)を表示し、エラーの内容を確認します。

図3.7 変換処理終了ダイアログ

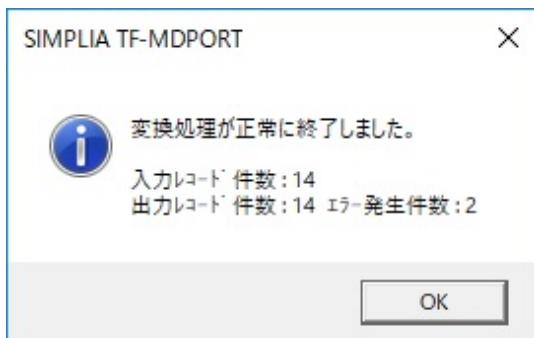
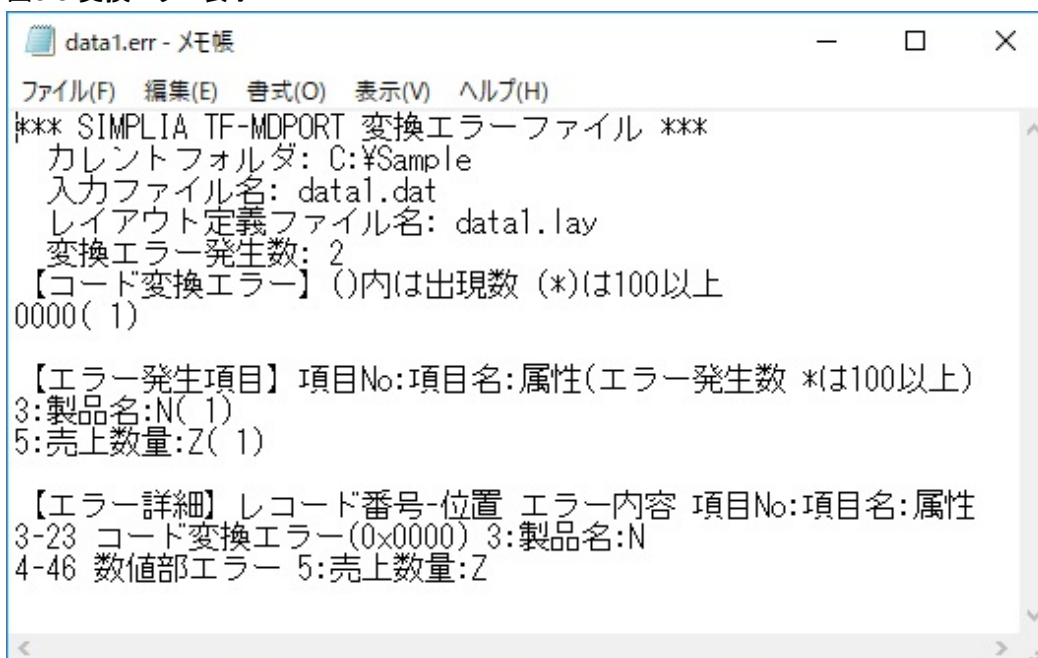


図3.8 変換エラー表示



出力ファイルの後処理

MDPORTは一切の通信機能を持っていないため、出力ファイルが汎用機やUNIX機向けのファイルの場合、利用者がファイル転送等を利用してWindows上から移出する必要があります。

ファイル転送を行う場合の注意として、一切のコード変換を行わないバイナリモード(透過モード)で転送してください。

3.1.2 データ加工

データ加工の基本的な流れは、以下のとおりです。

1. 加工対象となる入力ファイルの準備
2. 環境設定(必須)

3. 加工指示の種類の設定
4. 入出力情報の設定
5. 加工内容の指定と処理の実行
6. 実行結果の確認
7. 出力ファイルの後処理

具体的な操作内容を以下に示します。

加工対象となる入力ファイルの準備

MDPORTは一切の通信機能を持っていません。

そのため、汎用機やUNIX機上のファイルを入力とする場合、利用者がファイル転送等を利用してWindows上に持ち込む必要があります。

ファイル転送を行う場合の注意として、一切のコード変換を行わないバイナリモード(透過モード)で転送してください。

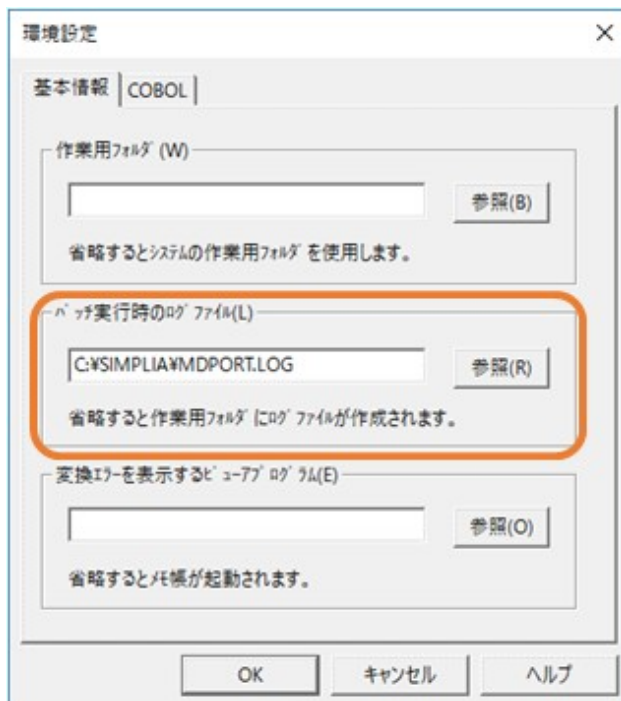
追加結合を除くデータ加工処理では、シフトJISの固定長データファイルしか扱えません。

環境設定(必須)

データ加工処理を行う前に、以下の設定を行います。

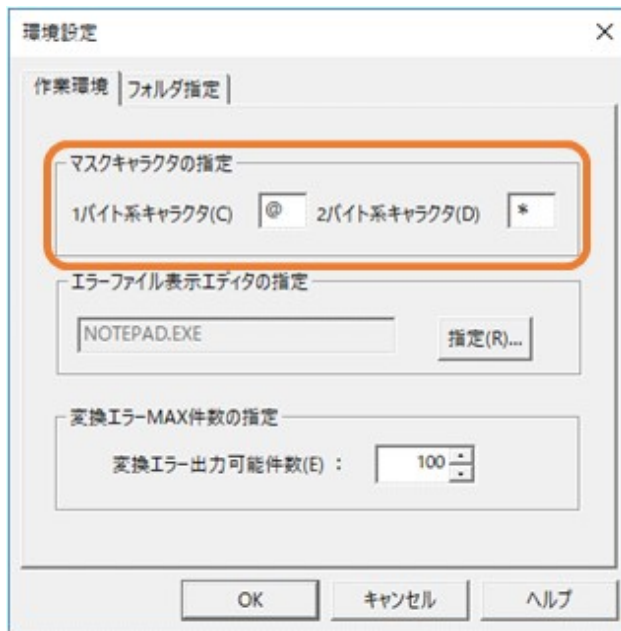
- 文字コード・ファイル形式変換機能の環境設定で、ログファイル名を指定します。
詳しくは、「[3.4.1 データ加工機能を起動する前に](#)」を参照してください。

図3.9 ログファイル名の指定



- ・ (データ加工のマスク機能を使用する場合) データ加工機能の環境設定で、マスクキャラクタを指定します。
詳しくは、「[3.4.6 マスク機能](#)」を参照してください。

図3.10 マスクキャラクタの指定



加工指示の種類の設定

データを加工する内容によって、加工指示の種類を決定します。

加工指示の種類は、データ加工機能の[ファイル(F)]メニューの[加工指示の新規設定(N)]で指定します。

図3.11 加工指示の種類の設定



入出力情報の設定

[入出力情報設定]画面で入出力ファイルを指定します。

ただし、追加結合の加工指示では、[追加結合](#)画面で入出力ファイルを指定します。

追加結合以外の加工指示を行う場合は、[レイアウト定義ファイル](#)の指定が必要です。

レイアウト定義ファイルは、[入出力情報設定]画面で、既存の[COBOL登録集](#)から新規に生成することができます。

レイアウト定義機能で作成したレイアウト定義ファイルを指定することも可能です。

図3.12 入出力情報の設定(項目移動の例)

入出力情報設定 (データ加工：項目移動)

レイアウト定義ファイルの設定

レイアウト定義ファイル名(L) : 参照(R)...

新規にレイアウト定義ファイルを生成する場合 :

レイアウト定義のレコード長 :

入力データファイルの設定

ファイル名(M) : 参照(S)...

出力ファイルの設定

ファイル名(N) : 参照(T)...

加工後コピー句名(O) : 参照(U)...

OK キャンセル ヘルプ

加工内容の指定と処理の実行

加工内容を指定して、加工処理を実行します。

加工指示内容は、加工指示ファイルとして保存することができ、再実行が可能です。

図3.13 加工内容の指定 (項目移動の例)

項目移動

レイアウト定義ファイル名 : C:\Sample\data3.lay

入力項目一覧(移動前)

項目名	属性
伝票番号	X(10)
製品コード	X(10)
製品名	N(10)
単価	Z(5,0)
売上数量	S Z(4,0)
売上高	S Z(9,0)
売上年月日	Z(8,0)
顧客名	N(20)
顧客コード	X(10)
郡道府県名	N(5)

出力項目一覧(移動後)

項目名	属性
製品コード	X(10)
製品名	N(10)
伝票番号	X(10)
単価	Z(5,0)
売上数量	S Z(4,0)
売上高	S Z(9,0)
売上年月日	Z(8,0)
顧客名	N(20)
顧客コード	X(10)
郡道府県名	N(5)

上移動↑(U) 下移動↓(D)

OK キャンセル ヘルプ

実行結果の確認

加工処理の終了後に表示されるダイアログおよびログファイルで、加工処理の実行結果を確認します。

加工処理でエラーが発生した場合、[データ加工機能エラーファイル](#)を表示し、エラーの内容を確認します。

図3.14 加工処理終了ダイアログ

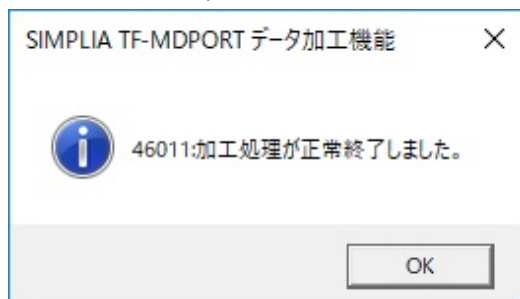
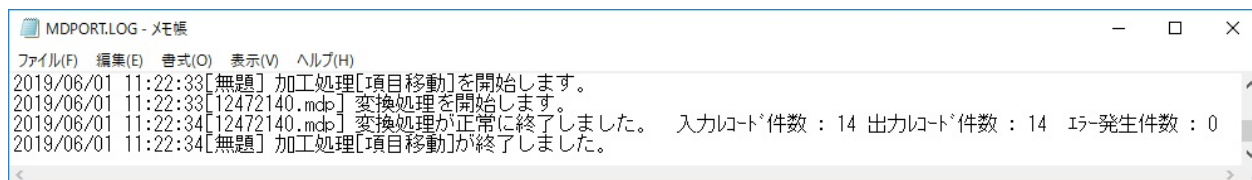


図3.15 ログファイル



出力ファイルの後処理

加工後の出力ファイルを、次の加工処理の入力とすることで、さらにデータを加工することができます。

加工指示の種類によっては、加工後のデータファイルだけでなく、加工後のレイアウト定義ファイルも出力されるので、次の加工処理に利用できます。

MDPORTは一切の通信機能を持っていないため、出力ファイルが汎用機やUNIX機向けのファイルの場合、利用者がファイル転送等を利用してWindows上から移す必要があります。

ファイル転送を行う場合の注意として、一切のコード変換を行わないバイナリモード(透過モード)で転送してください。

3.2 文字コード・ファイル形式変換

文字コード・ファイル形式変換について説明します。

3.2.1 起動/終了

[文字コード・ファイル形式変換機能](#)の起動/終了方法について説明します。

起動方法

以下のいずれかの方法で起動します。

- ・ スタートメニューから「SIMPLIA TF-MDPORT Pro」を起動します。

- ・ エクスプローラ等からMDPORTのインストール先フォルダ配下の実行ファイル(“TFMDP32.EXE”[x86版], “TFMDP64.EXE”[x64版])を実行します。

終了方法

以下のいずれかの方法で終了します。

- ・ [ファイル]メニューの[SIMPLIA TF-MDPORTの終了]をクリックします。
- ・ 画面右上の[×]ボタン(終了ボタン)をクリックします。



参考

終了時に、変換指示内容を保存していない場合は、確認ダイアログが表示されます。

- ・ 変換指示ファイルを保存する場合は、[はい]をクリックしてください。
- ・ 変換指示の変更内容を破棄する場合は、[いいえ]をクリックしてください。
- ・ 画面を終了しない場合は、[キャンセル]をクリックしてください。

3.2.2 MDPORT変換指示ウィザード

MDPORT変換指示ウィザードで、変換実行に必要な情報を設定する必要があります。

MDPORT変換指示ウィザードの表示方法

以下のいずれかの方法で、MDPORT変換指示ウィザードを表示します。

- ・ [ファイル]メニューまたはツールバーの[変換指示の新規設定]をクリックします。
- ・ コマンドボタンの[設定]ボタンをクリックします。



参考

既に設定が完了している変換指示の編集を行う場合は、新規設定ではなく、コマンドボタンの[設定]ボタンから行ってください。

MDPORT変換指示ウィザードの概要

MDPORTの変換実行に必要な情報を、ウィザード形式で指定します。

MDPORT変換指示ウィザードは、以下の5つのページで構成されています。

- ・ MDPORT変換指示ウィザード 1/5: 基本情報(ファイル変換モードおよびカレントフォルダ)の指定
- ・ MDPORT変換指示ウィザード 2/5: レイアウト定義ファイルの指定 (ファイル変換モードがデータファイル変換の場合のみ)
- ・ MDPORT変換指示ウィザード 3/5: 入力ファイル情報の指定
- ・ MDPORT変換指示ウィザード 4/5: 出力ファイル情報の指定

- [MDPORT変換指示ウィザード 5/5](#): コード変換仕様および変換エラー情報の指定

なお、MDPORT変換指示ウィザードで指定した内容は、変換実行の前に画面で確認することができます。

参照

MDPORT変換指示ウィザードの指定内容について

詳しくは、「第4章 画面説明」の「[4.1.6 MDPORT変換指示ウィザード](#)」を参照してください。

3.2.3 変換仕様の指定

以下のいずれかの方法で、利用者定義文字(外字)や拡張漢字・拡張非漢字を任意のコードに変換することが可能です。

- [Charset Manager](#)を使用する方法(推奨)
 1. Charset Managerの文字コード変換表に、対応させるコードを定義します(Charset Manager側での設定)。
 2. 「[MDPORT変換指示ウィザード 5/5](#)」で[Charset Managerを使用する]のチェックボックスをオンにします。
- [利用者定義変換テーブル](#)を使用する方法
 1. MDPORTの利用者定義変換テーブルを、Windows標準のメモ帳等で作成します。
 2. 「[MDPORT変換指示ウィザード 5/5](#)」で[利用者定義変換テーブル]を指定します。

ポイント

Charset Managerを使用する場合、iconv_openの各コード体系(変換元・変換先)のキーワードによって変換仕様が変わります。

「[MDPORT変換指示ウィザード 5/5](#)」の[詳細]ボタンをクリックして、[[Charset Manager環境の設定](#)]画面を開き、iconv_openのキーワードを選択します。

参照

- MDPORTの変換仕様については、「[第5章 変換仕様](#)」を参照してください。
- [利用者定義変換テーブル](#)については、「[付録A 利用者定義変換テーブル](#)」を参照してください。

3.2.4 レコード抽出

[レコード抽出機能](#)の使用方法について説明します。

[データ条件設定]画面の表示方法

以下の手順で、レコード抽出の[[データ条件設定](#)]画面を表示します。

1. 「[MDPORT変換指示ウィザード 2/5](#)」において、[レイアウト定義ファイル名]を指定します。

2. 「MDPORT変換指示ウィザード 2/5」において、[データ条件設定]ボタンをクリックします。

ポイント

[データ条件設定]画面では、以下の設定ができます。

- ・レコード抽出の条件が複数設定できます。
また、複数の条件の連結条件(OR/AND)が設定できます。
- ・レイアウト定義ファイルで定義した各項目を意識して、レコード抽出の条件が設定できます。
- ・条件の比較演算子を設定できます(完全一致/前方一致/未満/より大きい/以下/以上/不一致)。
- ・文字属性の場合は、16進で条件値を設定することもできます。
- ・条件に合わないレコードを抽出漏れファイルとして出力するように設定できます。

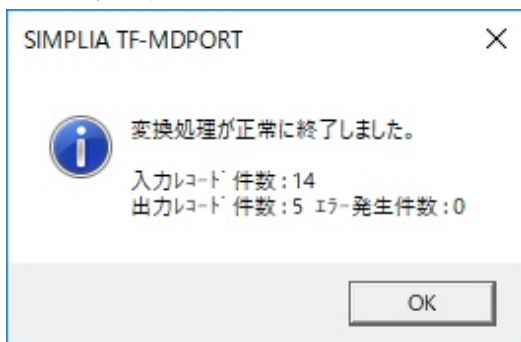
レコード抽出時の変換処理

「MDPORT変換指示ウィザード 2/5」でデータ条件設定を行った場合、変換実行時にレコード抽出処理を行います。
変換処理が終了すると、入出力レコード件数、変換エラー発生件数等が表示されます。

表3.1 変換終了時に表示される情報

No	項目	内容
1	入力レコード件数	入力ファイルのレコード数
2	出力レコード件数	データ条件と一致したレコード数
3	エラー発生件数	レコード抽出を実施したレコード内の変換エラー発生件数

図3.16 表示例



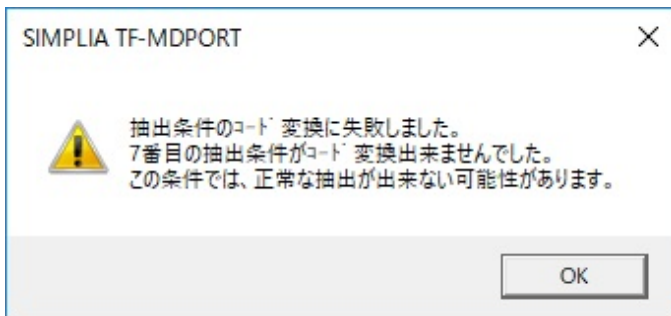
エラー発生時の対応

変換処理中に以下のメッセージが表示された場合は、データ条件設定の条件値を確認してください。

「抽出条件のコード変換に失敗しました。
n番目の抽出条件がコード変換出来ませんでした。
この条件では、正常な抽出が出来ない可能性があります。」

n : データ条件の通し番号

図3.17 表示例



参照

- [データ条件設定]画面については、「第4章 画面説明」の「4.1.6.2.1 データ条件設定」を参照してください。
- レコード抽出の仕様については、「第6章 レコード抽出仕様」を参照してください。
- レコード抽出の注意事項については、「第7章 注意事項」の「7.2.5 レコード抽出機能について」を参照してください。

3.2.5 マスク処理

マスク機能の使用方法について説明します。

マスク処理実行手順

以下の手順で、特定の項目(群)に対して、[マスクデータファイル](#)のデータに置き換えて出力します。

1. [マスク対象項目の指定](#)
2. [マスクデータファイルの格納](#)
3. MDPORT変換実行(※)

(※)マスク処理特有の操作ではありません。変換実行の操作方法については、「[3.2.7 変換実行](#)」を参照してください。

マスク対象項目の指定

[レイアウト定義](#)において、以下の方法で、マスク対象項目を指定します。

指定しない項目については、マスク処理の対象から除かれるため、データは置き換えられません。

複数の項目に関連性を持たせてマスク処理を行う場合、複数の項目すべてをマスク対象として指定する必要があります。

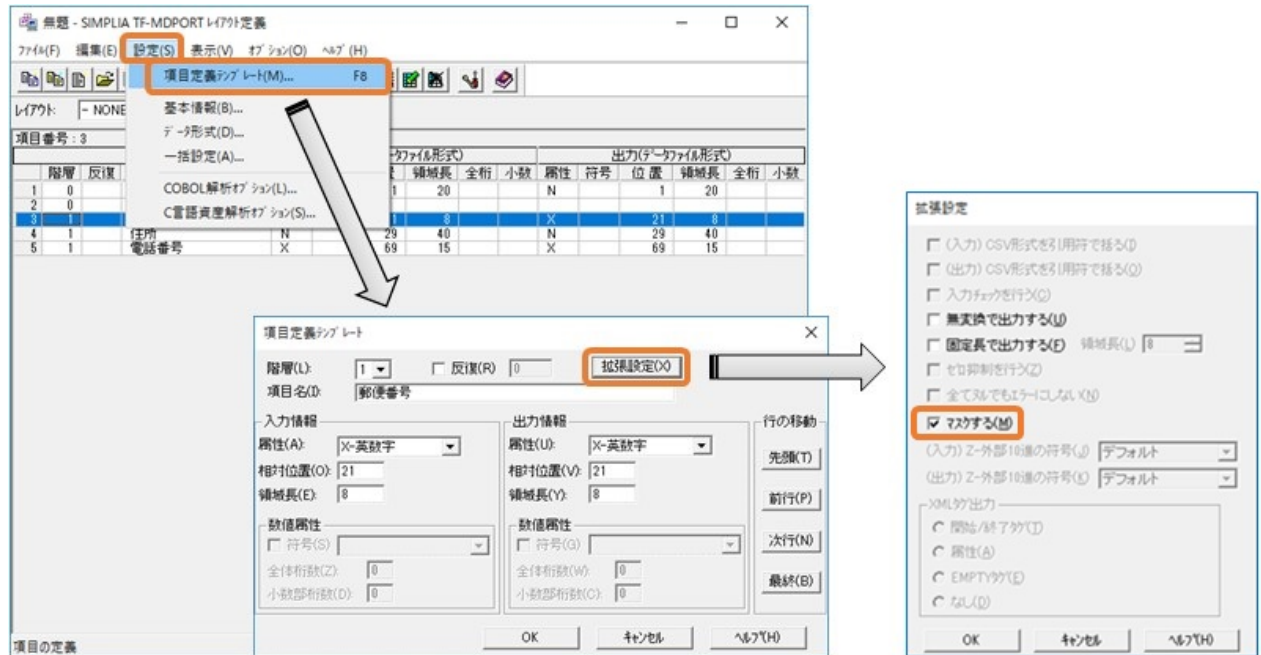
- [項目定義テンプレートによる編集](#)の場合

マスク対象の項目について、[項目定義テンプレート]から[拡張設定]画面を開き、[マスクする]のチェックボックスをオンにします。

マスク対象の項目が複数存在する場合は、それぞれの項目に対して、同様の指定を行います。

[表示]メニューで拡張表示にすると、マスク対象の指定を行った項目については、[拡張]の列に“M”が表示されるため、どの項目に対してマスク対象の指定をしているかを一覧で確認することが可能です。

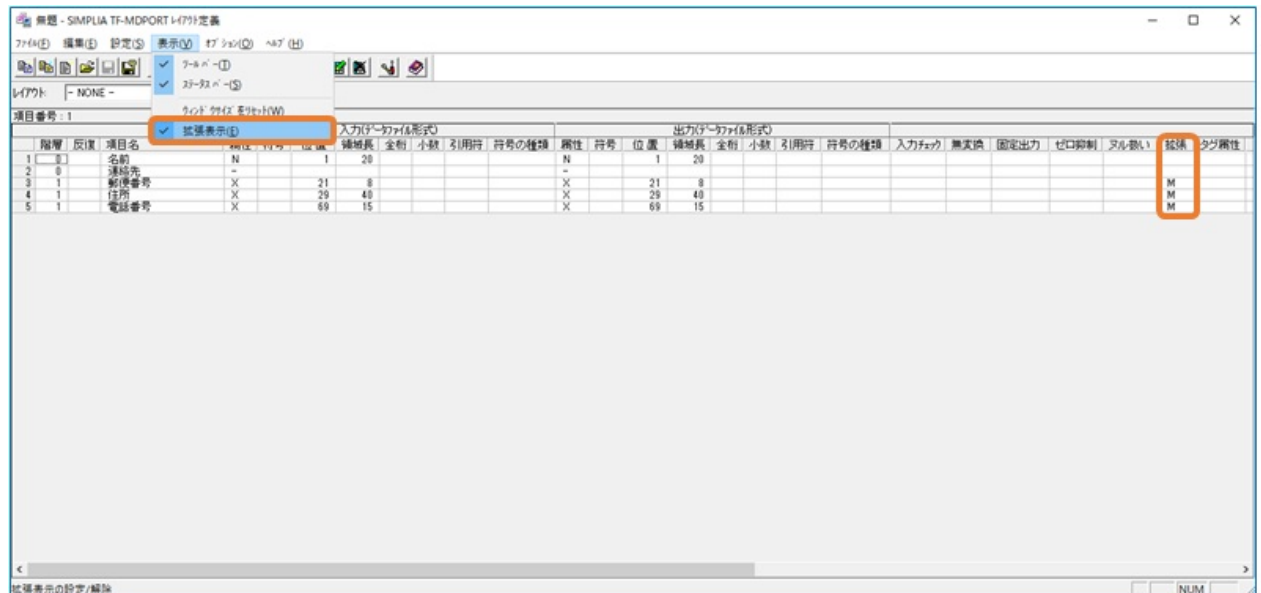
図3.18 指定例



- 直接入力の場合

[表示]メニューで拡張表示にした状態で、マスク対象の項目について、[拡張]の列に“M”を入力します。

図3.19 指定例



参照

レイアウト定義の指定内容については、「第4章 画面説明」の「4.2.7 項目定義の編集」を参照してください。

マスクデータファイルの格納

データを置き換える基となる **マスクデータファイル**は、以下の条件で作成・保存する必要があります。

- 作成したマスクデータファイルは、MDPORTのインストール先フォルダ直下に格納します。
- マスクデータファイルのファイル名は「レイアウト定義の項目名」、拡張子は“.csv”にします。
例えば、レイアウト定義の項目名が「名前」の場合、マスクデータファイルのファイル名は“名前.csv”です。
- 複数の項目に関連性を持たせてデータを置き換える場合は、複数の項目で1つのマスクデータファイルを作成する必要がありますが、その場合のファイル名は、一番先頭の「レイアウト定義の項目名」にします。
例えば、レイアウト定義の項目名「郵便番号」「住所」「電話番号」の場合、マスクデータファイルのファイル名は“郵便番号.csv”です。
- 1回の変換実行において、複数の項目に対して、マスクデータファイルをそれぞれ用意することができます。
例えば、項目名「名前」のマスクデータファイル“名前.csv”と、項目名「郵便番号」「住所」「電話番号」のマスクデータファイル“郵便番号.csv”を用意することにより、1回の変換実行で、4つの項目(名前・郵便番号・住所・電話番号)に対してマスク処理を行うことが可能です。
- マスクデータファイルは、Microsoft(R) Excelまたはテキストエディタで作成/編集します。
テキストエディタで作成/編集する場合、カンマ区切りでデータを入力します。
また、文字コードは「シフトJIS」とします(入力データの文字コードが「シフトJIS」でない場合、マスクデータを入力データの文字コードに内部で変換します)。
- マスクデータファイルの書式について、以下の表に記載します。

表3.2 マスクデータファイルの書式

行	内容	備考
1行目	レイアウト定義の項目名	複数の項目に対して入力する場合は、複数の列に分けて(テキストエディタでの編集時はカンマ区切りで)入力します。
2行目	データ件数	3行目以降に入力するデータ件数(行数)を入力します。
3行目以降	置き換える基となるデータ	2行目のデータ件数(行数)分のデータを入力します。 複数の項目に対して入力する場合は、1行目と同様に複数項目分のデータを入力します。 その際、複数の項目に関連性を持たせたい場合は、関連性を考慮してデータを入力します。

図3.20 例1 (1つの項目の場合)

入力ファイル(実運用データ)

名前	郵便番号	住所	電話番号
藤井	530-0000	大阪府大阪市北区	06-1234-5678
中川	462-0000	愛知県名古屋市北区	052-123-4567
橋本	810-0000	福岡県福岡市中央区	092-123-4567

出力ファイル(テストデータ)

名前	郵便番号	住所	電話番号
鈴木	530-0000	大阪府大阪市北区	06-1234-5678
山田	462-0000	愛知県名古屋市北区	052-123-4567
佐藤	810-0000	福岡県福岡市中央区	092-123-4567

MDPORT
変換実行

特定の項目(名前の項目のみ)をマスク

レイアウト定義ファイル

階層	反復	項目名	拡張
1	0	名前	M
2	0	連絡先	
3	1	郵便番号	
4	1	住所	
5	1	電話番号	

マスクデータファイル

名前.csv - マスク
名前
山田
鈴木

図3.21 例2 (複数の項目の場合)

入力ファイル(実運用データ)

名前	郵便番号	住所	電話番号
藤井	530-0000	大阪府大阪市北区	06-1234-5678
中川	462-0000	愛知県名古屋市北区	052-123-4567
橋本	810-0000	福岡県福岡市中央区	092-123-4567

出力ファイル(テストデータ)

名前	郵便番号	住所	電話番号
藤井	160-0000	東京都新宿区	03-1234-5678
中川	900-0000	沖縄県那覇市	098-123-4567
橋本	001-0000	北海道札幌市北区	011-123-4567

MDPORT
変換実行

複数の項目(郵便番号、住所、電話番号)をセットでマスク

レイアウト定義ファイル

階層	反復	項目名	拡張
1	0	名前	
2	0	連絡先	
3	1	郵便番号	M
4	1	住所	M
5	1	電話番号	M

マスクデータファイル

郵便番号.csv - マスク
郵便番号,住所,電話番号
001-0000,北海道札幌市北区,011-123-4567
160-0000,東京都新宿区,03-1234-5678
900-0000,沖縄県那覇市,098-123-4567

参考

MDPORTのインストール先フォルダ配下には、以下のマスクデータファイルのサンプルが格納されています。

表3.3 マスクデータファイルのサンプル

ファイル名	レイアウト定義の項目名
ビル名.csv	ビル名
運送会社名.csv	運送会社名,運送会社名(よみ),運送会社名(ヨミ)
顧客名.csv	顧客名,顧客名(よみ),顧客名(ヨミ)
住所.csv	住所,市外局番,市内局番,契約番号,電話番号,郵便番号1,郵便番号2,郵便番号
姓.csv	姓,姓(よみ),姓(ヨミ)
都道府県名.csv	都道府県名,市町村名,番地,市外局番,市内局番,契約番号,郵便番号1,郵便番号,顧客郵便番号,顧客電話番号

ファイル名	レイアウト定義の項目名
名.csv	名,名(よみ),名(ヨミ)

参照

マスク処理の注意事項については、「第7章 注意事項」の「7.2.6 マスク機能について」を参照してください。

3.2.6 プレビュー表示

プレビュー機能の使用方法について説明します。

プレビューの表示方法

以下の手順で、[プレビュー]画面を表示します。

1. MDPORT変換指示ウィザードで変換指示を行います。
または、既に設定された変換指示ファイルを開きます。
2. コマンドボタンの[プレビュー]ボタンをクリックします。

プレビューの表示内容

プレビュー機能で、変換結果を変換実行前に画面上で確認することができます。

プレビューでは、先頭レコード100件分の変換結果を表示します。

文字表記は出力側コード体系がシフトJISの場合に限って表示されます。

出力側コード体系がシフトJIS以外の文字、および文字以外のデータ値の場合は、[オプション]メニューの[16進表示]のチェックをオンにして、16進表示で確認してください。

図3.22 通常表示例

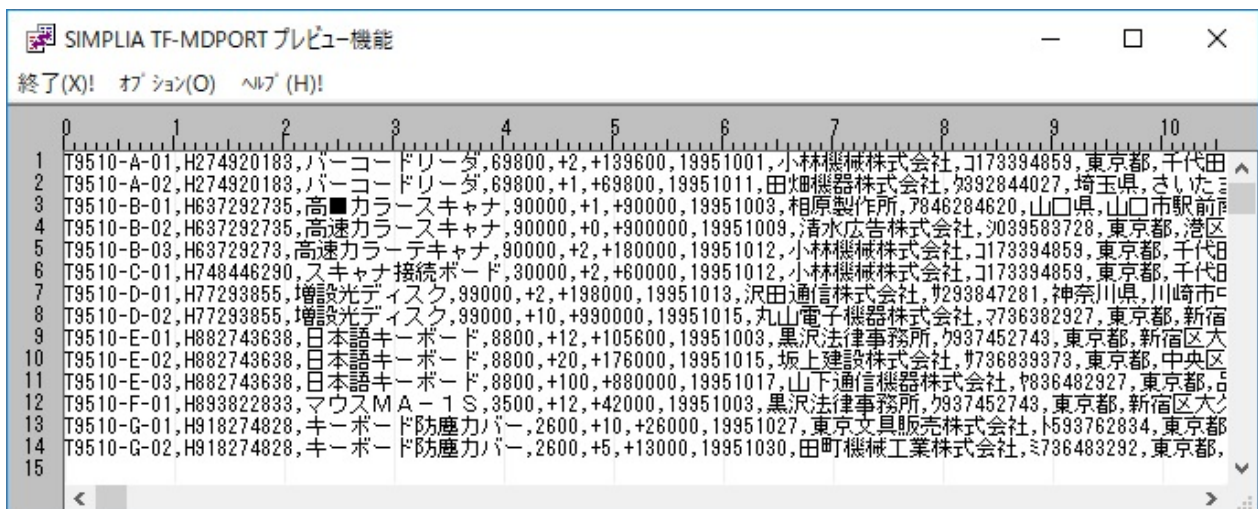


図3.23 16進表示例



参照

- ・ [プレビュー]画面については、「第4章 画面説明」の「4.1.7 プレビュー」を参照してください。
- ・ プレビュー表示の注意事項については、「第7章 注意事項」の「7.2.7 プレビュー機能について」を参照してください。

3.2.7 変換実行

変換実行について説明します。

変換処理の実行方法

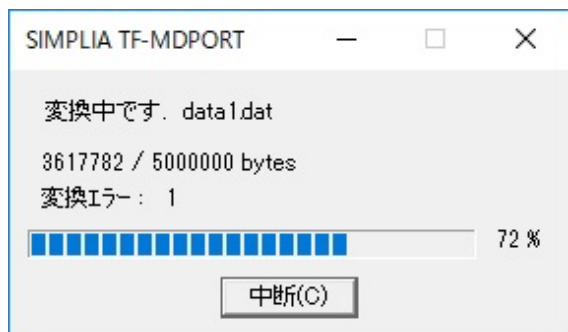
以下の手順で、変換処理を実行します。

1. **MDPORT変換指示ウィザード**で変換指示を行います。
または、既に設定された**変換指示ファイル**を開きます。
2. **コマンドボタン**の[変換実行]ボタンをクリックします。

変換処理

変換処理の実行中は進行状況インジケータが表示され、入力ファイルの処理状況、および変換エラーの発生状況が表示されます。
[中断]ボタンで変換処理を中止することができます。その場合の出力ファイルの内容は保証されません。

図3.24 進行状況インジケータの表示例



変換処理が終了すると、入出力レコード件数、および変換エラー発生件数が表示されます。

図3.25 変換処理終了の表示例 (標準変換の場合)

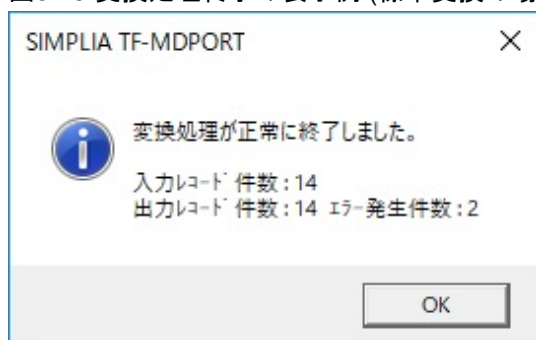


図3.26 変換処理終了の表示例 (Charset Manager変換の場合)



3.2.8 変換エラー表示

変換エラーの表示について説明します。

変換エラーの表示方法

変換中に発生したエラーは、[変換エラーファイル](#)へ出力されます。

以下の手順で、変換エラーファイルの内容を表示します。

1. [MDPORT変換指示ウィザード](#)で変換指示を行い、変換実行を行います。
2. [コマンドボタン](#)の[変換エラー表示]ボタンをクリックします。

ポイント

- MDPORT変換指示ウィザードで変換指示の内容を変更した場合でも、変換実行を行わないと、変換エラーファイルの内容は更新されません。
- 変換実行前でも、プレビューの[オプション]メニューの[変換エラー表示]から、プレビュー表示されている変換結果(先頭レコード100件分)内で、発生した変換エラーを表示することができます。
- 変換エラーファイルを表示するエディタは、[環境設定]画面の[変換エラーを表示するビューアプログラム]で指定することが可能です。指定を省略した場合は、Windows標準のメモ帳で表示します。

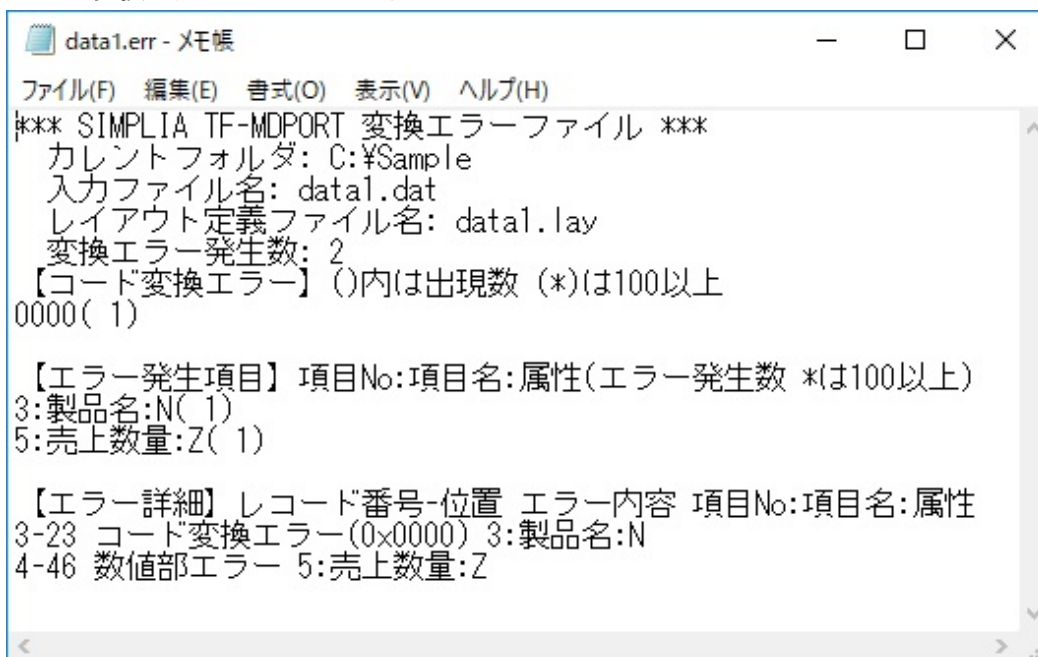
参照

変換エラー表示の注意事項については、「第7章 注意事項」の「[7.2.8 変換エラー表示について](#)」を参照してください。

変換エラーファイルの出力例

サンプル資産を実行した場合、以下のエラーが発生します。

図3.27 変換エラーファイルの出力例



```
data1.err - メモ帳
ファイル(F) 編集(E) 書式(O) 表示(V) ヘルプ(H)
*** SIMPLIA TF-MDPORT 変換エラーファイル ***
カレントフォルダ: C:\¥Sample
入力ファイル名: data1.dat
レイアウト定義ファイル名: data1.lay
変換エラー発生数: 2
【コード変換エラー】 ()内は出現数 (*)は100以上
0000( 1)

【エラー発生項目】 項目No:項目名:属性(エラー発生数 *は100以上)
3:製品名:N( 1)
5:売上数量:Z( 1)

【エラー詳細】 レコード番号-位置 エラー内容 項目No:項目名:属性
3-23 コード変換エラー(0x0000) 3:製品名:N
4-46 数値部エラー 5:売上数量:Z
```

備考) サンプル資産の変換指示内容

- ・入力ファイル: data1.dat
- ・レイアウト定義ファイル: data1.lay (データファイル形式からCSV形式への変換)
- ・コード体系: シフトJISからシフトJISへの変換

変換エラーファイルの出力内容

変換エラーファイルには、以下の内容が出力されます。

表3.4 変換エラーファイルの出力内容

項目	説明
【コード変換エラー】	<p>コード変換エラーとなった文字コードの一覧です。</p> <p><書式> 文字コード(16進表記)2桁、4桁、または8桁 (括弧内は出現数)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 1行に出力される文字コードの個数は、2桁の場合は11個、4桁の場合は8個、8桁の場合は6個です。 ・ 出現数は“99”まで出力されます。超えた場合は“*”が出力されます。 ・ EUCコードのコードセット3(G3文字)のコード変換エラーは、本項目には出力されません。 ・ Unicodeの場合は種別(UCS2/UTF8/UTF16/UTF32)やエンディアンにかかわらず、UCS2またはUTF32のビッグエンディアンで出力されます。 <p>ただし、以下の場合は、UCS2またはUTF32のビッグエンディアンのシグネチャ(“0xFEFF”または“0x0000FEFF”)で出力されます。</p> <ul style="list-style-type: none"> － 範囲外文字 例) <ul style="list-style-type: none"> - “0xE0A000” (UTF8の3バイト文字の3バイト目が範囲外の場合) ⇒ “0xFEFF”で出力 - “0xF5808080” (UTF8の5バイト文字の場合) ⇒ “0xFEFF”で出力 - “0x00110000” (UTF32の範囲外文字、つまり“0x00000000～0x0010FFFF”の範囲外の場合) ⇒ “0x0000FEFF”で出力 － 1文字に満たない半端なコード 例) <ul style="list-style-type: none"> - “0xE0A0” (UTF8の3バイト文字が2バイトで切れている場合) ⇒ “0xFEFF”で出力 - “0xF0” (UTF8の4バイト文字が1バイトで切れている場合) ⇒ “0xFEFF”で出力 - “0x30” (UCS2の文字が1バイトで切れている場合) ⇒ “0xFEFF”で出力 - “0x001000” (UTF32の文字が3バイトで切れている場合) ⇒ “0x0000FEFF”で出力
【エラー発生項目】	<p>変換エラーが発生した項目の一覧です。</p> <p>本項目は、データファイル変換の場合のみ出力されます(テキスト変換の場合は出力されません)。</p> <p><書式> レイアウト定義の項目No:項目名:項目属性 (括弧内はエラー発生数)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 1行につき、1項目が出力されます。

項目	説明
	<ul style="list-style-type: none"> エラー発生数は“99”まで出力されます。超えた場合は“*”が出力されます。 エラー発生項目に出力される項目数は“999”までです。超えた場合は「(続きあり)」が出力され、それ以降の項目は出力されません。
【エラー詳細】	<p>変換エラー詳細の一覧です。</p> <p><書式> 入力レコード番号-レコード上の相対位置 エラー内容 レイアウト定義の項目No:項目名:項目属性</p> <ul style="list-style-type: none"> 変換エラーの発生順に出力されます。 「MDPORT変換指示ウィザード 5/5」で指定する[変換エラー出力可能件数]までが出力対象です。ただし、[エラー出力可能件数を超えても続行]を指定し、続行方法に[エラー情報を出力しながら続行]を選択した場合は、すべてのエラー情報が出力されます。 Unicodeの場合は、種別(UCS2/UTF8/UTF16/UTF32)やエンディアンについて入力コードのまま出力されます。 入力データ形式がCSV形式の場合、レコード上の相対位置は、常に“0”となります。

3.2.9 変換指示ファイルの保存

MDPORT変換指示ウィザードで設定した内容(データ条件設定の内容を含む)は、変換指示ファイルとして保存し、繰り返し使用することができます。

変換指示ファイルの保存方法

MDPORT変換指示ウィザードの設定後、[ファイル]メニューまたはツールバーの[名前を付けて保存]から、変換指示ファイルを保存することができます。

変換指示ファイルを保存していない状態で、画面を閉じようとしたり新規設定を行おうとしたりした際に表示される確認ダイアログから、変換指示ファイルを保存することも可能です。

変換指示ファイルの拡張子

変換指示ファイルは、任意の拡張子(拡張子なしを含む)でも処理としては問題ありませんが、変換指示ファイルを開くダイアログでは、“*.mdp”のフィルターがかかった状態で表示されます。

そのため、変換指示ファイルの拡張子は、“.mdp”で保存することを推奨します。

変換指示ファイルの開き方

[ファイル]メニューまたはツールバーの[変換指示ファイルを開く]から、変換指示ファイルを開くことができます。

変換指示ファイルを開くと、[メイン画面]に変換指示内容が表示されます。

変換指示内容を変更する場合は、コマンドボタンの[設定]ボタンをクリックし、MDPORT変換指示ウィザードで変換指示内容を変更します。

MDPORT変換指示ウィザードを起動せずに、そのままコマンドボタンの[変換実行]ボタンや[プレビュー]ボタンをクリックすることもできます。

変換指示ファイルの変更内容を保存する場合は、[ファイル]メニューまたはツールバーから[変換指示ファイルの上書き保存]をしてください。

最近使用したファイル

[ファイル]メニューに、過去に使用した変換指示ファイルが、新しいものから最大4件表示されます。

最近使用したファイルについては、[ファイル]メニューに表示されている変換指示ファイルをクリックすることにより、簡単に開くことができます。



参照

変換指示ファイルの注意事項については、「第7章 注意事項」の「7.2.9 変換指示ファイルについて」を参照してください。

3.3 レイアウト定義

レイアウト定義について説明します。

3.3.1 起動/終了

レイアウト定義機能の起動/終了方法について説明します。

起動方法

以下のいずれかの方法で起動します。

- ・ スタートメニューから「SIMPLIA TF-MDPORT Pro レイアウト定義」を起動します。
- ・ 「MDPORT変換指示ウィザード 2/5」の[レイアウト定義の起動]ボタンから起動します。
- ・ 文字コード・ファイル形式変換画面の[ツール]メニューの[レイアウト定義]から起動します。
- ・ エクスプローラ等からMDPORTのインストール先フォルダ配下の実行ファイル“F5AVPLAY.EXE”を実行します。

終了方法

以下のいずれかの方法で終了します。

- ・ [ファイル]メニューの[終了]をクリックします。
- ・ 画面右上の[×]ボタン(終了ボタン)をクリックします。



参照

終了時に、レイアウト定義内容を保存していない場合は、確認ダイアログが表示されます。

- ・ レイアウト定義ファイルを保存する場合は、[はい]をクリックしてください。
- ・ レイアウト定義の変更内容を破棄する場合は、[いいえ]をクリックしてください。
- ・ 画面を終了しない場合は、[キャンセル]をクリックしてください。

3.3.2 データ形式の指定

レイアウト定義ファイルを作成する際に、入力および出力のデータ形式を指定します。

レイアウト定義画面の[設定]メニューの[データ形式]を選択して、[データ形式指定]画面を開きます。

データ形式は、以下のいずれかを選択します。

- データファイル形式
- CSV形式

なお、XML形式は選択できません(XML形式変換は使用できません)。



注意

データ形式の変更について

既に作成済みのレイアウト定義ファイルに対してデータ形式を変更すると、定義済みの情報が失われてしまいます。

CSV形式からデータファイル形式に変更した場合は、すべての項目について相対位置や領域長を定義しなければなりません。

レイアウト定義の[一括設定]画面の[入力属性と出力属性の入替え]、[入力属性を出力属性へコピー]、[出力属性を入力属性へコピー]の設定メニューを活用することで、定義情報の再設定をしなくて済むケースがあります。



参照

[データ形式指定]画面については、「第4章 画面説明」の「4.2.9 データ形式指定」を参照してください。

3.3.3 既存資産の取り込み

レイアウト定義ファイルは、既存資産の取り込みを行って作成することができます。

具体的には、以下の方法があります。

表3.5 既存資産取り込みの方法

取り込み方法	操作方法
新規のレイアウト定義ファイルとして取り込む方法	<ul style="list-style-type: none">• 既存COBOL資産からの場合 [ファイル]メニューの[既存COBOL資産からの新規作成]から、既存COBOL資産(COBOL登録集等)を選択します。• 既存C言語資産からの場合 [ファイル]メニューの[既存C言語資産からの新規作成]から、既存C言語資産(インクルードファイル)を選択します。 <p>なお、取り込み時に未保存のレイアウトがある場合は、保存するかどうかの確認ダイアログが表示されます。</p>
既存のレイアウト定義ファイルに対して取り込む方法	<ul style="list-style-type: none">• 既存レイアウト定義からの場合 [ファイル]メニューの[既存レイアウト定義の取込]から、レイアウト定義ファイルを選択します。 <p>既存レイアウトを流用してマルチレイアウトを作成する場合や、既存レイアウトの内容をコピーしてレイアウトを編集(参照作成)する場合に効果的です。</p>

取り込み方法	操作方法
	<p>既存レイアウト定義を取り込むには、編集中のレイアウト定義と取り込むレイアウト定義の入力データ形式・出力データ形式を一致させる必要があります。</p> <ul style="list-style-type: none"> 既存COBOL資産からの場合 <p>[ファイル]メニューの[既存COBOL資産の取込]から、既存COBOL資産(COBOL登録集等)を選択します。</p> <p>既存COBOL資産を取り込んでマルチレイアウトを作成する場合や、既存レイアウトの内容を上書きする場合に効果的です。</p> <p>なお、取り込み時に編集中のレイアウトがある場合は、上書きするかどうかの確認ダイアログが表示されます。</p>

既存資産の取り込みを行うと、各項目定義が自動生成されて展開されます。
必要に応じて、レイアウト定義画面で展開された項目定義を編集してください。

参考

以下のいずれかの方法により、レイアウト定義画面を開くことなく、レイアウト定義ファイルを生成できます。

- MDPORT変換指示ウィザードの[レイアウト定義情報\(2ページ目\)](#)の[レイアウト定義の生成]から、既存COBOL資産または既存C言語資産を取り込むことが可能です。
- データ加工機能の[入出力情報設定]画面の[レイアウト定義ファイル生成]から、既存COBOL資産を取り込むことが可能です。

ポイント

取り込み時にエラーが発生した場合の対応

取り込み時にエラーが表示された場合は、[\[設定\]](#)メニューの[COBOL解析オプション]または[C言語資産解析オプション]の設定内容、および既存資産の内容に問題がないかを確認してください。

解析オプションの設定内容については、「第4章 画面説明」の[「4.2.11 COBOL解析オプション」](#)または[「4.2.12 C言語資産解析オプション」](#)を参照してください。

また、必要に応じて、解析エラーファイルの内容を確認してください。

表3.6 既存資産取り込み時の解析エラーファイル

取り込み資産	出力先	解析エラーファイル名	備考
既存COBOL資産	文字コード・ファイル形式変換の[環境設定]画面で指定する[作業用フォルダ](省略時はシステムの作業用フォルダ)	ANALYZE.ERR	<p>解析エラーがない場合も出力されます。</p> <p>既にファイルが存在する場合は上書きされます。</p> <p>エラー内容の詳細については、NetCOBOLのメッセージ集を参照してください。</p>
既存C言語資産	既存C言語資産と同じフォルダ	(既存C言語資産のファイル名).txt	<p>解析エラーがない場合は出力されません。</p> <p>既にファイルが存在する場合は上書きされます。</p>



参照

取り込める既存資産については、「第7章 注意事項」の「7.3.1 レイアウト定義機能で取り込める既存資産」を参照してください。

COBOL資産取り込みの例

COBOL資産の取り込みについて、データ形式がデータファイル形式の場合の例を、以下の表に示します。

CSV形式の場合は、日本語項目および英数字項目は属性“M”、数字項目は属性“V”で取り込まれます。

表3.7 COBOL資産取り込みの例 (データファイル形式の場合)

項目	COBOL登録集のデータ項目	属性	符号	領域長	全桁	小数
日本語	PIC N(3)	N		6		
	PIC NNN	N		6		
英数字	PIC X(5)	X		5		
	PIC XXXXX	X		5		
数字	PIC 9(8)	Z		8	8	0
	PIC 99999999	Z		8	8	0
	PIC 9(6)V9(2)	Z		8	8	2
	PIC S9(6)V9(2)	Z	S	8	8	2
	PIC S9(6)V9(2) SIGN LEADING	Z	L	8	8	2
	PIC S9(6)V9(2) SIGN TRAILING	Z	S	8	8	2
	PIC S9(6)V9(2) SIGN LEADING SEPARATE	Z	LS	9	8	2
	PIC S9(6)V9(2) SIGN TRAILING SEPARATE	Z	TS	9	8	2
	PIC 9(8) PACKED-DECIMAL	P		5	8	0
	PIC S9(6)V9(2) PACKED-DECIMAL	P	S	5	8	2
	PIC 9(8) BINARY	B		4(※)	8	0
	PIC S9(6)V9(2) BINARY	B	S	4(※)	8	2
	PIC 9(8) COMP-5	5		4(※)	8	0
	PIC S9(6)V9(2) COMP-5	5	S	4(※)	8	2

(※) 領域長は、COBOL解析オプションの2進項目の扱いに依存します。

備考)レイアウト定義の属性および符号は、レイアウト定義画面の一覧に表示される記号で説明しています。記号の意味については、「第4章 画面説明」の「4.2.7.2 直接入力」の説明を参照してください。

C言語資産取り込みの例

C言語資産の取り込みについて、データ形式がデータファイル形式の場合の例を、以下の表に示します。

CSV形式の場合は、文字型/単精度実数型/倍精度実数型の項目は属性“M”、整数型/短整数型/長整数型の項目は属性“V”で取り込まれます。

表3.8 C言語資産取り込みの例 (データファイル形式の場合)

項目	C言語のデータ型	属性	符号	領域長	備考
文字型	char	C		1	配列の場合の領域長は、配列の要素数に依存します。

項目	C言語のデータ型	属性	符号	領域長	備考
	unsigned char	C		1	
単精度実数型	float	C		4	
倍精度実数型	double	C		8	
整数型	int	LまたはS	S	4または2	属性および領域長は、C言語資産解析オプションのint型のサイズの設定に依存します。
	unsigned int	LまたはS		4または2	
短整数型	short	S	S	2	
	unsigned short	S		2	
長整数型	long	L	S	4	
	unsigned long	L		4	

備考)レイアウト定義の属性および符号は、レイアウト定義画面の一覧に表示される記号で説明しています。記号の意味については、「第4章 画面説明」の「4.2.7.2 直接入力」の説明を参照してください。

3.3.4 項目定義行の追加/削除

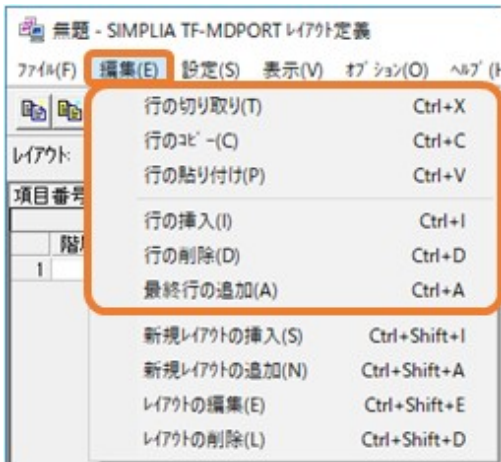
レイアウト定義機能の起動時は、空行が1行だけ表示されます。

[編集]メニューから行の追加や削除を行うことができます。

[最終行の追加]を除き、行を選択した後に、行の各操作を実行する必要があります。

[編集]メニューは、行をマウスで右クリックすることで表示することも可能です。

図3.28 行の追加/削除のメニュー



参照

レイアウト定義のメニューについては、「第4章 画面説明」の「4.2.2.2 [編集]メニュー」を参照してください。

行の挿入

[行の挿入]を実行すると、選択した行の前に空行が挿入されます。

一番後ろに挿入する場合は、[最終行の追加]を実行します(その場合は、選択した行は挿入位置に影響しません)。

図3.29 行の挿入の例

階層	反復	項目名	属性	符号	位置	領域長
1	0	項目1				
2	0	項目2				
3	0	項目4				

階層	反復	項目名	属性	符号	位置	領域長
1	0	項目1				
2	0	項目2				
3						
4	0	項目4				

行の移動

行を移動するには、まず、移動する行を選択した状態で[行の切り取り]を実行します。

その後、移動先の行を選択した状態で[行の貼り付け]を実行すると、選択した行の前に切り取った行が挿入されます。

同様に、[行のコピー]後の[行の貼り付け]による、行の複写も可能です。

図3.30 行の移動の例

階層	反復	項目名	属性	符号	位置	領域長
1	0	項目1				
2	0	項目2				
3	0	項目3				

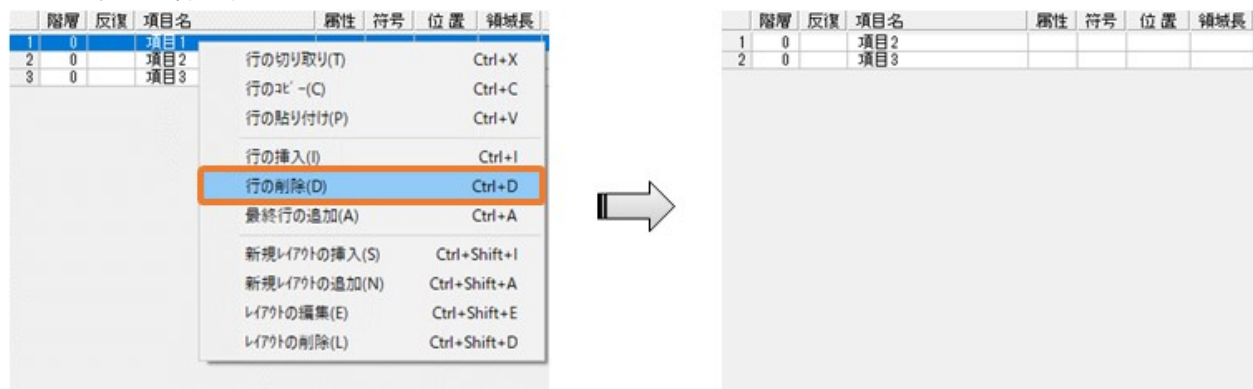
階層	反復	項目名	属性	符号	位置	領域長
1	0	項目2				
2	0	項目3				

階層	反復	項目名	属性	符号	位置	領域長
1	0	項目2				
2	0	項目1				
3	0	項目3				

行の削除

行を削除するには、削除する行を選択した状態で[行の削除]を実行します。

図3.31 行の削除の例



P ポイント

相対位置の振り直し

データファイル形式の場合、行操作の後に、相対位置の修正が必要です。

行操作を行うと、後続の項目定義行の相対位置に影響があるため注意してください。

レイアウト定義の[一括設定]画面の[相対位置の振り直し]を実行すると、相対位置を簡単に振り直すことができます。

複数行に対しての操作

項目定義行を[Ctrl]キーで複数選択したり、[Shift]キーで範囲選択したりすることで、複数行に対して、行の移動や削除ができます。

3.3.5 項目定義の編集

項目定義には、基本情報と拡張情報があります。

項目定義の編集を行うには、以下の2通りの方法(項目定義テンプレートによる編集、直接入力)があります。

項目定義テンプレートによる編集 (推奨)

項目定義行単位で、項目定義の編集を行う方法です。

選択肢やチェックボックスがあるため、直接入力よりもわかりやすく編集ができます。

• 基本情報の設定方法

基本情報の設定は、[項目定義テンプレート]画面で行います。

[項目定義テンプレート]画面は、編集対象の項目定義行を選択した状態で、[設定]メニューの[項目定義テンプレート]を選択して表示します。

または、[環境設定]の[ダブルクリックの編集方法の指定]が[項目定義テンプレートによる編集]の場合は、編集対象の項目定義行をダブルクリックして表示することもできます。

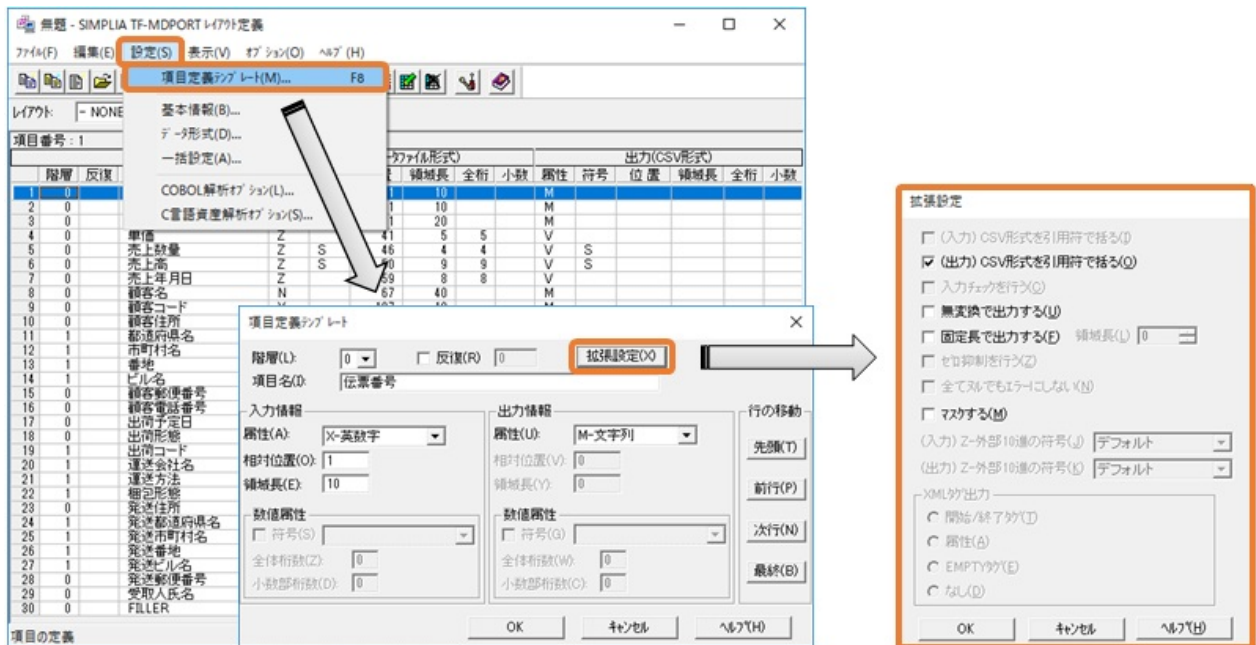
[項目定義テンプレート]画面の[行の移動]の機能により、項目定義行毎に画面を閉じることなく、別の項目定義行に移動することができます。

- ・ 拡張情報の設定方法

拡張情報の設定は、[拡張設定]画面で行います。

[拡張設定]画面は、[項目定義テンプレート]画面の[拡張設定]ボタンをクリックして表示します。

図3.32 拡張設定の表示イメージ



直接入力

セル単位で、項目定義の編集を行う方法です。

複数の項目定義行の設定を一覧で見ながら編集できるというメリットはありますが、不慣れな場合の入力誤りを生じやすいため、この編集方法ではなく、項目定義テンプレートによる編集方法をお勧めします。

- ・ 基本情報の設定方法

レイアウト定義画面において、編集対象のセルにフォーカスを当てた状態で、[Enter]キーを押して直接入力します。

または、[環境設定]画面の[ダブルクリックの編集方法の指定]が[直接入力]の場合は、編集対象のセルをダブルクリックして直接入力することもできます。

セルの入力状態で、[Enter]キーを押すと表に反映され、[Esc]キーを押すと表に反映されずに復帰します。

直接入力した内容は、レイアウト定義ファイルの保存時にチェックされます。

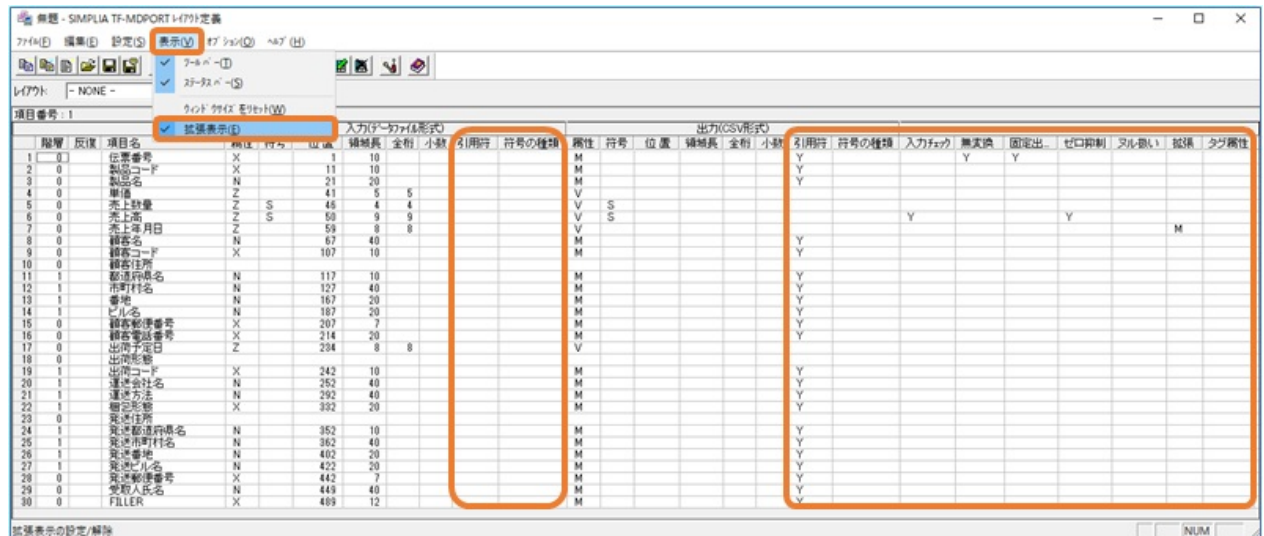
無効な設定の場合は、無視されて初期化されます。

- ・ 拡張情報の設定方法

[表示]メニューの[拡張表示]のチェックをオンにすると、拡張情報が表示されます。

編集方法は、基本情報の設定方法と同様です。

図3.33 拡張設定の表示イメージ



参考

各項目の設定内容については、「第4章 画面説明」の「4.2.7 項目定義の編集」を参照してください。

P ポイント

項目属性(入力側・出力側)やデータ形式の指定内容によって、指定が必要な定義情報は異なります。

項目定義テンプレートによる編集方法では、指定が不要な定義情報についてはグレー表示となり指定できなくなります。

また、入力漏れや入力ミスがあった場合、項目毎にエラーが表示されるため、早期に対応することができます。

項目属性は、大きく分けて、「文字属性」、「数値属性」、「その他」の3つに分類されます(詳しくは、「4章 画面説明」の「4.2.7.3 項目属性の種類」を参照)。

表3.9 指定が必要な定義情報

データ形式	指定要否
データファイル形式	<p>相対位置、領域長の指定が必要です。項目定義テンプレートを使用する場合、数値属性(数値文字列属性を除く)については、領域長は自動でセットされます。</p> <p>数値属性では、符号有無の指定ができます。外部10進項目属性で符号ありの場合は、符号の種類を指定する必要があります。</p> <p>外部10進/内部10進/2進/COMP5項目属性では、全体桁数および小数部桁数の指定が必要です。</p> <p>拡張設定の固定出力が有効の場合は、数値文字列属性(出力側)において、全体桁数および小数部桁数の指定が必要です。</p>
CSV形式	<p>相対位置、領域長、全体桁数および小数部桁数の指定は必要ありません。</p> <p>数値属性では、符号有無の指定ができます。</p> <p>ただし、拡張設定の固定出力が有効の場合は、文字属性では領域長、数値属性では領域長、全体桁数および小数部桁数の指定が必要になります。</p>

備考) その他の「項目なし」の項目属性においては、データ形式に関わらず、相対位置、領域長、符号有無、全体桁数および小数部桁数の指定は不要です。

例

数値属性のデータのCSV出力について

数値属性の入力データ“012345”(シフトJIS)をCSV形式へ変換する場合、「表3.10 変換実行例」の実行例1では、先頭のゼロが削除されて“+123.45”で出力されます。

それに対して、実行例2では、固定長出力(領域長:8)の指定により、“+0123.45”で出力されます。

表3.10 変換実行例

	入力側	出力側(実行例1)	出力側(実行例2)
データ形式	データファイル形式	CSV形式	CSV形式
属性	外部10進(Z)	数値文字列(V)	数値文字列(V)
領域長	6	(指定なし)	8
符号	あり(TRAILING)	あり	あり
全体桁数	6	(指定なし)	6
小数部桁数	2	(指定なし)	2
固定長出力(拡張設定)		固定長出力しない	固定長出力する
データ例	012345	+123.45	+0123.45

参考

項目属性を利用した項目の追加・削除について

「--項目なし(-)」という項目属性を、入力側に指定すると項目の追加、出力側に指定すると項目の削除ができます。

適用例を以下に示します。

図3.34 入力側の項目属性に「--項目なし(-)」を指定した場合の例

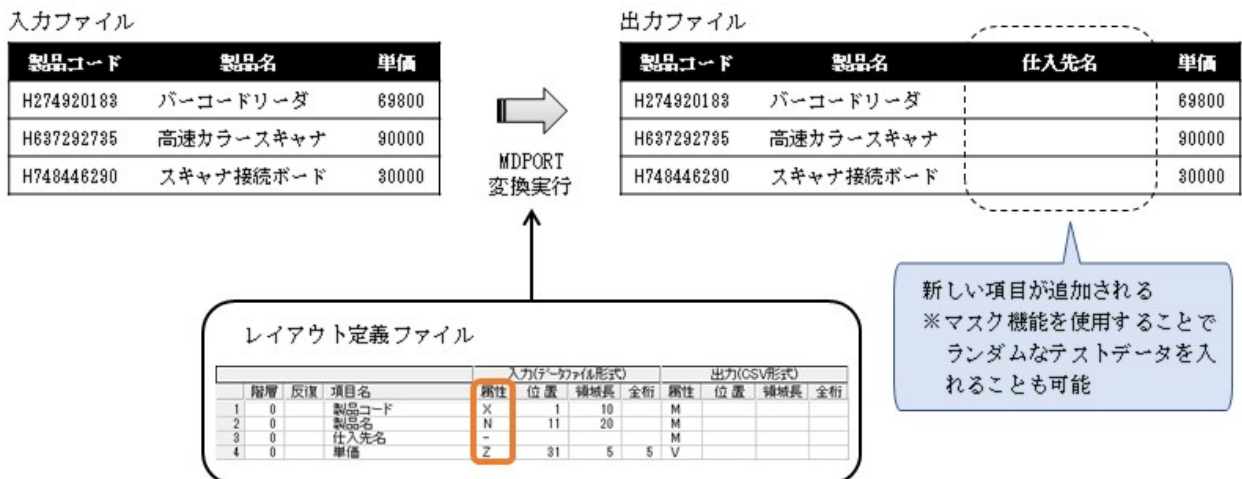
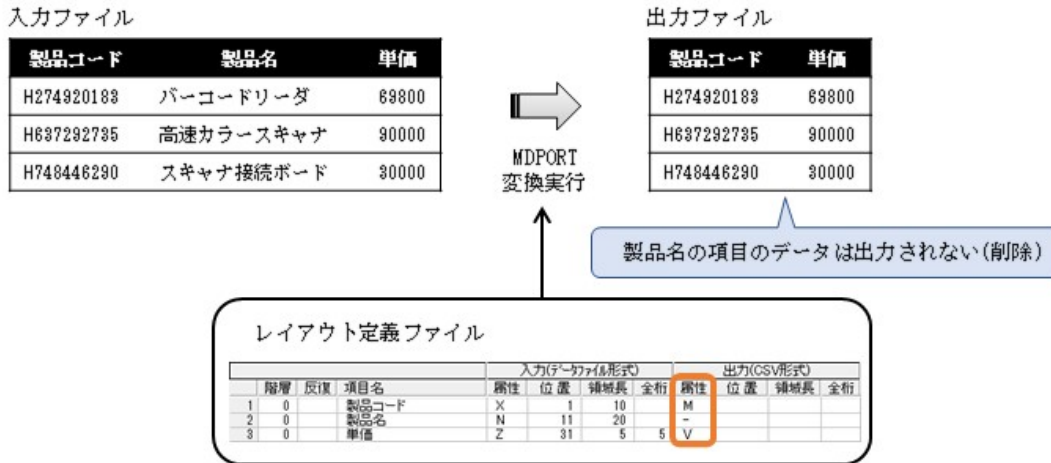


図3.35 出力側の項目属性に「--項目なし(-)」を指定した場合の例



3.3.6 集団項目の定義

レイアウト定義では、COBOLデータ記述の集団項目の記述に対応しています。

集団項目の指定は、集団項目定義行で行われ、通常の項目定義行とは異なります。

また、集団項目に従属する項目は、集団項目定義行より深い階層で示されます。

集団項目定義行は階層と項目名のみで構成され、次の行は必ず階層が1つ深くなければなりません。

指定できる階層は、階層0～階層7です。

既存資産の取り込みを行う際に、集団項目として扱うには、[COBOL解析オプション]画面で[集団項目の扱い]を[有効]にする必要があります。

また、この集団項目の扱いの指定に関係なく、レイアウト定義の画面では集団項目の追加、削除等の編集は可能です。

既存COBOL資産からのレイアウト生成例

COBOLでのデータ記述

```

000010 01 ABC-REC.
000020 03 ITEM1 PIC X(10).
000030 03 GROUP1.
000040 05 ITEM2 PIC X(3).
000050 05 ITEM3 PIC X(1).
000060 03 GROUP2.
000070 05 ITEM4 PIC X(5).
000080 05 ITEM5 PIC X(5).
000090 05 GROUP2-1.
000100 07 ITEM6 PIC 9(2).
000110 05 ITEM7 PIC X(2).
    
```

表3.11 生成されるレイアウト定義 (COBOL解析オプションの[集団項目の扱い]有効時)

階層	項目名
0	ITEM1

階層	項目名
0	GROUP1
1	ITEM2
1	ITEM3
0	GROUP2
1	ITEM4
1	ITEM5
1	GROUP2-1
2	ITEM6
1	ITEM7

表3.12 生成されるレイアウト定義 (COBOL解析オプションの[集団項目の扱い]無効時)

階層	項目名
0	ITEM1
0	ITEM2
0	ITEM3
0	ITEM4
0	ITEM5
0	ITEM6
0	ITEM7

3.3.7 反復項目/配列の定義

レイアウト定義では、COBOLデータ記述の「OCCURS句」に相当する反復項目、およびC言語のインクルードファイルの配列に対応しています。

反復数の指定は、反復定義行で行われ、通常の項目定義行とは異なります。

また、反復対象となる項目は、反復定義行より深い階層で示されます。

反復定義行は階層と反復数のみで構成され、次の行は必ず階層が1つ深くなければなりません。

指定できる階層は、階層0～階層7です。

既存COBOL資産からのレイアウト生成例

COBOLでのデータ記述

```

000010 01  ABC-REC.
000020 03  ITEM1  PIC X(10).
000030 03  GROUP1.
000040 05  ITEM2  PIC X(3).
000050 05  ITEM3  PIC X(1).
000060 03  GROUP2 OCCURS 10.
000070 05  ITEM4  PIC X(5).
000080 05  ITEM5  PIC X(5).
000090 05  GROUP2-1 OCCURS 5.
000100 07  ITEM6  PIC 9(2).

```

```

000110 05 ITEM7 PIC X(2).
000120 03 ITEM8 PIC X(20).
000130 03 ITEM9 OCCURS 5 PIC X(8).
000140 03 ITEM10 PIC X.

```

表3.13 生成されるレイアウト定義 (COBOL解析オプションの[集団項目の扱い]有効時)

階層	反復数	項目名
0		ITEM1
0		GROUP1
1		ITEM2
1		ITEM3
0	10	GROUP2
1		ITEM4
1		ITEM5
1	5	GROUP2-1
2		ITEM6
1		ITEM7
0		ITEM8
0	5	
1		ITEM9
0		ITEM10

表3.14 生成されるレイアウト定義 (COBOL解析オプションの[集団項目の扱い]無効時)

階層	反復数	項目名
0		ITEM1
0		ITEM2
0		ITEM3
0	10	
1		ITEM4
1		ITEM5
1	5	
2		ITEM6
1		ITEM7
0		ITEM8
0	5	
1		ITEM9
0		ITEM10

既存C言語資産からのレイアウト生成例

C言語でのデータ記述

```

struct Sample {
    char    szData1[10];
    int     lData2[2][3];
    short   sData3;
    long    lData4;
    unsigned int lData5;
};

```

表3.15 生成されるレイアウト定義

階層	反復数	項目名
0		szData1
0		@DUMMY
0	2	
1	3	
2		lData2
0		sData3
0		@DUMMY
0		lData4
0		lData5

3.3.8 マルチレイアウトの作成

マルチレイアウトの作成方法について説明します。

マルチレイアウトとは、1つのレイアウト定義ファイルの中に、複数のレイアウトを作成し、それぞれのレイアウトの適用条件を設定したものです。

マルチレイアウトの設定

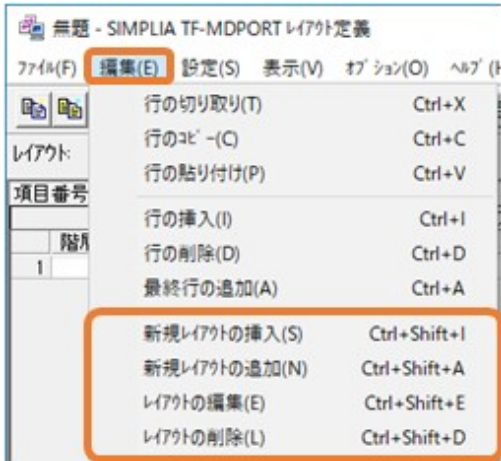
マルチレイアウトの設定は、[編集]メニューで行います。

[編集]メニューは、行をマウスで右クリックすることで表示することもできます。

表3.16 マルチレイアウトの設定

[編集]メニュー	設定内容
新規レイアウトの挿入(S)	レイアウトの挿入/追加を行います。
新規レイアウトの追加(N)	挿入の場合は選択しているレイアウトの前に、追加の場合は選択しているレイアウトの後に新規レイアウトを作成します。
レイアウトの編集(E)	[レイアウト定義テンプレート]画面を開き、レイアウト名およびレイアウトの適用条件を設定します。
レイアウトの削除(L)	レイアウトの削除を行います。

図3.36 レイアウトの設定メニュー

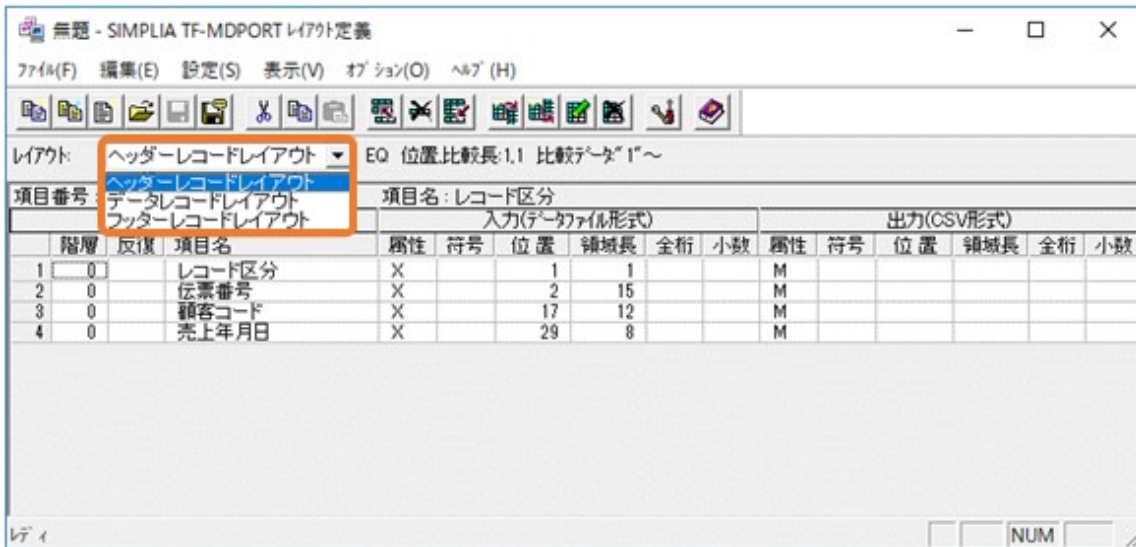


レイアウトの選択

[レイアウト定義テンプレート]画面で設定したレイアウト名は、[マルチレイアウト定義指定ダイアログバー]から選択できます。

レイアウト名を選択すると、選択したレイアウト名のレイアウト定義情報が一覧に表示されます。レイアウトを切り替えながら、レイアウト毎にレイアウト定義情報を設定してください。

図3.37 レイアウトの選択イメージ



注意

レイアウトの優先度について

変換実行においては、変換対象の各レコードに対して、ドロップダウンリストに表示されるレイアウト名の上から順番に条件判定を行います。条件に合致してレイアウトが適用されたレコードについては、それ以降のレイアウト条件は無視されます。そのため、レイアウト名の表示順には注意が必要です。

レイアウトの条件式[OTHER](または[NONE])は、無条件に適用されるレイアウトのため、通常は一番下に位置づけるレイアウト名になります(それ以降に他のレイアウトがあっても無視されます)。

なお、レイアウト名の表示順を後から変更することはできませんので注意してください。

マルチレイアウトの作成例

マルチレイアウトの作成手順について、以下に例を記載します。

1. レイアウト定義機能を起動し、[設定]メニューの[データ形式]から[データ形式指定]画面を開きます。

[データ形式指定]画面で、入力および出力のデータ形式を指定し、[OK]ボタンをクリックします。

なお、データ形式を変更しようとする、「データ形式が変更されたため、既に定義されている項目情報が失われます。よろしいですか?」という確認ダイアログが表示されますので、[はい]をクリックします。

図3.38 データ形式指定



2. レイアウトの項目定義を作成します。

既存資産を持っている場合は、**既存資産の取り込み**で、項目定義を自動生成することができます。

なお、レイアウトを複数追加した後に、各レイアウトの項目定義を作成/編集することもできます。

図3.39 1つ目のレイアウトの項目定義の作成



3. [編集]メニューの[レイアウトの編集]から[レイアウト定義テンプレート]画面を開きます。

[レイアウト定義テンプレート]画面で、レイアウト名および適用条件を設定し、[OK]ボタンをクリックします。

なお、レイアウト名および適用条件は、[編集]メニューの[レイアウトの編集]から後で変更することもできます。

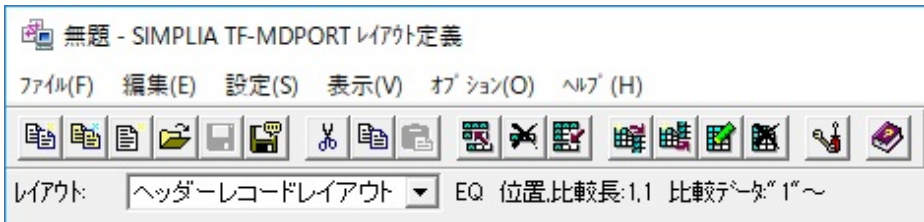
図3.40 1つ目のレイアウトの編集



上記の例では、1バイト目が“1”のレコードについて、ヘッダレコードレイアウトを適用します。


4. [マルチレイアウト定義指定ダイアログバー]に、設定した内容が反映されていることを確認します。

図3.41 マルチレイアウト定義指定ダイアログバーの確認



5. [編集]メニューの[新規レイアウトの追加]から、選択しているレイアウトの後ろにレイアウトを追加します。
追加時に表示される[レイアウト定義テンプレート]画面で、レイアウト名および適用条件を設定し、[OK]ボタンをクリックします。

図3.42 2つ目のレイアウトの編集



上記の例では、1バイト目が“2”のレコードについて、データレコードレイアウトを適用します。

6. 追加したレイアウトの項目定義を作成します。

図3.43 2つ目のレイアウトの項目定義の作成

無題 - SIMPLIA TF-MDPORT レイアウト定義

ファイル(F) 編集(E) 設定(S) 表示(V) オプション(O) ヘルプ(H)

レイアウト: データレコードレイアウト EQ 位置比較長:1.1 比較フィールド:2"~

項目番号: 1 項目名: レコード区分

階層	反復	項目名	入力(データファイル形式)						出力(CSV形式)						
			属性	符号	位置	領域長	全桁	小数	属性	符号	位置	領域長	全桁	小数	
1	0	レコード区分	X		1	1			M						
2	0	伝票番号	X		2	10			M						
3	0	製品コード	X		12	10			M						
4	0	製品名	N		22	20			M						
5	0	単価	Z		42	5	5		V						
6	0	売上数量	Z		47	4	4		V						
7	0	売上高	Z		51	9	9		V						

レイ

NUM

7. [編集]メニューの[新規レイアウトの追加]から、選択しているレイアウトの後ろにレイアウトを追加します。
追加時に表示される[レイアウト定義テンプレート]画面で、レイアウト名および適用条件を設定し、[OK]ボタンをクリックします。

図3.44 3つ目のレイアウトの編集

レイアウト定義テンプレート

レイアウト名(L): フッターレコードレイアウト

条件式(C): OTHER

フィールド位置(B): 1

フィールド長(F): 1

最小値(I):

最大値(M):

レイアウトの移動

前レイアウト(P)

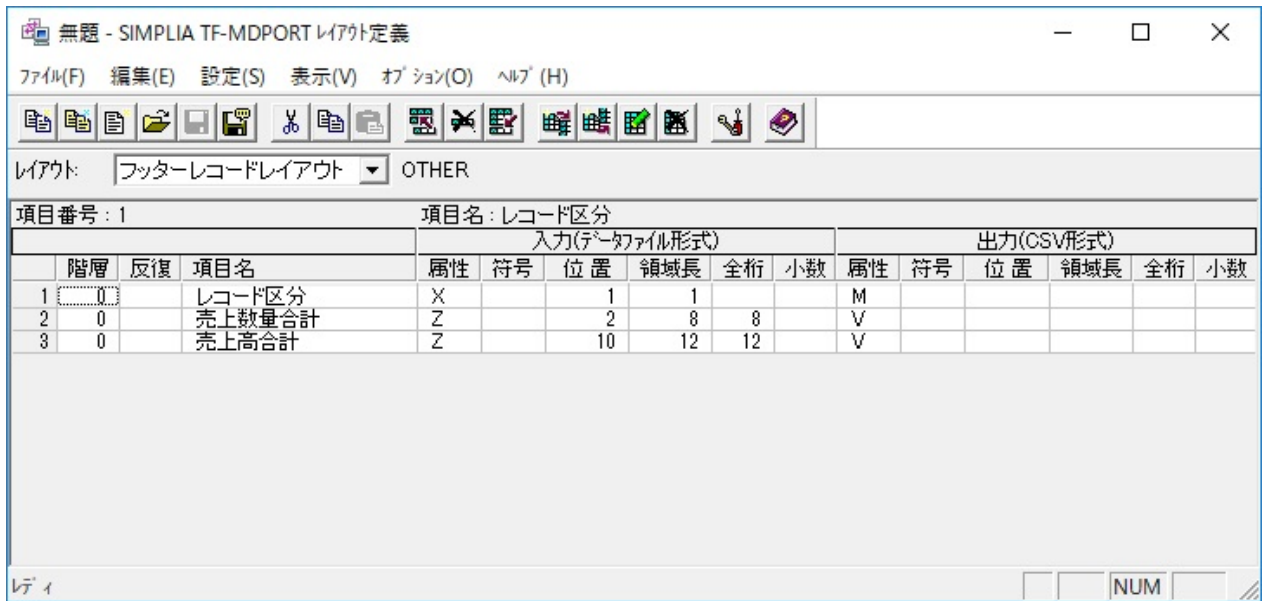
次レイアウト(N)

OK キャンセル ヘルプ(H)

上記の例では、1つ目および2つ目のレイアウトに該当しないすべてのレコードについて、フッターレコードレイアウトを適用します。

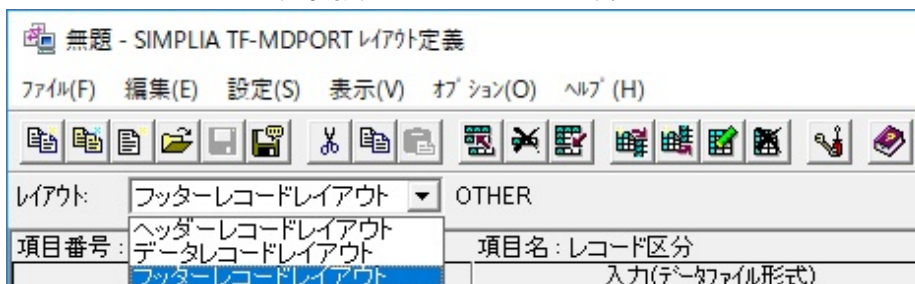
8. 追加したレイアウトの項目定義を作成します。

図3.45 3つ目のレイアウトの項目定義の作成



9. [マルチレイアウト定義指定ダイアログバー]に、レイアウトが3つ作成できていることを確認します。
必要に応じて、各レイアウトの適用条件や項目定義を確認/編集します。

図3.46 マルチレイアウト定義指定ダイアログバーの確認



10. [ファイル]メニューの[名前を付けて保存]から、作成したレイアウト定義ファイルを保存します。

参照

- 画面については、「第4章 画面説明」の「4.2.4 マルチレイアウト定義指定ダイアログバー」および「4.2.6 レイアウト定義テンプレート」を参照してください。
- 項目定義の編集方法については、「3.3.5 項目定義の編集」を参照してください。
- マルチレイアウトの注意事項については、「第7章 注意事項」の「7.3.2 レイアウト定義機能について」の「マルチレイアウトを扱う場合の注意事項」を参照してください。

3.3.9 COBOL登録集/DDLの出力

COBOL登録集の出力、およびDDLの出力について説明します。

3.3.9.1 COBOL登録集の出力

レイアウト定義機能では、編集時のレイアウト定義より、COBOL登録集を出力することができます。

出力方法

以下の手順で、COBOL登録集を出力します。

1. [ファイル]メニューの[COBOL登録集作成]をクリックします。
2. [COBOL登録集出力指定]画面で、レイアウト定義の入力情報・出力情報のどちらの情報の属性で作成するかを指定します。
3. 出力先および出力ファイル名を指定します。

出力例1

表3.17 レイアウト定義 (データファイル形式)

階層	反復数	項目名	属性	符号	領域長	全桁	小数
0		ITEM1	X		10		
0		GROUP1					
1		ITEM2	X		3		
1		ITEM3	X		1		
0	10	GROUP2					
1		ITEM4	X		5		
1		ITEM5	X		5		
1	5	GROUP2-1					
2		ITEM6	Z		2	2	
1		ITEM7	X		2		
0		ITEM8	X		20		
0	5	GROUP3					
1		ITEM9	X		8		
0		ITEM10	X		1		

([基本情報設定]画面のレコード名:ABC-REC1)

「表3.17 レイアウト定義 (データファイル形式)」から、以下のCOBOL登録集が出力されます。

```
01 ABC-REC1.  
  03 ITEM1 PIC X(10).  
  03 GROUP1.  
    05 ITEM2 PIC X(3).  
    05 ITEM3 PIC X(1).  
  03 GROUP2 OCCURS 10.  
    05 ITEM4 PIC X(5).
```

```

05 ITEM5 PIC X(5).
05 GROUP2-1 OCCURS 5.
  07 ITEM6 PIC 9(2).
05 ITEM7 PIC X(2).
03 ITEM8 PIC X(20).
03 GROUP3 OCCURS 5.
  05 ITEM9 PIC X(8).
03 ITEM10 PIC X(1).

```

出力例2

表3.18 レイアウト定義 (CSV形式)

階層	反復数	項目名	属性	符号	領域長	全桁	小数
0		ITEM1	M				
0		GROUP1					
1		ITEM2	M				
1		ITEM3	M				
0	10	GROUP2					
1		ITEM4	M				
1		ITEM5	M				
1	5	GROUP2-1					
2		ITEM6	V				
1		ITEM7	M				
0		ITEM8	M				
0	5	GROUP3					
1		ITEM9	M				
0		ITEM10	M				

([基本情報設定]画面のレコード名:ABC-REC2)

「表3.18 レイアウト定義 (CSV形式)」から、以下のCOBOL登録集が出力されます。

```

01 ABC-REC2.
  03 ITEM1 PIC X(1).
  03 GROUP1.
    05 ITEM2 PIC X(1).
    05 ITEM3 PIC X(1).
  03 GROUP2 OCCURS 10.
    05 ITEM4 PIC X(1).
    05 ITEM5 PIC X(1).
    05 GROUP2-1 OCCURS 5.
      07 ITEM6 PIC X(1).
    05 ITEM7 PIC X(1).
  03 ITEM8 PIC X(1).
  03 GROUP-3 OCCURS 5.
    05 ITEM9 PIC X(1).
  03 ITEM10 PIC X(1).

```

出力されるCOBOL登録集のデータ項目について

- 出力対象のデータ形式がデータファイル形式の場合

レイアウト定義の属性や領域長等の定義内容に応じて、COBOL登録集のデータ項目が出力されます。

ただし、出力されるCOBOL登録集は、COBOLの文法に沿った形となりますので、レイアウト定義の定義内容と全く同じ意味合いになるとは限りません。

データ項目の出力例を以下に示します。

表3.19 レイアウト定義から出力されるCOBOL登録集のデータ項目の例 (データファイル形式の場合)

分類	属性	符号	領域長	全桁	小数	COBOL登録集のデータ項目
文字	X		5			PIC X(5)
	N		6			PIC N(3)
	M		5			PIC X(5)
	C		5			PIC X(5)
	R		5			PIC X(5)
	Y		6			PIC N(3)
数値	Z		8	8	0	PIC 9(8)
	Z		8	8	2	PIC 9(6)V9(2)
	Z	S	8	8	2	PIC S9(6)V9(2)
	Z	L	8	8	2	PIC S9(6)V9(2) SIGN LEADING
	Z	T	8	8	2	PIC S9(6)V9(2)
	Z	LS	9	8	2	PIC S9(6)V9(2) SIGN LEADING SEPARATE
	Z	TS	9	8	2	PIC S9(6)V9(2) SIGN TRAILING SEPARATE
	P		5	8	0	PIC 9(8) PACKED-DECIMAL
	P	S	5	8	2	PIC S9(6)V9(2) PACKED-DECIMAL
	B		4	8	0	PIC 9(8) BINARY
	B	S	4	8	2	PIC S9(6)V9(2) BINARY
	5		4	8	0	PIC 9(8) COMP-5
	5	S	4	8	2	PIC S9(6)V9(2) COMP-5
	S		2			PIC 9(5)
	S	S	2			PIC S9(5)
	L		4			PIC 9(10)
	L	S	4			PIC S9(10)
	V		5			PIC X(5)
	V	S	5			PIC X(5)

レイアウト定義の属性および符号は、レイアウト定義画面の一覧に表示される記号で説明しています。

記号の意味については、「第4章 画面説明」の「4.2.7.2 直接入力」の説明を参照してください。

- 出力対象のデータ形式がCSV形式の場合

出力時に「雛形のCOBOL登録集を出力しました」というメッセージダイアログが表示されます。

出力されるCOBOL登録集は、上記の出力例2のような形式となります。

3.3.9.2 DDLの出力

レイアウト定義機能では、編集中のレイアウト定義より、RDBMSであるSymfoware、Oracle、SQL Serverに対応したデータベース作成文の雛形を出力することができます。

出力方法

以下の手順で、DDLを出力します。

1. [ファイル]メニューの[DDL作成]をクリックします。
2. [DDL文出力指定]画面で、レイアウト定義の入力情報・出力情報のどちらの情報の属性で作成するかを指定します。
また、データベース設定(Symfoware/Oracle/SQLServer)を選択します。
3. 出力先および出力ファイル名を指定します。

出力例1

表3.20 レイアウト定義 (データファイル形式)

階層	項目名	属性	符号	領域長	全桁	小数
0	ITEM1	X		20		
0	ITEM2	N		20		
0	ITEM3	Z	S	10	10	2

([基本情報設定]画面のレコード名:ABC-REC1)

「表3.20 レイアウト定義 (データファイル形式)」から、以下のDDL文が出力されます。

- データベース設定:Symfoware の場合

```
CREATE TABLE "ABC-REC1" (  
  "ITEM1" VARCHAR(20) NOT NULL,  
  "ITEM2" NCHAR(10) NOT NULL,  
  "ITEM3" NUMERIC(10,2) NOT NULL  
);
```

- データベース設定:Oracle の場合

```
CREATE TABLE "ABC-REC1" (  
  "ITEM1" VARCHAR2(20) NOT NULL,  
  "ITEM2" NCHAR(10) NOT NULL,  
  "ITEM3" NUMBER(10,2) NOT NULL  
);
```

- データベース設定:SQLServer の場合

```
CREATE TABLE "ABC-REC1" (  
  "ITEM1" varchar(20) NOT NULL,  
  "ITEM2" nchar(10) NOT NULL,  
  "ITEM3" numeric(10,2) NOT NULL  
);
```

出力例2

表3.21 レイアウト定義 (CSV形式)

階層	項目名	属性	符号	領域長	全桁	小数
0	ITEM1	V				
0	ITEM2	M				
0	ITEM3	-				

([基本情報設定]画面のレコード名:ABC-REC2)

「表3.21 レイアウト定義 (CSV形式)」から、以下のDDL文が出力されます。

- データベース設定:Symfoware の場合

```
CREATE TABLE "ABC-REC2" (  
  "ITEM1" NUMERIC(1) NOT NULL,  
  "ITEM2" VARCHAR(1) NOT NULL  
);
```

- データベース設定:Oracle の場合

```
CREATE TABLE "ABC-REC2" (  
  "ITEM1" NUMBER(1) NOT NULL,  
  "ITEM2" VARCHAR2(1) NOT NULL  
);
```

- データベース設定:SQLServer の場合

```
CREATE TABLE "ABC-REC2" (  
  "ITEM1" numeric(1) NOT NULL,  
  "ITEM2" varchar(1) NOT NULL  
);
```

参考

雛形のDDL文の出力について

出力対象のデータ形式がCSV形式の場合、出力時に「雛形のDDL文を出力しました」というメッセージダイアログが表示されます。

出力されるDDL文は、上記の出力例2のような形式となります。

参照

DDLの出力の注意事項については、「第7章 注意事項」の「7.3.3 DDL文出力について」を参照してください。

3.3.10 レイアウト定義ファイルの保存

レイアウト定義内容は、レイアウト定義ファイルとして保存し、文字コード・ファイル形式変換機能のデータファイル変換やデータ加工機能で使用することができます。

レイアウト定義ファイルの保存方法

レイアウト定義の作成後、[ファイル]メニューまたはツールバーの[名前を付けて保存]から、レイアウト定義ファイルとして保存することができます。

レイアウト定義ファイルを保存していない状態で、画面を閉じようとしたり新規作成を行おうとした際に表示される確認ダイアログから、レイアウト定義ファイルを保存することも可能です。

レイアウト定義ファイルの拡張子

レイアウト定義ファイルは、任意の拡張子(拡張子なしを含む)でも処理としては問題ありませんが、レイアウト定義ファイルを開くダイアログでは、“*.lay”のフィルターがかかった状態で表示されます。

そのため、レイアウト定義ファイルの拡張子は、“.lay”で保存することを推奨します。

レイアウト定義ファイルの開き方

[ファイル]メニューまたはツールバーの[開く]から、レイアウト定義ファイルを開くことができます。

レイアウト定義ファイルを開くと、[メイン画面]にレイアウト定義内容が表示されます。

レイアウト定義ファイルの定義内容を変更する場合は、定義内容を編集した後、[ファイル]メニューまたはツールバーから上書き保存をしてください。

最近使用したファイル

[ファイル]メニューに、過去に使用したレイアウト定義ファイルが、新しいものから最大4件表示されます。

最近使用したファイルについては、[ファイル]メニューに表示されているレイアウト定義ファイルをクリックすることにより、簡単に開くことができます。

3.4 データ加工

データ加工について説明します。

3.4.1 データ加工機能を起動する前に

データ加工機能を使用する前に、以下の手順で、ログファイル名を指定する必要があります。

1. 文字コード・ファイル形式変換機能を起動し、[環境設定]画面を開きます。
2. [環境設定]画面の[基本情報]タブの[バッチ実行時のログファイル]の項目に、フルパスで任意のログファイル名を指定します。



注意

ログファイル名の指定は、文字コード・ファイル形式変換機能では省略可能ですが、データ加工機能では必須です。

ログファイル名を指定していない場合、データ加工機能の起動時に、エラーダイアログが表示されて起動することができません。



参照

ログ出力については、「3.4.12 ログファイルの確認」を参照してください。

3.4.2 起動/終了

データ加工機能の起動/終了方法について説明します。

起動方法

以下のいずれかの方法で起動します。

- ・ スタートメニューから「SIMPLIA TF-MDPORT Pro データ加工機能」を起動します。
- ・ エクスプローラ等からMDPORTのインストール先フォルダ配下の実行ファイル(“TFMDQ32.EXE”[\[x86版\]](#), “TFMDQ64.EXE”[\[x64版\]](#))を実行します。

終了方法

以下のいずれかの方法で終了します。

- ・ [ファイル]メニューの[終了]をクリックします。
- ・ 画面右上の[×]ボタン(終了ボタン)をクリックします。



参考

終了時に、加工指示内容を保存していない場合は、確認ダイアログが表示されます。

- ・ 加工指示ファイルを保存する場合は、[はい]をクリックしてください。
- ・ 加工指示の変更内容を破棄する場合は、[いいえ]をクリックしてください。
- ・ 画面を終了しない場合は、[キャンセル]をクリックしてください。

3.4.3 項目移動

「項目移動」は、以下の手順で実行します。

1. [ファイル]メニューから、[加工指示の新規設定]の[項目移動]をクリックします。
2. [入出力情報設定]画面で、レイアウト定義ファイル名、入力データファイル名、出力データファイル名、および加工後コピー句名を指定します。
各ファイル名を指定した後、[OK]ボタンをクリックします。
3. [項目移動]画面で、[出力項目一覧(移動後)]の対象の項目を切り替えながら、[上移動↑]ボタンまたは[下移動↓]ボタンで、項目の順番を並び替えます。
項目を並び替えた後、[OK]ボタンをクリックして、加工処理を実行します。

4. 実行結果ダイアログおよびログファイルで、加工処理の**実行結果の確認**を行います。
5. 必要に応じて、**加工指示ファイルの保存**を行います。



レイアウト定義ファイルの注意事項については、「第7章 注意事項」の「7.4.1 レイアウト定義ファイルについて」を参照してください。

3.4.4 項目追加、削除

「項目追加、削除」は、以下の手順で実行します。

1. [ファイル]メニューから、[加工指示の新規設定]の[項目追加、削除]をクリックします。
2. [入出力情報設定]画面で、レイアウト定義ファイル名、入力データファイル名、出力データファイル名、および加工後コピー句名を指定します。
各ファイル名を指定した後、[OK]ボタンをクリックします。
3. [項目追加、削除]画面で、項目の新規追加、または既存の項目の削除を指定します。
項目の追加/削除を指定した後、[OK]ボタンをクリックして、加工処理を実行します。
4. 実行結果ダイアログおよびログファイルで、加工処理の**実行結果の確認**を行います。
5. 必要に応じて、**加工指示ファイルの保存**を行います。



レイアウト定義ファイルの注意事項については、「第7章 注意事項」の「7.4.1 レイアウト定義ファイルについて」を参照してください。

3.4.5 形式変換

「形式変換」は、以下の手順で実行します。

1. [ファイル]メニューから、[加工指示の新規設定]の[形式変換]をクリックします。
2. [入出力情報設定]画面で、レイアウト定義ファイル名、入力データファイル名、出力データファイル名、および加工後コピー句名を指定します。
各ファイル名を指定した後、[OK]ボタンをクリックします。
3. [形式変換]画面で、項目の領域拡張、または数値属性から文字属性への変換を指定します。
変換内容を指定した後、[OK]ボタンをクリックして、加工処理を実行します。
4. 実行結果ダイアログおよびログファイルで、加工処理の**実行結果の確認**を行います。
5. 必要に応じて、**加工指示ファイルの保存**を行います。



参照

レイアウト定義ファイルの注意事項については、「第7章 注意事項」の「7.4.1 レイアウト定義ファイルについて」を参照してください。

3.4.6 マスク機能

「マスク機能」は、以下の手順で実行します。

1. [オプション]メニューの[環境設定]をクリックして、[環境設定]画面を開きます。
[環境設定]画面の[作業環境]タブの[マスクキャラクタの指定]で、[1バイト系キャラクタ]、[2バイト系キャラクタ]をそれぞれ指定します。
2. [ファイル]メニューから、[加工指示の新規設定]の[マスク機能]をクリックします。
3. [入出力情報設定]画面で、レイアウト定義ファイル名、入力データファイル名、および出力データファイル名を指定します。
各ファイル名を指定した後、[OK]ボタンをクリックします。
4. [マスク機能]画面で、マスク対象の項目および文字位置を指定します。
マスクの指定をした後、[OK]ボタンをクリックして、加工処理を実行します。
5. 実行結果ダイアログおよびログファイルで、加工処理の**実行結果の確認**を行います。
6. 必要に応じて、**加工指示ファイルの保存**を行います。



ポイント

マスクキャラクタの指定

マスク機能を初めて使用する場合は、上記の手順1の指定を必ず行ってください(次回以降は、マスクキャラクタを変更する場合のみ)。マスクキャラクタを指定していない場合は、手順2の操作をしたときに警告メッセージが表示されて、マスク機能を実行することができません。

1バイト系/2バイト系のどちらのマスクキャラクタで置き換えられるかは、以下のとおり、マスク対象の項目属性によって決まります。

表3.22 マスクキャラクタの適用

マスク対象の項目属性	適用されるマスクキャラクタ	[環境設定]画面で指定する文字
英数字項目属性(X-英数字)	1バイト系キャラクタ	半角1文字
日本語項目属性(N-日本語)	2バイト系キャラクタ	全角1文字

備考) データ加工(マスク機能)において、マスク対象として指定できる項目の属性は、英数字項目属性(X-英数字)または日本語項目属性(N-日本語)です。それ以外の属性の項目はマスクできません。



参照

レイアウト定義ファイルの注意事項については、「第7章 注意事項」の「7.4.1 レイアウト定義ファイルについて」を参照してください。

3.4.7 JOIN

「JOIN」は、以下の手順で実行します。

1. [ファイル]メニューから、[加工指示の新規設定]の[JOIN]をクリックします。
2. [入出力情報設定]画面で、JOIN対象のレイアウト定義ファイル名1,2、入力データファイル名1,2、出力データファイル名、および加工後コピー句名を指定します。
各ファイル名を指定した後、[OK]ボタンをクリックします。
3. [JOIN]画面で、JOINのキー項目、および出力する項目を指定します。
JOINの指定をした後、[OK]ボタンをクリックして、加工処理を実行します。
4. 実行結果ダイアログおよびログファイルで、加工処理の**実行結果の確認**を行います。
5. 必要に応じて、**加工指示ファイルの保存**を行います。



参照

- ・ JOINの注意事項については、「第7章 注意事項」の「7.4.2 JOINについて」を参照してください。
- ・ レイアウト定義ファイルの注意事項については、「第7章 注意事項」の「7.4.1 レイアウト定義ファイルについて」を参照してください。

3.4.8 追加結合

「追加結合」は、以下の手順で実行します。

1. [ファイル]メニューから、[加工指示の新規設定]の[追加結合]をクリックします。
2. [追加結合]画面で、結合元ファイル名(2ファイル～6ファイル)、および結合先ファイル名を指定します。
追加結合の指定をした後、[OK]ボタンをクリックして、加工処理を実行します。
3. 実行結果ダイアログおよびログファイルで、加工処理の**実行結果の確認**を行います。
4. 必要に応じて、**加工指示ファイルの保存**を行います。

3.4.9 コピー句生成

「コピー句生成」は、以下の手順で実行します。

1. [ツール]メニューから、[コピー句生成]の[項目結合]または[項目分割]をクリックします。
2. [入出力情報設定]画面で、レイアウト定義ファイル名、および加工後コピー句名を指定します。
各ファイル名を指定した後、[OK]ボタンをクリックします。
3. [項目結合]画面または[項目分割]画面で、項目を結合または分割します。
項目結合または項目分割の指定をした後、[OK]ボタンをクリックして、コピー句生成処理を実行します。
4. 実行結果ダイアログで、コピー句生成の実行結果を確認します。



参考

コピー句生成の処理は、レイアウト定義ファイルを加工して、COBOL登録集(コピー句)を出力します。

データファイルを加工するわけではないので、データ加工機能としては補助的な処理の位置づけとなります。
そのため、加工指示ファイルへの保存はできません。ログファイルへの実行ログの出力も行われません。



参照

レイアウト定義ファイルの注意事項については、「第7章 注意事項」の「7.4.1 レイアウト定義ファイルについて」を参照してください。

3.4.10 連続実行

データ加工機能の「連続実行」について説明します。

設定方法

連続実行を使用するには、[オプション]メニューの[連続実行]のチェックをオンにします。

その後、通常どおり、[ファイル]メニューの[加工指示の新規設定]から加工指示を行います。



ポイント

連続実行は、同一のファイルに対して、複数の加工指示を続けて行う場合に効果的な設定です。

使用例

例えば、1つの入力ファイルに対して、「項目移動」と「項目追加、削除」の両方を行いたいという要件があるとします。

その場合、データ加工機能では、「項目移動」と「項目追加、削除」の2つの加工指示を行う必要があります。

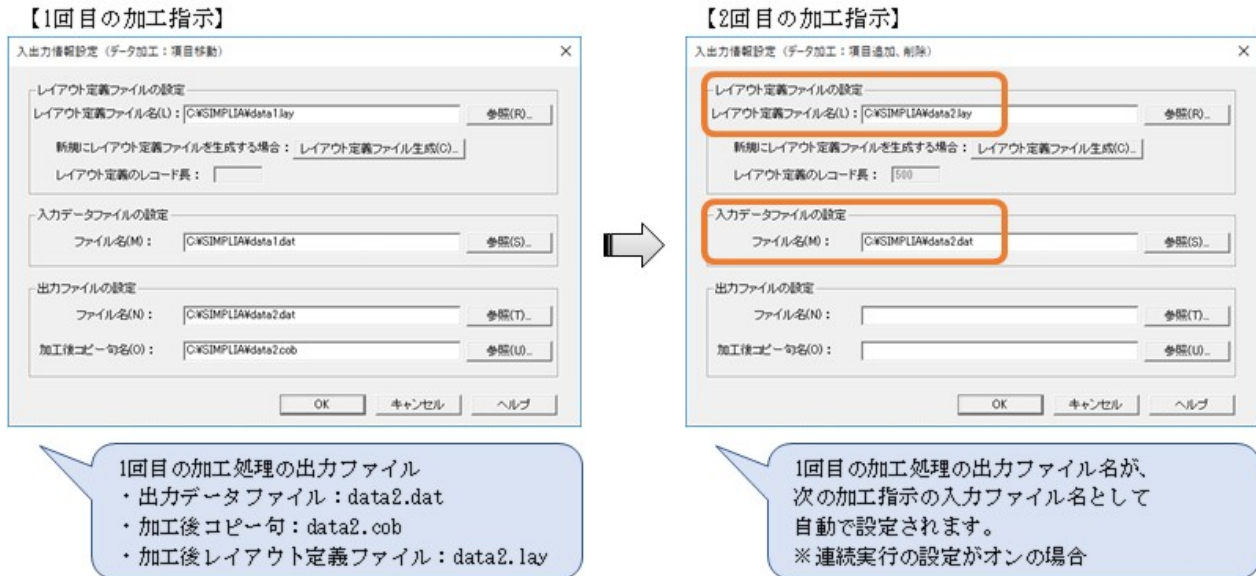
同時に加工処理を行うことはできないため、以下の流れで、2回に分けて加工指示を行います。

1. まず、「項目移動」を行います。
2. 次に、手順1で得られた出力ファイルを入力とし、「項目追加、削除」を行います。

上記の「手順1で得られた出力ファイルを入力」とする指定を、自動で行うのが連続実行の設定になります。

連続実行を設定時、手順2で表示される[入出力情報設定]画面の[レイアウト定義ファイル名]および[入力ファイル名]に、手順1で出力された各ファイル名が自動で設定されます。

図3.47 ファイル名の自動設定のイメージ



参考

- ・連続実行は、連続して加工処理を実行するうえでの補助的な役割を持ちます。
 入力情報以外の加工指示の内容は、実行の都度、指定する必要があります。
- ・加工指示を連続で行う場合でも、加工指示ファイルは加工指示毎に保存するようになります。
 1つの加工指示ファイルに、複数の加工指示を保存することはできません。
- ・追加結合およびコピー句生成は、連続実行の対象外です。
 ファイル名は自動で設定されないため、必要に応じて、ファイル名を直接指定してください。

3.4.11 実行結果の確認

データ加工機能の実行結果について説明します。

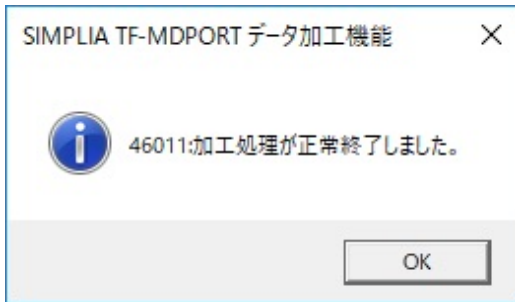
実行結果の確認方法

以下の方法で、データ加工機能の実行結果を確認します。

- ・データ加工処理の終了時に表示される実行結果ダイアログを確認します。
- ・ログファイルの内容を確認します。ログファイルについては、「3.4.12 ログファイルの確認」を参照してください。
- ・加工処理でエラーが発生した場合は、エラー発生時の実行結果ダイアログからデータ加工機能エラーファイルを表示し、エラーの内容を確認します。

実行結果ダイアログ

図3.48 正常終了時のダイアログ (JOINを除く)



備考) 処理件数は、ログファイルで確認してください。

図3.49 正常終了時のダイアログ (JOINの場合)

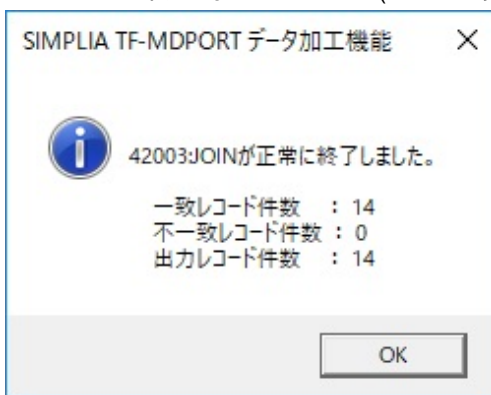
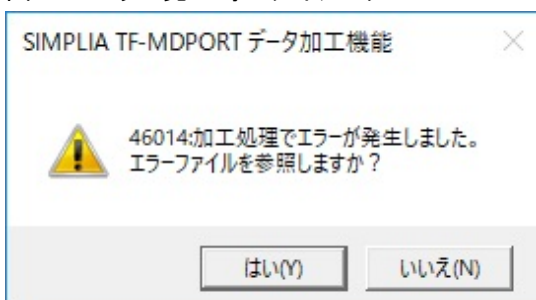


図3.50 異常終了時のダイアログ



備考) 異常終了の原因は、ログファイルで確認してください。

図3.51 エラー発生時のダイアログ



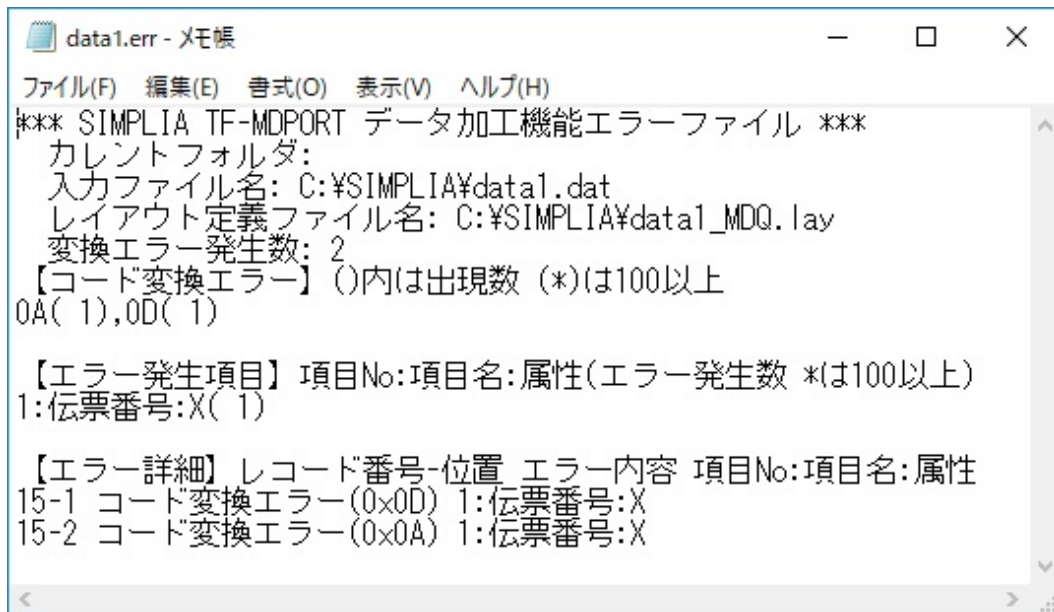
備考) [はい(Y)]を選択して、エラーファイルの内容を確認してください。

エラー表示

データ加工機能エラーファイルの表示について説明します。

- データ加工機能エラーファイルを表示するエディタは、[環境設定]画面の[エラーファイル表示エディタの指定]で指定します。
デフォルトは、Windows標準のメモ帳です。
- データ加工機能エラーファイルの出力先は、[環境設定]画面の[作業フォルダの指定]で指定することが可能です。
作業フォルダの指定がない場合は、システムの作業用フォルダ(環境変数TEMPまたはWindowsフォルダ)に出力されます。
ファイル名は、「(入力データファイル名).err」です。
- 変換エラーの出力内容は、文字コード・ファイル形式変換の場合と同様です。
「3.2.8 変換エラー表示」の「表3.4 変換エラーファイルの出力内容」を参照してください。

図3.52 データ加工機能エラーファイルの出力例



```
data1.err - メモ帳
ファイル(F) 編集(E) 書式(O) 表示(V) ヘルプ(H)
*** SIMPLIA TF-MDPORT データ加工機能エラーファイル ***
カレントフォルダ:
入力ファイル名: C:¥SIMPLIA¥data1.dat
レイアウト定義ファイル名: C:¥SIMPLIA¥data1_MDQ.lay
変換エラー発生数: 2
【コード変換エラー】 ()内は出現数 (*)は100以上
0A( 1),0D( 1)

【エラー発生項目】 項目No:項目名:属性(エラー発生数 *は100以上)
1:伝票番号:X( 1)

【エラー詳細】 レコード番号-位置 エラー内容 項目No:項目名:属性
15-1 コード変換エラー(0x0D) 1:伝票番号:X
15-2 コード変換エラー(0x0A) 1:伝票番号:X
```

参照

データ加工機能のエラー表示の注意事項については、「第7章 注意事項」の「7.4.3 データ加工機能エラー表示について」を参照してください。

3.4.12 ログファイルの確認

データ加工機能では、バッチ実行時だけでなく画面での実行時も、加工履歴がログファイルへ出力されます。

処理が正常終了した場合でも、常にログファイルへの出力が行われます。

ログファイルの出力先およびファイル名は、文字コード・ファイル形式変換の[環境設定]画面の[バッチ実行時のログファイル]で指定します。

確認方法

ログファイルは、テキストファイルです。

Windows標準のメモ帳等を使用して、ログファイルの内容を参照することができます。

1つのログファイルに複数のログ情報が出力されている場合は、最終行が最新のログ情報です。ログの各行の先頭に、実行日時の情報が出力されます。



例

ログファイル出力例

```
2019/06/01 11:22:33[項目移動.mdq] 加工処理[項目移動]を開始します。
2019/06/01 11:22:33[26294233.mdp] 変換処理を開始します。
2019/06/01 11:22:33[26294233.mdp] 変換処理が正常に終了しました。入力レコード件数 : 14 出力レコード
件数 : 14 エラー発生件数 : 0
2019/06/01 11:22:33[項目移動.mdq] 加工処理[項目移動]が終了しました。
```

```
2019/06/01 12:00:00[項目追加削除.mdq] 加工処理[項目追加、削除]を開始します。
2019/06/01 12:00:00[26309911.mdp] 変換処理を開始します。
2019/06/01 12:00:00[26309911.mdp] 変換処理が正常に終了しました。入力レコード件数 : 14 出力レコード
件数 : 14 エラー発生件数 : 0
2019/06/01 12:00:00[項目追加削除.mdq] 加工処理[項目追加、削除]が終了しました。
```

```
2019/06/01 12:34:50[形式変換.mdq] 加工処理[形式変換]を開始します。
2019/06/01 12:34:50[26324326.mdp] 変換処理を開始します。
2019/06/01 12:34:50[26324326.mdp] 変換処理が正常に終了しました。入力レコード件数 : 14 出力レコード
件数 : 14 エラー発生件数 : 0
2019/06/01 12:34:50[形式変換.mdq] 加工処理[形式変換]が終了しました。
```

```
2019/06/01 23:59:59[マスク機能.mdq] 加工処理[マスク機能]を開始します。
2019/06/01 23:59:59[26332017.mdp] 変換処理を開始します。
2019/06/01 23:59:59[26332017.mdp] 変換処理が正常に終了しました。入力レコード件数 : 14 出力レコード
件数 : 14 エラー発生件数 : 0
2019/06/01 23:59:59[マスク機能.mdq] 加工処理[マスク機能]が終了しました。
```

```
2019/06/01 01:02:03[JOIN.mdq] 加工処理[JOIN]を開始します。
2019/06/01 01:02:03[JOIN.mdq] 加工処理[JOIN]が終了しました。一致件数 : 14 不一致件数 : 0 出力レコード
件数 : 14
```

```
2019/06/01 15:20:25[追加結合.mdq] 加工処理[追加結合]を開始します。
```



ログファイルの注意事項については、「第7章 注意事項」の「7.4.4 ログファイルについて」を参照してください。

3.4.13 加工指示ファイルの保存

データ加工機能の加工指示で設定した内容は、[加工指示ファイル](#)として保存し、繰り返し使用することができます。

加工指示ファイルの保存方法

加工処理の実行後、[\[ファイル\]](#)メニューまたは[ツールバー](#)の[\[加工指示ファイルに名前を付けて保存\]](#)から、加工指示ファイルを保存することができます。

加工指示ファイルを保存していない状態で、画面を閉じようとしたり次の加工指示を行おうとしたりした際に表示される確認ダイアログから、加工指示ファイルを保存することも可能です。

加工指示ファイルの拡張子

加工指示ファイルは、任意の拡張子(拡張子なしを含む)でも処理としては問題ありませんが、加工指示ファイルを開くダイアログでは、“*.mdq”のフィルターがかかった状態で表示されます。

そのため、加工指示ファイルの拡張子は、“.mdq”で保存することを推奨します。

加工指示ファイルの開き方

[\[ファイル\]](#)メニューまたは[ツールバー](#)の[\[加工指示ファイルを開く\]](#)から、加工指示ファイルを開くことができます。

加工指示ファイルを開くと、加工指示の設定画面が表示されます。

必要に応じて、加工指示内容を変更して加工処理を実行します(ただし、レイアウト定義ファイルの指定内容は変更できません)。

加工指示ファイルの設定内容を変更する場合は、[\[ファイル\]](#)メニューまたは[ツールバー](#)から[\[加工指示ファイルの上書き保存\]](#)をしてください。

最近使用したファイル

[\[ファイル\]](#)メニューに、過去に使用した加工指示ファイルが、新しいものから最大4件表示されます。

最近使用したファイルについては、[\[ファイル\]](#)メニューに表示されている加工指示ファイルをクリックすることにより、簡単に開くことができます。



加工指示ファイルの注意事項については、「第7章 注意事項」の「7.4.5 加工指示ファイルについて」を参照してください。

第4章 画面説明

MDPORTの画面について説明します。

4.1 文字コード・ファイル形式変換

文字コード・ファイル形式変換機能の画面について説明します。

4.1.1 メイン画面

文字コード・ファイル形式変換機能のメイン画面です。

図4.1 画面イメージ

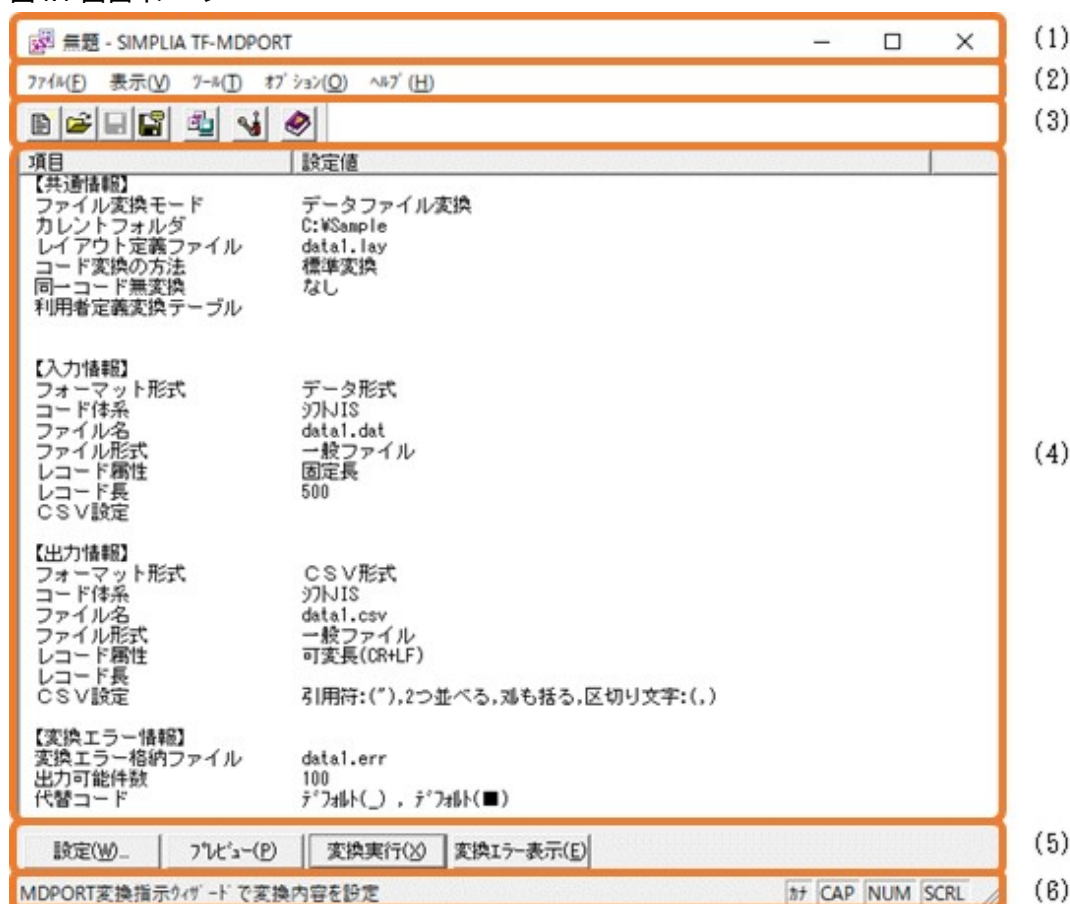


表4.1 項目説明

No	項目	内容
(1)	タイトルバー	変換指示ファイル名が表示されます。 新規設定で変換指示ファイルを保存していない場合や、既存の変換指示ファイルを開いていない場合は「無題」と表示されます。 [X]ボタンをクリックすると、画面が閉じます。 [□]ボタンをクリックすると、画面が最大化されます。

No	項目	内容
		[_]ボタンをクリックすると、画面が最小化されます。
(2)	メニュー	[ファイル(F)]メニュー、[表示(V)]メニュー、[ツール(T)]メニュー、[オプション(O)]メニュー、[ヘルプ(H)]メニューがあります。
(3)	ツールバー	メニューの各機能を1回のマウスクリックで実行することができます。 [表示(V)]メニューの[ツールバー(T)]のチェックがオンの場合のみ表示されます。
(4)	変換指示内容	[MDPORT変換指示ウィザード]で設定した内容が表示されます。 ここで表示される内容は、一部簡略化されます。具体的な表示内容については、以下の参考情報を参照してください。 なお、データ条件設定の内容を確認するには、[設定(W)]メニューから[MDPORT変換指示ウィザード]を起動し、[データ条件設定]画面を開いてください。
(5)	コマンドボタン	[設定(W)]ボタン、[プレビュー(P)]ボタン、[変換実行(X)]ボタン、[変換エラー表示(E)]ボタンがあります。
(6)	ステータスバー	メニュー、ツールバー、コマンドボタンにマウスカーソルを当てると、説明が表示されます。 右下には、キーボードのキーロック状態が表示されます。 [表示(V)]メニューの[ステータスバー(S)]のチェックがオンの場合のみ表示されます。

参考

メイン画面での変換指示内容の表示

「[図4.1 画面イメージ](#)」の(4)で表示される内容について、以下の表で説明します。

表4.2 メイン画面に表示される変換指示内容

分類	項目	説明
【共通情報】	ファイル変換モード	「データファイル変換」または「テキスト変換」が表示されます。 本項目は、[MDPORT変換指示ウィザード]の1ページ目の指定内容に該当します。
	カレントフォルダ	カレントフォルダが表示されます。 指定を省略した場合は、本項目は空欄で表示されます。 本項目は、[MDPORT変換指示ウィザード]の1ページ目の指定内容に該当します。
	レイアウト定義ファイル	レイアウト定義ファイル名が表示されます。 ファイル変換モードが「テキスト変換」の場合は、本項目は空欄で表示されます。 本項目は、[MDPORT変換指示ウィザード]の2ページ目の指定内容に該当します。
	コード変換の方法	「標準変換」または「Charset Managerによる変換(変換元コード→変換先コード)」が表示されます。 [MDPORT変換指示ウィザード]の5ページ目で、[Charset Managerを使用する]のチェックボックスをオンにした場合に、「Charset Managerによる変換」となります。括弧内の「変換元コード」および「変換先コード」は、[Charset Manager環境の設定]画面で設定したiconv_openのキーワードが表示されます。
	同一コード無変換	「なし」または「あり」が表示されます。

分類	項目	説明
		本項目は、[MDPORT変換指示ウィザード]の5ページ目の指定内容に該当します。
	利用者定義変換テーブル	利用者定義変換テーブルが表示されます。 本項目は、[MDPORT変換指示ウィザード]の5ページ目の指定内容に該当します。
【入力情報】 【出力情報】	フォーマット形式	「データ形式」または「CSV形式」が表示されます。 本項目は、レイアウト定義の指定内容に該当します。 レイアウト定義の[データ形式指定]画面で[データファイル形式]を選択した場合は「データ形式」、[CSV形式]を選択した場合は「CSV形式」となります。 ファイル変換モードがテキスト変換の場合は、本項目は空欄で表示されます。
	コード体系	「シフトJIS」、「EUC」、「JEF」、「JEF ASCII」、「JIS」、「UCS2B」、「UCS2L」、「UTF8」、「UTF16B」、「UTF16L」、「UTF32B」、または「UTF32L」が表示されます。 Unicodeについては、種別とエンディアン(ビッグエンディアンはB、リトルエンディアンはL)の組み合わせで表示されます。例えば、「UCS2B」は「UCS2(ビッグエンディアン)」を意味します。 また、[シグネチャを省略する]のチェックボックスをオンにした場合、コード体系に続いて「(シグネチャ省略)」と表示されます。 本項目は、[MDPORT変換指示ウィザード]の3ページ目(入力情報)または4ページ目(出力情報)の指定内容に該当します。
	ファイル名	入力ファイル名または出力ファイル名が表示されます。 本項目は、[MDPORT変換指示ウィザード]の3ページ目(入力情報)または4ページ目(出力情報)の指定内容に該当します。
	ファイル形式	「一般ファイル」、「COBOL85順ファイル」、「COBOL85行順ファイル」、「COBOL85相対ファイル」、または「COBOL85索引ファイル」が表示されます。 本項目は、[MDPORT変換指示ウィザード]の3ページ目(入力情報)または4ページ目(出力情報)の指定内容に該当します。
	レコード属性	「固定長」または「可変長」が表示されます。 また、レコードの区切りとして改行コードが指定されている場合は、上記に続いて「(CR+LF)」または「(LF)」が表示されます。 本項目は、[MDPORT変換指示ウィザード]の3ページ目(入力情報)または4ページ目(出力情報)の指定内容に該当します。
	レコード長	レコード長が表示されます。 可変長の一般ファイルの場合は、本項目は空欄で表示されます。 本項目は、[MDPORT変換指示ウィザード]の3ページ目(入力情報)または4ページ目(出力情報)の指定内容に該当します。

分類	項目	説明
	CSV設定	<p>CSV形式の引用符文字および区切り文字が表示されます。</p> <p>また、[CSV情報の指定]画面での指定によって、以下の情報が表示されます。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ [引用符データは2つならべて表現]のチェックボックスをオンにした場合：「2つ並べる」 ・ [引用符文字なしの前置ブランクカット抑制]のチェックボックスをオンにした場合：「前置ブランクカット抑制」 ・ [ヌル文字列も引用符で括って出力]のチェックボックスをオンにした場合：「ヌルも括る」 ・ [項目名ヘッダを先頭レコードに出力]のチェックボックスをオンにした場合：「見出し出力」 ・ [+符号を出力しない]のチェックボックスをオンにした場合：「+符号出力なし」 <p>CSV形式以外の場合は、本項目は空欄で表示されます。</p> <p>本項目は、[MDPORT変換指示ウィザード]の3ページ目(入力情報)または4ページ目(出力情報)の指定内容に該当します(「前置ブランクカット抑制」は3ページ目のみ、「ヌルも括る」、「見出し出力」、「+符号出力なし」は4ページ目のみ)。</p>
【変換エラー情報】	変換エラー格納ファイル	<p>変換エラーファイル名が表示されます。</p> <p>本項目は、[MDPORT変換指示ウィザード]の5ページ目の指定内容に該当します。</p>
	出力可能件数	<p>変換エラー出力可能件数が表示されます。</p> <p>また、[エラー出力可能件数を超えても続行]のチェックボックスをオンにした場合、変換エラー出力可能件数に続いて、以下の情報が表示されます。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ [続行方法]が[エラー情報を出力しながら続行]の場合：「(超えても続行, 超過出力有)」 ・ [続行方法]が[エラー情報を出力せずに続行]の場合：「(超えても続行)」 <p>本項目は、[MDPORT変換指示ウィザード]の5ページ目の指定内容に該当します。</p>
	代替コード	<p>1カラム系代替コード、2カラム系代替コードの順で、16進の指定内容の先頭に“0x”が付加されて表示されます。</p> <p>指定を省略した場合、1カラム系代替コードは「デフォルト(□)」、2カラム系代替コードは「デフォルト(■)」が表示されます。</p> <p>本項目は、[MDPORT変換指示ウィザード]の5ページ目の指定内容に該当します。</p>

4.1.2 メニュー

文字コード・ファイル形式変換画面の各メニューについて説明します。

4.1.2.1 [ファイル]メニュー

変換指示の新規設定、変換指示ファイルの選択、保存を行うメニューです。

図4.2 画面イメージ



表4.3 項目説明

項目	内容
変換指示の新規設定(N)	新規に変換指示を行います。 保存されていない変換指示がある場合は、保存するかどうかの確認ダイアログが表示されます。 MDPORT変換指示ウィザードの 基本情報(1ページ目) の画面が表示されます。 ショートカットキー[Ctrl+N]でも実行できます。
変換指示ファイルを開く(O)	既存の 変換指示ファイル を開きます。 変換指示ファイルは、エクスプローラからのドラッグ&ドロップ操作でも開くことができます。 変換指示ファイルを開くと、変換指示内容がメイン画面に表示されます。 変換指示ファイル内で以前設定した レイアウト定義ファイル 等が存在しないと、正しく開くことができないので注意してください。 ショートカットキー[Ctrl+O]でも実行できます。
変換指示ファイルの上書き保存(S)	現在の変換指示内容を変換指示ファイルへ、上書きで保存します。 ショートカットキー[Ctrl+S]でも実行できます。
変換指示ファイルに名前を付けて保存(A)	現在の変換指示内容を変換指示ファイルへ、名前を付けて保存します。
最近使用したファイル	最近使用した変換指示ファイルが最大4個表示されます。 ファイル名を選択することにより、該当の変換指示ファイルを開くことができます。
SIMPLIA TF-MDPORTの終了(X)	SIMPLIA TF-MDPORTを終了します。

4.1.2.2 [表示]メニュー

ツールバーやステータスバーの表示/非表示を切り替えるメニューです。

図4.3 画面イメージ

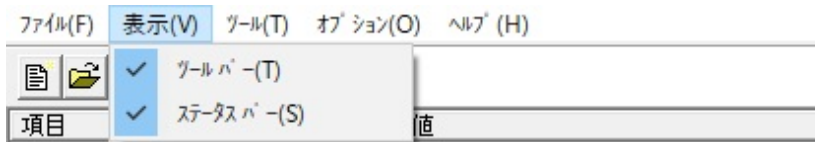


表4.4 項目説明

項目	内容
ツールバー(T)	ツールバーの表示/非表示を切り替えます。 デフォルトは、チェックがオンの状態(表示)です。 文字コード・ファイル形式変換の画面を終了すると、デフォルトの設定(チェックがオンの状態)に戻ります。
ステータスバー(S)	ステータスバーの表示/非表示を切り替えます。 デフォルトは、チェックがオンの状態(表示)です。 文字コード・ファイル形式変換の画面を終了すると、デフォルトの設定(チェックがオンの状態)に戻ります。

4.1.2.3 [ツール]メニュー

レイアウト定義画面を起動するメニューです。

図4.4 画面イメージ



表4.5 項目説明

項目	内容
レイアウト定義(L)	[レイアウト定義]画面を起動し、変換指示に設定されたレイアウト定義ファイルを開きます。 変換指示でレイアウト定義ファイルが設定されていない場合は、新規作成のレイアウト定義画面を起動します。

4.1.2.4 [オプション]メニュー

環境設定画面を起動するメニューです。

図4.5 画面イメージ

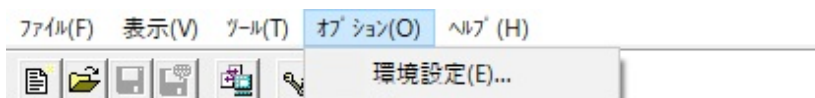


表4.6 項目説明

項目	内容
環境設定(E)	[環境設定]画面で、MDPORTが動作するにあたっての環境設定を行います。

4.1.2.5 [ヘルプ]メニュー

MDPORTのユーザーズガイドを表示するメニューです。
このメニューから、バージョン情報を表示することもできます。

図4.6 画面イメージ



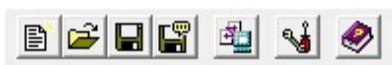
表4.7 項目説明

項目	内容
TF-MDPORT ヘルプ(H)	ユーザーズガイドが表示されます。 なお、ユーザーズガイドは、各画面に配置されている[ヘルプ]ボタンをクリックしたり、[F1]キーを押下したりすることにより、表示することもできます。
バージョン情報(A)	製品名、バージョン・レベル(括弧内は詳細版数)、Copyrightの情報が表示されます。








4.1.3 ツールバー

ツールバーには、よく使うメニューを素早く実行できるようにボタンで配置しています。
[表示]メニューで、ツールバーの表示/非表示を切り替えることができます。

図4.7 画面イメージ



各ボタンに対応するメニュー

-  [ファイル(F)]-[変換指示の新規設定(N)]
-  [ファイル(F)]-[変換指示ファイルを開く(O)]
-  [ファイル(F)]-[変換指示ファイルの上書き保存(S)]
-  [ファイル(F)]-[変換指示ファイルに名前を付けて保存(A)]
-  [ツール(T)]-[レイアウト定義(L)]
-  [オプション(O)]-[環境設定(E)]
-  [ヘルプ(H)]-[TF-MDPORT ヘルプ(H)]

参照

各メニューの内容については、「[4.1.2 メニュー](#)」を参照してください。

4.1.4 コマンドボタン

コマンドボタンには、変換実行に関するボタンを配置しています。

左側のボタンから順番に操作するイメージで構成されています。ただし、必ずしもすべてのボタンを実行する必要はありません。

図4.8 画面イメージ



表4.8 項目説明

項目	内容
設定(W)	[MDPORT変換指示ウィザード]が起動され、変換指示内容の設定を行います。 変換指示が既に設定されている場合は変更、何も設定されていない場合は新規設定になります。
プレビュー(P)	変換結果を変換実行前に画面上で確認することができます。 出力ファイルが一般ファイルの時に活用してください。
変換実行(X)	変換処理を開始します。
変換エラー表示(E)	変換処理で発生したエラー内容が表示されます。 変換エラーファイルが存在する場合に、表示できます。

参照

各コマンドボタンの実行については、「第3章 操作説明」の「[3.2.2 MDPORT変換指示ウィザード](#)」、「[3.2.6 プレビュー表示](#)」、「[3.2.7 変換実行](#)」、「[3.2.8 変換エラー表示](#)」を参照してください。

4.1.5 環境設定

MDPORTの環境設定を行う画面です。

[基本情報]と[COBOL]の2つのタブに分かれています。

[基本情報]タブ

作業用フォルダ、バッチ実行時のログファイル、変換エラーを表示するビューアプログラムの設定を行います。

図4.9 画面イメージ

環境設定

基本情報 | COBOL

作業用フォルダ (W)

参照(B)

省略するとシステムの作業用フォルダを使用します。

バッチ実行時のログファイル(L)

参照(R)

省略すると作業用フォルダにログファイルが作成されます。

変換エラーを表示するビューアプログラム(E)

参照(O)

省略すると帳簿が起動されます。

OK キャンセル ヘルプ

表4.9 項目説明

項目	内容
作業用フォルダ(W)	MDPORTが使用する作業用フォルダを指定します。 省略した場合、システムの作業用フォルダ(環境変数TEMPまたはWindowsフォルダ)が使用されます。 [参照(B)]ボタンをクリックして指定することも可能です。
バッチ実行時のログファイル(L)	バッチ実行時に出力されるログファイルをフルパスで指定します。 省略した場合、作業用フォルダに以下のファイル名で作成されます。 “MDPORT.LOG” [x86版]

項目	内容
	<p>“MDPORT64.LOG” [x64版]</p> <p>作業用フォルダを省略して、ログファイル名だけを指定した場合、バッチ実行時のカレントフォルダにログファイルが出力されます。</p> <p>[参照(R)]ボタンをクリックして指定することも可能です。</p>
変換エラーを表示するビューアプログラム(E)	<p>変換エラーを表示する外部ビューアプログラムをフルパスで指定します。</p> <p>ワードパッドや各種テキストエディタ等を指定できます。</p> <p>省略した場合、変換エラーはWindows標準のメモ帳で表示されます。</p> <p>[参照(O)]ボタンをクリックして指定することも可能です。</p> <p>変換エラーを表示するには、コマンドボタンの[変換エラー表示]ボタンをクリックする方法と、[プレビュー]画面の[オプション]メニューの[変換エラー表示]をクリックする方法があります。</p>
OK	変更した内容を確定して、[環境設定]画面を閉じます。
キャンセル	変更した内容を取り消して、[環境設定]画面を閉じます。
ヘルプ	ユーザーズガイドが表示されます。

[COBOL]タブ

COBOL仕様についての設定を行います。

図4.10 画面イメージ

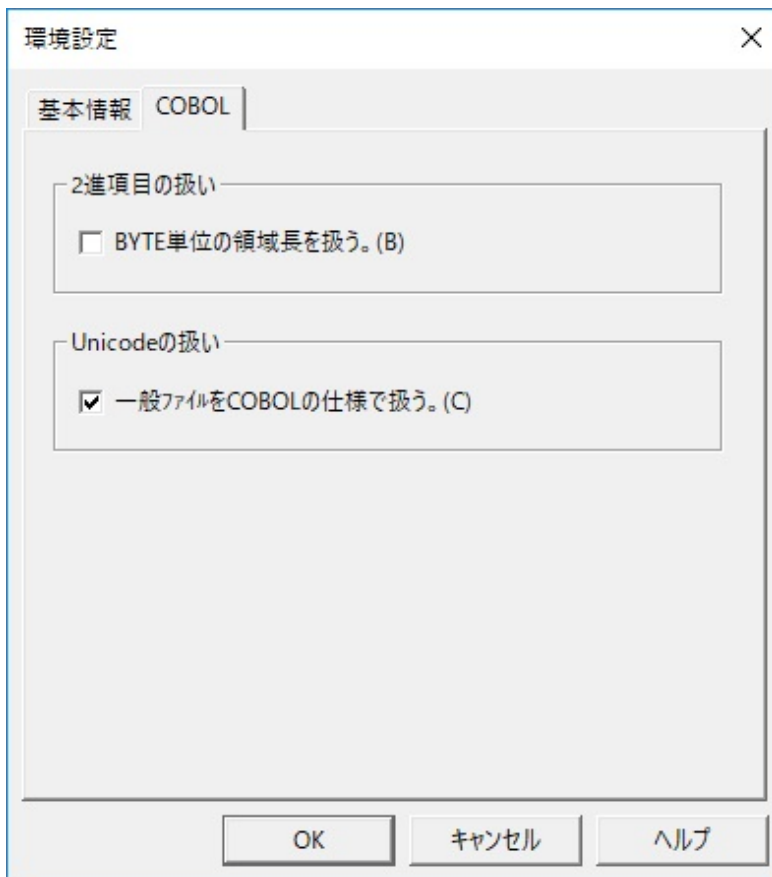


表4.10 項目説明

項目	内容
BYTE単位の領域長を扱う(B)	2進項目においてBYTE単位の領域長を扱う場合に、チェックボックスをオンにします。 デフォルトは、チェックボックスがオフ(WORD単位)の状態です。
一般ファイルをCOBOLの仕様で扱う(C)	コード体系がUnicode、かつファイル形式に一般ファイルを指定した場合、COBOLの仕様で扱うかどうかを指定します。 デフォルトは、チェックボックスがオンの状態です。 <ul style="list-style-type: none"> ・ チェックボックスがオンの場合: COBOLの仕様で扱います。 COBOLの仕様では、一部の属性について以下のようなコード体系で表されています。 <ul style="list-style-type: none"> － 英数字項目(X-英数字)、混在項目(M-混在): UTF8 － 日本語項目(N-日本語): UCS2/UTF16/UTF32 (コード体系に依存) <p>チェックボックスがオンの場合は、V60L10以前のバージョンとの互換性のあるデータを出力します(Unicodeの詳細でUCS2選択時のみ)。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ チェックボックスがオフの場合: コード体系に依存した形で扱います。
OK	変更した内容を確定して、[環境設定]画面を閉じます。
キャンセル	変更した内容を取り消して、[環境設定]画面を閉じます。
ヘルプ	ユーザーズガイドが表示されます。

4.1.6 MDPORT変換指示ウィザード

文字コード・ファイル形式変換画面のMDPORT変換指示ウィザードについて説明します。

4.1.6.1 基本情報 (1ページ目)

MDPORT変換指示ウィザードの1ページ目の画面です。

図4.11 画面イメージ



表4.11 項目説明

項目	内容
ファイル変換モード	ファイル変換にあたり、[データファイル変換(D)]と[テキスト変換(T)]のいずれかを選択します。デフォルトは、[データファイル変換(D)]が選択された状態です。
カレントフォルダ(C)	<p>カレントフォルダを指定します。</p> <p>[参照(R)]ボタンをクリックして指定することも可能です。</p> <p>カレントフォルダの指定は省略可能です。</p> <p>カレントフォルダを指定すると、そのフォルダを基準とした相対パスで、MDPORT変換指示ウィザード内の以下のファイル名を指定することができます。各ファイルの格納フォルダが変更された場合に、カレントフォルダを変更するだけで各ファイル名の再指定を行わなくて済みます。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ レイアウト定義ファイル名 (データファイル変換の場合) ・ 抽出漏れファイル名 (データファイル変換でレコード抽出機能を使用する場合) ・ 入力ファイル名 ・ 出力ファイル名 ・ 利用者定義変換テーブルのファイル名 ・ 変換エラーファイル名 <p>なお、カレントフォルダを指定した場合でも、フルパスで指定した各ファイルについては、フルパスの指定が有効になります。</p>
次へ(N)	[MDPORT変換指示ウィザード]の次のページに進みます。

項目	内容
キャンセル	変更した内容を取り消して、[MDPORT変換指示ウィザード]を閉じます。
ヘルプ	ユーザーズガイドが表示されます。

4.1.6.2 レイアウト定義情報 (2ページ目)

MDPORT変換指示ウィザードの2ページ目の画面です。

[基本情報\(1ページ目\)](#)のファイル変換モードで[データファイル変換(D)]を選択した場合に表示されます。

[テキスト変換(T)]を選択した場合は表示されません。

図4.12 画面イメージ

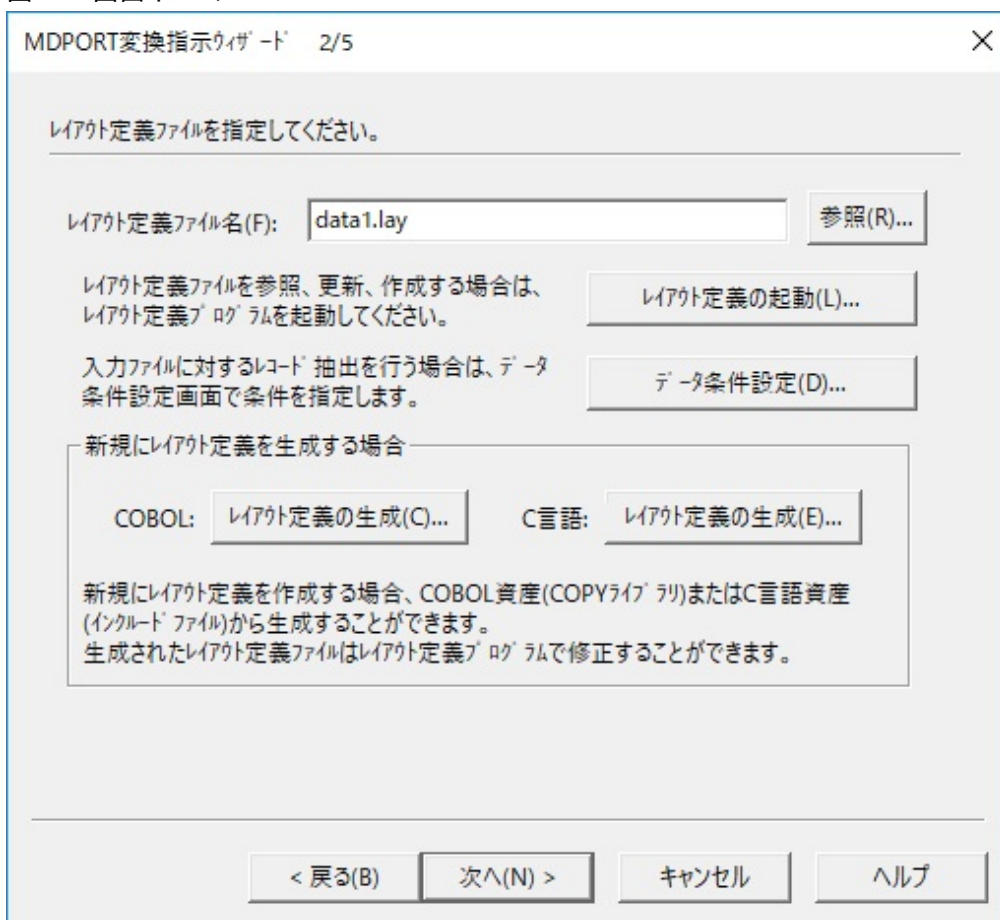


表4.12 項目説明

項目	内容
レイアウト定義ファイル名(F)	データファイル変換で使用するレイアウト定義ファイル名をフルパスで指定します。 カレントフォルダを設定している場合は相対パスでの指定も有効です。 [参照(R)]ボタンをクリックして指定することも可能です。
レイアウト定義の起動(L)	[レイアウト定義]画面を起動し、[レイアウト定義ファイル名(F)]に指定されたレイアウト定義ファイルを開きます。

項目	内容
	[レイアウト定義ファイル名(F)]が指定されていない場合は、新規作成のレイアウト定義画面を起動します。
データ条件設定(D)	[データ条件設定]画面を開きます。
レイアウト定義の生成(C)	既存COBOL資産からレイアウト定義ファイルを生成します。 既存COBOL資産の解析後に、[レイアウト定義ファイルの生成]画面が表示されます。
レイアウト定義の生成(E)	既存C言語資産からレイアウト定義ファイルを生成します。 既存C言語資産の解析後に、[レイアウト定義ファイルの生成]画面が表示されます。
戻る(B)	[MDPORT変換指示ウィザード]の前のページに戻ります。
次へ(N)	[MDPORT変換指示ウィザード]の次のページに進みます。
キャンセル	変更した内容を取り消して、[MDPORT変換指示ウィザード]を閉じます。
ヘルプ	ユーザーズガイドが表示されます。



参考

レイアウト定義ファイルの作成方法

レイアウト定義ファイルは、以下のいずれかの方法で作成します。

- ・ [レイアウト定義]画面を起動し、項目定義テンプレートまたは直接入力によって、項目定義を指定します。
- ・ [レイアウト定義]画面を起動し、既存COBOL資産より新規作成を行います。
- ・ [レイアウト定義]画面を起動し、既存C言語資産より新規作成を行います。
- ・ [MDPORT変換指示ウィザード]の[レイアウト定義の生成(C)]ボタンから、既存COBOL資産を指定することにより生成します。
- ・ [MDPORT変換指示ウィザード]の[レイアウト定義の生成(E)]ボタンから、既存C言語資産を指定することにより生成します。
- ・ MDPORTLCコマンドを利用して、既存COBOL資産より新規作成を行います。

4.1.6.2.1 データ条件設定

レコード抽出を行う場合に、レコード抽出の条件を設定する画面です。

図4.13 画面イメージ

No.	連結条件	項目名	演算子	条件値	16進指定
1		伝票番号	≠	9999999999	×
2	AND	製品名	=	バーコード	×
3	OR	製品名	=	日本語キーボード	×
4	OR	製品コード	=	31323334353637383930	○
5	AND	単価	>	10000	×
6	AND	単価	≠	99999	×
7	AND	売上数量	>	2000	×
8	AND	売上数量	<	5000	×
9	AND	売上年月日	≠	20170101	×
10	AND	売上年月日	≠	20181231	×

表4.13 項目説明

項目	内容
条件確定一覧	<p>設定したデータ条件が表示されます。</p> <p>ここに表示されている条件でレコード抽出を行います。</p> <ul style="list-style-type: none"> • [No.] データ条件の通し番号が表示されます。設定したデータ条件のNo.1からNo.10の順に判定を行います。 • [連結条件] データ条件の連結子[OR]または[AND]が表示されます(No.2以降)。 • [項目名] データ条件の項目名が表示されます。 • [演算子] データ条件の演算子が表示されます。 • [条件値] データ条件の条件値が表示されます。 • [16進指定] 16進指定を設定している場合は[○]、設定していない場合は[×]が表示されます。
連結条件	<p>データ条件を2つ以上指定する場合、前の条件との連結子として、[OR(O)]と[AND(N)]のいずれかを選択します。</p> <p>デフォルトは、いずれも選択されていない状態です。</p>
項目名(I)	<p>[MDPORT変換指示ウィザード]のレイアウト定義情報(2ページ目)で指定したレイアウト定義ファイル内の項目名を設定します。</p> <p>集団項目名や反復項目名は指定できません。</p>
演算子(P)	<p>入力レコードのデータ値と条件値を比較するための演算子を指定します。</p> <p>データ属性により、指定可能な演算子が異なります。</p>

項目	内容
	<ul style="list-style-type: none"> 文字属性: [= (完全一致)], [= (前方一致)], [=] 数値属性: [= (完全一致)], [<], [>], [≤], [≥], [=]
16進指定(1)	<p>条件値を16進で指定する場合、チェックボックスをオンにします。</p> <p>文字属性の場合のみ有効です。</p>
条件値(C)	<p>入力レコードのデータ値と比較するための条件値を指定します。</p> <p>条件値には最大150バイトまでの条件値の指定が可能です。</p> <p>数値属性の場合、最大18桁(“+”、“-”、“.”(小数点)は含みません)の数値指定が可能です。</p> <p>文字属性の混在項目属性(M)の場合のみ、条件値の未入力指定が可能です。条件値が未入力の場合はNULLデータと判断されますので、CSV形式の文字列項目のNULLデータを抽出することができます。</p> <p>【16進指定時の条件値について】</p> <p>使用できる文字は、半角英数字の“0~9”、“A~F”、“a~f”および“;”(セミコロン)です。</p> <p>セミコロンは、バイト毎の区切りとして使用することができます。例えば、“95788E6D92CA”と指定する代わりに、“9578;8E6D;92CA”または“95;78;8E;6D;92;CA”のように指定しても、条件値としては同じ意味になります。</p> <p>なお、ビット間にセミコロンを指定した場合は、下位ビットの“0”(16進)を省略したものとみなされます。例えば、“9;5;7;8”と指定した場合、“90507080”を指定したものとみなされます。</p>
追加(A)	<p>条件内容グループ内で[連結条件](No.2以降)、[項目名(I)]、[演算子(P)]、[16進指定(1)]、[条件値(C)]を設定後、[追加(A)]ボタンをクリックすると、条件確定一覧にデータ条件が追加されます。</p> <p>エラーが発生した場合は、メッセージの内容に従い条件内容を修正してください。</p>
更新(U)	<p>条件確定一覧で変更したい条件を選択し、条件内容グループ内で[連結条件](No.2以降)、[項目名(I)]、[演算子(P)]、[16進指定(1)]、[条件値(C)]を設定後、[更新(U)]ボタンをクリックすると、条件確定一覧のデータ条件が更新されます。</p> <p>エラーが発生した場合は、メッセージの内容に従い条件内容を修正してください。</p>
削除(D)	<p>条件確定一覧で削除したい条件を選択し、[削除(D)]ボタンを選択すると、条件確定一覧からデータ条件が削除されます。</p>
条件に合わないレコードを出力する(T)	<p>データ条件から漏れたレコードを出力する場合、チェックボックスをオンにします。</p> <p>チェックボックスをオンにした場合は、[抽出漏れファイル名(E)]の指定が必須です。</p>
抽出漏れファイル名(E)	<p>抽出漏れファイル名をフルパスで指定します。</p> <p>カレントフォルダを設定している場合は相対パスでの指定も有効です。</p> <p>[参照(R)]ボタンをクリックして指定することも可能です。</p> <p>[条件に合わないレコードを出力する(T)]のチェックボックスがオンの場合に、データ条件に一致しなかった入力レコードを本ファイルに出力します。</p> <p>抽出漏れファイルには、MDPORT変換前のデータが出力されるため、再度レコード抽出処理を行う際の入力ファイルとして利用することができます。</p>
OK	<p>変更した内容を確定して、[データ条件設定]画面を閉じます。</p>
キャンセル	<p>変更した内容を取消して、[データ条件設定]画面を閉じます。</p>
ヘルプ(H)	<p>ユーザーズガイドが表示されます。</p>

 参照

- ・レコード抽出の機能については、「第2章 機能説明」の「2.2.3 レコード抽出機能」を参照してください。
- ・レコード抽出の操作については、「第3章 操作説明」の「3.2.4 レコード抽出」を参照してください。
- ・レコード抽出の仕様については、「第6章 レコード抽出仕様」を参照してください。
- ・レコード抽出の注意事項については、「第7章 注意事項」の「7.2.5 レコード抽出機能について」を参照してください。

4.1.6.2.2 レイアウト定義ファイルの生成

MDPORT変換指示ウィザードのレイアウト定義情報(2ページ目)で、既存COBOL資産または既存C言語資産から新規にレイアウト定義ファイルを生成する場合に、必要な情報を指定する画面です。

図4.14 画面イメージ



表4.14 項目説明

項目	内容
入力データ形式	<p>入力データ形式を以下の中から選択します。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ [データファイル形式(D)] ・ [CSV形式(C)] <p>デフォルトは、[データファイル形式(D)]が選択された状態です。 [XML形式(X)]は選択できません(XML形式変換は使用できません)。</p>
出力データ形式	<p>出力データ形式を以下の中から選択します。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ [データファイル形式(A)] ・ [CSV形式(S)] <p>デフォルトは、[データファイル形式(A)]が選択された状態です。 [XML形式(M)]は選択できません(XML形式変換は使用できません)。</p>
レイアウト定義ファイル名(L)	<p>データファイル変換で使用するレイアウト定義ファイル名を指定します。 カレントフォルダを設定している場合は相対パスでの指定も有効です。</p>

項目	内容
	[参照(R)]ボタンをクリックして指定することも可能です。
OK	指定した内容で、レイアウト定義ファイルを生成します。
キャンセル	レイアウト定義ファイルの生成を中止します。
ヘルプ(H)	ユーザーズガイドが表示されます。

4.1.6.3 入出力ファイル情報 (3・4ページ目)

MDPORT変換指示ウィザードの3ページ目および4ページ目の画面です。

図4.15 画面イメージ

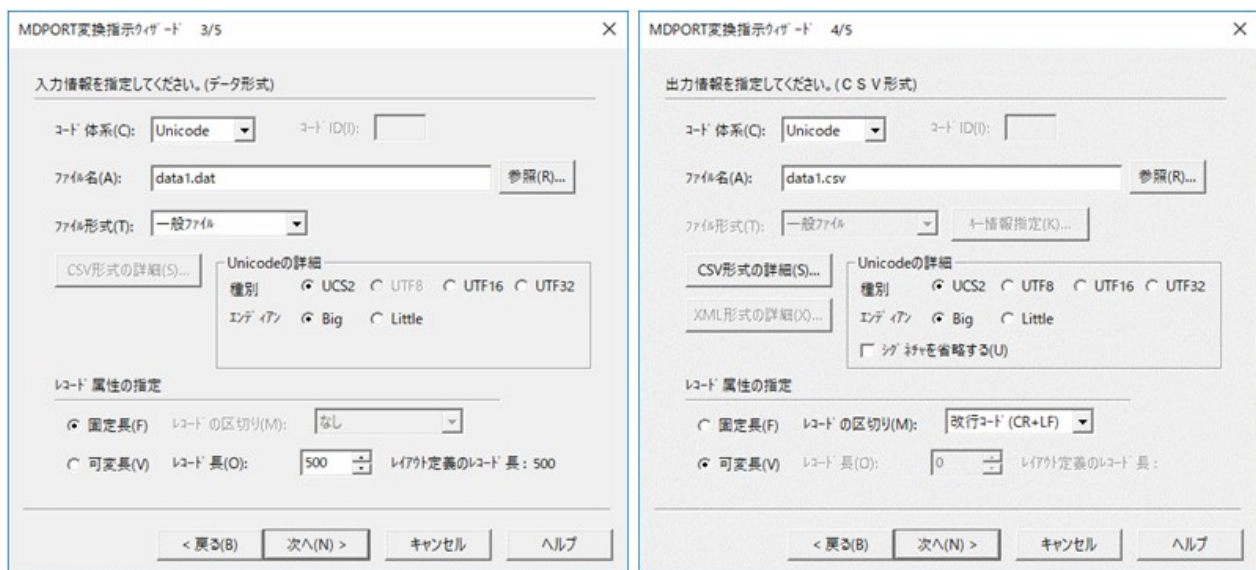


表4.15 項目説明

項目	内容
コード体系(C)	ファイルのコード体系として、[シフトJIS]、[EUC]、[JEF]、[JEF ASCII]、[JIS]、[Unicode]、または[その他]を選択します。 [その他]を選択した場合は、[コードID(I)]の入力が必要です。 サポートしている変換パスについては、「第5章 変換仕様」の「5.1.1 変換パス」を参照してください。
コードID(I)	富士通以外の他社コードを変換する場合に指定します。 具体的なコードIDについては、「第5章 変換仕様」の「5.1.4 他社コード変換」を参照してください。
ファイル名(A)	入力ファイル名または出力ファイル名をフルパスで指定します。 カレントフォルダを設定している場合は相対パスでの指定も有効です。 [参照(R)]ボタンをクリックして指定することも可能です。
ファイル形式(T)	(データファイル変換の場合) ファイル形式として、一般ファイルかCOBOLファイルかを指定します。 具体的には、[一般ファイル]、[COBOL85順ファイル]、[COBOL85行順ファイル]、[COBOL85相対ファイル]、または[COBOL85索引ファイル]を選択します。

項目	内容
	Windows上のCOBOLファイル以外は、[一般ファイル]を選択してください。
キー情報指定(K)	(COBOL索引ファイル出力の場合) [キー情報指定]画面で、索引キーに関する情報を指定します。 入力情報の指定(MDPORT変換指示ウィザード 3/5)の場合は表示されません。
CSV形式の詳細(S)	(CSV形式ファイルの場合) [CSV情報の指定]画面で、CSV形式に関する情報を指定します。
XML形式の詳細(X)	常に使用できません(XML形式変換は使用できません)。 入力情報の指定(MDPORT変換指示ウィザード 3/5)の場合は表示されません。
Unicodeの詳細	(コード体系がUnicodeの場合) Unicodeに関する情報として、種別・エンディアン・シグネチャの有無を指定します。 エンディアンの“Big”はビッグエンディアン、“Little”はリトルエンディアンを意味します。 詳しくは、「表4.16 Unicodeの詳細について」を参照してください。
レコード属性の指定	レコード属性として、[固定長(F)]と[可変長(V)]のいずれかを選択します。 [レコードの区切り(M)]として、[なし]、[改行コード(CR+LF)]、または[改行コード(LF)]を選択します(ただし、COBOLファイルの場合や、入力情報の[固定長(F)]を選択した場合は選択不可)。 COBOLファイルの場合や、[固定長(F)]を選択した場合は、[レコード長(O)]の指定が必要です。 データファイル変換(データファイル形式)の場合、[レイアウト定義のレコード長:]にレイアウト定義のレコード長が表示されます。マルチレイアウトの場合は、一番大きいレコード長が表示され、続いて「(マルチ)」と表示されます。 変換指示の新規設定時のみ、レイアウト定義のレコード長が[レコード長(O)]のデフォルト値として設定されます。 レイアウト定義を変更すると、[レイアウト定義のレコード長:]の値は自動で変わりますが、[レコード長(O)]の値は変わりませんので必要に応じて変更してください。[レコード長(O)]の値と、[レイアウト定義のレコード長:]の値が異なると、変換実行時に、領域溢れエラーやコード変換エラーが発生する場合がありますので注意が必要です。 一般的な指定内容を「表4.17 レコード属性の一般的な指定内容」に示していますので、参考にしてください。
戻る(B)	[MDPORT変換指示ウィザード]の前のページに戻ります。
次へ(N)	[MDPORT変換指示ウィザード]の次のページに進みます。
キャンセル	変更した内容を取り消して、[MDPORT変換指示ウィザード]を閉じます。
ヘルプ	ユーザーズガイドが表示されます。

表4.16 Unicodeの詳細について

項目	設定値	入力								出力							
		一般 ※1	一般 ※2	順 編 成	行 順 ※3	相 対	索 引	C S V ※3	テ キ ス ト ※3	一般 ※1	一般 ※2	順 編 成	行 順	相 対	索 引	C S V	テ キ ス ト
種別	UCS2																
	UTF16	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
	UTF32																
	UTF8	×		×		×	×			×		×		×	×		
エン ディ アン	Big				×	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
	Little	○	○	○	×	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
シグネチャを省略する ※4		-	-	-	-	-	-	-	-	×	×	×	×	×	×	○	○

○:指定可, ×:指定不可, -:非表示

※1 COBOLの仕様で扱う場合([環境設定]画面の[一般ファイルをCOBOLの仕様で扱う]のチェックボックスがオンの場合)です。

※2 選択したコード体系に依存する形で扱う場合([環境設定]画面の[一般ファイルをCOBOLの仕様で扱う]のチェックボックスがオフの場合)です。

※3 入力が行順ファイル、CSV形式ファイル、テキストファイルの時は、シグネチャに従います。

※4 シグネチャの出力を省略するかを指定します。入力情報の指定(MDPORT変換指示ウィザード 3/5)の場合は、[シグネチャを省略する]のチェックボックスは表示されません。また、コード体系がUnicode以外の場合は、[シグネチャを省略する]のチェックボックスは選択できません。[シグネチャを省略する]のチェックボックスがオフの場合、Unicodeの詳細で指定した形式のシグネチャがファイルの先頭に付加されます(例えば、UTF8の場合は“0xEFBBBF”の3バイトのデータがシグネチャとして付加されます)。

 参考

レコード属性の指定について

一般的には「表4.17レコード属性の一般的な指定内容」のように指定します。

表4.17 レコード属性の一般的な指定内容

種類	属性	レコードの区切り
データファイル形式	固定長	なし (レイアウト定義と同じレコード長)
Windows(DOS)CSV形式	可変長	改行コード(CR+LF)
Windows(DOS)テキスト	可変長	改行コード(CR+LF)
UNIXテキスト(CSV含む)	可変長	改行コード(LF)
汎用機ソース	固定長	なし (レコード長: 80が多い)

ワイルドカードによる指定

入力ファイル名にワイルドカードを指定した場合は、出力ファイル名へは拡張子のみを指定します。この場合、生成される出力ファイル名としては、入力ファイル名.拡張子となります。

【例】

入力ファイル名の指定：*.dat

出力ファイル名の指定：.out

↓

変換対象となる入力ファイル名：aaa.dat、bbb.dat …

生成される出力ファイル名：aaa.out、bbb.out …



出力ファイル名をフルパスで指定すると、ワイルドカードとして正しく処理されない場合があります。

そのため、ワイルドカードを使用する場合は、MDPORT変換指示ウィザードの**基本情報(1ページ目)**のカレントフォルダを指定した上で、出力ファイル名に拡張子のみ(ピリオド含む)を指定してください。



- 入力ファイル名にワイルドカードを指定した場合は、デフォルトの**変換エラーファイル**名として“Mdport.err”が設定されます。
- 変換エラーファイルが既に存在する場合は、既存のファイルは削除され新たにファイルが作成されます。
- 変換エラーファイルには、検索されたすべての入力ファイルのエラーが追加モードで出力されます。
- MDPORTで利用可能なワイルドカードは、“*”(アスタリスク)のみです。
- **レイアウト定義ファイル**は、同じものが利用されます。
- 出力ファイルが既に存在する場合、上書きして良いかどうかを確認するメッセージボックスが表示されます。

なお、バッチ実行機能による変換実行では、出力ファイルが既に存在する場合、処理は中止されます(/fオペランド指定時は、強制的に上書きされます)。バッチ実行機能については、「ユーザーズガイド コマンド編」を参照してください。

【CSV形式のワイルドカード指定について】

- 入力側がCSV形式の場合

入力ファイル名の指定：*.csv

出力ファイル名の指定：aaa.dat

↓

変換対象となる入力ファイル名：aaa.csv、bbb.csv …

生成される出力ファイル名：aaa.dat

- 出力側がCSV形式の場合

入力ファイル名の指定：aaa.dat

出力ファイル名の指定：*.csv

↓

変換対象となる入力ファイル名：aaa.dat

生成される出力ファイル名：aaa00000.csv、aaa00001.csv、aaa00002.csv …

4.1.6.3.1 キー情報指定

COBOL索引ファイルへ出力する場合に、索引キーに関する情報を指定する画面です。

図4.16 画面イメージ

表4.18 項目説明

項目	内容
主キー(M)	主キーまたは副キーについて、位置と長さをセミicolon(;)で区切って指定します。
副キー-1(1)	位置は1から始まるレコード上の相対バイト位置で、長さはバイト長です。
副キー-2(2)	キーが連続した領域でない場合、同様に並べて指定します。
副キー-3(3)	主キーは省略できません。
副キー-4(4)	[キー情報指定]画面を再表示した場合、キーの位置と長さの区切りはカンマ(,)で表示されます。 また、キーが連続した領域でない場合の区切りはスラッシュ(/)で表示されます。
キー重複	各キーについて重複ありの場合、チェックボックスをオンにします。
OK	変更した内容を確定して、[キー情報指定]画面を閉じます。
キャンセル	変更した内容を取り消して、[キー情報指定]画面を閉じます。
ヘルプ(H)	ユーザーズガイドが表示されます。



例

図4.17 キー情報の指定例

- ・主キーが、1から5バイト 重複なし
- ・副キー1が、1から7バイト 重複あり
- ・副キー2が、5から3バイト、11から5バイト 重複あり

上記の設定後、[OK]ボタンで内容を確定し、[キー情報指定]画面を再表示した場合、以下のように表示されます。

図4.18 [キー情報指定]画面の再表示例

4.1.6.3.2 CSV情報の指定

CSV形式を入力または出力とする場合に、CSV形式に関する情報を指定する画面です。

図4.19 画面イメージ

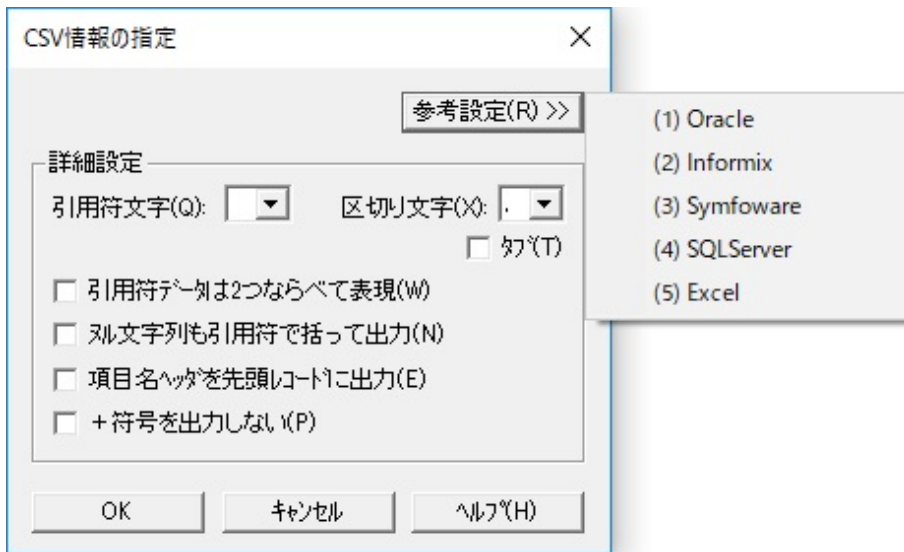


表4.19 項目説明

項目	内容
参考設定(R)	各RDBMSおよびExcelでサポートされる、デフォルトの形式を選択できます。 詳しくは、「表4.20 参考設定について」を参照してください。
引用符文字(Q)	文字列項目を括る引用符文字を指定します。 引用符文字として指定可能な文字は、「第7章 注意事項」の「7.2.2 CSV形式で扱える引用符・区切り文字」を参照してください。
区切り文字(X)	項目間を区切るための文字を指定します(通常、CSV形式はカンマ)。 区切り文字として指定可能な文字は、「第7章 注意事項」の「7.2.2 CSV形式で扱える引用符・区切り文字」を参照してください。
タブ(T)	項目間を区切るための文字としてタブコード“0x09”を指定する場合、チェックボックスをオンにします。
引用符データは2つならべて表現(W)	データ中に引用符が存在する場合の扱いを指定します。 1つの引用符データは2つの引用符で表現し、文字列項目を括っている引用符との識別を行う場合、チェックボックスをオンにします。 なお、JISコードの場合は正常に出力されない場合があります。
引用符文字なしの前置ブランクカット抑制(B)	(入力側の場合のみ有効) 引用符がない文字列項目について、前置の空白を削除しない場合、チェックボックスをオンにします。
ヌル文字列も引用符で括って出力(N)	(出力側の場合のみ有効) NULLの項目文字列を2つの引用符で表す場合、チェックボックスをオンにします。 チェックボックスがオフの場合は、NULLの項目文字列に引用符は付加されません。
項目名ヘッダを先頭レコードに出力(E)	(出力側の場合のみ有効) CSV出力レコードの1件目にレイアウト定義からの項目名の見出しレコードを出力する場合、チェックボックスをオンにします。 出力されたCSV形式ファイルを表計算ソフトで使用する場合に便利です。 なお、チェックボックスをオンにしても、入力レコード件数が0件の場合は、項目名ヘッダーは出力されません。

項目	内容
+符号を出力しない(P)	(出力側の場合のみ有効) CSV出力レコードの符号あり数値文字列項目に+符号を出力しない場合、チェックボックスをオンにします。
OK	変更した内容を確定して、[CSV情報の指定]画面を閉じます。
キャンセル	変更した内容を取り消して、[CSV情報の指定]画面を閉じます。
ヘルプ(H)	ユーザーズガイドが表示されます。

表4.20 参考設定について

項目	引用符文字 (Q)	区切り文字 (X)	引用符データは2つならべて表現 (W)	引用符文字なしの前置ブランクカット抑制(B)	ヌル文字列も引用符で括って出力 (N)	項目名ヘッダを先頭レコードに出力 (E)	+符号を出力しない(P)
(1) Oracle	"	,	Yes	No	Yes	No	No
(2) Informix	なし	,	No	No	No	No	No
(3) Symfoware	"	,	Yes	No	No	No	No
(4) SQL Server	なし	,	No	No	No	No	No
(5) Excel	"	,	Yes	No	No	Yes	No

レイアウト定義でCSV形式を引用符で括る指定

「引用符で括る指定」とは、具体的には以下を指します。

- ・ 項目定義テンプレートの場合
項目定義テンプレートの[拡張設定]画面で、[CSV形式を引用符で括る]のチェックボックスをオンにします。
- ・ 直接入力の場合
直接入力の拡張設定項目の[引用符]に“Y”を指定します。

4.1.6.4 変換仕様/エラー情報 (5ページ目)

MDPORT変換指示ウィザードの5ページ目の画面です。

図4.20 画面イメージ

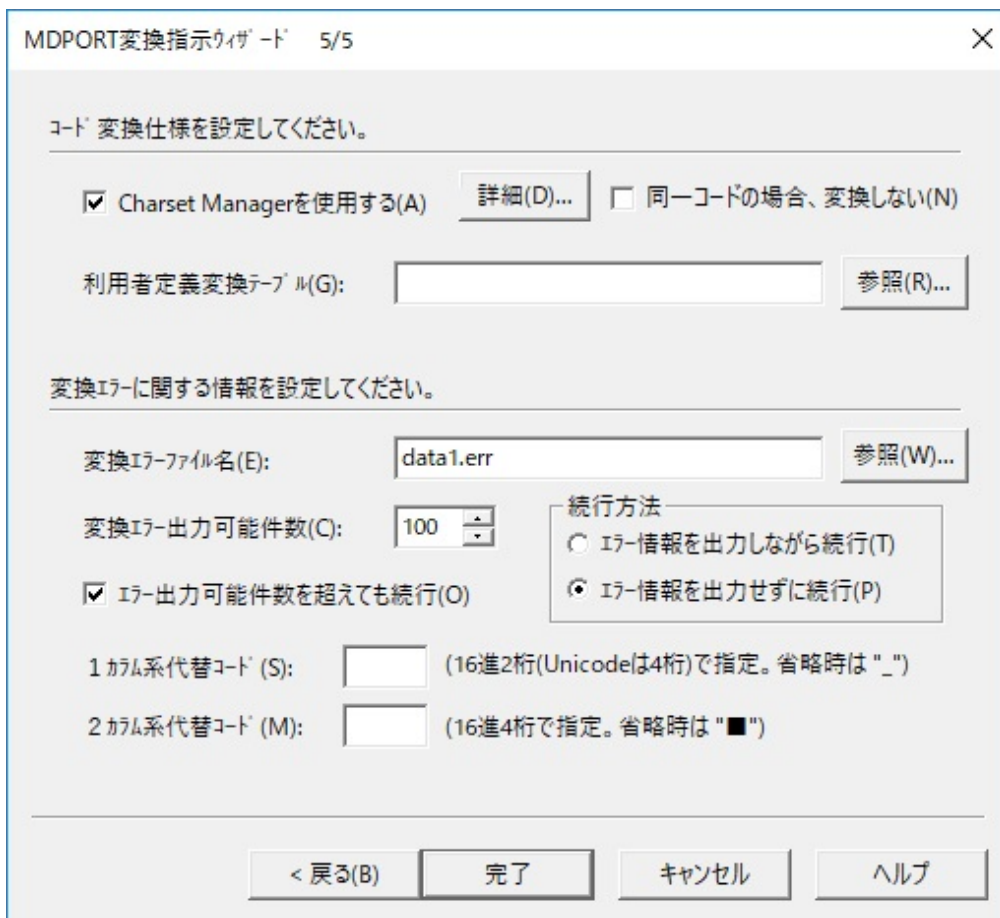


表4.21 項目説明

項目	内容
Charset Managerを使用する(A)	<p>Charset Managerを使用してコード変換する場合、チェックボックスをオンにします。</p> <p>Charset Managerが正常にインストールされていない場合、同一コード間の変換の場合、またはCharset Managerで対応していないコード変換パスの場合に指定することはできません。</p> <p>入力側または出力側のコード体系を変更すると、チェック状態が自動で変わる場合があるので注意してください。</p> <p>Charset Managerに関する動作環境は、[詳細(D)]ボタンで設定します。</p> <p>Charset Managerの外字連携機能を利用することにより、利用者定義文字や拡張文字を任意の外字区画等に割り当てたコード変換を行うことができます。</p> <p>なお、チェックボックスをオフにした場合、Unicodeの変換の動作は以下のようになります。</p> <ul style="list-style-type: none"> シフトJIS⇔Unicode間は、Windows APIを使用した変換が行われます。 JEF⇔Unicode間は、内部変換テーブルファイルを使用したUniJEFへの変換が行われます。
詳細(D)	[Charset Manager環境の設定]画面を開きます。
同一コードの場合、変換しない(N)	<p>入力コードと出力コードに同一のコードを指定して、チェックボックスをオンにした場合、変換処理を行わないようにします。</p> <p>異なるコードの場合に指定することはできません。</p>

項目	内容
	指定した場合の注意事項については、「第7章 注意事項」の「7.2.3 同一コード無変換について」を参照してください。
利用者定義変換テーブル (G)	<p>コード変換の際に参照したい利用者定義変換テーブルのファイル名を指定します。</p> <p>カレントフォルダを設定している場合は相対パスでの指定も有効です。</p> <p>[参照(R)]ボタンをクリックして指定することも可能です。</p> <p>利用者定義変換テーブルの書式については、付録Aの「A.1 利用者定義変換テーブルの書式」を参照してください。</p> <p>Charset Managerを使用したコード変換を実施する場合は、本機能を使用せず、Charset Managerの外字連携機能を使用することを推奨します。</p>
変換エラーファイル名 (E)	<p>変換エラーファイル名をフルパスで指定します。</p> <p>カレントフォルダを設定している場合は相対パスでの指定も有効です。</p> <p>[参照(W)]ボタンをクリックして指定することも可能です。</p> <p>デフォルトでは入力ファイル名の拡張子を“.err”にしたファイル名となります。</p>
変換エラー出力可能件数 (C)	<p>変換エラーファイルへ詳細情報を出力する最大件数を指定します。</p> <p>指定できる値は“1～9999”の範囲で、デフォルト値は“100”です。</p>
エラー出力可能件数を超えても続行(O)	<p>チェックボックスがオフの場合は、変換処理中に変換エラー出力可能件数を超えると、処理を中止するかどうかの問い合わせが発生します。</p> <p>チェックボックスがオンの場合は、[続行方法]の指定に従って処理を続行します。</p> <p>デフォルトは、チェックボックスがオフの状態です。</p> <p>ただし、バッチ実行の場合は、問い合わせは発生せず処理を中止します。バッチ実行については、「ユーザーズガイド コマンド編」を参照してください。</p>
続行方法	<p>変換エラー出力可能件数を超えて変換処理を続行する場合の、変換エラーの出力方法を選択します。</p> <p>[エラー出力可能件数を超えても続行(O)]のチェックボックスがオンの場合のみ選択可能です。</p> <p>[エラー情報を出力しながら続行(T)]を選択した場合は、エラー情報を出力しながら変換処理を続行します。</p> <p>[エラー情報を出力せずに続行(P)]を選択した場合は、エラー情報を出力せずに変換処理を続行します。</p>
1カラム系代替コード(S)	<p>1カラム系文字コード(ANK文字)の変換でエラーが発生した場合に、出力データとして何の文字へ置き換えるかを16進コードで、Unicode以外は2桁、Unicodeの時は4桁で指定します。</p> <p>指定は出力側コード体系でのコードを入力します。</p> <p>Unicodeの時はUCS2ビッグエンディアンで指定します。</p> <p>省略時は、出力側コード体系の“_”(アンダースコア)とします(出力側コード体系がシフトJISの場合:“0x5F”、JEFの場合:“0x6D”)。</p>
2カラム系代替コード(M)	<p>2カラム系文字コード(日本語文字)の変換でエラーが発生した場合に、出力データとして何の文字へ置き換えるかを16進コード4桁で指定します。</p> <p>指定は出力側コード体系でのコードを入力します。</p> <p>Unicodeの時はUCS2ビッグエンディアンで指定します。</p> <p>省略時は、出力側コード体系の“■”(黒い四角文字)とします(出力側コード体系がシフトJISの場合:“0x81A1”、JEFの場合:“0xA2A3”)。</p>
戻る(B)	[MDPORT変換指示ウィザード]の前のページに戻ります。
完了	変更した内容を確定して、[MDPORT変換指示ウィザード]を閉じます。
キャンセル	変更した内容を取消して、[MDPORT変換指示ウィザード]を閉じます。

項目	内容
ヘルプ	ユーザーズガイドが表示されます。

ポイント

コード変換仕様の設定の優先度について

Charset Managerと利用者定義変換テーブルの両方を使用する場合、利用者定義変換テーブルの指定の方が優先されます(文字コード単位)。

4.1.6.4.1 Charset Manager環境の設定

Charset Managerを使用した変換を行う場合、MDPORTのコード変換規則はCharset Manager(iconv)に従います。

この画面では、入出力ファイルのコード体系が、iconv変換(iconv_open関数)のどのキーワードに該当するかを指定します。

図4.21 画面イメージ



表4.22 項目説明

項目	内容
変換元コード(I)	変換元コードについて、iconv_openのキーワードを選択します。
変換先コード(O)	変換先コードについて、iconv_openのキーワードを選択します。
OK	変更した内容を確定して、[Charset Manager環境の設定]画面を閉じます。
キャンセル	変更した内容を取り消して、[Charset Manager環境の設定]画面を閉じます。
ヘルプ(H)	ユーザーズガイドが表示されます。

参照

各キーワードの意味やコード変換の詳細は、Charset Managerのマニュアルを参照してください。

4.1.7 プレビュー

文字コード・ファイル形式変換画面のプレビューについて説明します。

4.1.7.1 プレビュー

プレビュー画面です。

図4.22 画面イメージ

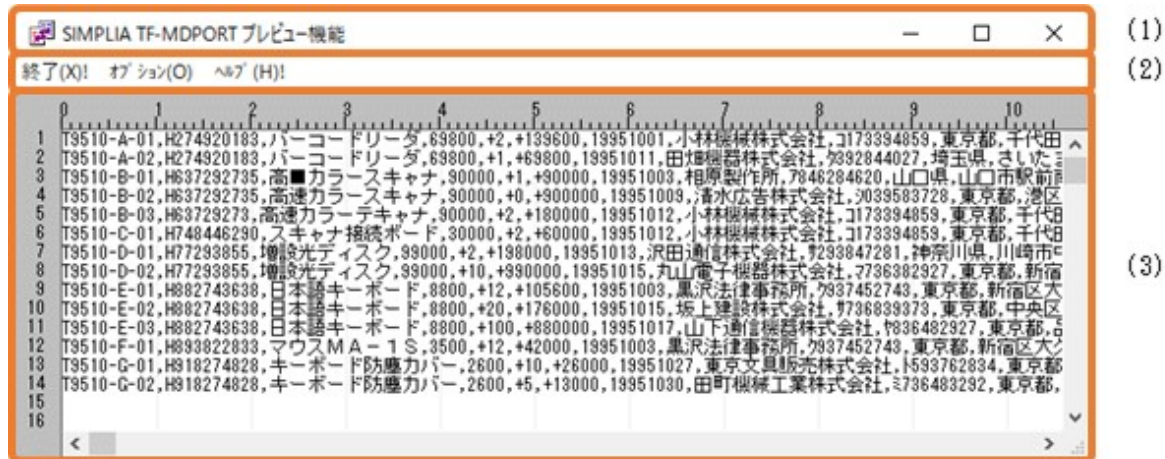


表4.23 項目説明

No	項目	内容
(1)	タイトルバー	[×]ボタンをクリックすると、[プレビュー]画面が閉じます。 [□]ボタンをクリックすると、[プレビュー]画面が最大化されます。 [▢]ボタンをクリックすると、[プレビュー]画面が最小化されます。
(2)	メニュー	[終了(X)]メニュー、[オプション(O)]メニュー、[ヘルプ(H)]メニューがあります。
(3)	プレビュー内容	プレビューの内容が表示されます。 プレビューで表示できるのは、先頭レコード100件までです。

4.1.7.2 [終了]メニュー

プレビュー画面を閉じるメニューです。

図4.23 画面イメージ

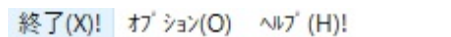


表4.24 項目説明

項目	内容
終了(X)	[プレビュー]画面を閉じます。

4.1.7.3 [オプション]メニュー

プレビュー画面の表示方法を設定するメニューです。

このメニューから、変換エラーを表示することもできます。

図4.24 画面イメージ

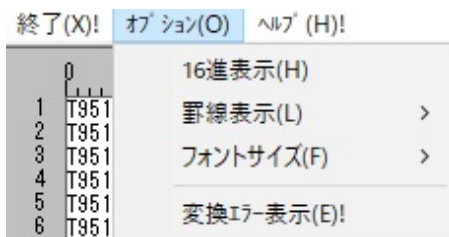


表4.25 項目説明

項目	内容
16進表示(H)	<p>チェックをオンにすると、データ内容を16進コードで表示します。</p> <p>もう一度選択すると、チェックがオフになり、通常の表示に戻ります。</p> <p>デフォルトは、チェックがオフの状態です。</p> <p>プレビューの画面を終了すると、デフォルトの設定(チェックがオフの状態)に戻ります。</p>
罫線表示(L)	<p>指定したカラムの単位で縦の罫線を表示し、データの各相対位置を見やすくします。</p> <p>[10カラム(T)]、[5カラム(F)]、[1カラム(O)]、または[表示なし(N)]に設定します。</p> <p>デフォルトは、[10カラム(T)]が選択された状態です。</p> <p>プレビューの画面を終了すると、デフォルトの設定([10カラム(T)]が選択された状態)に戻ります。</p>
フォントサイズ(F)	<p>表示フォントの指定を行います。</p> <p>[小(S)]、[標準(N)]、または[大(B)]に設定します。</p> <p>デフォルトは、[標準(N)]が選択された状態です。</p> <p>プレビューの画面を終了すると、デフォルトの設定([標準(N)]が選択された状態)に戻ります。</p>
変換エラー表示(E)	<p>プレビュー表示されている変換の範囲(出力レコードの先頭100件)で発生した変換エラーが表示されます。</p> <p>変換エラーが1件もない場合は、選択できません。</p>

 参照

変換エラー表示の出力内容については、「第3章 操作説明」の「3.2.8 変換エラー表示」を参照してください。

4.1.7.4 [ヘルプ]メニュー

MDPORTのユーザーズガイドを表示するメニューです。

図4.25 画面イメージ

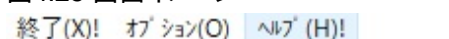


表4.26 項目説明

項目	内容
ヘルプ(H)	ユーザーズガイドが表示されます。

4.2 レイアウト定義

レイアウト定義機能の画面について説明します。

4.2.1 メイン画面

レイアウト定義機能のメイン画面です。

図4.26 画面イメージ



表4.27 項目説明

No	項目	内容
(1)	タイトルバー	レイアウト定義ファイル名が表示されます。 新規作成でレイアウト定義ファイルを保存していない場合や、既存のレイアウト定義ファイルを開いていない場合は「無題」と表示されます。 [×]ボタンをクリックすると、画面が閉じます。

No	項目	内容
		[□]ボタンをクリックすると、画面が最大化されます。 [▢]ボタンをクリックすると、画面が最小化されます。
(2)	メニュー	[ファイル(F)]メニュー、[編集(E)]メニュー、[設定(S)]メニュー、[表示(V)]メニュー、[オプション(O)]メニュー、[ヘルプ(H)]メニューがあります。
(3)	ツールバー	メニューの各機能を1回のマウスクリックで実行することができます。 [表示(V)]メニューの[ツールバー(T)]のチェックがオンの場合のみ表示されます。
(4)	マルチレイアウト定義 指定ダイアログバー	マルチレイアウトの定義を行う場合に使用します。 レイアウト名を選択すると、レイアウト名の右側に選択したレイアウトの適用条件が表示され、その(5)レイアウト定義内容が表示されます。
(5)	レイアウト定義内容	レイアウト定義の内容が表示されます。 設定内容の意味については、「 4.2.7 項目定義の編集 」を参照してください。
(6)	ステータスバー	メニュー、ツールバーにマウスカーソルを当てると、説明が表示されます。 右下には、キーボードのキーロック状態が表示されます。 [表示(V)]メニューの[ステータスバー(S)]のチェックがオンの場合のみ表示されます。

4.2.2 メニュー

レイアウト定義画面の各メニューについて説明します。

4.2.2.1 [ファイル]メニュー

レイアウト定義の新規作成、レイアウト定義ファイルの選択、保存、各種レイアウト定義資産の取り込み/出力を行うメニューです。

図4.27 画面イメージ

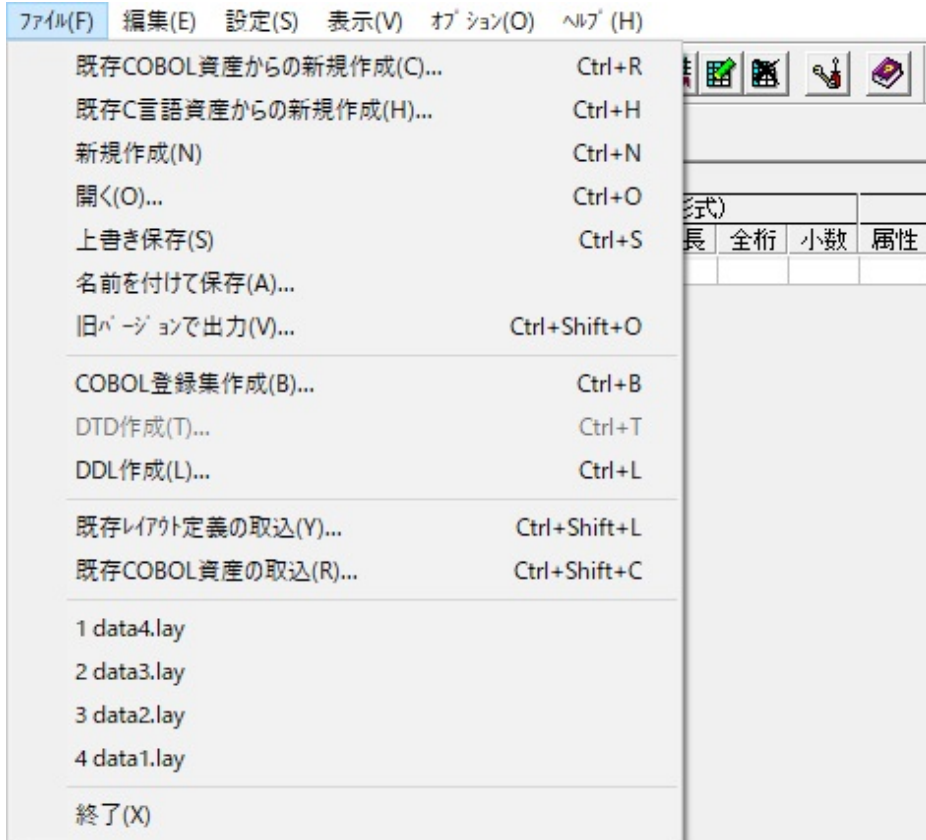


表4.28 項目説明

項目	内容
既存COBOL資産からの新規作成(C)	<p>既存COBOL資産より、項目定義が自動生成されます。</p> <p>既存COBOL資産の解析後に、[データ形式指定]画面が表示されます。</p> <p>ショートカットキー[Ctrl+R]でも実行できます。</p> <p>詳しくは、「第3章 操作説明」の「3.3.3 既存資産の取り込み」を参照してください。</p>
既存C言語資産からの新規作成(H)	<p>既存C言語資産より、項目定義が自動生成されます。</p> <p>既存C言語資産の解析後に、[データ形式指定]画面が表示されます。</p> <p>ショートカットキー[Ctrl+H]でも実行できます。</p> <p>詳しくは、「第3章 操作説明」の「3.3.3 既存資産の取り込み」を参照してください。</p>
新規作成(N)	<p>新規にレイアウト定義を行います。</p> <p>ショートカットキー[Ctrl+N]でも実行できます。</p>
開く(O)	<p>既存のレイアウト定義ファイルを開きます。</p> <p>レイアウト定義ファイルは、エクスプローラからのドラッグ&ドロップ操作でも開くことができます。</p> <p>レイアウト定義ファイルを開くと、レイアウト定義内容がメイン画面に表示されます。</p> <p>ショートカットキー[Ctrl+O]でも実行できます。</p>
上書き保存(S)	<p>編集中のレイアウト定義内容をレイアウト定義ファイルへ、上書きで保存します。</p> <p>ショートカットキー[Ctrl+S]でも実行できます。</p> <p>なお、定義内容に誤りがある場合、そのまま保存するかどうかの確認ダイアログが表示されます。</p>
名前を付けて保存(A)	<p>編集中のレイアウト定義内容をレイアウト定義ファイルへ、名前を付けて保存します。</p>

項目	内容
	なお、定義内容に誤りがある場合、そのまま保存するかどうかの確認ダイアログが表示されます。
旧バージョンで出力(V)	<p>マルチレイアウト対応以前(V70より前)のバージョンでレイアウト定義ファイルを出力します。</p> <p>マルチレイアウトのレイアウト定義では、選択中の(画面に表示されている)レイアウトのみが出力対象になります。</p> <p>SIMPLIA TF-LINDAでレイアウト定義ファイルの読み込みを行う場合は、本機能でレイアウト定義ファイルを出力してください。</p> <p>ショートカットキー[Ctrl+Shift+O]でも実行できます。</p>
COBOL登録集作成(B)	<p>編集中のレイアウト定義内容で、COBOL登録集を作成します。</p> <p>続いて表示される[COBOL登録集出力指定]画面で、入力情報/出力情報のどちらの属性でCOBOL登録集を作成するかを選択します。</p> <p>ショートカットキー[Ctrl+B]でも実行できます。</p> <p>詳しくは、「第3章 操作説明」の「3.3.9.1 COBOL登録集の出力」を参照してください。</p>
DTD作成(T)	常に使用できません(XML形式のレイアウト定義は行えません)。
DDL作成(L)	<p>編集中のレイアウト定義内容で、DDL文を作成します。</p> <p>続いて表示される[DDL文出力指定]画面で、入力情報/出力情報のどちらの属性でDDL文を作成するか、および、Symfoware/Oracle/SQLServerのどのデータベースに対応するDDL文を作成するかを選択します。</p> <p>ショートカットキー[Ctrl+L]でも実行できます。</p> <p>詳しくは、「第3章 操作説明」の「3.3.9.2 DDLの出力」を参照してください。</p> <p>注意事項については、「第7章 注意事項」の「7.3.3 DDL文出力について」を参照してください。</p>
既存レイアウト定義の取込(Y)	<p>既存レイアウト定義ファイルからレイアウト情報を取り込んで、選択中のレイアウトに上書きします。</p> <p>取り込むレイアウト情報は、編集中のレイアウトと同じデータ形式(入力側および出力側)である必要があります。</p> <p>異なるデータ形式を読み込んだ場合は、警告ダイアログが表示されて、取り込むことができません。</p> <p>マルチレイアウトのレイアウト定義ファイルの取り込みはできません。</p> <p>ショートカットキー[Ctrl+Shift+L]でも実行できます。</p> <p>詳しくは、「第3章 操作説明」の「3.3.3 既存資産の取り込み」を参照してください。</p>
既存COBOL資産の取込(R)	<p>既存COBOL資産を取り込んで、選択中のレイアウトに上書きします。</p> <p>取り込まれたCOBOL資産は、編集中のレイアウトのデータ形式へ自動的に変換されます。</p> <p>ショートカットキー[Ctrl+Shift+C]でも実行できます。</p> <p>詳しくは、「第3章 操作説明」の「3.3.3 既存資産の取り込み」を参照してください。</p>
最近使用したファイル	<p>最近使用したレイアウト定義ファイルが最大4個表示されます。</p> <p>ファイル名を選択することにより、該当のレイアウト定義ファイルを開くことができます。</p>
終了(X)	レイアウト定義機能を終了します。

4.2.2.2 [編集]メニュー

レイアウト定義行の追加/削除や、レイアウトの追加/編集/削除を行うメニューです。

図4.28 画面イメージ



表4.29 項目説明

項目	内容
行の切り取り(T)	選択した行を切り取ります。 ショートカットキー[Ctrl+X]でも実行できます。
行のコピー(C)	選択した行をコピーします。 ショートカットキー[Ctrl+C]でも実行できます。
行の貼り付け(P)	[行の切り取り(T)]または[行のコピー(C)]を行った行を、選択した行の前に挿入します。 ショートカットキー[Ctrl+V]でも実行できます。
行の挿入(I)	選択した行の前に、新たに定義行を挿入します。 ショートカットキー[Ctrl+I]でも実行できます。
行の削除(D)	選択した行を削除します。 ショートカットキー[Ctrl+D]でも実行できます。
最終行の追加(A)	最終行に、新たに定義行を追加します。 ショートカットキー[Ctrl+A]でも実行できます。
新規レイアウトの挿入(S)	(マルチレイアウトを作成する場合) 表示中のレイアウトの前に、レイアウトを新規に追加します。 ショートカットキー[Ctrl+Shift+I]でも実行できます。
新規レイアウトの追加(N)	(マルチレイアウトを作成する場合) 表示中のレイアウトの後に、レイアウトを新規に追加します。 ショートカットキー[Ctrl+Shift+A]でも実行できます。
レイアウトの編集(E)	[レイアウト定義テンプレート]画面で、レイアウト名およびレイアウトの適用条件を設定します。 通常はマルチレイアウトを作成する場合に使用しますが、マルチレイアウトの場合でなくても、適用条件を設定することにより、レコード抽出を行うことが可能です。 ショートカットキー[Ctrl+Shift+E]でも実行できます。
レイアウトの削除(L)	(マルチレイアウトを作成する場合) 表示中のレイアウトを削除します。 レイアウトが1つしかない場合は、警告メッセージが表示され、削除することができません。

項目	内容
	ショートカットキー[Ctrl+Shift+D]でも実行できます。

4.2.2.3 [設定]メニュー

項目定義、基本情報、データ形式、一括設定、言語解析オプションの設定を行うメニューです。

図4.29 画面イメージ

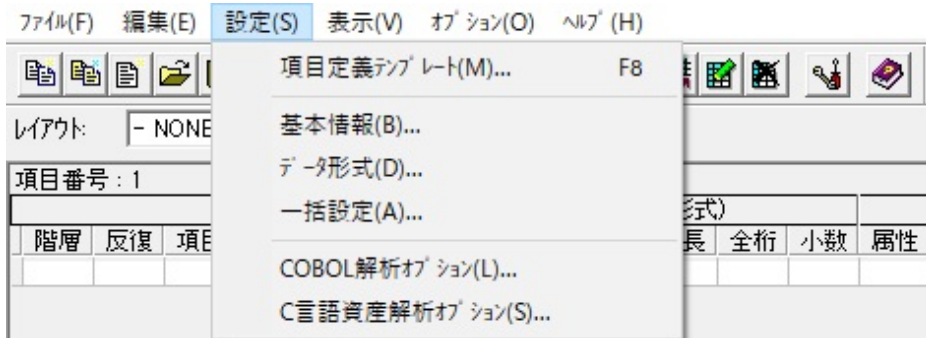


表4.30 項目説明

項目	内容
項目定義テンプレート(M)	選択した行に対して、[項目定義テンプレート]画面で項目定義を設定します。 キーボードのファンクションキー[F8]でも実行できます。 選択状態の行が存在しない場合は、警告メッセージが表示されて、[項目定義テンプレート]画面を開くことができません。
基本情報(B)	[基本情報設定]画面で、レイアウト定義の基本情報を設定します。
データ形式(D)	[データ形式指定]画面で、入力および出力のデータ形式を指定します。
一括設定(A)	[一括設定]画面で、項目情報の一括設定を行うメニューを選択します。 なお、一括設定を行うと、元に戻すことはできません。
COBOL解析オプション(L)	[COBOL解析オプション]画面で、COBOL資産を解析するための各種情報を設定します。
C言語資産解析オプション(S)	[C言語資産解析オプション]画面で、C言語資産を解析するための各種情報を設定します。

4.2.2.4 [表示]メニュー

ツールバー、ステータスバー、拡張情報の表示/非表示を切り替えるメニューです。

このメニューから、ウィンドウサイズをリセットすることもできます。

図4.30 画面イメージ

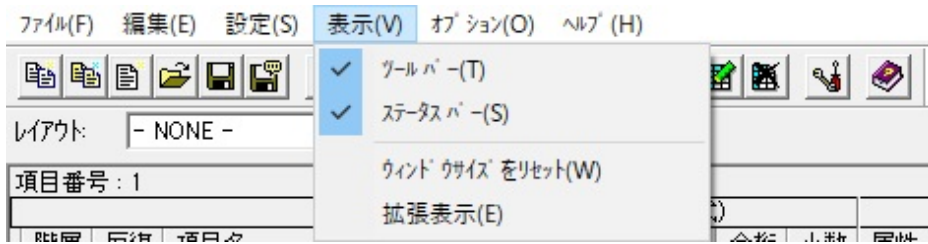


表4.31 項目説明

項目	内容
ツールバー(T)	ツールバーの表示/非表示を切り替えます。 デフォルトは、チェックがオンの状態(表示)です。 レイアウト定義の画面を終了すると、デフォルトの設定(チェックがオンの状態)に戻ります。
ステータスバー(S)	ステータスバーの表示/非表示を切り替えます。 デフォルトは、チェックがオンの状態(表示)です。 レイアウト定義の画面を終了すると、デフォルトの設定(チェックがオンの状態)に戻ります。
ウィンドウサイズをリセット(W)	ウィンドウサイズや項目定義表のセル幅等を初期状態にします。
拡張表示(E)	拡張設定情報の表示/非表示を切り替えます。 デフォルトは、チェックがオフの状態(非表示)です。 レイアウト定義の画面を終了すると、デフォルトの設定(チェックがオフの状態)に戻ります。

 参照

拡張表示については、「第3章 操作説明」の「3.3.5 項目定義の編集」の「[図3.33 拡張設定の表示イメージ](#)」を参照してください。

4.2.2.5 [オプション]メニュー

環境設定画面を起動するメニューです。

図4.31 画面イメージ

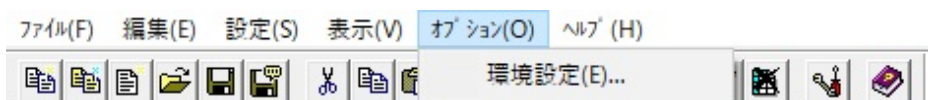


表4.32 項目説明

項目	内容
環境設定(E)	[環境設定] 画面で、レイアウト定義機能が動作するにあたっての環境設定を行います。

4.2.2.6 [ヘルプ]メニュー

MDPORTのユーザズガイドを表示するメニューです。

このメニューから、バージョン情報を表示することもできます。

図4.32 画面イメージ

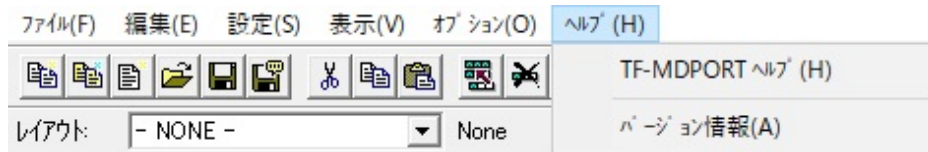


表4.33 項目説明

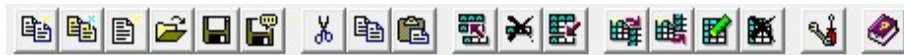
項目	内容
TF-MDPORT ヘルプ(H)	ユーザーズガイドが表示されます。 なお、ユーザーズガイドは、各画面に配置されている[ヘルプ]ボタンをクリックしたり、[F1]キーを押下したりすることにより、表示することもできます。
バージョン情報(A)	製品名、バージョン・レベル(括弧内は詳細版数)、Copyrightの情報が表示されます。

4.2.3 ツールバー

ツールバーには、よく使うメニューを素早く実行できるようにボタンで配置しています。

[表示]メニューで、ツールバーの表示/非表示を切り替えることができます。

図4.33 画面イメージ



各ボタンに対応するメニュー

-  [ファイル(F)]-[既存COBOL資産からの新規作成(C)]
-  [ファイル(F)]-[既存C言語資産からの新規作成(H)]
-  [ファイル(F)]-[新規作成(N)]
-  [ファイル(F)]-[開く(O)]
-  [ファイル(F)]-[上書き保存(S)]
-  [ファイル(F)]-[名前を付けて保存(A)]
-  [編集(E)]-[行の切り取り(T)]
-  [編集(E)]-[行のコピー(C)]
-  [編集(E)]-[行の貼り付け(P)]
-  [編集(E)]-[行の挿入(I)]
-  [編集(E)]-[行の削除(D)]
-  [編集(E)]-[最終行の追加(A)]
-  [編集(E)]-[新規レイアウトの挿入(S)]
-  [編集(E)]-[新規レイアウトの追加(N)]
-  [編集(E)]-[レイアウトの編集(E)]
-  [編集(E)]-[レイアウトの削除(L)]
-  [オプション(O)]-[環境設定(E)]
-  [ヘルプ(H)]-[TF-MDPORT ヘルプ(H)]

参照

.....
各メニューの内容については、「[4.2.2 メニュー](#)」を参照してください。
.....

4.2.4 マルチレイアウト定義指定ダイアログバー

この画面では、マルチレイアウトを扱う場合に、レイアウトの選択および適用条件の表示を行います。

図4.34 画面イメージ



表4.34 項目説明

No	項目	内容
(1)	レイアウト名	<p>選択したレイアウト名が表示されます。</p> <p>マウスでクリックすると、レイアウト名がドロップダウンリストで一覧表示されます。</p> <p>ドロップダウンリストからレイアウト名を選択すると、選択したレイアウトのレイアウト定義の内容が画面に表示されます。</p> <p>変換実行においては、変換対象の各レコードに対して、ドロップダウンリストに表示されるレイアウト名の上から順番に条件判定を行います。</p> <p>レイアウト名が未入力の場合は[NONE]と表示されます。デフォルトは[NONE]です。</p>
(2)	レイアウトの適用条件	<p>選択したレイアウトの適用条件が表示されます。</p> <p>表示される書式については、以下の「適用条件の書式」を参照してください。</p>

適用条件の書式

op 位置,比較長: *pos,len* 比較データ: *min~max*

表4.35 変数説明

変数名	内容
op	<p>条件式の演算子です。</p> <p>[NONE]、[EQ]、[NOT]、または[OTHER]が表示されます。</p> <p>デフォルトは[NONE]です。</p>
pos	比較するデータのフィールド位置(開始位置)が表示されます。
len	比較するデータのフィールド長(バイト数)が表示されます。
min	比較するデータの最小値が表示されます。
max	比較するデータの最大値が表示されます。

ポイント

レイアウトの編集について

マルチレイアウト定義指定ダイアログバーでは、レイアウト名やレイアウトの適用条件を編集することはできません。

編集は、[編集(E)]メニューの[レイアウトの編集(E)]から[レイアウト定義テンプレート]画面を開いて行ってください。

参照

マルチレイアウトの作成方法については、「第3章 操作説明」の「[3.3.8 マルチレイアウトの作成](#)」を参照してください。

4.2.5 環境設定

レイアウト定義画面の環境設定を行う画面です。

図4.35 画面イメージ

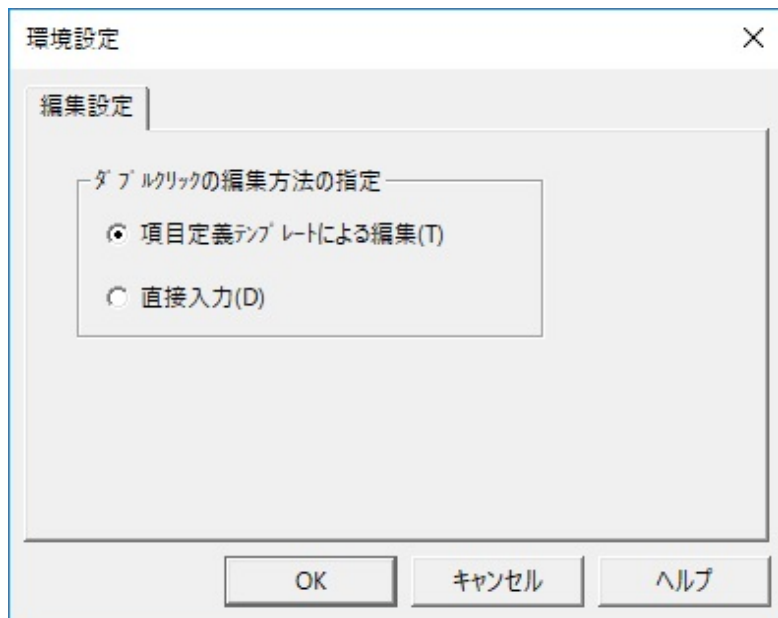


表4.36 項目説明

項目	内容
ダブルクリックの編集方法の指定	レイアウト定義画面上でのダブルクリック時の編集方法の指定です。 [項目定義テンプレートによる編集(T)]を選択した場合、ダブルクリックした行が編集対象となり[項目定義テンプレート]画面が開きます。 [直接入力(D)]を選択した場合、ダブルクリックしたセルの入力がレイアウト定義画面上で可能になります。 デフォルトは、[項目定義テンプレートによる編集(T)]が選択された状態です。
OK	変更した内容を確定して、[環境設定]画面を閉じます。
キャンセル	変更した内容を取消して、[環境設定]画面を閉じます。
ヘルプ	ユーザーズガイドが表示されます。

4.2.6 レイアウト定義テンプレート

レイアウト名やレイアウトの適用条件を設定する画面です。

図4.36 画面イメージ

レイアウト定義テンプレート

レイアウト名(L):

条件式(C):

フィールド位置(B):

フィールド長(F):

最小値(I):

最大値(M):

レイアウトの移動

前レイアウト(P)

次レイアウト(N)

OK キャンセル ヘルプ(H)

表4.37 項目説明

項目	内容
レイアウト名(L)	<p>レイアウト名を入力します。</p> <p>レイアウト名は60バイトまで入力可能です。</p> <p>未入力でも登録は可能ですが、マルチレイアウトを作成する場合は、各レイアウトを区別するために必ず入力してください。</p> <p>[基本情報設定]画面のレイアウト名とは異なります。</p>
条件式(C)	<p>比較条件式を選択します。</p> <p>以下の4つのうち、必ず1つを選択する必要があります。</p> <ul style="list-style-type: none"> • [NONE] … 条件なし • [EQ] … 等しい • [NOT] … 等しくない • [OTHER] … それ以外 <p>デフォルトは、[NONE]が選択された状態です。</p> <p>[NONE]または[OTHER]を選択した場合、条件を設定することはできません([フィールド位置]、[フィールド長]、[最小値]、[最大値]の項目は入力不可となります)。</p> <p>マルチレイアウトを作成する場合は、[NONE]以外を選択してください。</p> <p>[OTHER]は、[EQ]や[NOT]のどの条件にも該当しないレコードに適用する条件ですので、レイアウトの最後の条件として使用してください。または、[OTHER]を使用しないことにより、[EQ]や[NOT]の条件に該当するレコードのみを出力させることも可能です。</p> <p>マルチレイアウトについては、「第3章 操作説明」の「3.3.8 マルチレイアウトの作成」を参照してください。</p>
フィールド位置(B)	<p>比較するデータの開始位置について、“1”をレコードの先頭としたバイト値で指定します。</p> <p>必ず指定する必要があります。</p> <p>最小値は“1”、最大値は“32767”です。</p>
フィールド長(F)	<p>比較するデータの長さ(バイト数)を指定します。</p> <p>必ず指定する必要があります。</p> <p>最小値は“1”、最大値は“32768 - フィールド位置”です。</p>

項目	内容
最小値(I)	比較するデータの最小値を指定します。 文字列を指定する場合は、"(ダブルクォーテーション)"で括って指定します。 それ以外の場合は、16進数で設定します。 フィールド長よりも短い場合は、余った領域にNULLがあるものとして比較します。 フィールド長よりも長い場合は、フィールド長の長さまでを対象として比較します。 最大値を空欄の状態では最小値のみを指定すると、最小値の定置比較となります。
最大値(M)	比較するデータの最大値を指定します。 文字列を指定する場合は、"(ダブルクォーテーション)"で括って指定します。 それ以外の場合は、16進数で設定します。 フィールド長よりも短い場合は、余った領域にNULLがあるものとして比較します。 フィールド長よりも長い場合は、フィールド長の長さまでを対象として比較します。 最小値を空欄の状態では最大値のみを指定すると、最大値の定置比較となります。
前レイアウト(P)	各項目の指定内容のチェックを行い、変更した内容を確定して、一つ前のレイアウトの情報が表示されます。 既に先頭レイアウトの場合は、警告ダイアログが表示されます。
次レイアウト(N)	各項目の指定内容のチェックを行い、変更した内容を確定して、次のレイアウトの情報が表示されます。 既に最終レイアウトの場合は、警告ダイアログが表示されます。
OK	各項目の指定内容のチェックを行い、変更した内容を確定して、[レイアウト定義テンプレート]画面を閉じます。 実際のレイアウトレコード長とフィールド位置・フィールド長の整合性チェックは、レイアウト定義ファイルの保存時に行います。
キャンセル	変更した内容を取り消して、[レイアウト定義テンプレート]画面を閉じます。
ヘルプ(H)	ユーザーズガイドが表示されます。



注意

[キャンセル]ボタンで編集を無効にできる範囲

[キャンセル]ボタンにおいて、編集を無効にできるのは、現在編集対象のレイアウト情報のみです。

[前レイアウト(P)]ボタンや[次レイアウト(N)]ボタンによりレイアウト移動を行った場合、その時点での編集内容が確定されますので、レイアウト移動前の変更内容を取り消すことはできません。

4.2.7 項目定義の編集

項目定義の編集を行うには、以下の2通りの方法があります。

それぞれの画面について説明します。

- ・ [項目定義テンプレートによる編集](#)
- ・ [直接入力](#)

項目定義の編集方法については、「第3章 操作説明」の「3.3.5 項目定義の編集」を参照してください。

4.2.7.1 項目定義テンプレート

レイアウトの項目定義を設定する画面です。

図4.37 画面イメージ

表4.38 項目説明

項目	内容
階層(L)	<p>項目の階層を示します。</p> <p>ドロップダウンリストから、“0～7”のいずれかを選択します。デフォルトは“0”です。</p> <p>レイアウトにおいて、階層は必ず“0”から始まる必要があります。</p> <p>階層は連番で指定する必要があります(例えば、階層“0”の次に、階層“1”を飛ばして階層“2”を指定することはできません)。</p> <p>COBOLデータ記述のレベル番号とは意味が異なるので注意してください。</p> <p>階層を利用することで、集団項目の定義が可能です。</p> <p>集団項目については、「第3章 操作説明」の「3.3.6 集団項目の定義」を参照してください。</p>
反復(R)	<p>反復の指定を行う場合、チェックボックスをオンにして、“2～32767”の範囲で反復数を入力します。</p> <p>指定がある場合、その行は反復指定行として他の項目定義行とは意味が異なります。</p> <p>反復については、「第3章 操作説明」の「3.3.7 反復項目/配列の定義」を参照してください。</p>
拡張設定(X)	[拡張設定]画面を開きます。
項目名(I)	<p>任意の名称で定義可能です。</p> <p>全角・半角混在可能で、最大60バイトまで定義できます。</p>

項目	内容
	<p>空白、カンマ(,)およびセミコロン(;)を含めることはできません。</p> <p>省略や他項目との同一名称の指定も可能ですが、項目名はレコード抽出のデータ条件設定の項目名となるので注意してください。</p> <p>また、マスク機能を使用する場合、項目名はマスクデータファイルで使用するので注意してください。</p>
属性(A) 属性(U)	<p>データ格納形式を意味する項目属性の種類を選択します。</p> <p>属性は文字属性と数値属性に分類され、文字属性と数値属性との変換はできません。</p> <p>詳しくは、「4.2.7.3 項目属性の種類」を参照してください。</p>
相対位置(O) 相対位置(V)	<p>(データファイル形式の場合)</p> <p>レコード上における項目の開始位置を、“1”から始まる相対バイト位置で指定します。</p> <p>“1～32767”の範囲で指定します。</p> <p>[設定(S)]メニューの一括設定の機能により、相対位置を自動的に振り直すことも可能です。</p>
領域長(E) 領域長(Y)	<p>項目領域長をバイト単位で指定します。</p> <p>“1～32767”の範囲で指定します。</p> <p>日本語項目属性の場合は常に偶数となります。</p> <p>CSV形式の場合は入力不要です。</p>
符号(S) 符号(G)	<p>(数値属性の場合)</p> <p>符号ありの場合は、チェックボックスをオンにします。</p> <p>チェックボックスがオンの場合、外部10進項目属性については、符号の種類を選択が必要です。</p> <p>詳しくは、「4.2.7.4 外部10進での符号の種類」を参照してください。</p>
全体桁数(Z) 全体桁数(W)	<p>(データファイル形式での数値属性の場合)</p> <p>数値における全体桁数を指定します。</p> <p>全体桁数とは、整数部桁数と小数部桁数を足した桁数を指します。</p> <p>“1～18”の範囲で指定します。</p>
小数部桁数(D) 小数部桁数(C)	<p>(データファイル形式での数値属性の場合)</p> <p>数値における小数部桁数を示します。</p> <p>“0”～(全体桁数に入力した数値まで)の範囲で指定します。</p>
先頭(T)	<p>各項目の指定内容のチェックを行い、変更した内容を確定して、先頭行の情報が表示されます。</p> <p>既に先頭行の場合は、警告ダイアログが表示されます。</p>
前行(P)	<p>各項目の指定内容のチェックを行い、変更した内容を確定して、一つ前の行の情報が表示されます。</p> <p>既に先頭行の場合は、警告ダイアログが表示されます。</p>
次行(N)	<p>各項目の指定内容のチェックを行い、変更した内容を確定して、次の行の情報が表示されます。</p> <p>既に最終行の場合は、行を追加するかどうかの確認ダイアログが表示されます。</p>
最終(B)	<p>各項目の指定内容のチェックを行い、変更した内容を確定して、最終行の情報が表示されます。</p> <p>既に最終行の場合は、警告ダイアログが表示されます。</p>

項目	内容
OK	各項目の指定内容のチェックを行い、変更した内容を確定して、[項目定義テンプレート]画面を閉じます。
キャンセル	変更した内容を取り消して、[項目定義テンプレート]画面を閉じます。
ヘルプ(H)	ユーザーズガイドが表示されます。

参照

[項目定義テンプレート]画面で設定した内容は、レイアウト定義画面の一覧の表に反映されます。

[項目定義テンプレート]画面の設定内容について、対応するレイアウト定義画面の列名および設定値は、「[4.2.7.2 直接入力](#)」を参照してください。

参考

相対位置の自動変更機能

[データファイル形式](#)の場合に、[項目定義テンプレート]画面により領域長を変更すると、以降の項目の相対位置を自動調整するかどうかの確認ダイアログが表示されます。

自動調整した場合、領域長の変更分が、以降の項目定義行の相対位置に加算または減算されます。

なお、階層や反復数の変更、および階層が1以上の項目の領域長の変更については、自動変更機能は使用できません。

ポイント

集団項目の指定方法

入力情報および出力情報について、[属性]のドロップダウンリストの一番下の空白行を選択し、[全体桁数]、[小数部桁数]に0を入力する必要があります。

集団項目を作成する場合、既存の項目定義行を修正するのではなく、[行の挿入(I)]または[最終行の追加(A)]で新規に作成することを推奨します。

注意

[キャンセル]ボタンで編集を無効にできる範囲

[キャンセル]ボタンにおいて、編集を無効にできるのは、現在編集対象の項目定義行の情報のみです。

[先頭(T)]ボタン、[前行(P)]ボタン、[次行(N)]ボタン、[最終(B)]ボタンにより行の移動を行った場合、その時点での編集内容が確定されるため、行移動前の変更内容を取り消すことはできません。

4.2.7.1.1 拡張設定

項目の拡張情報を設定する画面です。

図4.38 画面イメージ

拡張設定

(入力) CSV形式を引用符で括る(I)

(出力) CSV形式を引用符で括る(O)

入力チェックを行う(C)

無変換で出力する(U)

固定長で出力する(F) 領域長(L)

ゼロ抑制を行う(Z)

全てヌルでもエラーにしない(N)

マスクする(M)

(入力) Z-外部10進の符号(J)

(出力) Z-外部10進の符号(K)

XMLタグ出力

開始/終了タグ(I)

属性(A)

EMPTYタグ(E)

なし(D)

OK キャンセル ヘルプ(H)

表4.39 項目説明

項目	内容
(入力) CSV形式を引用符で括る(I) (出力) CSV形式を引用符で括る(O)	(CSV形式の場合) 文字項目を引用符で括る場合、チェックボックスをオンにします。 デフォルトは、文字属性は引用符で括り、数値属性は括りません。 [MDPORT変換指示ウィザード]の[CSV情報の指定]画面で、引用符を指定した場合に有効です。
入力チェックを行う(C)	数値項目(外部10進の符号部およびゾーン部、内部10進の符号部)の厳密チェック処理を行う場合、チェックボックスをオンにします。 本指定は、変換エラーの出力レベルを制御するものであり、変換仕様が変更されることはありません。
無変換で出力する(U)	一切の変換処理を行わずに出力する場合(無変換出力を行う場合)、チェックボックスをオンにします。 可変長項目は、無変換をサポートしていません。
固定長で出力する(F)	出力側項目が可変長の項目(出力がCSV形式の場合も含む)に対して、常に指定された領域長(固定長)で出力する場合、チェックボックスをオンにして、[領域長(L)]を指定します。 出力側の領域長を省略している場合は、領域長“0”として扱われるため、注意してください。 出力が数値文字列項目属性(V)の場合、全体桁数および小数部桁数の指定が有効となります。 例えば、入力データ“000123”をCSV形式の数値文字列項目属性の項目に変換すると、通常は先行ゼロが削除されて“123”で出力されますが、チェックボックスをオン(領域長および全体桁数:6)にすることにより“000123”で出力できます。

項目	内容
	すべての項目に対し本指定を行うと、出力ファイルは固定レコード長となります。
ゼロ抑制を行う(Z)	<p>(固定長出力指定の数値文字列項目属性に対して有効)</p> <p>固定長出力指定の数値文字列項目属性(V)に対して、ゼロ抑制を行う場合、チェックボックスをオンにします。</p> <ul style="list-style-type: none"> • チェックボックスがオフの場合: 先行ゼロおよび小数部下位ゼロは抑制されません。 • チェックボックスがオンの場合: ゼロは抑制され空白で出力します。 <p>小数点付きのデータを抑制する場合は、直接入力にて、領域長、全桁および小数桁を指定してください。</p> <p>例えば、入力データ“000123”をCSV形式の数値文字列項目属性の項目に変換する場合、固定長出力指定(領域長および全体桁数:6)にして、チェックボックスをオンにすることにより“△△△123”(半角空白を△で表記)で出力できます。</p>
全てヌルでもエラーにしない(N)	<p>MDPORTの仕様では、NULL(0x00)は文字以外の項目とみなしてコード変換エラー扱いとします。</p> <p>チェックボックスをオンにすることにより、データファイル中の文字属性の項目内の入力データがすべてNULLの場合に、コード変換エラーにならないようにすることができます。</p> <ul style="list-style-type: none"> • チェックボックスがオフの場合: NULLはコード変換エラー扱いとなり代替文字に変換されます。 • チェックボックスがオンの場合: コード変換エラーとはならず、出力側項目属性の初期値で出力されます。 <p>例えば、英数字項目属性の項目がすべてNULLの入力データをCSV形式の混在項目属性の項目に変換する場合、チェックボックスをオンにすることにより、コード変換エラーにはならず[""] (出力側の[CSV情報の指定]画面で[ヌル文字列も引用符で括って出力]がオンの場合)で出力できます。</p>
マスクする(M)	<p>マスク処理を行う場合、チェックボックスをオンにします。</p> <p>マスク処理については、「第3章 操作説明」の「3.2.5 マスク処理」を参照してください。</p>
(入力) Z-外部10進の符号(J)	<p>入力データの属性が外部10進の場合、ドロップダウンリストから符号の種類を選択します。</p> <ul style="list-style-type: none"> • 「デフォルト」の場合: NetCOBOLの符号に対応した変換をします。 • 「MicroFocusCOBOL」の場合: MicroFocusCOBOLの符号に対応した変換をします。
(出力) Z-外部10進の符号(K)	<p>出力データの属性が外部10進の場合、ドロップダウンリストから符号の種類を選択します。</p> <ul style="list-style-type: none"> • 「デフォルト」の場合: NetCOBOLの符号に対応した変換をします。 • 「MicroFocusCOBOL」の場合: MicroFocusCOBOLの符号に対応した変換をします。
XMLタグ出力	常に使用できません(XML形式のレイアウト定義は行えません)。
OK	変更した内容を確定して、[拡張設定]画面を閉じます。
キャンセル	変更した内容を取消して、[拡張設定]画面を閉じます。
ヘルプ(H)	ユーザーズガイドが表示されます。

 参照

拡張設定で設定した内容は、レイアウト定義画面の一覧の表に反映されます。

拡張設定の設定内容について、対応するレイアウト定義画面の列名および設定値は、「4.2.7.2 直接入力」(拡張設定項目)を参照してください。

4.2.7.2 直接入力

項目定義をレイアウト定義画面で直接入力する場合の設定値について説明します。

拡張設定項目を表示するには、[表示(V)]メニューの[拡張表示(E)]のチェックをオンにする必要があります。

図4.39 画面イメージ

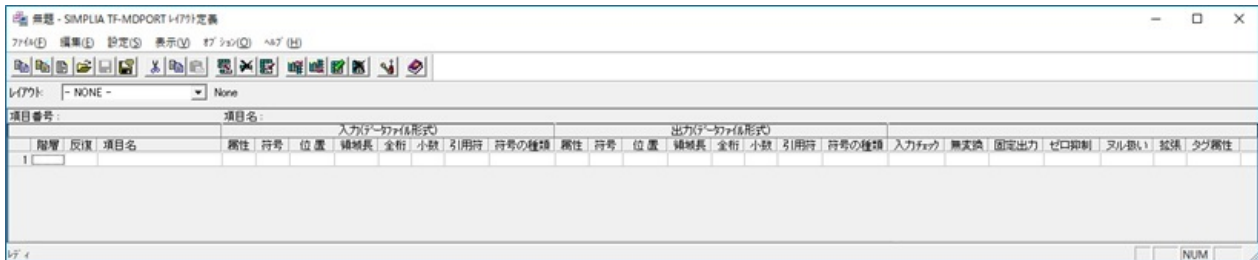


表4.40 項目説明

レイアウト定義画面の列名	設定値	対応する項目(項目定義テンプレート)
階層	“0～7”	階層(L)
反復	“2～32767”	反復(R)
項目名	任意(全角・半角混在可能で、最大60バイトまで) ただし、空白、カンマ(,)およびセミコロン(;)は使用不可	項目名(I)
属性(入力/出力)	「4.2.7.3 項目属性の種類」を参照してください。	属性(A) 属性(U)
符号(入力/出力)	(数値属性の場合) 符号ありの場合:“S” ただし、外部10進の場合は設定値が異なります。 詳細は「4.2.7.4 外部10進での符号の種類」を参照してください。	符号(S) 符号(G)
位置(入力/出力)	(データファイル形式の場合) “1～32767”	相対位置(O) 相対位置(V)
領域長(入力/出力)	“1～32767” CSV形式の場合は省略可能です。	領域長(E) 領域長(Y)
全桁(入力/出力)	(データファイル形式での数値属性の場合)	全体桁数(Z)

レイアウト定義画面の列名	設定値	対応する項目(項目定義テンプレート)
	“1～18”	全体桁数(W)
小数(入力/出力)	(データファイル形式での数値属性の場合) “0”～(全桁に入力した数値まで)	小数部桁数(D) 小数部桁数(C)

表4.41 項目説明(拡張設定項目)

レイアウト定義画面の列名	設定値	対応する項目(拡張設定)
引用符(入力/出力)	(CSV形式の場合) 引用符で括弧する場合:“Y”	(入力) CSV形式を引用符で括弧(I) (出力) CSV形式を引用符で括弧(O)
符号の種類(入力/出力)	符号の種類をMicroFocusCOBOLにする場合:“M”	(入力) Z-外部10進の符号(J) (出力) Z-外部10進の符号(K)
入力チェック	入力チェックを行う場合:“Y”	入力チェックを行う(C)
無変換	無変換で出力する場合:“Y”	無変換で出力する(U)
固定出力	固定長で出力する場合:“Y” 領域長は、出力側の領域長にバイト単位で指定します。	固定長で出力する(F)
ゼロ抑制	(固定長出力指定の数値文字列項目属性に対して有効) ゼロ抑制を行う場合:“Y”	ゼロ抑制を行う(Z)
ヌル扱い	全てヌルでも変換エラーにしない場合:“I”	全てヌルでもエラーにしない(N)
拡張	マスク処理の対象項目とする場合:“M”	マスクする(M)
タグ属性	常に指定できません(XML形式のレイアウト定義は行えません)。	XMLタグ出力

参照

各列の内容は、「対応する項目」について、「[4.2.7.1 項目定義テンプレート](#)」または「[4.2.7.1.1 拡張設定](#)」の説明箇所を参照してください。

4.2.7.3 項目属性の種類

項目属性は、文字属性と数値属性に分類されます。

図4.40 項目定義テンプレートにおける属性の選択肢



表4.42 属性の種類 (データファイル形式の場合)

分類	属性(項目定義テンプレートの場合)	属性(直接入力の場合)	意味
文字属性	X-英数字	X	1バイト系キャラクタの格納形式
	N-日本語	N	日本語(2バイト系)キャラクタのみの格納形式
	M-混在	M	1/2バイト系キャラクタ混在の格納形式
	C-char型	C	NULLで終了する文字列
	R-可変長文字	R	先頭2バイトに有効データ長(領域長)を持つ文字列(※) サポートコード体系は、シフトJIS、EUC、Unicodeです。
Y-可変長日本語	Y	先頭2バイトに有効データ長(文字数)を持つ日本語項目属性の文字列(※) サポートコード体系は、シフトJIS、EUC、Unicodeです。 なお、UTF16コードのサロゲートペア1文字(4バイト)は、2文字として扱います。 また、UTF8コードの場合は、領域長を持ちます。	
数値属性	Z-外部10進	Z	COBOL独自のゾーン形式
	P-内部10進	P	COBOL独自のパック形式
	B-2進	B	COBOL独自のバイナリ形式
	5-COMP5	5	COBOL独自のバイナリ形式(※)
	S-short型	S	16ビットで表現されるバイナリ形式(※)
	L-long型	L	32ビットで表現されるバイナリ形式(※)
	V-数値文字列	V	数値をキャラクタ表現した形式(符号や小数点も文字で表現される)
その他	--項目なし	-	項目の追加・削除に使用

意味の欄に、(※)の付いているものは、[基本情報設定]画面の[バイナリをビッグエンディアンで扱う]の指定により、内部形式が異なります。

表4.43 属性の種類 (CSV形式の場合)

分類	属性(項目定義テンプレートの場合)	属性(直接入力の場合)	意味
文字属性	M-文字列	M	1/2バイト系キャラクタ混在の格納形式
数値属性	V-数値	V	数値をキャラクタ表現した形式(符号や小数点も文字で表現される)
その他	--項目なし	-	項目の追加・削除に使用

CSV形式の場合に指定できるものは、“M”と“V”のみです。

4.2.7.4 外部10進での符号の種類

外部10進項目属性には、以下の符号の種類があります。

図4.41 項目定義テンプレートにおける符号の選択肢

The image shows a dropdown menu with the following options:

- あり
- LEADING
- TRAILING
- LEADING SEPARATE
- TRAILING SEPARATE

表4.44 符号の種類

符号(項目定義テンプレートの場合)	符号(直接入力の場合)	意味
あり	S	TRAILING属性。 末尾バイトの上位4ビット上に表現されます。 符号:“TRAILING”(直接入力の場合は“T”)が指定された場合と同じです。
LEADING	L	LEADING属性。 先頭バイトの上位4ビット上に表現されます。
TRAILING	T	TRAILING属性。 末尾バイトの上位4ビット上に表現されます。 符号:“あり”(直接入力の場合は“S”)が指定された場合と同じです。
LEADING SEPARATE	LS	LEADING SEPARATE属性。 先頭の1バイトで表現されます。
TRAILING SEPARATE	TS	TRAILING SEPARATE属性。 末尾の1バイトで表現されます。

参考

外部10進項目属性以外の数値属性には、符号の種類はありませんが、符号の有無を選択することはできません。
 符号ありの場合、項目定義テンプレートでは[符号]のチェックボックスをオン、直接入力では“S”を指定します。

4.2.8 基本情報設定

レイアウト定義の基本情報設定を行う画面です。

図4.42 画面イメージ

基本情報設定

レイアウト名(L):

レコード名(R):

各項目にヌル表示域を設定: 入力側(I) 出力側(O)

バイナリをビッグエンディアンで扱う: 入力側(P) 出力側(T)

入力データ中の列を文字列終了とみなす(E)

OK キャンセル ヘルプ(H)

表4.45 項目説明

項目	内容
レイアウト名(L)	レイアウト名を指定します。
レコード名(R)	レコード名を指定します。 COBOL登録集 作成時の01レベルのレコード名になります。 既存COBOL資産の取り込み時は、COBOL登録集の01レベルのレコード名(01レベルが存在しない場合は“TF-MDPORT-ADDREC”固定)が本項目に自動で設定されます。 既存C言語資産の取り込み時は、インクルードファイルの構造体タグ名が本項目に自動で設定されます。
各項目にヌル表示域を設定 入力側(I) 出力側(O)	(データファイル形式 の場合) チェックボックスをオンにした場合、各項目の先頭に2バイトの ヌル表示域 があることを示します。 ヌル表示域がある場合、実際の領域長は項目情報の領域長より2バイト多く必要になります。 本指定を変更した場合、一般的には各項目の相対位置も変更する必要があります。 [設定(S)]メニューの[一括設定]を使用すれば、効率的に相対位置を振り直すことができます。
バイナリをビッグエンディアンで扱う 入力側(P) 出力側(T)	データ上のバイナリ数値の エンディアン “WORD_ENDIAN”を指定します。 本指定は、以下のデータ部分に対して反映されます。 <ul style="list-style-type: none"> COMP-5、short型、long型の項目属性の内部表現 可変長の項目属性(項目属性が“R”、“Y”)の先頭2バイトに付加される有効データ長の領域

項目	内容
	SPARCのUNIXマシンや汎用機のデータを扱う場合はチェックボックスをオンに、WindowsやDOSのデータを扱う場合はチェックボックスをオフにしてください。
入力データ中のヌルを文字列終了とみなす(E)	(入力がデータファイル形式の場合) 入力側の項目属性が文字属性(項目属性が“X”、“N”、“M”、“R”)の場合に、入力データ中のNULL文字を文字列の終了として扱う場合にチェックボックスをオンにします。 チェックボックスがオフの場合は、NULLは文字として正しくないため変換エラーになりますが、チェックボックスがオンの場合は、NULLまでを有効データとして変換エラーになりません。 ただし、項目属性が“C”の場合は、チェックボックスをオンにしなくてもNULLを文字列終了とします。
OK	変更した内容を確定して、[基本情報設定]画面を閉じます。
キャンセル	変更した内容を取り消して、[基本情報設定]画面を閉じます。
ヘルプ(H)	ユーザーズガイドが表示されます。

4.2.9 データ形式指定

レイアウト定義のデータ形式を指定する画面です。

図4.43 画面イメージ

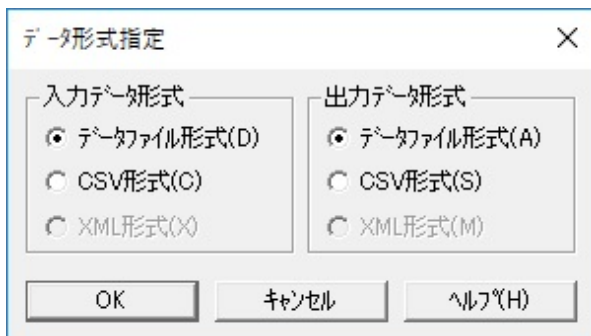


表4.46 項目説明

項目	内容
入力データ形式	入力データ形式を以下の中から選択します。 <ul style="list-style-type: none"> ・ [データファイル形式(D)] ・ [CSV形式(C)] デフォルトは、[データファイル形式(D)]が選択された状態です。 [XML形式(X)]は選択できません(XML形式変換は使用できません)。
出力データ形式	出力データ形式を以下の中から選択します。 <ul style="list-style-type: none"> ・ [データファイル形式(A)] ・ [CSV形式(S)] デフォルトは、[データファイル形式(A)]が選択された状態です。 [XML形式(M)]は選択できません(XML形式変換は使用できません)。
OK	変更した内容を確定して、[データ形式指定]画面を閉じます。

項目	内容
キャンセル	変更した内容を取り消して、[データ形式指定]画面を閉じます。
ヘルプ(H)	ユーザーズガイドが表示されます。

注意

データ形式の変更について

既に作成済みのレイアウト定義ファイルに対してデータ形式を変更すると、定義済みの情報が失われてしまいます。

また、CSV形式からデータファイル形式に変更した場合は、すべての項目について相対位置や領域長を定義しなければなりません。

データ形式を変更する場合は、データ形式変更後に、新規作成で既存資産(COBOL登録集やインクルードファイル等)の取り込みを行うことを推奨します。

4.2.10 一括設定

レイアウト定義の一括設定を実行する画面です。

図4.44 画面イメージ

表4.47 項目説明

項目	内容
設定メニュー(M)	一括設定の内容を一覧より選択します。 それぞれの機能については、「表4.48 設定メニューの詳細と設定の対象の選択可否」で説明します。
設定の対象	一括設定の対象として、[入力側(I)]および[出力側(O)]をそれぞれ指定します。 それぞれの機能に対する指定可能/指定不可の条件については、「表4.48 設定メニューの詳細と設定の対象の選択可否」で説明します。
説明	[設定メニュー(M)]で選択した各機能の内容が表示されます。
OK	選択した一括設定を実行します。

項目	内容
キャンセル	一括設定は行わずに、[一括設定]画面を閉じます。
ヘルプ(H)	ユーザーズガイドが表示されます。

表4.48 設定メニューの詳細と設定の対象の選択可否

設定メニュー	内容	設定の対象の選択可否(入力側/出力側)
相対位置の振り直し	領域長を基に、すべての項目について相対位置を1から振り直します。	データファイル形式の場合は選択できます。 CSV形式の場合は選択できません。
入力属性と出力属性の入替え	入力属性と出力属性の設定を入れ替えます。	選択できません。
入力属性を出力属性へコピー	入力属性の設定を出力属性へコピーします。	選択できません。
出力属性を入力属性へコピー	出力属性の設定を入力属性へコピーします。	選択できません。
属性を"項目なし(-)"に変更	属性をすべて「項目なし(-)」に変更します。	選択できます。
日本語項目属性の領域長を2倍に変更	日本語項目属性(N)の領域長を2倍にし、相対位置を振り直します。	データファイル形式の場合は選択できます。 CSV形式の場合は選択できません。
日本語項目属性の領域長を1/2に変更	日本語項目属性(N)の領域長を1/2にし、相対位置を振り直します。	データファイル形式の場合は選択できます。 CSV形式の場合は選択できません。

注意

- 一括設定を行うと、元に戻すことはできません。
- [設定の対象]を選択可能な設定メニューについては、[入力側(I)]または[出力側(O)]のチェックボックスをオンにした場合のみ設定が行われます。

4.2.11 COBOL解析オプション

既存COBOL資産の取り込み時の解析オプションを設定する画面です。

図4.45 画面イメージ

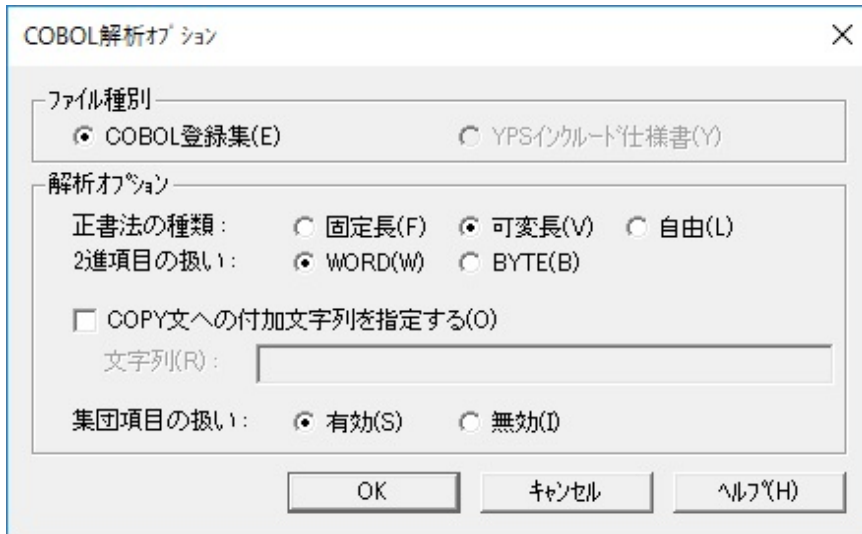


表4.49 項目説明

項目	内容
ファイル種別	<p>既存COBOL資産のファイル種別について、[COBOL登録集(E)]、[YPSインクルード仕様書(Y)]のいずれかを選択します。</p> <p>デフォルトは、[COBOL登録集(E)]が選択された状態です。</p> <p>[COBOL登録集(E)]は、富士通のCOBOLによるレコード記述のファイルです。</p> <p>[YPSインクルード仕様書(Y)]は、YPS/COBOLによるレコード記述のファイルです。</p> <p>なお、[YPSインクルード仕様書(Y)]は、YPS/COBOLがインストールされている必要があります。また、[x64版]では解析できません。</p>
正書法の種類	<p>COBOL登録集の正書法の形式について、[固定長(F)]、[可変長(V)]、または[自由(L)]を選択します。</p> <p>デフォルトは、[可変長(V)]が選択された状態です。</p> <p>YPSインクルード仕様書の場合、YPSインクルード仕様書からCOBOL登録集を生成し、COBOL登録集として解析します。その際、正書法は可変長として扱います。よって、YPS/COBOLコンパイラの「環境設定(COBOL仕様)」の「レコード長」では、“251”を設定する必要があります。</p> <p>なお、ファイル種別が[COBOL登録集(E)]以外の場合は、[可変長(V)]固定になります。</p>
2進項目の扱い	<p>COBOL翻訳オプションである「BINARY」に関する設定を行います。</p> <p>[WORD(W)]、[BYTE(B)]のいずれかを選択します。</p> <p>デフォルトは、[WORD(W)]が選択された状態です。</p>
COPY文への付加文字列を指定する(O)	<p>COBOL登録集が仮原文(括弧等)を含む場合、REPLACING句の指定を行わないと正しく解析することができません。</p> <p>正しく解析するために、チェックボックスをオンにして、[文字列(R)]にCOPY文への付加文字列を指定します。</p> <p>指定する文字列は、COBOL文法に従って記述する必要があります。</p> <p>JOINING/DISJOINING句の指定も可能です。</p>

項目	内容
	<p>指定例)</p> <p>REPLACING ==() == BY ==AA ==</p> <p>なお、ファイル種別が[YPSインクルード仕様書(Y)]の場合、この指定は関係ありません。 ファイル種別が[COBOL登録集(E)]の場合のみ指定可能です。 COPY文に任意の文字列を付加する場合に指定します。</p>
集団項目の扱い	<p>集団項目の扱いについて、[有効(S)]、[無効(I)]のいずれかを選択します。 デフォルトは、[有効(S)]が選択された状態です。</p> <p>[有効(S)]の場合は、集団項目をレイアウト定義に取り込みます。集団項目、反復定義の項目が取り込まれます。</p> <p>[無効(I)]の場合は、集団項目をレイアウト定義に取り込みません。V50L20以前のバージョンのレイアウト定義と同じにしたいときに指定します。</p>
OK	変更した内容を確定して、[COBOL解析オプション]画面を閉じます。
キャンセル	変更した内容を取り消して、[COBOL解析オプション]画面を閉じます。
ヘルプ(H)	ユーザーズガイドが表示されます。

4.2.12 C言語資産解析オプション

既存C言語資産の取り込み時の解析オプションを設定する画面です。

[入力]と[出力]の2つのタブに分かれています。

[入力]タブ

入力データ側への設定を行います。

図4.46 画面イメージ



表4.50 項目説明

項目	内容
int型のサイズ	int型メンバーのサイズについて、[long(L)]、[short(S)]のいずれかを選択します。 デフォルトは、[long(L)]が選択された状態です。 [long(L)]を選択した場合、intはlongと同じサイズ(4バイト)とみなされます。 [short(S)]を選択した場合、intはshortと同じサイズ(2バイト)とみなされます。
構造体のアライメント	取り込む構造体を使用するアプリケーションをコンパイルした際に指定した、 アライメントサイズ を選択します。 [サイズ(A)]のドロップダウンリストから、[1バイト]、[2バイト]、[4バイト]、[8バイト]、または[16バイト]のいずれかを選択します。 デフォルトは、[8バイト]が選択された状態です。
OK	変更した内容を確定して、[C言語資産解析オプション]画面を閉じます。
キャンセル	変更した内容を取り消して、[C言語資産解析オプション]画面を閉じます。
ヘルプ	ユーザーズガイドが表示されます。

[出力]タブ

出力データ側への設定を行います。

設定内容については、[入力]タブと同様です。「[表4.50 項目説明](#)」を参照してください。

図4.47 画面イメージ



4.2.13 COBOL登録集出力指定

入力情報/出力情報のどちらの属性でCOBOL登録集を作成するかを指定する画面です。

図4.48 画面イメージ

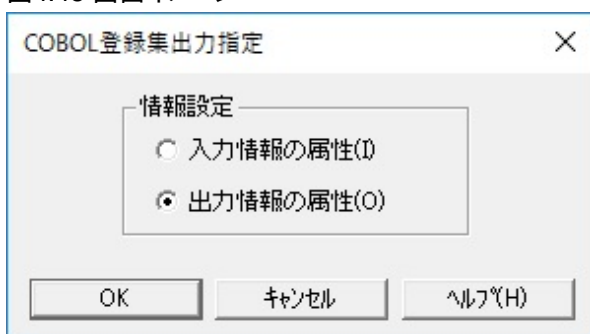


表4.51 項目説明

項目	内容
情報設定	<p>COBOL登録集を作成するレイアウト定義の情報の属性を指定します。</p> <p>[入力情報の属性(I)]を選択すると、レイアウト定義の入力情報の属性でCOBOL登録集を作成します。</p> <p>[出力情報の属性(O)]を選択すると、レイアウト定義の出力情報の属性でCOBOL登録集を作成します。</p> <p>デフォルトは、[出力情報の属性(O)]が選択された状態です。</p>
OK	指定した内容でCOBOL登録集を作成します。
キャンセル	COBOL登録集作成をキャンセルします。
ヘルプ(H)	ユーザーズガイドが表示されます。

4.2.14 DDL文出力指定

入力情報/出力情報のどちらの属性でDDL文を作成するか、および、どのデータベースに対応するDDL文を作成するかを指定する画面です。

図4.49 画面イメージ

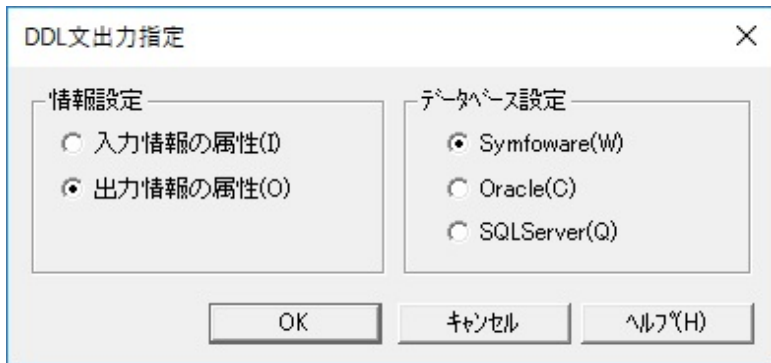


表4.52 項目説明

項目	内容
情報設定	DDL文を作成するレイアウト定義の情報の属性を指定します。 [入力情報の属性(I)]を選択すると、レイアウト定義の入力情報の属性でDDL文を作成します。 [出力情報の属性(O)]を選択すると、レイアウト定義の出力情報の属性でDDL文を作成します。 デフォルトは、[出力情報の属性(O)]が選択された状態です。
データベース設定	どのデータベースに対応したDDL文を作成するかを指定します。 [Symfoware(W)]を選択すると、Symfoware用のDDL文を作成します。 [Oracle(C)]を選択すると、Oracle用のDDL文を作成します。 [SQLServer(Q)]を選択すると、SQL Server用のDDL文を作成します。 デフォルトは、[Symfoware(W)]が選択された状態です。
OK	指定した内容でDDL文を作成します。
キャンセル	DDL作成をキャンセルします。
ヘルプ(H)	ユーザガイドが表示されます。

4.3 データ加工

データ加工機能の画面について説明します。

参照

項目属性と符号の種類

データ加工機能の各画面で表示される、項目属性と符号の種類の意味は、レイアウト定義画面と同様です。

「4.2.7.3 項目属性の種類」、「4.2.7.4 外部10進での符号の種類」を参照してください(データ加工機能では、主に「直接入力の場合」の表記を使用しています)。

また、データ加工機能の各画面では、「属性」という項目名で、「符号の種類+項目属性+項目の長さ」を意味する場合があります。

表4.53 データ加工機能における「属性」の表現の例

データ例	データ加工機能における表現
項目属性:X 領域長:10	X(10)
項目属性:N 領域長:20	N(10)
符号の種類:S 項目属性:Z 全体桁数:4 小数部桁数:0	S Z(4,0)

4.3.1 メイン画面

データ加工機能のメイン画面です。

図4.50 画面イメージ

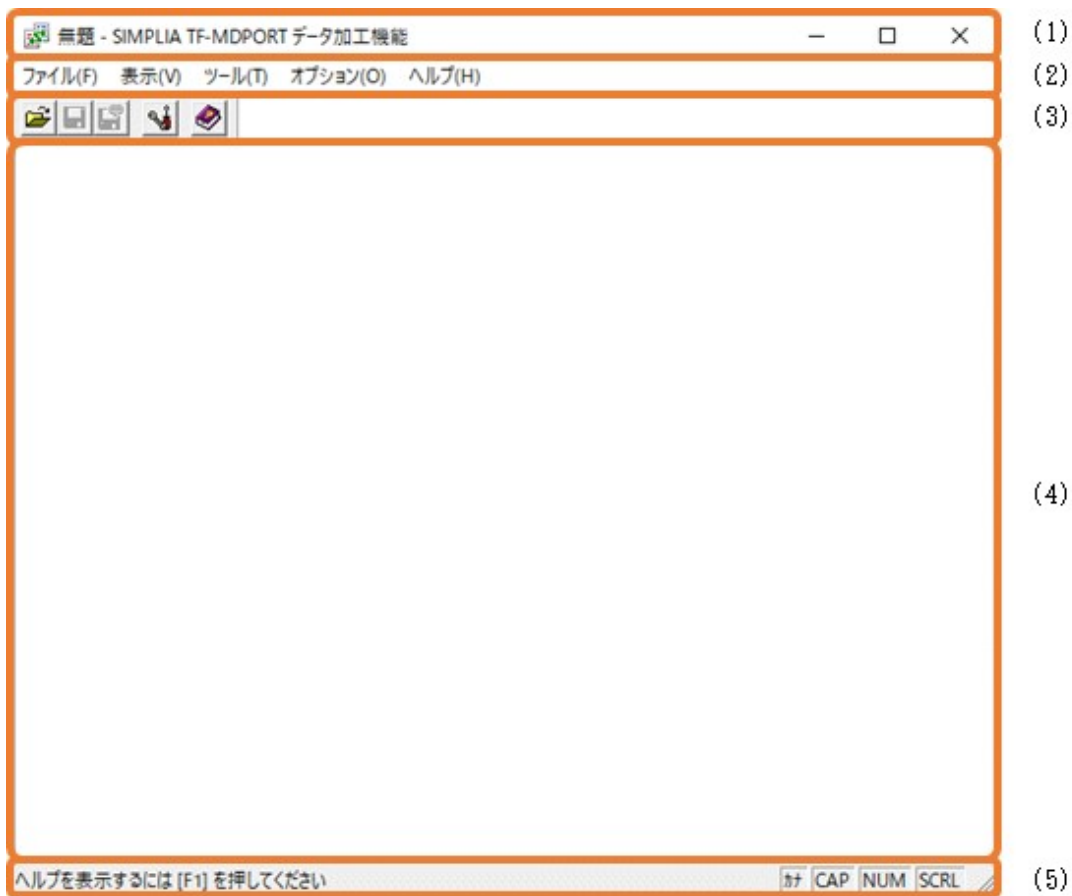


表4.54 項目説明

No	項目	内容
(1)	タイトルバー	加工指示ファイル名が表示されます。 既存の加工指示ファイルを開いていない場合は「無題」と表示されます。 [×]ボタンをクリックすると、画面が閉じます。 [□]ボタンをクリックすると、画面が最大化されます。 [―]ボタンをクリックすると、画面が最小化されます。
(2)	メニュー	[ファイル(F)]メニュー、[表示(V)]メニュー、[ツール(T)]メニュー、[オプション(O)]メニュー、[ヘルプ(H)]メニューがあります。
(3)	ツールバー	メニューの各機能を1回のマウスクリックで実行することができます。 [表示(V)]メニューの[ツールバー(T)]のチェックがオンの場合のみ表示されます。
(4)	未使用エリア	データ加工機能では、このエリアは使用されません。 常に空欄表示となります。
(5)	ステータスバー	メニュー、ツールバーにマウスカーソルを当てると、説明が表示されます。 右下には、キーボードのキーロック状態が表示されます。 [表示(V)]メニューの[ステータスバー(S)]のチェックがオンの場合のみ表示されます。

4.3.2 メニュー

データ加工画面の各メニューについて説明します。

4.3.2.1 [ファイル]メニュー

加工指示の新規設定、加工指示ファイルの選択、保存を行うメニューです。

図4.51 画面イメージ

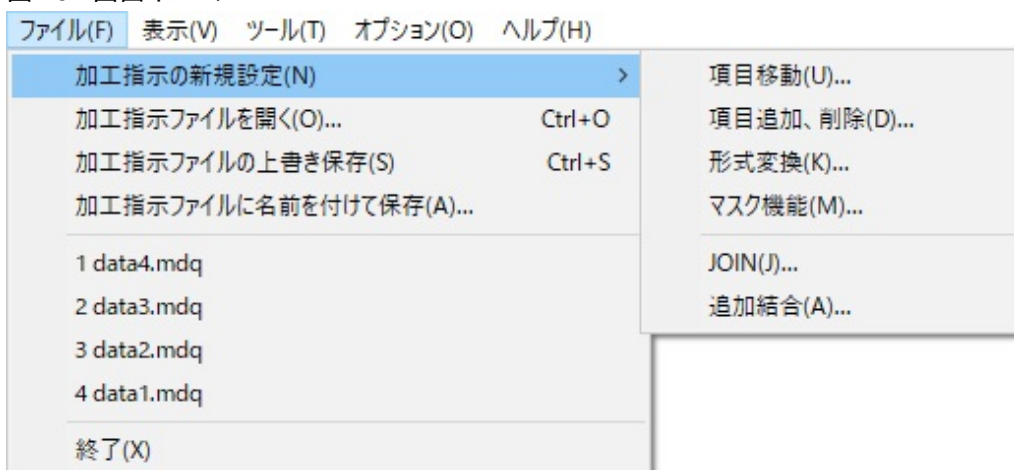


表4.55 項目説明

項目	内容
加工指示の新規設定(N)	新規にデータの加工指示を行います。

項目	内容
	[項目移動(U)]、[項目追加、削除(D)]、[形式変換(K)]、[マスク機能(M)]、[JOIN(J)]、[追加結合(A)]の中から選択します。 選択時に、保存されていない加工指示がある場合は、保存するかどうかの確認ダイアログが表示されます。
加工指示ファイルを開く(O)	既存の加工指示ファイルを開きます。 開いた加工指示ファイルの設定画面が表示されます。 加工指示ファイル内で以前設定したレイアウト定義ファイル等が存在しないと、正しく開くことができないので注意してください。 ショートカットキー[Ctrl+O]でも実行できます。
加工指示ファイルの上書き保存(S)	現在の加工指示内容を加工指示ファイルへ、上書きで保存します。 ショートカットキー[Ctrl+S]でも実行できます。
加工指示ファイルに名前を付けて保存(A)	現在の加工指示内容を加工指示ファイルへ、名前を付けて保存します。
最近使用したファイル	最近使用した加工指示ファイルが最大4個表示されます。 ファイル名を選択することにより、該当の加工指示ファイルを開くことができます。
終了(X)	データ加工機能を終了します。

ポイント

加工指示の設定画面について

続いて、[追加結合(A)]は1画面、その他の加工指示は2画面の設定画面で、主に構成されています。

実行する加工指示によって、以下の画面説明の箇所を参照してください。

表4.56 加工指示の設定画面

分類	加工指示の新規設定(N)	画面1	画面2
データ加工	項目移動(U)	4.3.5.1 入出力情報設定 (データ加工共通)	4.3.5.2 項目移動
	項目追加、削除(D)		4.3.5.3 項目追加、削除
	形式変換(K)		4.3.5.4 形式変換
	マスク機能(M)		4.3.5.5 マスク機能
ファイル加工	JOIN(J)	4.3.6.1 入出力情報設定 (JOIN)	4.3.6.2 JOIN
	追加結合(A)	4.3.6.3 追加結合	(なし)

注意) [マスク機能(M)]を使用する場合は、事前に[環境設定]画面で[マスクキャラクタの指定]を行う必要があります。

4.3.2.2 [表示]メニュー

ツールバーやステータスバーの表示/非表示を切り替えるメニューです。

図4.52 画面イメージ

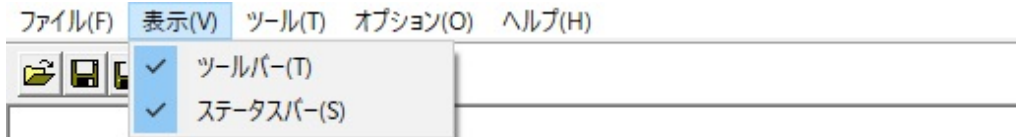


表4.57 項目説明

項目	内容
ツールバー(T)	ツールバーの表示/非表示を切り替えます。 デフォルトは、チェックがオンの状態(表示)です。 データ加工の画面を終了すると、デフォルトの設定(チェックがオンの状態)に戻ります。
ステータスバー(S)	ステータスバーの表示/非表示を切り替えます。 デフォルトは、チェックがオンの状態(表示)です。 データ加工の画面を終了すると、デフォルトの設定(チェックがオンの状態)に戻ります。

4.3.2.3 [ツール]メニュー

コピー句生成を行うメニューです。

図4.53 画面イメージ

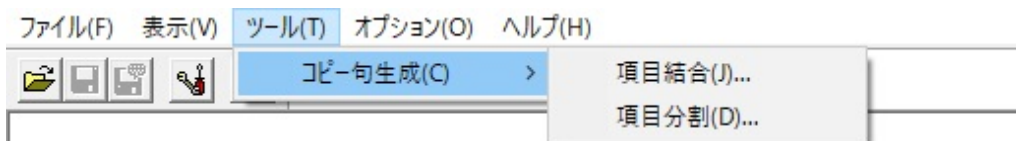


表4.58 項目説明

項目	内容
コピー句生成(C)	コピー句の生成を行います。 [項目結合(J)]または[項目分割(D)]を選択します。 項目結合では、レイアウト定義ファイルから、属性の同じ2つ以上の項目を1つの項目に結合し、コピー句を生成します。 項目分割では、レイアウト定義ファイルから、1つの項目を2つ以上の項目に分割し、コピー句を生成します。

ポイント

コピー句生成の設定画面について

続いて、主に2画面の設定画面で構成されています。

実行するコピー句生成の種類によって、以下の画面説明の箇所を参照してください。

表4.59 コピー句生成の設定画面

コピー句生成(C)	画面1	画面2
項目結合(J)	4.3.7.1 入出力情報設定 (コピー句生成共通)	4.3.7.2 項目結合
項目分割(D)		4.3.7.3 項目分割

4.3.2.4 [オプション]メニュー

環境設定画面の起動や、連続実行の指定を行うメニューです。

図4.54 画面イメージ



表4.60 項目説明

項目	内容
環境設定(E)	[環境設定]画面で、データ加工機能が動作するにあたっての環境設定を行います。
連続実行(C)	<p>データ加工後の出力結果を、次のデータ加工における入力データとして利用する場合に、チェックをオンにします。</p> <p>チェックをオンにすると、直前の加工作業で出力したファイル名が、次の加工指示の[入出力情報設定]画面の入力情報として自動的に設定されるため、入力情報を設定し直すことなく、連続してデータ加工を行うことができます。詳しくは、「3.4.10 連続実行」を参照してください。</p> <p>デフォルトは、チェックがオフの状態(連続実行を行わない設定)です。</p> <p>データ加工の画面を終了すると、デフォルトの設定(チェックがオフの状態)に戻ります。</p> <p>本設定は、画面上で加工指示を行う場合のみ有効です(コマンド機能では無効です)。</p>

4.3.2.5 [ヘルプ]メニュー

MDPORTのユーザーズガイドを表示するメニューです。

このメニューから、バージョン情報を表示することもできます。

図4.55 画面イメージ

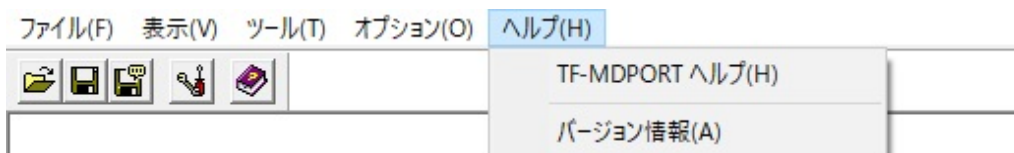


表4.61 項目説明

項目	内容
TF-MDPORT ヘルプ(H)	ユーザーズガイドが表示されます。

項目	内容
	なお、ユーザズガイドは、各画面に配置されている[ヘルプ]ボタンをクリックしたり、[F1]キーを押下したりすることにより、表示することもできます。
バージョン情報(A)	製品名、バージョン・レベル(括弧内は詳細版数)、Copyrightの情報が表示されます。

4.3.3 ツールバー






ツールバーには、よく使うメニューを素早く実行できるようにボタンで配置しています。

[表示]メニューで、ツールバーの表示/非表示を切り替えることができます。

図4.56 画面イメージ



各ボタンに対応するメニュー

-  【ファイル(F)】-[加工指示ファイルを開く(O)]
-  【ファイル(F)】-[加工指示ファイルの上書き保存(S)]
-  【ファイル(F)】-[加工指示ファイルに名前を付けて保存(A)]
-  【オプション(O)】-[環境設定(E)]
-  【ヘルプ(H)】-[TF-MDPORT ヘルプ(H)]



参照

各メニューの内容については、「4.3.2 メニュー」を参照してください。

4.3.4 環境設定

データ加工画面の環境設定を行う画面です。

[作業環境]と[フォルダ指定]の2つのタブに分かれています。

[作業環境]タブ

マスクキャラクタ、エラーファイル表示エディタ、変換エラーMAX件数の指定を行います。

図4.57 画面イメージ

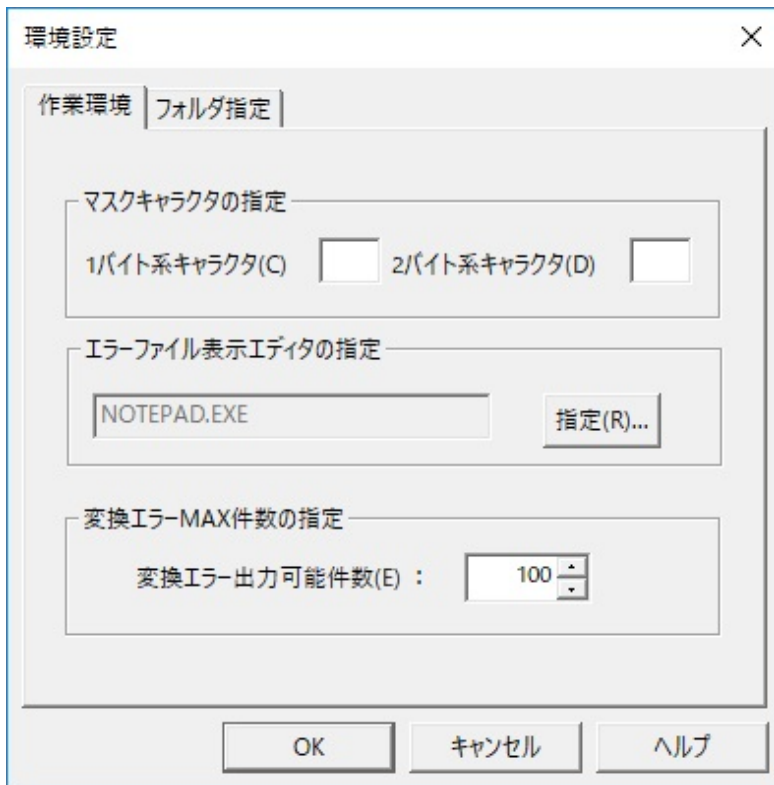


表4.62 項目説明

項目	内容
マスクキャラクタの指定	データ加工のマスク機能で、データを置き換える基となる文字を指定します。 [1バイト系キャラクタ(C)]は半角1文字、[2バイト系キャラクタ(D)]は全角1文字で、それぞれ指定します。 データ加工のマスク機能を使用する場合は、本指定が必須です。
エラーファイル表示エディタの指定	[指定(R)]ボタンをクリックして、 データ加工機能エラーファイル を表示するエディタを指定します。 ワードパッドや各種テキストエディタ等を指定できます。 デフォルトは、Windows標準のメモ帳(NOTEPAD.EXE)です。
変換エラーMAX件数の指定	変換エラーを出力する最大件数として、[変換エラー出力可能件数(E)]を指定します。 指定できる値は“0～999”の範囲で、デフォルト値は“100”です。 変換エラー件数が、ここで指定した値よりも多く出力された場合は、データ加工処理が中止されます。
OK	変更した内容を確定して、[環境設定]画面を閉じます。
キャンセル	変更した内容を取り消して、[環境設定]画面を閉じます。
ヘルプ	ユーザーズガイドが表示されます。

[フォルダ指定]タブ

加工指示ファイルフォルダ、作業フォルダ、コモンダイアログ初期フォルダの指定を行います。

図4.58 画面イメージ

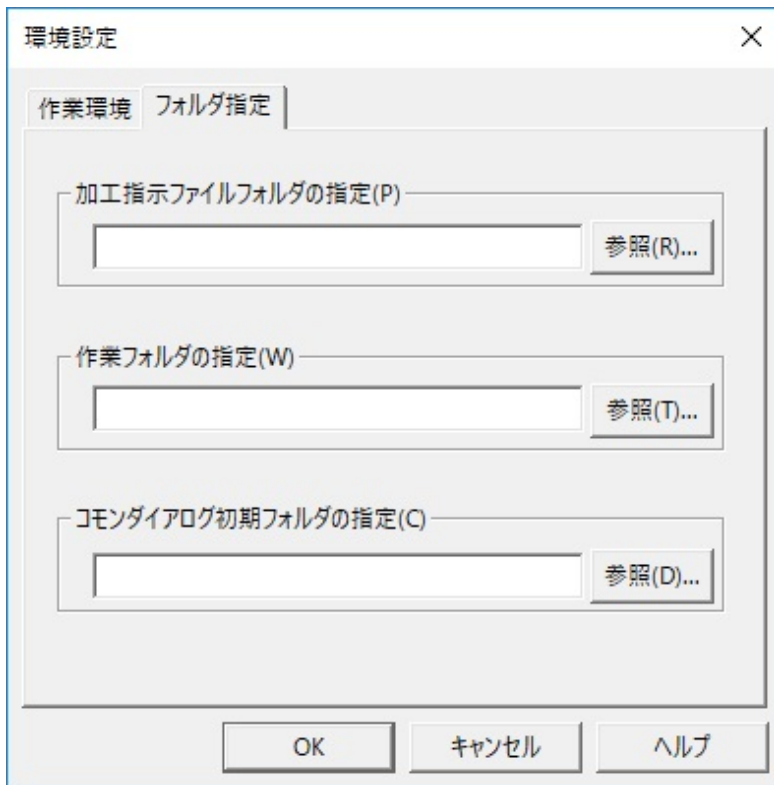


表4.63 項目説明

項目	内容
加工指示ファイルフォルダの指定(P)	データ加工機能の加工指示ファイルの保存先となるフォルダを指定します。 [参照(R)]ボタンをクリックして指定することも可能です。
作業フォルダの指定(W)	データ加工機能の作業ファイルを作成するフォルダを指定します。 省略した場合、システムの作業フォルダ(環境変数TEMPまたはWindowsフォルダ)が使用されます。 [参照(T)]ボタンをクリックして指定することも可能です。
コマンドイアログ初期フォルダの指定(C)	データ加工機能の[入出力情報設定]画面で[参照]ボタンをクリックした際に、初期表示となるフォルダを指定します。 [参照(D)]ボタンをクリックして指定することも可能です。
OK	変更した内容を確定して、[環境設定]画面を閉じます。
キャンセル	変更した内容を取り消して、[環境設定]画面を閉じます。
ヘルプ	ユーザーズガイドが表示されます。

4.3.5 データ加工

データ加工機能のデータ加工(項目移動/項目追加、削除/形式変換/マスク機能)の画面について説明します。

4.3.5.1 入出力情報設定(データ加工共通)

データ加工(項目移動/項目追加、削除/形式変換/マスク機能)の入出力情報設定の画面です。

図4.59 画面イメージ

備考) 上記は「項目移動」の画面イメージです。加工指示の種類によって、画面のタイトルが異なります。

表4.64 項目説明

項目	内容
レイアウト定義ファイル名(L)	加工対象のレイアウト定義ファイル名を指定します。 [参照(R)]ボタンをクリックして指定することも可能です。
レイアウト定義ファイル生成(C)	既存のCOBOL登録集(コピー句)から、レイアウト定義ファイルを新規に作成する場合に使用します。 このボタンをクリックした後は、以下の流れとなります。 <ol style="list-style-type: none"> [既存COBOL資産の指定]ダイアログで、既存のCOBOL登録集(コピー句)を指定します。 指定したCOBOL登録集(コピー句)が正常に解析されると、[レイアウト定義ファイルの生成]画面が表示されます。 [レイアウト定義ファイルの生成]画面で、生成するレイアウト定義ファイル名を指定して、[OK]ボタンをクリックします。 生成したレイアウト定義ファイル名が、[レイアウト定義ファイル名(L)]の項目に自動で設定されます。
レイアウト定義のレコード長	既存のCOBOL登録集(コピー句)から生成したレイアウト定義のレコード長が表示されます。 [レイアウト定義ファイル生成(C)]ボタンから、レイアウト定義ファイルを生成した場合のみ表示されます。 本項目は表示のみで、編集することはできません。
入力ファイル名(M)	入力データファイル名を指定します。

項目	内容
	[参照(S)]ボタンをクリックして指定することも可能です。
出力ファイル名(N)	出力データファイル名を指定します。 [参照(T)]ボタンをクリックして指定することも可能です。
加工後コピー句名(O)	加工後のCOBOL登録集名(コピー句名)を指定します。 [参照(U)]ボタンをクリックして指定することも可能です。 本項目は、加工後のレイアウト定義ファイル名(.lay)としても使用されます。 なお、「マスク機能」では、本項目の指定は不要です(指定できません)。
OK	入力内容に不備がなければ、次の画面に進みます。 入力漏れや入力誤りがある場合は、警告メッセージが表示されます。 また、出力ファイル名、加工後のCOBOL登録集名(コピー句名)、加工後のレイアウト定義ファイル名が既に存在している場合は、上書きして良いかの確認ダイアログが表示されます。
キャンセル	加工指示をキャンセルします。
ヘルプ	ユーザーズガイドが表示されます。

4.3.5.2 項目移動

「項目移動」の加工指示において、[入出力情報設定(データ加工共通)]画面の次に表示される画面です。

図4.60 画面イメージ

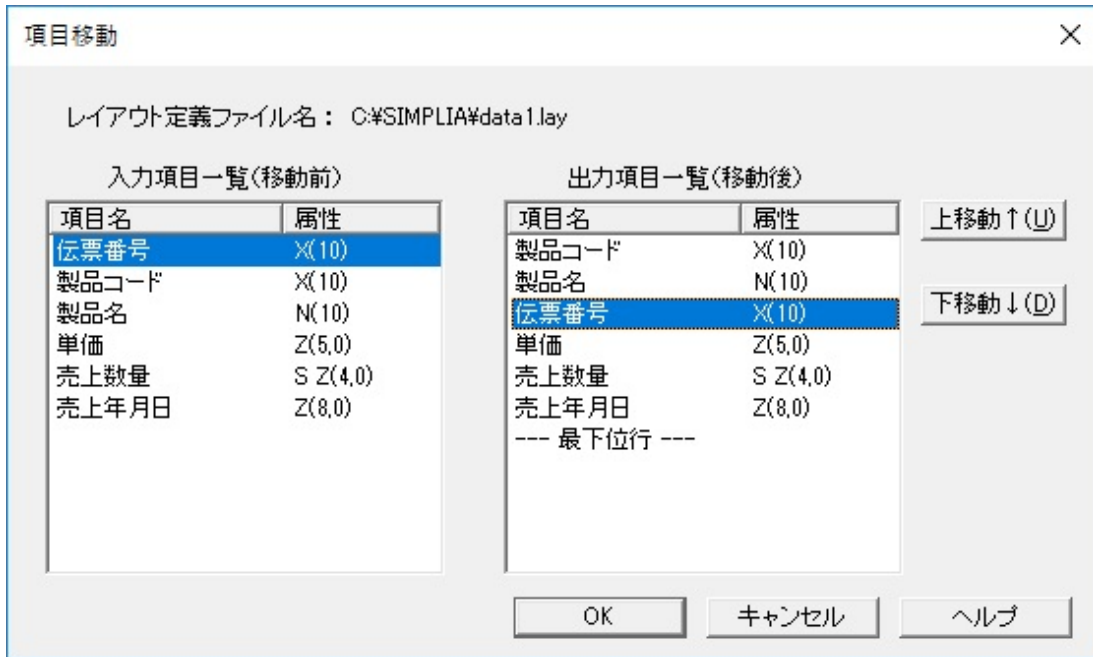


表4.65 項目説明

項目	内容
レイアウト定義ファイル名	加工対象のレイアウト定義ファイル名が表示されます。 本項目は表示のみで、編集することはできません。
入力項目一覧(移動前)	入力のレイアウト定義ファイルの情報(項目名、属性)が表示されます。

項目	内容
	移動前の一覧のため、この一覧の項目を移動することはできません。 「出力項目一覧(移動後)」との項目位置の比較で参照してください。
出力項目一覧(移動後)	出力のレイアウト定義ファイルの情報(項目名、属性)が表示されます。 移動する項目を選択した状態で、[上移動↑(U)]ボタンまたは[下移動↓(D)]ボタンをクリックします。 移動のボタンを1回クリックする毎に、1項目ずつ移動します。 移動する項目を切り替えながら、出力したい項目の順番に並び替えてください。 なお、一番下の「--- 最下位行 ---」という項目は、出力される項目ではなく、単にこれより下に項目がないことを示すものです。
上移動↑(U)	「出力項目一覧(移動後)」で選択した項目を、1つ上の項目の前に移動します。 先頭項目を選択している場合は、警告ダイアログが表示されます。
下移動↓(D)	「出力項目一覧(移動後)」で選択した項目を、1つ下の項目の後に移動します。 最終項目を選択している場合は、警告ダイアログが表示されます。
OK	加工処理を実行します。
キャンセル	加工指示をキャンセルします。
ヘルプ	ユーザーズガイドが表示されます。

4.3.5.3 項目追加、削除

「項目追加、削除」の加工指示において、[入出力情報設定(データ加工共通)]画面の次に表示される画面です。

図4.61 画面イメージ

項目追加、削除

レイアウト定義ファイル名: C:\SIMPLIA\data1.lay

項目の新規追加

項目名(N):

属性(T): 領域長(E):

符号(S): 全体桁数(Z): 小数部桁数(V):

項目一覧(L)

状態	項目名	属性
	伝票番号	X(10)
	製品コード	X(10)
削除	製品名	-
	単価	Z(5,0)
	売上数量	S Z(4,0)
	売上年月日	Z(8,0)
追加	ポイント	L Z(10,2)
	--- 最下位行 ---	

表4.66 項目説明

項目	内容
レイアウト定義ファイル名	加工対象のレイアウト定義ファイル名が表示されます。 本項目は表示のみで、編集することはできません。
[項目の新規追加] 項目名 (N)	追加する項目の項目名を入力します。
[項目の新規追加] 属性(T)	追加する項目の属性を、以下の中から選択します。 <ul style="list-style-type: none"> ・ X-英数字 (文字属性) ・ N-日本語 (文字属性) ・ Z-外部10進 (数値属性) ・ P-内部10進 (数値属性) ・ B-2進 (数値属性) ・ 5-COMP5 (数値属性)
[項目の新規追加] 領域長 (E)	(追加する項目が文字属性の場合) 追加する項目の領域長をバイト単位で入力します。 日本語項目属性(N-日本語)の場合は、最大文字数*2バイトを指定してください。
[項目の新規追加] 符号(S)	(追加する項目が数値属性の場合) 追加する項目が符号ありの場合、チェックボックスをオンにします。 また、外部10進項目属性(Z-外部10進)の場合は、ドロップダウンリストから符号の種類を選択します。
[項目の新規追加] 全体桁数 (Z)	(追加する項目が数値属性の場合) 追加する項目の全体桁数を入力します。 全体桁数とは、整数部桁数と小数部桁数を足した桁数です。
[項目の新規追加] 小数部桁数(V)	(追加する項目が数値属性の場合) 追加する項目の小数部桁数を入力します。
追加(A)	[項目の新規追加]で指定した項目を、[項目一覧(L)]に追加します。 項目の追加位置は、[項目一覧(L)]で選択している行の直前です。複数の行を選択している場合は、一番上の選択行の直前に追加されます。 [項目一覧(L)]に既に存在する項目名は追加できないため、項目名が重複しないように注意してください。 [項目一覧(L)]に追加した項目の内容を修正したい場合は、[項目一覧(L)]から該当の項目を一旦取り消した後、修正後の内容で項目を追加し直してください。 追加した項目のデータは、項目属性の初期値で出力されます。
削除(D)	[項目一覧(L)]で選択している項目を削除します。 項目を削除すると、状態が「削除」、属性が「-」で表示されます。 新規追加した項目は、本ボタンでは削除できません([取り消し(C)]ボタンで削除できます)。 属性が「-」で表示されている項目は削除できません。 反復項目については、最上位階層から従属する項目を含めて、反復項目全体をまとめて削除することはできません。反復項目の下位項目名(反復要素)のみの削除はできません。
取り消し(C)	[追加(A)]または[削除(D)]の操作の取り消しができます。 <ul style="list-style-type: none"> ・ 追加項目の取り消しの場合

項目	内容
	<p>[項目一覧(L)]から選択した追加項目を削除します。</p> <p>複数の項目を選択している場合でも、追加項目が含まれていれば処理は行われます。</p> <ul style="list-style-type: none"> 削除項目の取り消しの場合 <p>[項目一覧(L)]で選択した削除項目について、[状態]の列を「削除」から空欄にし、[属性]の列を「-」から元の属性に戻します。</p> <p>複数の項目を選択している場合でも、削除項目が含まれていれば処理は行われます。</p>
項目一覧(L)	<p>レイアウト定義ファイルの情報(項目名、属性)が表示されます。</p> <p>[状態]の列には、追加/削除の操作を行った場合に、「追加」または「削除」が表示されます(取り消しの操作を行うと、表示が消えます)。</p> <p>なお、一番下の「--- 最下位行 ---」という項目は、出力される項目ではなく、単にこれより下に項目がないことを示すものです。最後の位置に項目を新規追加するには、この項目を選択した状態で、[追加(A)]ボタンをクリックします。</p>
OK	加工処理を実行します。
キャンセル	加工指示をキャンセルします。
ヘルプ	ユーザーズガイドが表示されます。

4.3.5.4 形式変換

「形式変換」の加工指示において、[入出力情報設定(データ加工共通)]画面の次に表示される画面です。

図4.62 画面イメージ

形式変換

レイアウト定義ファイル名： C:\SIMPLIA\data1.lay

形式変換項目

項目名(N)： 売上年月日

旧属性

属性： Z

領域長： 8

数値属性

符号：

全体桁数： 8

小数部桁数： 0

新属性

属性： X

領域長(E)： 8

数値属性

符号：

全体桁数(Z)： 0

小数部桁数(V)： 0

数値 → 文字変換(C)

形式変換対象項目一覧(L)

項目名	旧属性	新属性
製品名	N(10)	N(20)
売上年月日	Z(8,0)	X(8)

追加(A)

削除(D)

OK

キャンセル

ヘルプ

表4.67 項目説明

項目	内容
レイアウト定義ファイル名	加工対象のレイアウト定義ファイル名が表示されます。 本項目は表示のみで、編集することはできません。
[形式変換項目] 項目名(N)	ドロップダウンリストから形式変換の対象項目を選択します。 選択した項目の情報が、[形式変換項目]の[旧属性]、[新属性]に表示されます。
[形式変換項目] 旧属性	変換前の情報(属性、領域長、符号、全体桁数、小数部桁数)が表示されます。 変換前の情報のため、旧属性として表示されている情報の編集はできません。 「新属性」との値の比較で参照してください。
[形式変換項目] 新属性	変換後の情報(属性、領域長、符号、全体桁数、小数部桁数)が表示されます。 文字属性の場合は、[領域長(E)]に変換後の値を指定します。 数値属性の場合は、[全体桁数(Z)]、[小数部桁数(V)]に変換後の値を指定します(全体桁数とは、整数部桁数と小数部桁数を足した桁数です)。 形式変換では、[数値→文字変換]の場合を除き、領域を拡張することを前提としています(領域を縮めることはできません)。 そのため、[領域長(E)]または[全体桁数(Z)]には、旧属性よりも大きな値を指定する必要があります。 また、数値属性については、変換時に整数部および小数部が桁溢れしないように(変換後の桁数がそれぞれ変換前の桁数以上になるように)、[全体桁数(Z)]および[小数部桁数(V)]の値を指定する必要があります。
[形式変換項目] 数値→文字変換(C)	(旧属性が数値属性の場合) 数値属性を文字属性へ変換する場合、チェックボックスをオンにします。 チェックボックスをオンにすると、新属性(属性、領域長)は自動設定されます。自動設定された値は変更できません。
追加(A)	[形式変換項目]の指定内容を、[形式変換対象項目一覧(L)]の末尾に追加します(項目の表示順は、処理に影響ありません)。 [形式変換対象項目一覧(L)]に既に存在する項目名は追加できません。[形式変換対象項目一覧(L)]の変換内容を修正したい場合は、[形式変換対象項目一覧(L)]から該当の項目を一旦削除した後に、修正後の変換内容で項目を追加し直してください。
削除(D)	[形式変換対象項目一覧(L)]で選択している項目を削除します。
形式変換対象項目一覧(L)	形式変換を指定した項目の項目名、旧属性、新属性が表示されます。 加工処理を行うには、一覧に1件以上の項目の追加が必要です。
OK	加工処理を実行します。
キャンセル	加工指示をキャンセルします。
ヘルプ	ユーザーズガイドが表示されます。

4.3.5.5 マスク機能

「マスク機能」の加工指示において、[入出力情報設定(データ加工共通)]画面の次に表示される画面です。

図4.63 画面イメージ

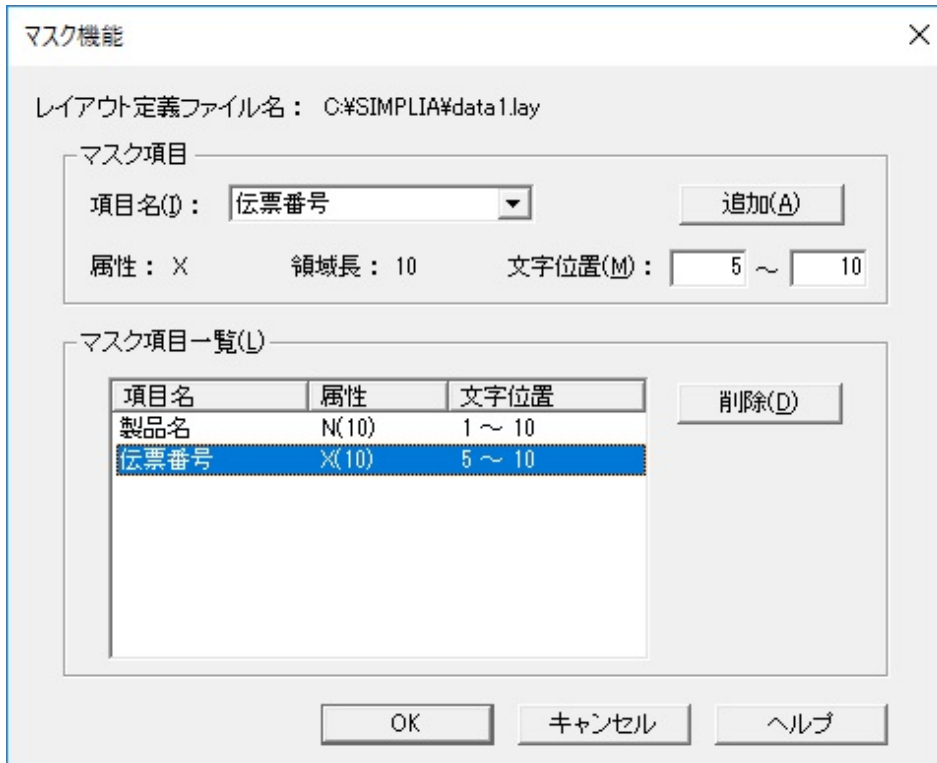


表4.68 項目説明

項目	内容
レイアウト定義ファイル名	加工対象のレイアウト定義ファイル名が表示されます。 本項目は表示のみで、編集することはできません。
[マスク項目] 項目名(I)	ドロップダウンリストからマスク対象の項目を選択します。 項目を選択すると、選択した項目の[属性]、[領域長]、および[文字位置(M)]のデフォルト値が表示されます。 マスクできる項目は、英数字項目属性(X-英数字)および日本語項目属性(N-日本語)のみです(それ以外の属性の項目を追加しようとすると、警告メッセージが表示されます)。
[マスク項目] 属性	選択した[項目名(I)]の属性が表示されます。 本項目は表示のみで、編集することはできません。
[マスク項目] 領域長	選択した[項目名(I)]の領域長が表示されます。 本項目は表示のみで、編集することはできません。
[マスク項目] 文字位置(M)	項目内の1文字目を位置“1”として、マスクする文字の開始位置、終了位置を指定します。 バイト数ではなく、文字数での位置指定となります。 [項目名(I)]を選択時に、選択した項目の全文字をマスクする内容(開始位置、終了位置)で、デフォルト値が設定されます。
追加(A)	[マスク項目]で指定した項目を、[マスク項目一覧(L)]の末尾に追加します(項目の表示順は、処理に影響ありません)。 [マスク項目一覧(L)]に既に存在する項目名は追加できません。[マスク項目一覧(L)]の内容を修正したい場合は、[マスク項目一覧(L)]から該当の項目を一旦削除した後に、修正後の内容で項目を追加し直してください。
削除(D)	[マスク項目一覧(L)]で選択している項目を削除します。

項目	内容
マスク項目一覧(L)	マスクの指定内容(項目名、属性、文字位置)が表示されます。 加工処理を行うには、一覧に1件以上の項目の追加が必要です。
OK	加工処理を実行します。
キャンセル	加工指示をキャンセルします。
ヘルプ	ユーザーズガイドが表示されます。

ポイント

マスク機能を行う前に

データ加工機能の[環境設定]画面の[作業環境]タブで、マスクキャラクタ(1バイト系キャラクタ、2バイト系キャラクタ)の指定を事前に行っておく必要があります。

マスク機能の画面で指定した項目の属性によって、英数字項目属性(X-英数字)は1バイト系キャラクタ、日本語項目属性(N-日本語)は2バイト系キャラクタで、指定した文字位置の範囲がマスクされたデータが出力されます。

4.3.6 ファイル加工

データ加工機能のファイル加工(JOIN/追加結合)の画面について説明します。

4.3.6.1 入出力情報設定(JOIN)

「JOIN」の入出力情報設定の画面です。

「追加結合」の場合は、「4.3.6.3 追加結合」の1画面のみで、入出力情報設定の画面はありません。

図4.64 画面イメージ

入出力情報設定 (ファイル加工: JOIN)

レイアウト定義ファイルの設定

レイアウト定義ファイル名1(L): 参照(R)...

新規にレイアウト定義ファイル1を生成する場合:

レイアウト定義のレコード長:

レイアウト定義ファイル名2(M): 参照(S)...

新規にレイアウト定義ファイル2を生成する場合:

レイアウト定義のレコード長:

入力データファイルの設定

ファイル名1(N): 参照(T)...

ファイル名2(O): 参照(U)...

出力ファイルの設定

ファイル名(P): 参照(V)...

加工後コピー句名(Q): 参照(W)...

OK キャンセル ヘルプ

表4.69 項目説明

項目	内容
レイアウト定義ファイル名1(L) レイアウト定義ファイル名2(M)	加工対象のレイアウト定義ファイル名を指定します。 [参照(R)]ボタンまたは[参照(S)]ボタンをクリックして指定することも可能です。
レイアウト定義ファイル生成(C) レイアウト定義ファイル生成(D)	既存のCOBOL登録集(コピー句)から、レイアウト定義ファイルを新規に作成する場合に使用します。 このボタンをクリックした後は、以下の流れとなります。 1. [既存COBOL資産の指定]ダイアログで、既存のCOBOL登録集(コピー句)を指定します。 2. 指定したCOBOL登録集(コピー句)が正常に解析されると、[レイアウト定義ファイルの生成]画面が表示されます。 [レイアウト定義ファイルの生成]画面で、生成するレイアウト定義ファイル名を指定して、[OK]ボタンをクリックします。 3. 生成したレイアウト定義ファイル名が、[レイアウト定義ファイル名1(L)]または[レイアウト定義ファイル名2(M)]の項目に自動で設定されます。
レイアウト定義のレコード長	既存のCOBOL登録集(コピー句)から生成したレイアウト定義のレコード長が表示されます。 [レイアウト定義ファイル生成(C)]ボタンまたは[レイアウト定義ファイル生成(D)]ボタンから、レイアウト定義ファイルを生成した場合のみ表示されます。 本項目は表示のみで、編集することはできません。
入力ファイル名1(N)	入力データファイル名を指定します。

項目	内容
入力ファイル名2(O)	[参照(T)]ボタンまたは[参照(U)]ボタンをクリックして指定することも可能です。
出力ファイル名(P)	出力データファイル名を指定します。 [参照(V)]ボタンをクリックして指定することも可能です。
加工後コピー句名(Q)	加工後のCOBOL登録集名(コピー句名)を指定します。 [参照(W)]ボタンをクリックして指定することも可能です。 本項目は、加工後のレイアウト定義ファイル名(.lay)としても使用されます。
OK	入力内容に不備がなければ、次の画面に進みます。 入力漏れや入力誤りがある場合は、警告メッセージが表示されます。 また、出力ファイル名、加工後のCOBOL登録集名(コピー句名)、加工後のレイアウト定義ファイル名が既に存在している場合は、上書きして良いかの確認ダイアログが表示されます。
キャンセル	加工指示をキャンセルします。
ヘルプ	ユーザーズガイドが表示されます。

ポイント

.....

[レイアウト定義ファイル名1(L)]と[入力ファイル名1(N)]、[レイアウト定義ファイル名2(M)]と[入力ファイル名2(O)]がそれぞれ対応するように指定します。

ファイル1がJOINの主、ファイル2がJOINの従となります。

.....

4.3.6.2 JOIN

「JOIN」の加工指示において、[入出力情報設定(JOIN)]画面の次に表示される画面です。

図4.65 画面イメージ

JOIN

レイアウト定義ファイル

ファイル名1: C:\SIMPLIA\join\data1.lay
 ファイル名2: C:\SIMPLIA\join\data2.lay

JOIN

結合方式
 INNER JOIN(I) LEFT JOIN(L)

ソート済ファイルの指定
 入力ファイルは昇順ソート済(S)

JOINキー項目の指定

ファイル1基本項目(F) = ファイル2基本項目(G)
 製品コード = 製品コード

ファイル1の項目名	属性	ファイル2の項目名	属性
伝票番号	X(10)	製品コード	X(10)
製品コード	X(10)	製品名	N(10)
売上数量	S Z(4,0)	単価	Z(5,0)
売上年月日	Z(8,0)		
顧客コード	X(10)		

OK キャンセル ヘルプ

表4.70 項目説明

項目	内容
レイアウト定義ファイル名1	JOINの主となるレイアウト定義ファイル名が表示されます。 本項目は表示のみで、編集することはできません。
レイアウト定義ファイル名2	JOINの従となるレイアウト定義ファイル名が表示されます。 本項目は表示のみで、編集することはできません。
結合方式	[INNER JOIN(I)]と[LEFT JOIN(L)]のどちらかを選択します。 デフォルトは、[INNER JOIN(I)]が選択された状態です。 <ul style="list-style-type: none"> • INNER JOIN [JOINキー項目の指定]で選択した項目を結合のキーとして、2つのデータファイルを結合します。 キー項目の値が一致したレコードのみ出力されます。 • LEFT JOIN [JOINキー項目の指定]で選択した項目を結合のキーとして、2つのデータファイルを結合します。 主となるファイル1については、キー項目の値の一致/不一致に関わらず、すべてのレコードが出力されます。

項目	内容
	従となるファイル2については、キー項目の値が一致したレコードのみ出力されます。キー項目の値が不一致の場合は、ファイル2の項目のデータにはNULLが出力されます。
ソート済ファイルの指定	<p>入力データファイル1と入力データファイル2の両方が、昇順でソートされている場合に、[入力ファイルは昇順ソート済(S)]のチェックボックスをオンにします。</p> <p>チェックボックスをオンにすることで、JOINの処理速度が速くなります。</p> <p>昇順でソートされていない場合にチェックボックスをオンにすると、正しく結合されない場合があります。昇順でソートされているかどうか不明な場合は、チェックボックスをオンにしないでください。</p> <p>デフォルトは、チェックボックスがオフの状態です。</p>
JOINキー項目の指定	<p>結合のキー項目として、[ファイル1基本項目(F)]および[ファイル2基本項目(G)]をそれぞれ選択します。</p> <p>それぞれの項目名は異なっても問題ありませんが、属性は同一である必要があります。</p>
ファイル1の項目一覧	<p>JOINの主となるレイアウト定義ファイル1の項目名、属性の一覧が表示されます。</p> <p>項目をクリックし、青く反転させた選択行の項目のみが、結合後のファイルとして出力されます。キーボードの[Ctrl]キーを押したまま項目をクリックすることで、複数の項目が選択可能です。</p> <p>ただし、[ファイル1基本項目(F)]で選択した項目に限り、項目の選択有無に関わらず、常に結合後のファイルとして出力されます。</p>
ファイル2の項目一覧	<p>JOINの従となるレイアウト定義ファイル2の項目名、属性の一覧が表示されます。</p> <p>項目をクリックし、青く反転させた選択行の項目のみが、結合後のファイルとして出力されます。キーボードの[Ctrl]キーを押したまま項目をクリックすることで、複数の項目が選択可能です。</p>
OK	加工処理を実行します。
キャンセル	加工指示をキャンセルします。
ヘルプ	ユーザーズガイドが表示されます。

参考

結合後のファイルの項目の順序

結合後のファイルの項目の並びは、[ファイル1の項目一覧]で選択されている項目が上から順に出力された後、[ファイル2の項目一覧]で選択されている項目が上から順に出力されます。

結合後のファイルのレコードの出力順

結合後のファイルは、入力データファイル1のレコードの順序で出力されます。

4.3.6.3 追加結合

「追加結合」の加工指示を行った際に表示される画面です。

図4.66 画面イメージ

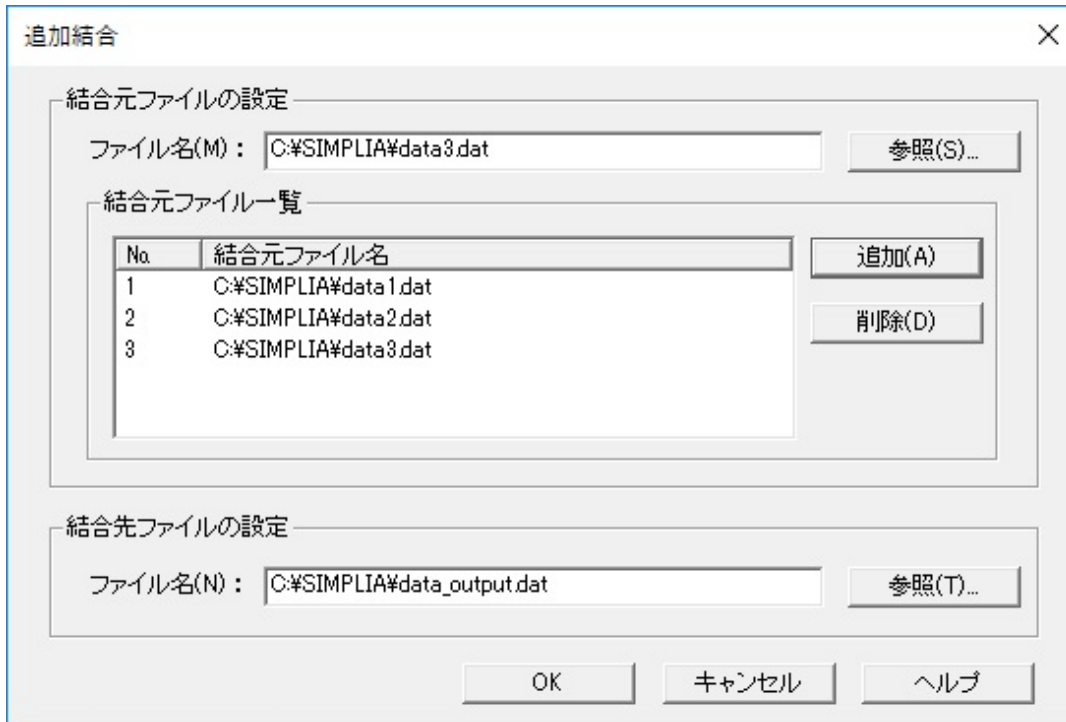


表4.71 項目説明

項目	内容
結合元ファイル名(M)	結合元のデータファイル名を指定します。 [参照(S)]ボタンをクリックして指定することも可能です。
追加(A)	結合元ファイルとして指定した[ファイル名(M)]を、[結合元ファイル一覧]の末尾に追加します。 既に[結合元ファイル一覧]に追加されているデータファイル名と、同じデータファイル名を指定することも可能です(その場合、同じデータ内容が重複して出力されます)。
削除(D)	[結合元ファイル一覧]で選択している行を削除します。 削除したデータファイル名は、[結合元ファイル名(M)]に表示されます。
結合元ファイル一覧	結合元ファイル名の一覧が表示されます。 加工処理を行うには、一覧に2つ以上の結合元ファイル名の追加が必要です。 ファイルは6つまで追加できます。 [No.]の列は、常に1から(最大6まで)連番になります。
結合先ファイル名(N)	結合先のデータファイル名を指定します。 [参照(T)]ボタンをクリックして指定することも可能です。
OK	加工処理を実行します。
キャンセル	加工指示をキャンセルします。
ヘルプ	ユーザーズガイドが表示されます。

参考

結合の順序

結合先ファイルは、[結合元ファイル一覧]で表示されている上から順に([No.]の列の1から順に)結合されて出力されます。

結合の順序を並び替えたい場合は、結合元ファイル一覧から結合元ファイルを一旦削除して、出力したい順番で追加し直してください。

4.3.7 コピー句生成

データ加工機能のコピー句生成(項目結合/項目分割)の画面について説明します。

4.3.7.1 入出力情報設定(コピー句生成共通)

コピー句生成(項目結合/項目分割)の入出力情報設定の画面です。

図4.67 画面イメージ

入出力情報設定 (コピー句生成：項目結合)

レイアウト定義ファイルの設定

レイアウト定義ファイル名(L) : 参照(R)...

新規にレイアウト定義ファイルを生成する場合 : レイアウト定義ファイル生成(O)...

レイアウト定義のレコード長 :

入力データファイルの設定

ファイル名(M) : 参照(S)...

出力ファイルの設定

ファイル名(N) : 参照(T)...

加工後コピー句名(O) : 参照(U)...

OK キャンセル ヘルプ

備考) 上記は「項目結合」の画面イメージです。「項目分割」の場合は、画面のタイトルが異なります。

表4.72 項目説明

項目	内容
レイアウト定義ファイル名(L)	項目結合/項目分割対象のレイアウト定義ファイル名を指定します。 [参照(R)]ボタンをクリックして指定することも可能です。
レイアウト定義ファイル生成(O)	既存のCOBOL登録集(コピー句)から、レイアウト定義ファイルを新規に作成する場合に使用します。 このボタンをクリックした後は、以下の流れとなります。 1. [既存COBOL資産の指定]ダイアログで、既存のCOBOL登録集(コピー句)を指定します。

項目	内容
	<p>2. 指定したCOBOL登録集(コピー句)が正常に解析されると、[レイアウト定義ファイルの生成]画面が表示されます。</p> <p>[レイアウト定義ファイルの生成]画面で、生成するレイアウト定義ファイル名を指定して、[OK]ボタンをクリックします。</p> <p>3. 生成したレイアウト定義ファイル名が、[レイアウト定義ファイル名(L)]の項目に自動で設定されます。</p>
レイアウト定義のレコード長	<p>既存のCOBOL登録集(コピー句)から生成したレイアウト定義のレコード長が表示されます。</p> <p>[レイアウト定義ファイル生成(C)]ボタンから、レイアウト定義ファイルを生成した場合のみ表示されます。</p> <p>本項目は表示のみで、編集することはできません。</p>
入力ファイル名(M)	本項目の指定は不要です(指定できません)。
出力ファイル名(N)	本項目の指定は不要です(指定できません)。
加工後コピー句名(O)	<p>生成するCOBOL登録集名(コピー句名)を指定します。</p> <p>[参照(U)]ボタンをクリックして指定することも可能です。</p>
OK	<p>入力内容に不備がなければ、次の画面に進みます。</p> <p>入力漏れや入力誤りがある場合は、警告メッセージが表示されます。</p> <p>また、生成するCOBOL登録集名(コピー句名)が既に存在している場合は、上書きして良いかの確認ダイアログが表示されます。</p>
キャンセル	コピー句生成をキャンセルします。
ヘルプ	ユーザーズガイドが表示されます。

4.3.7.2 項目結合

「項目結合」のコピー句生成において、[入出力情報設定(コピー句生成共通)]画面の次に表示される画面です。

図4.68 画面イメージ

項目結合

レイアウト定義ファイル名： C:\SIMPLIA\simp1a1.lay

入力項目一覧(結合前)		出力項目一覧(結合後)	
項目名	属性	項目名	属性
顧客コード	X(10)	顧客コード	X(10)
顧客名	N(20)	顧客名	N(20)
都道府県名	N(5)	顧客住所	N(45)
市町村名	N(20)	繰返し項目1	3
番地	N(10)	メモ	N(20)
ビル名	N(10)	---	最下位行 ---
メモ1	N(20)		
メモ2	N(20)		
メモ3	N(20)		

項目結合(C)...

OCCURS句作成(O)...

OK キャンセル ヘルプ

表4.73 項目説明

項目	内容
レイアウト定義ファイル名	項目結合対象のレイアウト定義ファイル名が表示されます。 本項目は表示のみで、編集することはできません。
入力項目一覧(結合前)	項目結合前のレイアウト定義ファイルの情報(項目名、属性)が表示されます。 項目結合前の一覧のため、この一覧の項目を編集することはできません。 「出力項目一覧(結合後)」との項目の比較で参照してください。
出力項目一覧(結合後)	項目結合後の情報(項目名、属性)が表示されます。 [項目結合(C)]または[OCCURS句作成(O)]をクリックして、連続した複数の項目を1つの項目に結合します。 OCCURS句作成時の反復定義行について、[項目名]の列には「繰返し項目1, 繰返し項目2, …」が表示され、[属性]の列には「反復数」が表示されます。ただし、出力されるコピー句の反復定義行の項目名としては「MDQ-OCCURS1, MDQ-OCCURS2, …」となります。 なお、一番下の「--- 最下位行 ---」という項目は、出力される項目ではなく、単にこれより下に項目がないことを示すものです。
項目結合(C)	[結合項目名設定]画面を表示し、2つ以上の基本項目を結合します。 以下の条件をすべて満たす場合に、項目結合が可能です。 <ul style="list-style-type: none"> 項目一覧上で隣接していること。 英数字項目属性(X-英数字)と日本語項目属性(N-日本語)のどちらかであること。 同一属性であること。
OCCURS句作成(O)	[反復要素設定]画面を表示し、2つ以上の基本項目をOCCURS句の設定により結合します。 以下の条件をすべて満たす場合に、OCCURS句作成が可能です。 <ul style="list-style-type: none"> 項目一覧上で隣接していること。 英数字項目属性(X-英数字)と日本語項目属性(N-日本語)のどちらかであること。 同一属性であること。 同一桁数であること。 また、基本項目からOCCURS句への作成は、一階層のみとします。
OK	コピー句生成処理を実行します。
キャンセル	コピー句生成をキャンセルします。
ヘルプ	ユーザーズガイドが表示されます。



注意

一度結合した項目を、元に戻すことはできません。

また、一度結合した項目を、さらに結合することはできません。

設定を変更したい場合は、一旦キャンセルして、コピー句生成をはじめからやり直してください。

4.3.7.2.1 結合項目名設定

コピー句生成(項目結合)で、項目結合の設定を行う画面です。

[項目結合]画面から呼び出されます。

図4.69 画面イメージ

表4.74 項目説明

項目	内容
項目名(N)	結合後の項目名を入力します。
属性表示	結合後の属性および領域長が表示されます。 領域長の値は、結合対象として選択した項目の領域長の合計になります。 本項目は表示のみで、編集することはできません。
OK	項目結合を行って、[項目結合]画面に戻ります。
キャンセル	項目結合をキャンセルして、[項目結合]画面に戻ります。
ヘルプ	ユーザガイドが表示されます。

4.3.7.2.2 反復要素設定

コピー句生成(項目結合)で、OCCURS句の設定を行う画面です。

[項目結合]画面から呼び出されます。

図4.70 画面イメージ

表4.75 項目説明

項目	内容
項目名(N)	OCCURS句作成後の要素項目名を入力します。
属性表示	OCCURS句作成後の属性、領域長、および反復数が表示されます。 領域長の値は、1要素あたりの領域長になります。 本項目は表示のみで、編集することはできません。
OK	OCCURS句作成を行って、[項目結合]画面に戻ります。
キャンセル	OCCURS句作成をキャンセルして、[項目結合]画面に戻ります。
ヘルプ	ユーザーズガイドが表示されます。

4.3.7.3 項目分割

「項目分割」のコピー句生成において、[\[入出力情報設定\(コピー句生成共通\)\]](#)画面の次に表示される画面です。

図4.71 画面イメージ

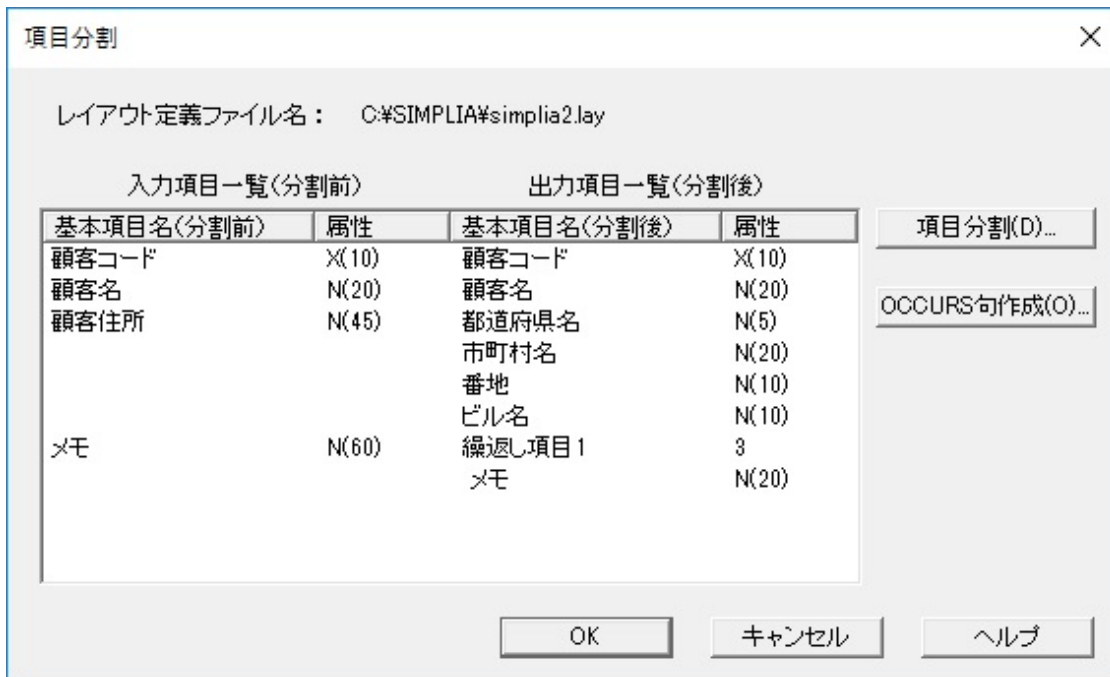


表4.76 項目説明

項目	内容
レイアウト定義ファイル名	項目分割対象のレイアウト定義ファイル名が表示されます。 本項目は表示のみで、編集することはできません。
入力項目一覧(分割前)	項目分割前のレイアウト定義ファイルの情報(項目名、属性)が表示されます。 項目分割前の一覧のため、この一覧の項目を編集することはできません。 「出力項目一覧(分割後)」との項目の比較で参照してください。
出力項目一覧(分割後)	項目分割後の情報(項目名、属性)が表示されます。 [項目分割(D)]または[OCCURS句作成(O)]をクリックして、1つの項目を連続した複数の項目に分割します。 OCCURS句作成時の反復定義行について、[項目名]の列には「繰返し項目1, 繰返し項目2, …」が表示され、[属性]の列には「反復数」が表示されます。ただし、出力されるコピー句の反復定義行の項目名としては「MDQ-OCCURS1, MDQ-OCCURS2, …」となります。
項目分割(C)	[分割項目名設定]画面を表示し、基本項目を2つ以上の項目に分割します。 項目分割できるのは、英数字項目属性(X-英数字)と日本語項目属性(N-日本語)のどちらかです。 項目分割は、1項目を対象とします。
OCCURS句作成(O)	[分割数設定]画面を表示し、基本項目をOCCURS句の設定により2つ以上の項目に分割します。 OCCURS句作成ができるのは、英数字項目属性(X-英数字)と日本語項目属性(N-日本語)のどちらかです。 OCCURS句作成は、1項目を対象とします。
OK	コピー句生成処理を実行します。
キャンセル	コピー句生成をキャンセルします。
ヘルプ	ユーザーズガイドが表示されます。

注意

一度分割した項目を、元に戻すことはできません。

また、一度分割した項目を、さらに分割することはできません。

設定を変更したい場合は、一旦キャンセルして、コピー句生成をはじめからやり直してください。

4.3.7.3.1 分割項目名設定

コピー句生成(項目分割)で、項目分割の設定を行う画面です。

[項目分割]画面から呼び出されます。

図4.72 画面イメージ



項目名	属性	領域長
都道府県名	N	10
市町村名	N	40
番地	N	20
ビル名	N	20

表4.77 項目説明

項目	内容
属性表示	分割前の項目名、属性、領域長が表示されます。 本項目は表示のみで、編集することはできません。
項目名(N)	分割後の項目名を入力します。
属性	分割後の属性が表示されます。 分割後の属性は、分割前と同じ属性になります。 本項目は表示のみで、編集することはできません。
領域長(E)	分割後の領域長を入力します。 分割後の項目の領域長の合計が、分割前の領域長と一致するように、領域長の値を指定する必要があります。

項目	内容
追加(A)	[項目名(N)、[領域長(E)]で指定した項目を、[項目一覧(分割後)]の末尾に追加します。 項目分割の入力として指定したレイアウト定義ファイルや、[項目一覧(分割後)]に既に存在する項目名は追加できないため、項目名が重複しないように注意してください。 [項目一覧(分割後)]に追加した項目の内容を修正したい場合は、[項目一覧(分割後)]から該当の項目を一旦削除した後に、修正後の内容で項目を追加し直してください。 また、項目の順序を並び替えたい場合も同様に、[項目一覧(分割後)]から項目を一旦削除した後に、並び替えたい順番で項目を追加し直してください。
削除(D)	[項目一覧(分割後)]で選択している行を削除します。
項目一覧(分割後)	分割後の項目一覧(項目名、属性、領域長)が表示されます。 項目分割を行うには、一覧に2つ以上の項目の追加が必要です。
OK	項目分割を行って、[項目分割]画面に戻ります。
キャンセル	項目分割をキャンセルして、[項目分割]画面に戻ります。
ヘルプ	ユーザーズガイドが表示されます。

4.3.7.3.2 分割数設定

コピー句生成(項目分割)で、OCCURS句の設定を行う画面です。

[項目分割]画面から呼び出されます。

図4.73 画面イメージ

表4.78 項目説明

項目	内容
属性表示	分割前の項目名、属性、領域長が表示されます。 本項目は表示のみで、編集することはできません。
分割数(D)	OCCURS句の反復数を指定します。 [属性表示]の領域長が、本指定値で等分割されて、OCCURS句作成が行われます。 以下の条件をすべて満たす場合に、OCCURS句作成が可能です。 <ul style="list-style-type: none"> ・ 分割数が2以上であること。 ・ 分割数が[属性表示]の領域長以下であること。 ・ [属性表示]の領域長が分割数の値で割り切れること。

項目	内容
OK	OCCURS句作成を行って、[項目分割]画面に戻ります。
キャンセル	OCCURS句作成をキャンセルして、[項目分割]画面に戻ります。
ヘルプ	ユーザーズガイドが表示されます。

4.3.8 レイアウト定義ファイルの生成

データ加工機能の[入出力情報設定]画面の[レイアウト定義ファイル生成]ボタンをクリックして、既存のCOBOL登録集(コピー句)を指定後に表示される画面です。

図4.74 画面イメージ

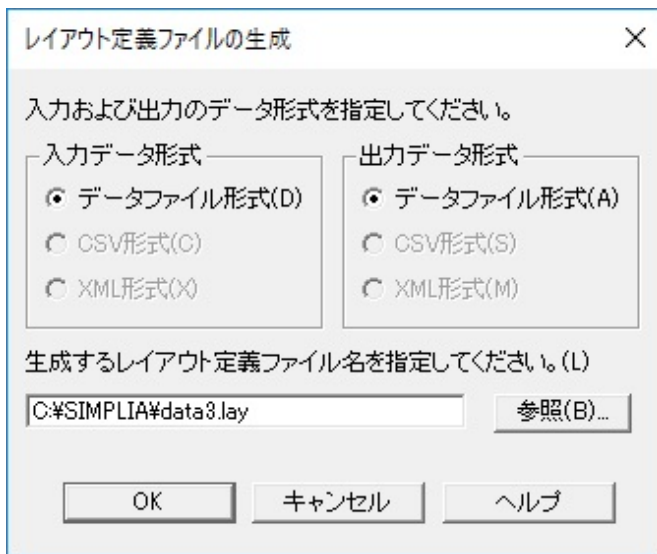


表4.79 項目説明

項目	内容
入力データ形式	デフォルトは、[データファイル形式(D)]が選択された状態です。 他のデータ形式に変更することはできません。
出力データ形式	デフォルトは、[データファイル形式(A)]が選択された状態です。 他のデータ形式に変更することはできません。
生成するレイアウト定義ファイル名(L)	生成するレイアウト定義ファイル名をフルパスで指定します。 デフォルトで、[既存COBOL資産の指定]ダイアログで指定したファイル名.layが設定されます。 必要に応じて変更可能です。[参照(B)]ボタンをクリックして指定することも可能です。
OK	レイアウト定義ファイルを生成します。
キャンセル	レイアウト定義ファイルの生成をキャンセルします。
ヘルプ	ユーザーズガイドが表示されます。

第5章 変換仕様

MDPORTの変換仕様について説明します。

5.1 文字コードの変換

文字コードの変換について説明します。

5.1.1 変換パス

MDPORTがサポートしている変換パスを、以下の3つの表に示します。

ファイル形式と文字コードによって、サポートするコード体系は異なるので注意してください(いずれかの表で未サポートに該当する変換パスについては変換できません)。

表5.1 文字コードの変換パス

入力/出力	シフトJIS	EUC	JEF	JEF ASCII	JIS	Unicode (UCS2/UTF8)	Unicode (UTF16)	Unicode (UTF32)	その他
シフトJIS	○	◎	◎	◎	▲	◎	◎	▲	△
EUC	◎	○	◎	◎	▲	▲	▲	▲	×
JEF	◎	◎	○	×	▲	◎	▲	▲	×
JEF ASCII	◎	◎	×	○	▲	▲	×	×	×
JIS	▲	▲	▲	▲	×	×	×	×	×
Unicode (UCS2/UTF8)	◎	▲	◎	▲	×	◎	◎	▲	□
Unicode (UTF16)	◎	▲	▲	×	×	◎	▲	▲	×
Unicode (UTF32)	▲	▲	▲	×	×	▲	▲	▲	×
その他	△	×	×	×	×	□	×	×	×

○：変換可能

◎：Charset Managerによる変換も可能

▲：Charset Managerが必要

△：他社コード変換により可能(日本電気AVX日本語コード以外は、Charset Managerによる変換も可能)

□：他社コード変換により可能(Charset Managerが必要) ※日本電気AVX日本語コードは未サポート

×：未サポート

【備考】

UCS2ビッグエンディアン同士、UCS2リトルエンディアン同士、UTF16ビッグエンディアン同士、

UTF16リトルエンディアン同士、UTF32ビッグエンディアン同士、UTF32リトルエンディアン同士、

UTF8同士、およびUTF8_4同士は、Charset Managerとの連携は行いません。

UTF8とUTF8_4の相互変換は、Charset Managerとの連携を行います。

なお、UTF8_4は、MDPORTのコード体系としてはUTF8です。Charset Manager使用時に、[4.1.6.4.1 Charset Manager環境の設定]画面で、iconv_openのキーワードとしてUTF8_4を指定することができます。

UTF16は、サロゲートペアに対応済みです(ただしCharset Managerが必要)。

表5.2 ファイル形式の変換パス

入力/出力	一般ファイル	COBOLファイル	CSVファイル	テキストファイル
一般ファイル	○	○	○	×
COBOLファイル	○	○	○	×
CSVファイル	○	○	×	×
テキストファイル	×	×	×	○

○：変換可能

×：未サポート

表5.3 サポートしているファイル形式と文字コードの組み合わせ

形式/コード	シフトJIS	EUC	JEF	JEF ASCII	JIS	Unicode	その他
一般ファイル	○	○	○	○	○	○	○
COBOLファイル	○	○	○	×	○	▲	×
CSVファイル	○	○	×	×	△	○	×
テキストファイル	○	○	○	○	○	○	○

○：変換可能

△：出力のみサポート

▲：X項目(UTF8形式)、N項目(UCS2/UTF16/UTF32形式)で格納

×：未サポート

参照

文字コード「その他」については「5.1.4 他社コード変換」を参照してください。

ポイント

画面で変換指示を行う場合、ファイル形式は以下のように指定します。

表5.4 ファイル形式の指定

ファイル形式	指定内容
一般ファイル	<ul style="list-style-type: none"> レイアウト定義の[データ形式指定]画面で、データ形式に[データファイル形式]を選択します。 [MDPORT変換指示ウィザード]の基本情報(1ページ目)で、ファイル変換モードに[データファイル変換]を選択します。 [MDPORT変換指示ウィザード]の入出力ファイル情報(3・4ページ目)で、ファイル形式に[一般ファイル]を選択します。
COBOLファイル	<ul style="list-style-type: none"> レイアウト定義の[データ形式指定]画面で、データ形式に[データファイル形式]を選択します。

ファイル形式	指定内容
	<ul style="list-style-type: none"> • [MDPORT変換指示ウィザード]の基本情報(1ページ目)で、ファイル変換モードに[データファイル変換]を選択します。 • [MDPORT変換指示ウィザード]の入出力ファイル情報(3・4ページ目)で、ファイル形式に[COBOL85順ファイル]、[COBOL85行順ファイル]、[COBOL85相対ファイル]、または[COBOL85索引ファイル]を選択します。
CSVファイル	<ul style="list-style-type: none"> • レイアウト定義の[データ形式指定]画面で、データ形式に[CSV形式]を選択します。 • [MDPORT変換指示ウィザード]の基本情報(1ページ目)で、ファイル変換モードに[データファイル変換]を選択します。
テキストファイル	<ul style="list-style-type: none"> • [MDPORT変換指示ウィザード]の基本情報(1ページ目)で、ファイル変換モードに[テキスト変換]を選択します。

5.1.2 1バイト系コード変換

MDPORTで対応している1バイト系コードとして、ASCIIコード系(シフトJIS、EUC、JIS等)とEBCDICコード系(JEF、他社コード)があります。

MDPORTでは同一コード系であっても、文字以外のコードはエラーとなります。

ただし、ASCIIコード系同士でのタブ文字(0x09)や、シフトコードはエラーとしません。

EBCDICコード系とASCIIコード系の文字変換において、特に一般のコード変換仕様と異なる点を以下に示します。

表5.5 EBCDIC-ASCIIコード変換による代替文字 (EBCDICコード系がJEFまたは他社コードの場合)

EBCDIC(カナ)	ASCII
(4F)] (5D)
£ (4A)	[(5B)
! (5A)	! (21)
¬ (5F)	^ (5E)

備考)一般のコード変換と比較すると、ASCIIの“]”と“!”が入れ替わっています。

括弧内は16進値を表しています。

また、英文字・カナの扱いについては以下のとおりです。

表5.6 英文字・カナの変換

変換パターン	変換結果
EBCDIC(カナ)→ASCII	英大→英大、カナ→カナ
ASCII→EBCDIC(カナ)	英大→英大、英小→英大、カナ→カナ
EBCDIC(ASCII)→ASCII	英大→英大、英小→英小
ASCII→EBCDIC(ASCII)	英大→英大、英小→英小、カナ→変換エラー

5.1.3 2バイト系コード変換

MDPORTでの2バイト系コードの変換は、以下のいずれかの方法で行われます。

表5.7 2バイト系コードの変換方法

変換方法	内容
標準変換	<p>各日本語コードは、JIS非漢字、JIS第1水準漢字、JIS第2水準漢字に対応しています。</p> <p>MDPORT内部の処理としては、算術式によりコード変換を行います。</p> <p>算術式では各コード体系がJISコード準拠とみなして1～94区のコード配置を変えるだけで、95区以降のコード変換はエラーとなります。</p> <p>そのため、拡張文字や利用者定義文字は変換できません。</p> <p>また、JEFコードは78JIS準拠のため、一部の文字(83JISでの改定文字)について同一の文字へ変換されません。</p> <p>サポート範囲外の文字を扱う場合は、Charset Manager変換を行うか、利用者定義変換テーブルを指定して変換を行ってください。</p> <p>JEFコードを扱う場合は、正しい文字の変換を行うなら、Charset Manager変換を行うようにしてください。または、MDPORTインストール先フォルダの[Sample]フォルダ配下の「JEF_SJIS.cnv」(利用者定義変換テーブル)を活用することによって、JEF(78JIS準拠)からシフトJISコードへ正しく変換することが可能です。</p> <p>なお、Unicodeの変換において、シフトJIS/JEF⇄Unicode(UCS2/UTF8)間の変換のみ、Charset Managerを使用せずに変換が可能です。</p> <p>シフトJISの場合、Windows APIを使用した変換が行われます。</p> <p>JEFの場合、内部変換テーブルファイルを使用したUniJEFへの変換が行われます。</p>
Charset Manager変換	<p>Charset Managerを使用してiconv変換を行います。</p> <p>この変換では、厳密な文字の対応付けを実現し、Charset Managerによる外字連携を行うことができます。</p> <p>Charset Managerを使用するには、[MDPORT変換指示ウィザード]の変換仕様/エラー情報(5ページ目)で、[Charset Managerを使用する]のチェックボックスをオンにします。また、[MDPORT変換指示ウィザード]の[Charset Manager環境の設定]画面で、iconv_openのキーワードを指定します。</p>

日本語コードの検出について

日本語コードの検出は、以下のように行われます。

- シフトJISコード

文字コードの先頭バイトにより1バイト系または2バイト系コードかの判断をし、日本語コードであることを検出します。

“0x81～0x9F”、“0xE0～0xFC”で始まるコードを日本語コードとします。
- EUCコード

文字コードの先頭バイトにより1バイト系または2バイト系コードかの判断をし、日本語コードであることを検出します。

“0xA1”以上で始まるコードを日本語コードとします。

また、“0x8F”で始まるコードは、コードセット3(G3文字)の日本語コードとみなします。
- JEFコード

テキスト変換およびデータファイル変換の英数字日本語混在項目(M項目)では、日本語コードへの切替制御コード(シフトコード“0x28”、“0x38”)が出現した場合に日本語コードであることを検出します(シフトコード“0x29”で1バイトコードに切り替わります)。

データファイル変換の日本語項目(N項目)では、無条件に日本語コードとして扱われます。

5.1.4 他社コード変換

MDPORTの他社コード変換テーブルを参照、またはCharset Managerを使用することによって、富士通以外の他社漢字コードとシフトJISコード間、またはUnicode(UCS2/UTF8)間で相互に変換を行うことができます。

MDPORTのインストール時に他社コード変換テーブルを選択していない場合、かつCharset Managerをインストールしていない場合は、他社コードの変換はできません。

変換方法は、[MDPORT変換指示ウィザード]の入出力ファイル情報(3・4ページ目)で、以下の指定を行います。

表5.8 他社コード変換のコード体系およびコードID

コード名	コード体系	コードID
IBM漢字コード	その他	IBM
日立KEISコード	その他	KEIS
日本電気JIPS(E)コード	その他	JIPE
日本電気JIPS(J)コード	その他	JIPJ
日本電気AVX日本語コード	その他	AVX

なお、対する相手側のコード体系はシフトJIS、またはUnicode(UCS2/UTF8)でなければなりません。

相手側のコード体系がUnicode(UCS2/UTF8)の場合、かつCharset Managerをインストールしていない場合は変換できません。

日本電気AVX日本語コードとUnicode(UCS2/UTF8)間の変換はできません。

- IBM漢字コード

IBM漢字コードは、83JIS対応版を対象としています。

変換対象文字はJIS規格の範囲です。

- 日立KEISコード

日立KEISコードでは、83JISに準拠した規則的な変換を行います。

83JISコード体系の範囲外については変換できません。

- 日本電気JIPS(E/J)コード

JIPS(E)、JIPS(J)コードでは、83JISに準拠した規則的な変換を行います。

83JISコード体系の範囲外については変換できません。

- 日本電気AVX日本語コード (Charset Managerを使用した変換はできません)

日本電気AVX日本語コードでは、83JISに準拠した規則的な変換を行います。

83JISコード体系の範囲外については変換できません。

5.2 文字列の変換

文字属性の変換(テキスト変換の場合を含む)について説明します。

英数字/日本語/混在属性の変換

データファイル変換において、英数字、日本語、混在の属性は、文字列として変換を行います。

また、テキスト変換も文字列の変換(混在属性扱い)です。

各属性の変換仕様を以下の表に示します。

表5.9 文字列の変換仕様

属性	説明
英数字 (X)	レイアウト定義の属性を“X”で定義した英数字項目では、入力文字列がすべて1バイト系文字(半角カナ含む)とみなされ、1バイト系のコード変換が行われます。 半角カタカナは、EUCコードでは2バイト文字、UTF8コードでは3バイト文字で表現されるため、変換後にデータ長が増えて出力領域が溢れる場合があります。 また、1バイト系のコードは、UCS2/UTF16コードではすべて2バイト文字、UTF32コードではすべて4バイト文字で表現されるため、変換後にデータ長が増えて出力領域が溢れる場合があります。
日本語 (N)	レイアウト定義の属性を“N”で定義した日本語項目では、入力文字列がすべて日本語文字とみなされ、2バイト系のコード変換が行われます。 JISとJEFおよび他社コードにおいて、入力時にシフトコードが存在してはいけません(本属性ではなく、混在属性ではシフトコードを認識できます)。 EUCコードのコードセット3(G3文字)は、cobolEUC(2バイト/文字)で表現されます。 UCS2コードでは2バイト文字、UTF16コードでは2バイト文字または4バイト文字、UTF32コードでは4バイト文字、UTF8コードでは1~4バイト文字で表現されるため、変換後にデータ長が増えて出力領域が溢れる場合があります。
混在 (M)	レイアウト定義の属性を“M”で定義した英数字日本語混在項目では、入力文字列に不定に英数字/日本語文字が混在しているとみなされ、コード変換が行われます。 JISとJEFおよび他社コードにおいて、入力時にシフトコードが存在しないと、日本語文字の開始/終了を認識できません。 出力時は、シフトコードの付加により、変換後にデータ長が増えて出力領域が溢れる場合があります(詳しくは、「シフトコードの出力仕様」を参照してください)。 また、英数字項目および日本語項目で説明している領域溢れが発生するケースについては、同様に本属性についても該当します。

ポイント

領域溢れの対処方法

領域溢れを防ぐには、レイアウト定義の出力側の領域長(テキスト変換の場合は出力側のレコード長)を増やしてください。

領域溢れエラーの具体例については、「付録B 代表的なエラーの紹介」の「B.1 領域溢れエラー」を参照してください。

なお、テキスト変換や出力がCSV形式の場合は、項目毎の出力領域長を持たないため、最大レコード長を超えた場合のみ領域溢れエラーが発生します。

後続ブランクカット処理

MDPORTの文字列の変換では、出力側領域長に対する領域溢れを識別する機能があります。

ただし、末尾の空白文字については、変換実行中に以下の処理で後続空白文字を削除することにより、領域溢れの対象としません。

【後続ブランクカット処理】

1. 入力文字列の先頭から入力属性に応じた後続空白文字を削除します。
2. 後続空白文字を削除した後の文字列を対象に変換処理を行います。
3. 変換結果の文字列の長さが出力領域長を超えた場合は領域溢れエラーとし、溢れ部分を削除します。
領域長に満たない場合は、出力属性に応じた空白文字を埋めます。

 注意

- ・テキスト変換や出力がCSV形式の場合は、出力領域長を持たないため、上記3の処理は行われません。ただし、最大レコード長を超えた場合は溢れエラーとなります。
- ・利用者定義変換テーブルに変換元の空白文字を定義すると、後続空白文字が削除されなくなります。

 例

表5.10 出力領域長を超える・満たない場合の具体例

ケース	入力データ	出力属性	出力領域長	出力データ	変換結果
満たない場合	SIMPLIA	X	10	SIMPLIA△△△	後続に半角空白が埋められます。
	富士通1	M	10	富士通1△△△	
	富士通	N	10	富士通▲▲	後続に全角空白が埋められます。
	SIMPLIA	C	10	SIMPLIA <code>nnn</code>	後続にNULL(0x00)が埋められます。
	SIMPLIA	R	10	<code>__SIMPLIA</code> <code>n</code>	
	富士通	Y	10	<code>__富士通</code> <code>nn</code>	
溢れる場合	FUJITSUSIMPLIA	X	10	FUJITSUSIM	領域溢れエラーが発生し、後ろが切り捨てられます。
	富士通12345	M	10	富士通1234	
	富士通株式会社	N	10	富士通株式	
	FUJITSUSIMPLIA	C	10	FUJITSUSIM	
	FUJITSUSIMPLIA	R	10	<code>__FUJITSUS</code>	
	富士通株式会社	Y	10	<code>__富士通株</code>	

備考)“△”:半角空白、“▲”:全角空白、“_”:有効データ長(領域長または文字数)を表す2バイト、“n”:NULL(0x00)を表しています。

【Unicodeに関する出力領域長を超える・満たない場合の処理】

- ・レイアウト定義においてX項目の領域長に奇数を指定した場合、UCS2ビッグエンディアン、UCS2リトルエンディアン、UTF16ビッグエンディアンまたはUTF16リトルエンディアンに変換すると1バイト分満たない、または溢れます。
その1バイト分の領域には、それぞれ半角空白の1バイト目(ビッグエンディアン:0x0020、リトルエンディアン:0x2000)を埋めます。
また、レイアウト定義において領域長が4バイトの倍数でない場合、UTF32ビッグエンディアンまたはUTF32リトルエンディアンに変換すると1、2、3バイト分満たない、または溢れます。
その1、2、3バイト分の領域には、それぞれ半角空白の収まる分(ビッグエンディアン:0x00000020、リトルエンディアン:0x20000000)を埋めます。

- レイアウト定義においてN項目の領域長には偶数のみ指定可能なので、UTF8/UTF8_4に変換して変換後の領域長が奇数になる場合、1バイト分満たない、または溢れます。

その1バイト分の領域には、半角空白(0x20)を埋めます。

また、指定した領域長によっては2バイト満たない、または溢れます。その場合は、半角空白の2文字(0x2020)を埋めます。

【入力がCSV形式の場合の空白削除処理】

入力データに引用符がない場合、後続空白だけでなく、前置の空白についても入力属性に応じた空白文字の削除を行います。

ただし、以下のいずれかの場合、前置の空白文字は削除しません。

- 入力データに引用符がある。
- 入力データに引用符がない、かつ、前置ブランクカット抑制を指定する。

【シフトコードの場合】

後続ブランクの削除では、次の条件を満たすシフトコードは存在しないものとみなします。

- シフトコードの直前に空白文字が存在する。
- シフトコードの後続がすべて空白文字またはデータが存在しない。

cobolEUCコードの対応

UXP/DS COBOLでは、EUCコードのコードセット3(G3文字)を2バイトの16ビットで扱う機能(cobolEUCコード)があります。

MDPORTではcobolEUCコード変換に対応しており、日本語項目属性のみコードセット3(G3文字)は2バイトのcobolEUCコードで扱います。



例

JEFコードの0x41FB(2バイト)をEUCコード(U90形式)へ変換した場合、出力側の項目属性によって、以下のように変換結果が異なります。

- 出力側の項目属性が日本語(N)の場合: 0xA17B (2バイト)
- 出力側の項目属性が混在(M)の場合: 0x8FA1FB (3バイト)

JISコード変換におけるシフトコードの扱い

- 入力ファイルに指定可能なシフトコードは、78/83/90JISです。
- 出力ファイルには83JIS準拠で出力します。

NULL(0x00)の扱い

MDPORTでは0x00は文字列として扱わないため変換エラーとなります。すべての変換パスにおいてエラーとなり、[代替文字](#)に書き換わります。



参考

代替方法として、[利用者定義変換テーブル](#)に以下のような定義を行うことにより、一部回避することが可能です。

【定義例】

JEF SJIS
00:00
FF:FF

シフトコードの出力仕様

データファイル変換の混在項目、およびテキスト変換の場合、JISとJEFおよび一部の他社コードで出力時に、以下の仕様でシフトコードを出力します。

- 1バイト系コードから2バイト系コードの切替、2バイト系コードから1バイト系コードの切替時にシフトコードを出力します。
- 2バイト系コードから開始するデータを変換する場合、1バイト系コードから2バイト系コードの切替時に出力するシフトコードを出力します。
- 2バイト系コードで終了するデータを変換する場合、2バイト系コードから1バイト系コードの切替時に出力するシフトコードを出力します。

図5.1 シフトコードの出力例

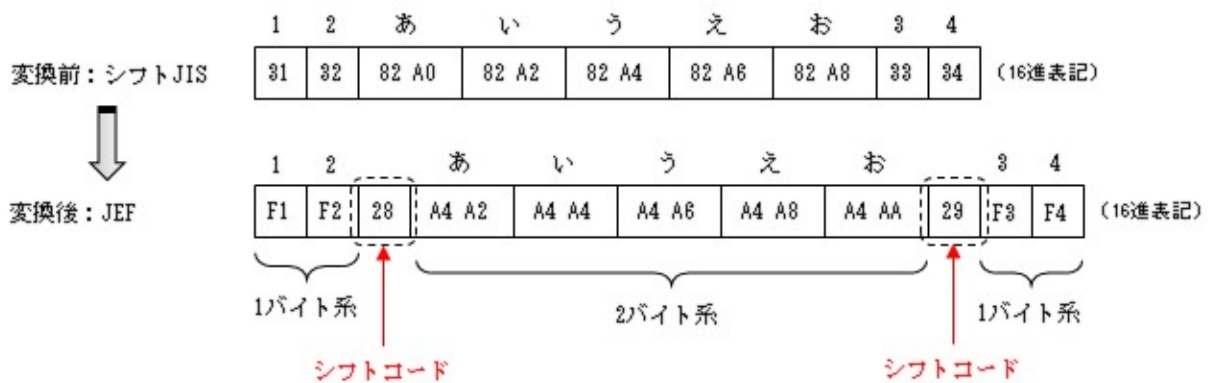


図5.2 シフトコードの出力例 (2バイト系コードから開始するデータ)

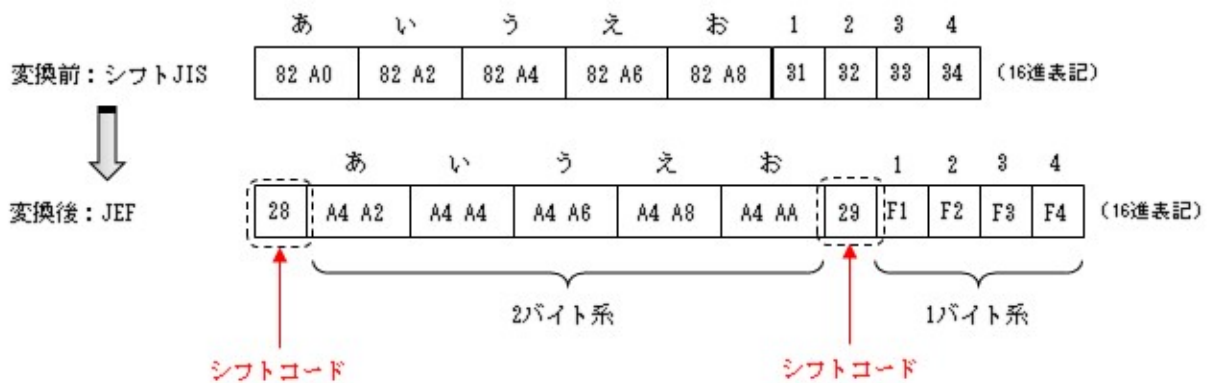
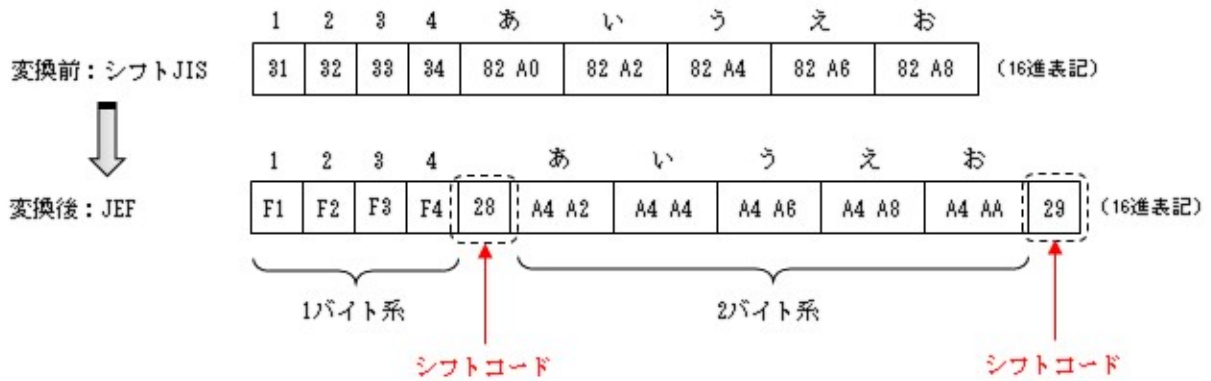


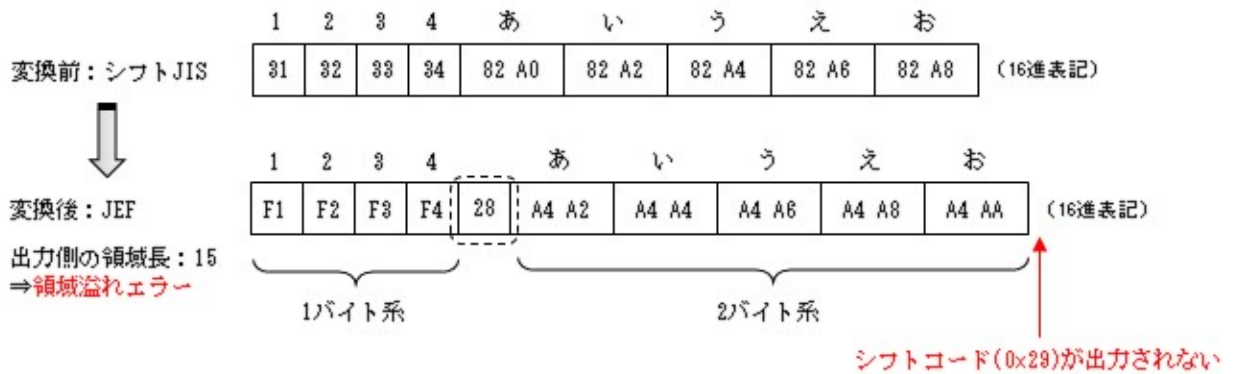
図5.3 シフトコードの出力例 (2バイト系コードで終了するデータ)



以下、特殊なケースとして、領域溢れエラー発生時のシフトコードの出力仕様について説明します。

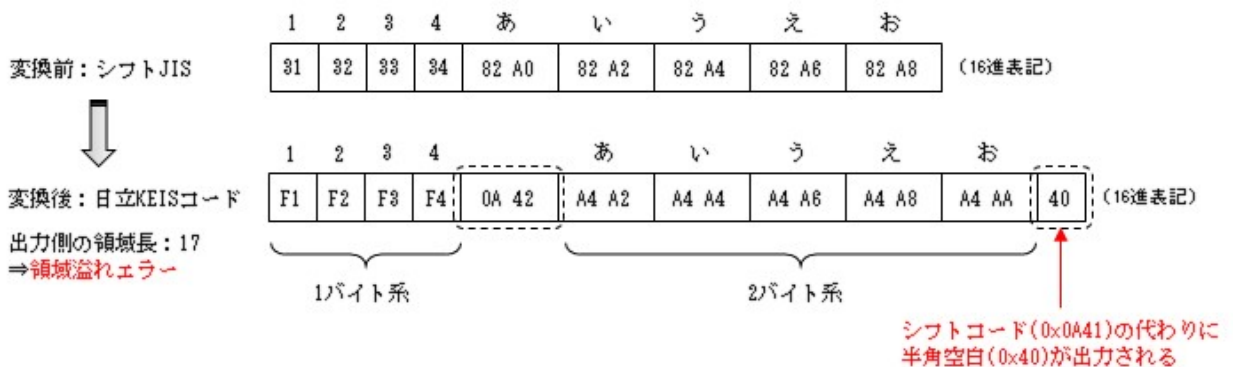
- シフトコードの有無に関わらず、出力側の領域長(またはレコード長)に収まるまでのデータを出力します。
例えば、以下のように、シフトコード分のみ領域長が溢れるケースでは、“0x28”は出力しますが、“0x29”は出力しません。

図5.4 領域溢れエラー発生時のシフトコードの出力例



- 2バイト系シフトコード出力時に、1バイト分だけ領域が溢れる場合は、半角空白を出力します。

図5.5 2バイト系シフトコードの途中で領域溢れエラーが発生した場合の出力例



5.3 数値の変換

数値属性の変換について説明します。

数値文字列属性での符号の扱い

数値文字列属性では、以下のように符号を意識して変換します。

表5.11 CSV形式の符号の付加/識別

内容	詳細
符号の付加	CSV形式へ出力する場合、符号ありの項目では先頭に“+”または“-”が付加されます。
符号の識別	CSV形式から入力する場合は、先頭または末尾に“+”または“-”があると符号と認識します。 符号文字が無い場合は正数値とみなします。

数値エラー時の出力結果

数値部が有効な値でなかった場合、数値エラーが発生しますが、外部10進の項目属性の場合は、エラーの発生した桁の下位4ビットで数値を認識し、出力します。

例としては、文字“A”(0x41)は“1”と認識し、文字“J”(0x4A)は9以上のため“0”と認識します。

それ以外の属性では数値エラーが発生した場合、項目値を0として処置します。

なお、ケースによっては必ずしもこのように処置されるわけではありません。

EBCDICコード系とASCIIコード系の数値項目では、外部10進(USAGE DISPLAY指定)の数値データ属性において、符号部の内部表現が異なります。

内部10進(PACKED DECIMAL)では、EBCDICコード系とASCIIコード系で相違はありません。

以下に、外部10進、内部10進における内部表現をそれぞれ示します。

表5.12 外部10進における内部表現(16進)

外部10進	EBCDICコード系	ASCIIコード系(NetCOBOL)	ASCIIコード系(MicroFocusCOBOL)
ゾーンビット (4ビット)	F	3	3
正の符号ビット (4ビット)	C	4	3
負の符号ビット (4ビット)	D	5	7

表5.13 内部10進における内部表現(16進)

内部10進	EBCDICコード系	ASCIIコード系
絶対値の符号ビット (4ビット)	F	F
正の符号ビット (4ビット)	C	C
負の符号ビット (4ビット)	D	D

入力の数値項目(外部10進、内部10進)の属性が符号付きの場合において、外部10進のゾーンビット、内部10進の絶対値の符号ビット、正/負の符号ビット以外のビットを検出した場合、MDPORTは正の符号と判断します。



例

EBCDIC(DATA) → ASCII(DATA) 符号付外部10進[S9(4)]の変換

入力データ: 0xF0F0F0F0 → 出力データ: 0x30303040

桁溢れが発生した場合

データファイル形式への変換で、出力側桁数に有効値が入りきらない場合は、溢れエラーが発生し、出力データは右詰め(小数点合わせ)で出力されます。



例

- ・ 入力データ“1234”に対して出力側の全体桁数:3 (小数部桁数:0)の場合、溢れエラーが発生し、出力データは“234”が出力されます。
- ・ 入力データ“1234.567”に対して出力側の全体桁数:5 (小数部桁数:2)の場合、溢れエラーが発生し、出力データは“234.56”が出力されます。



注意

2進項目属性およびCOMP5項目属性の数値において、18桁を超えるデータが入力の場合は、溢れエラーは発生せず、出力データは右詰めです。

第6章 レコード抽出仕様

MDPORTのレコード抽出処理に関する仕様について説明します。



参照

- レコード抽出機能については、「第2章 機能説明」の「[2.2.3 レコード抽出機能](#)」を参照してください。
- レコード抽出の操作方法については、「第3章 操作説明」の「[3.2.4 レコード抽出](#)」を参照してください。
- レコード抽出処理に関する注意事項については、「第7章 注意事項」の「[7.2.5 レコード抽出機能について](#)」を参照してください。

6.1 条件値の文字コード変換 (文字属性データの場合)

文字属性のデータを条件にレコード抽出を行う場合、[\[データ条件設定\]](#)画面で指定した条件値(シフトJIS)を入力ファイルのコード体系へ文字コード変換後に、入力レコードのデータ値と条件値の比較を行います。

ただし、入力ファイルのコード体系がシフトJIS、または条件値の指定が16進指定の場合、コード変換は行いません。

条件値のコード変換は、以下の規則で行います。

表6.1 条件値の文字コード変換 (文字属性データの場合)

入力ファイルのコード体系	Charset Manager指定なし	Charset Manager指定あり(※)
シフトJIS	コード変換未実施(条件値の指定データを使用します)	コード変換未実施(条件値の指定データを使用します)
EUC	MDPORT標準変換(シフトJIS → EUC)	Charset Manager変換(sjisms → EUC)
JEF	MDPORT標準変換(シフトJIS → JEF)	Charset Manager変換(sjisms → JEF)
JIS	---	Charset Manager変換(sjisms → JIS)
Unicode (UCS2/UTF8/UTF16)	MDPORT標準変換(シフトJIS → Unicode)	Charset Manager変換(sjisms → Unicode)
Unicode (UTF32)	---	Charset Manager変換(sjisms → Unicode)
その他	MDPORT標準変換(シフトJIS → 他社コード)	Charset Manager変換(sjisms → 他社コード)

(※) Charset Manager指定の詳細は、[\[Charset Manager環境の設定\]](#)画面の変換元コードに従います。

文字コード変換後は、演算子指定に従った抽出判定処理により、レコード抽出を行います。

表6.2 抽出判定の仕様

属性	演算子	抽出判定の仕様
英数字/日本語/混在/文字列(CSV)項目	完全一致	条件値と入力データの領域長と値が一致した場合に、完全一致とみなします。 それ以外の場合は不一致とみなします。
	不一致	
	前方一致	条件値の領域長分の値が入力データと一致した場合に、前方一致とみなします。

属性	演算子	抽出判定の仕様
char型項目	完全一致 不一致	条件値と入力データ(文字列の終了を表すNULLは含まない)の領域長と値が一致した場合に、完全一致とみなします。 それ以外の場合は不一致とみなします。
	前方一致	条件値の領域長分の値が入力データと一致した場合に、前方一致とみなします。
可変長文字項目	完全一致 不一致	条件値と入力データ(データ内の有効領域長分)の領域長と値が一致した場合に、完全一致とみなします。 それ以外の場合は不一致とみなします。
	前方一致	条件値の領域長分の値が入力データと一致した場合に、前方一致とみなします。
可変長日本語項目	完全一致 不一致	条件値と入力データ(データ内の有効文字数分)の領域長と値が一致した場合に、完全一致とみなします。 それ以外の場合は不一致とみなします。 ただし、UTF8形式のデータの場合は、有効データ長を領域長分として扱います。
	前方一致	条件値の領域長分の値が入力データと一致した場合に、前方一致とみなします。

6.2 条件値の数値変換 (数値属性データの場合)

数値属性のデータを条件にレコード抽出を行う場合、入力レコード内の数値データを[データ条件設定]画面で指定した条件値と比較できる形式(数値データ)に変換後に、比較を行います。

数値データへの変換は、以下の規則で行います。

表6.3 条件値の数値変換 (数値属性データの場合)

符号なし属性	常に正の値として扱います。
符号あり属性	負の符号を検出した場合、負の値として扱います。 それ以外は、正の値として扱います。
抽出対象外	<ul style="list-style-type: none"> • 外部10進/内部10進 <ul style="list-style-type: none"> — 数値部に数値以外のデータが格納されている場合 • CSV形式 <ul style="list-style-type: none"> — 正負の符号/小数点/数字以外のデータが格納されている場合 — 有効桁数が18桁を超えるデータが格納されている場合 — 先頭以外に正負の符号の存在、小数点が複数検出された場合

数値変換後は、演算子指定に従った抽出判定処理により、レコード抽出を行います。

6.3 複数のデータ条件を設定している場合の判定規則

2つ以上の判定条件を設定した場合の判定規則について、例を用いて説明します。

表6.4 データ条件の設定例

No	連結条件	項目名	演算子	条件値	16進指定
1	--	製品名	=(完全一致)	バーコードリーダ	×
2	OR	製品名	≐(前方一致)	高速	×
3	OR	単価	>	10000	×
4	AND	単価	≦	90000	×
5	OR	顧客名	≐(前方一致)	8FAC97D1	○
6	OR	顧客名	≐(前方一致)	8E52;89BA	○

【データ条件の判定順番】

1. No.1のデータ条件の判定を行う。
2. No.2のデータ条件の判定を行う。
3. No.1とNo.2のデータ条件の判定結果をORする。
4. No.3のデータ条件の判定を行う。
5. 3.の判定結果とNo.3のデータ条件の判定結果をORする。
6. No.4のデータ条件の判定を行う。
7. 5.の判定結果とNo.4のデータ条件の判定結果をANDする。
8. No.5のデータ条件の判定を行う。
9. 7.の判定結果とNo.5のデータ条件の判定結果をORする。
10. No.6のデータ条件の判定を行う。
11. 9.の判定結果とNo.6のデータ条件の判定結果をORする。
これが、最終的なレコード抽出のデータ条件となります。

上記順序を式で表現すると、以下のようになります。

(((((製品名=バーコードリーダ) OR (製品名≐高速)) OR (単価>10000)) AND (単価≦90000)) OR (顧客名≐8FAC97D1)) OR (顧客名≐8E52;89BA)

第7章 注意事項

MDPORTには、以下の注意事項があります。

7.1 MDPORTで扱えるファイル・データ形式

MDPORTで扱えるファイルやデータ形式には、以下のような制限があります。

表7.1 定量制限

内容	制限値	備考
最大レコード長	32767バイト	
最小レコード長	1バイト	
データファイル変換の最大項目数	3000	
データファイル変換の最大レイアウト数	100	
文字データ項目の最大領域長	32767バイト	
数値項目の最大桁数	18桁	小数部桁数を含みます。
階層	階層0～階層7	集団項目/反復項目の入れ子で使 います。
COBOL登録集、YPSインクルード仕様書[x86版]、およびインクルードファイルの解析での最大項目数	3000	集団項目を含みます。
項目名の最大長 (データ加工機能以外の場合)	60バイト	日本語では30文字です。
項目名の最大長 (データ加工機能の場合)	30バイト	日本語では15文字です。
変換エラー最大出力可能件数 (文字コード・ファイル形式変換機能の場合)	9999件	出力件数の指定上限としては9999件ですが、無制限出力の指定を行うと、メモリが許す限り出力可能です。
変換エラー最大出力可能件数 (データ加工機能の場合)	999件	
最大入出力ファイルサイズ (データ加工機能の場合)	4Gバイト	
最大入出力ファイルサイズ (文字コード・ファイル形式変換機能の場合)	4Gバイト	COBOLファイル以外の場合

【COBOLファイルの最大入出力ファイルサイズについて】

COBOLファイルを扱う場合、扱えるCOBOLファイルの入出力ファイルサイズは使用するCOBOLやCOBOLランタイムシステムに依存します。COBOLファイルの扱いについては、NetCOBOLのユーザーズガイドを参照してください。

扱えないファイル形式

- 可変長レコード属性の汎用機やオフコン上のファイル
- XML形式で構成されるファイル
- 複数のレコードのレイアウト(マルチレイアウト)で構成されるファイル (データ加工機能の場合)
- 追加結合を除くデータ加工処理では、シフトJISの固定長データファイルしか扱えません (データ加工機能の場合)
- 符号の種類にMicroFocusCOBOLを設定したレイアウト定義ファイル (V81L11以前のデータ加工機能の場合)

扱えない文字

- 本製品では、IVS(Ideographic Variation Sequence)を利用した文字は扱うことができません。
- Windows 10では、Windows簡単操作のディスプレイで文字を大きくする機能を使用できますが、本製品で当該機能を使用すると一部画面描画が確認できない場合があります。
- JIS2004の4バイトコードで表現される文字を使用した場合は、正しく動作しません。
 - ー 入力項目に入力した場合
 - ー 文字を含むフォルダ名、ファイル名を選択した場合
- シフトJIS以外の日本語文字が含まれるファイル名およびフォルダ名を正しく扱うことはできません。

7.2 文字コード・ファイル形式変換機能に関する注意事項

文字コード・ファイル形式変換機能に関する注意事項を、以下に示します。

7.2.1 COBOLファイルについて

MDPORTでCOBOLファイルの入出力を行うにあたっては、以下の注意事項があります。

- COBOLファイルの排他制御は行われません。
変換中は他のアプリケーションから対象のファイルを更新しないようにしてください。
- キー重複なしと指定した索引ファイルへ出力する場合、重複したキー値のレコードが存在するとアクセスエラーとなり変換処理は中止されます。
事前にキーの重複が起こらないことを確認してください。
- COBOLファイルを入力とする場合、変換指示の設定と実際のファイルとで、編成・レコード属性・レコード長が異なると正常に処理されません。
ただし、索引ファイルが入力の場合は、実際のファイルよりレコード情報を取得するため、変換指示で設定した情報が誤っていても無視されて正常に処理されます。
- COBOLファイルの索引ファイルから順ファイルへ変換する場合、出力の順ファイルは、索引ファイルの主キーの昇順でレコード出力されます。

7.2.2 CSV形式で扱える引用符・区切り文字

CSV形式で扱える引用符・区切り文字を、以下のASCIIコード表に示します。

なお、表中の「SP」という表現は、空白を意味します。

表7.2 ASCIIコード表

\	0	1	2	3	4	5	6	7
0			SP	0	@	P	`	p
1			!	1	A	Q	a	q
2			"	2	B	R	b	r
3			#	3	C	S	c	s
4			\$	4	D	T	d	t

5			%	5	E	U	e	u
6			&	6	F	V	f	v
7			'	7	G	W	g	w
8			(8	H	X	h	x
9)	9	I	Y	i	y
A			*	:	J	Z	j	z
B			+	;	K	[k	{
C			,	<	L	¥	l	
D			-	=	M]	m	}
E			.	>	N	^	n	~
F			/	?	O	_	o	

水色の背景色:使用可

灰色の背景色:使用不可

注意

- 引用符文字と区切り文字を同一コードで指定した場合、変換結果は保証されません。
- 引用符文字を使用しない文字項目および数値項目に、区切り文字と同一の文字が存在する場合、変換結果は保証されません。
- タブ“0x09”の指定方法に関しては、「第4章 画面説明」の「[4.1.6.3.2 CSV情報の指定](#)」を参照してください(タブ“0x09”は区切り文字にのみ指定可)。
- コード体系でUnicode(UCS2/UTF16)を指定した場合は、上記ASCIIコードをUnicode(UCS2/UTF16)に変換したコードになります。
例) カンマ(,)は上記ASCIIコード表では“0x2C”ですが、UCS2/UTF16ビッグエンディアンの場合は“0x002C”、UCS2/UTF16リトルエンディアンの場合は“0x2C00”です。
- コード体系でUnicode(UTF32)を指定した場合は、上記ASCIIコードをUnicode(UTF32)に変換したコードになります。
例) カンマ(,)は上記ASCIIコード表では“0x2C”ですが、UTF32ビッグエンディアンの場合は“0x0000002C”、UTF32リトルエンディアンの場合は“0x2C000000”です。
- 引用符文字を利用者定義変換テーブルに指定した場合、[\[CSV情報の指定\]](#)画面の[引用符データは2つならべて表現]の指定が機能しません。データ中に引用符文字が含まれる場合に影響があります。

7.2.3 同一コード無変換について

同一コード無変換には、以下の注意事項があります。

- 変換処理と同様に、後続空白文字が削除されます。
- 入力領域長 > 出力領域長の場合、入力データは出力領域長のサイズに切り捨てられます。その際、溢れエラーは出力されません。
- 入力領域長 < 出力領域長の場合、余った領域にはNULLが挿入されます。
- 可変長文字項目について
 - 入力の場合、有効データ長は入力領域長となります。
 - 出力の場合、有効データ長は以下となります。
 - 入力形式がデータファイル形式の時は、入力領域長

- 入力形式がCSV形式の時は、NULLの位置までのデータ長

ただし、入力領域長 > (出力領域長-2) の場合、入力データは(出力領域長-2)のサイズに切り捨てられます。その際、溢れエラーは出力されません。入力領域長 < (出力領域長-2) の場合、余った領域にはNULLが挿入されます。

- 数値項目に関しては、通常の変換を行います。
- テキストファイル形式の入出力については、未サポートです。

7.2.4 Charset Managerの使用について

[Charset Manager](#)の文字コード変換表のカスタマイズ機能を利用し、利用者固有の文字コードの対応関係を定義した環境において、MDPORTでCharset Managerを利用した変換を行う場合、以下の注意事項があります。

- Charset Managerは変換依頼した文字が未定義文字の場合、全角アンダースコアを返しますが、MDPORTでは返却された全角アンダースコアを変換エラーと判断します。

このため、カスタマイズ定義で変換先に全角アンダースコアを定義した場合、MDPORTでは変換元に定義したコードを変換エラーとします。

変換先に全角アンダースコアを定義する場合は、MDPORTの[利用者定義変換テーブル](#)を使用してください。

変換拡張定義機能では、これまで文字コード変換表のカスタマイズ機能では定義できなかった1バイト文字の定義ができますが、MDPORTでこれによるCharset Managerを利用した変換を行う場合、以下の注意事項があります。

1バイト文字の定義を変更する場合は、MDPORTの利用者定義変換テーブルを使用してください。

- 変換元のタブを除く制御文字(“0x00~0x19”、“0x7F”)の対応関係を変更しても変換に反映されません。
- 変換元コード属性と変換先コード属性が異なる定義(半角の英数字を漢字に定義、漢字を半角の英数字に定義等)は、行わないでください。また、未定義文字の代替コードを変更しないでください。MDPORTの変換が正しく行われなくなります。

7.2.5 レコード抽出機能について

[レコード抽出機能](#)には、以下の注意事項があります。

[データ条件設定]画面の起動

[[データ条件設定](#)]画面で条件を設定した後に、[レイアウト定義ファイル](#)を変更した場合は、データ条件の確認を必ず行ってください。一旦、データ条件を削除してから再設定することを推奨します。

以下のいずれかの場合は、レコード抽出は行えません。[データ条件設定]画面の起動時に、エラーメッセージが表示されます。

- 入力ファイルのデータに[ヌル表示域](#)を含む場合
レイアウト定義機能の[[基本情報設定](#)]画面で、[各項目にヌル表示域を設定]のチェックボックス(入力側)をオンにした場合です。
- 入力ファイルのバイナリデータを[ビッグエンディアン](#)で扱う場合
レイアウト定義機能の[基本情報設定]画面で、[バイナリをビッグエンディアンで扱う]のチェックボックス(入力側)をオンにした場合です。

なお、バッチ実行機能やコマンド機能を利用してレイアウト定義ファイルを指定した場合は、データ条件とレイアウト定義の整合性チェックは行われなため、正常なレコード抽出ができない可能性があります。

[データ条件設定]画面

- ・ 同一項目名が複数存在する項目に対して条件値を指定した場合、レコード抽出では最初に検索された項目名を対象に処理を行います。
レコード抽出を行う場合は、レイアウト定義の項目名を一意にしてください。
- ・ レイアウト定義内の項目名に空白やカンマを指定している場合、レコード抽出を行うことはできません。
- ・ 条件値で入力可能な領域は150バイトのため、150バイトを超えるデータ項目に対する完全一致は行えません。前方一致で代用してください。
- ・ Windowsのカット&ペースト機能等を利用して条件値に文字以外のコードを設定した場合、レコード抽出の動作は保証しません。制御文字を検出したい場合は16進指定を利用してください。
- ・ 反復項目に対して条件値を指定した場合、レコード抽出では1回目の反復項目を対象に処理を行います。
反復項目に対するレコード抽出を行う場合は、レイアウト定義で反復項目分を展開して定義する等の対処を行ってください。
- ・ 数値型項目の16進指定は行えません。

出力ファイルと抽出漏れファイル

- ・ ワイルドカードの指定により複数ファイルへ出力する(1レコード/1ファイル)場合、抽出対象外のレコード(ファイル)は出力されません。その他の出力形式では、抽出対象レコードが1件もない場合、空の出力ファイル(0バイト)が作成されます。
ただし、CSVの項目ヘッダー出力指定をしている場合は、その情報が出力されます。
- ・ 対象となる入力ファイル形式が索引ファイルの場合、抽出漏れファイルを指定してもファイルは作成されません。
- ・ ワイルドカードの指定により対象となる入力ファイルが複数の場合、抽出漏れファイル出力は未サポートです。
最後に処理された入力ファイルに対する抽出漏れレコードのみ出力します。

条件値の文字コード変換 (文字属性データの場合)

入力ファイルの文字の扱いや構成によっては、文字属性データのレコード抽出処理を行うこと(データ条件と入力ファイルのデータを一致させること)ができません。

以下のような文字を含んでいる場合は、16進指定を利用したレコード抽出を行ってください。

- ・ コード体系がJISで、JIS78、JIS83、JIS90の混在データを含んでいる場合、レコード抽出は行えません。
条件値の文字列はJIS83形式に変換します。
- ・ コード体系がEUCでJIS8形式の半角カタカナを含んでいる場合、レコード抽出は行えません。
条件値の半角カタカナはコードセット2(G2文字)の2バイト/文字に変換します。
- ・ コード体系がEUC(U90)で日本語項目(cobolEUC)を含んでいる場合、レコード抽出は行えません。
条件値の日本語項目はコードセット3(G3文字)の3バイト/文字に変換します。
- ・ 入力ファイルのデータ項目内に制御コードが存在する場合、レコード抽出は行えません(char型項目の終了を表すNULLやシフトコードへは対応しています)。

条件値の数値変換 (数値属性データの場合)

- ・ ファイル形式がCSV形式の場合、NULLデータは0と判断します。
- ・ 外部10進/内部10進項目の数値データの符号部は、負の符号部のみ厳密に判断します。
それ以外は正の符号と判断します(符号なしデータは、常に正と判断します)。

- 条件値の数値変換では桁数の厳密なチェックを行わないため、入力ファイル内の数値データが異常であっても、正常データと判断して数値変換を実施します。

その結果、期待する抽出を得られない可能性があります。

- 例)

PIC 9(6) COMP-3.

入力データ(16進形式):0x1234567C

の場合、抽出では“+1234567”(7桁)の数値と解釈します。

7.2.6 マスク機能について

マスク機能には、以下の注意事項があります。

- マスクデータファイルは、MDPORTのインストール先フォルダ直下に保存してください。
- マスク対象の項目属性とマスクデータファイルに定義されているマスク値の属性の整合性のチェックはしません。
これにより、マスク機能によって日本語項目属性の項目が半角英数字に置き換えられる場合があります(これは、テストデータとしてイレギュラーなデータを生成するような使用方法を想定しています)。
項目属性に対して明らかに不正な指定がされた場合は、レイアウト保存時のチェックでエラーダイアログが表示され、マスク処理を行いません。
- マスクデータファイルはシフトJISコードで記述し、Excelで編集可能な範囲の文字を記述できるものとします。
- データ整合性は、ファイル内でのみ有効です。
そのため、複数ファイルに同一項目名のデータが存在しても同一の値でマスクされるとは限りません。
- 以下の表に示す例では、No.1とNo.2の両方の場合において、入力データと出力データは同一ではない(重複していない)と扱われます。
No.1の場合は、入力データと出力データは明らかに異なった文字列のため問題ありませんが、No.2の場合は、空白を無視して考えると同等の意味になるため注意が必要です。

表 7.3 入力データと出力データが同一ではないと扱われるパターン(例)

No	入力データ(マスク前)	出力データ(マスク後)
1	小山△田	小山
2	小△山	小山

備考)“△”は空白を表しています。

- マスクデータに、入力データに存在するデータが含まれていた場合、重複しないデータ選択のためリライしますが、マスクデータの内容によっては、入力データと同一のデータが出力されることがあります(その場合、警告メッセージを表示します)。
マスクデータには、入力データを含まないデータで作成する必要があります。
- マスク処理は、実行毎に、マスクデータファイルからランダムにデータを取り出して、マスク対象項目のデータを置き換えます。
そのため、同じ条件(マスクデータファイル、入力ファイル、変換指示内容)であっても、マスク処理の結果は変換実行を行う度に変わります。
また、入力データ内容によって置き換えるマスクデータを指定したり、マスク処理後のデータからマスク処理前のデータに復元したりすることはできません。

7.2.7 プレビュー機能について

プレビュー機能には、以下の注意事項があります。

各種変換指定の整合性の概略を確認する機能のため、厳密な文字変換の整合性や正確なデータ内容の確認には適していません。

- ・ 出力ファイルの形式が一般ファイルの場合に活用してください。
CSV出力では引用符や区切り文字のコードも表示されるため、プレビュー機能には適していません。
CSVの変換結果は、各種アプリケーションを利用して確認することを薦めます。
- ・ 表示されるのは先頭レコードから100件分までです。
- ・ ワイルドカードを指定して出力ファイルが複数ある場合、1つ目の出力ファイルについて表示されます。
- ・ プレビュー機能では、出力ファイルの内容をそのままシフトJISコードとして表示するため、出力側コード体系がシフトJISコードでないと文字を確認できません。
ただし、16進表示での確認としては利用できます。
- ・ プレビュー上のフォントは「MS ゴシック」を使用しています。
- ・ 出力内容に未定義の利用者定義文字コードが存在すると、実際のデータが2バイトであるのに対し、表示上は1バイトの“・”が表示されて以降の文字が詰められてしまいます。
よって、表示データ相対位置と上段カラムおよび16進表示との間でズレが生じますので注意してください。
- ・ 改行コード等のキャラクタ以外のコードは、“・”で表示されます。

7.2.8 変換エラー表示について

変換エラー表示には、以下の注意事項があります。

- ・ 変換エラー表示を行う際、変換エラーの格納先に[変換エラーファイル](#)が存在しないと表示できません。
- ・ 環境設定で、変換エラーを表示する外部ビューアプログラムを指定した場合、コマンドラインに変換エラーファイル名を設定して起動されます。
このインターフェース以外のプログラムだと正常に実行されません。

7.2.9 変換指示ファイルについて

MDPORTでは、変換指示ウィザードで指定した内容を[変換指示ファイル](#)として保存することができますが、以下の注意事項があります。

- ・ 変換指示ファイルは、[レイアウト定義ファイル](#)や入出力ファイルをフルパス名で情報管理しているため可搬性がありません。
例えば、変換指示ファイルを開いた際に、変換指示ファイルを保存したときのレイアウト定義ファイルが削除/移動されていると、エラーが発生します。
- ・ 変換指示ファイルは、直接エディタなどで編集しないでください。

7.3 レイアウト定義機能に関する注意事項

レイアウト定義機能に関する注意事項を、以下に示します。

7.3.1 レイアウト定義機能で取り込める既存資産

レイアウト定義機能では、COBOLの[COBOL登録集](#)、YPSインクルード仕様書[x86版]、C言語の[インクルードファイル](#)を解析し、[レイアウト定義ファイル](#)を生成する機能があります。

また、編集時のレイアウトに、既存のレイアウト定義ファイルの定義を取り込む機能もあります。
ただし、既存資産の取り込みには、以下の注意事項があります。

既存COBOL資産

- COBOL登録集
 - COBOLの文法上、正しく記述されていないと解析処理は保証されません。
 - 扱える項目数は、集団項目を含めて3000までです。これを超える場合は、項目の結合等によりCOBOL登録集を加工してください。
 - 01レベルが複数ある場合は、最初に出現する01レベルのレコードしか解析されません。
 - 以下の記述がある場合は、正しく解析できません。COBOL登録集を加工してください。
 - レベル番号が01～49以外の項目。
 - SYNCHRONIZED(SYNC)句。
 - OCCURS DEPENDING ON句。
 - REDEFINES句の記述は無視され、再定義の項目は解析対象となりません。なお、再定義される項目は解析対象となります。
 - MDPORTでは以下の項目属性変換に対応していないため、解析時に英数字項目属性として扱います。
ポインタデータ項目、ブール項目、指標データ項目、浮動小数項目
 - 数字編集項目・英数字編集項目は英数字項目属性として解析されます。
 - 以下の記述は無視されて解析されます。
KEY IS句、INDEXED BY句、JUSTIFIED句、BLANK句、VALUE句、CHARACTER TYPE句、PRINTING POSITION句、BASED ON句
 - シフトJIS以外のCOBOL登録集を扱うことはできません。シフトJIS以外のCOBOL登録集を扱う場合は、コード変換を行ってください。
 - USAGE IS COMPUTATIONAL-6句を記述して、Micro Focus固有の符号の領域がない内部10進形式のデータを扱うことはできません。
- YPSインクルード仕様書 [x86版]
 - YPS/COBOLの文法上、正しく記述されていないと解析処理は保証されません。
 - 解析する前にYPS/COBOLコンパイラの「環境設定(COBOL仕様)」の「レコード長」で、“251”を設定しておく必要があります。

注意

既存COBOL資産における領域長の変更

以下の属性は、[x86版]と[x64版]で領域長が変更になります。

- POINTER (ポインタデータ項目)
- INDEX (指標データ項目)

これに合わせて解析結果も以下のように変更となります。

表7.4 領域長の比較

属性	属性の内容	MDPORTの解析結果	
		[x86版]	[x64版]
POINTER	ポインタデータ項目。MDPORTではX項目として扱います。	属性:X 領域長:4	属性:X 領域長:8
INDEX	指標データ項目。MDPORTではX項目として扱います。	属性:X 領域長:4	属性:X 領域長:8

既存C言語資産 (インクルードファイル)

- C言語の文法上、正しく記述されていないと解析処理は保証されません。
- レイアウト定義ファイルの生成対象は、インクルードファイル中の最初の構造体の定義のみです。
- 解析はインクルードファイル全体に対して行われますので、全体の記述が解析可能な内容である必要があります。
- 解析可能な字句は以下のとおりです。
struct, signed, unsigned, char, int, short, long, float, double, *(ポインタ), [] (配列), {} (構造体定義), /* */ (コメント), //(コメント), <構造体名>, <メンバー名>
- 以下の記述があると解析できません。上記の字句を使った記述にインクルードファイルを変更してください。
 - #includeや#defineといったマクロ記述。
 - typedefによる型宣言。
 - 構造体定義中の、別の構造体の定義や構造体型のメンバー(ポインタも含む)。
 - 構造体の定義以外の構文(コメントは可)。
- char a[N]のようなchar型の1次元配列は、領域長Nバイトの1つの項目として解釈されます。char b[M][N]と記述した場合は、領域長Nバイトの項目のM回繰り返しと解釈されます。
- 配列やポインタは7次元までです。それ以上は切り捨てます。
- double型やfloat型は同じ長さのchar型配列に置き換わります。
- [アライメント](#)により項目間に隙間が発生した場合、その部分には@DUMMYという項目が追加されます。
- ポインタの項目の場合、項目名の先頭に“*”が付加されます。
- 解析時にエラーが発生した場合、[解析エラーファイル](#)にエラー情報が出力されます。
- ポインタの項目は[x86版]、[x64版]共に領域長:4として解析されます。
- int型2進データ項目の解析を行う場合は、以下の注意事項があります。

表7.5 int型2進データ項目の代替変換

項目	代替変換
BINARY-CHAR	未サポートです。X項目に代替変換します。
BINARY-SHORT	COMP5形式に代替変換します。
BINARY-LONG	COMP5形式に代替変換します。
BINARY-DOUBLE	COMP5形式に代替変換します。19桁を超えるデータ変換には未対応です。

COMP5形式に代替変換したレイアウトを変更することはできません。「項目定義テンプレート」を起動すると、項目の領域長が自動的に変更されますので注意してください。

既存レイアウト定義

- ・ 空白、カンマ(,)およびセミコロン(;)を含む項目名を入力とした場合の動作は保証していません。

7.3.2 レイアウト定義機能について

レイアウト定義機能には、以下の注意事項があります。

- ・ 項目名に空白、カンマ(,)およびセミコロン(;)を含めた場合の動作は保証していません。
- ・ 一括設定機能の「日本語項目属性の領域長を2倍に変更」および「日本語項目属性の領域長を1/2に変更」は、「N-日本語」項目にのみ適用されます。
- ・ 一括設定機能の「日本語項目属性の領域長を2倍に変更」を複数回実行し、領域長が“99999”を超える場合、領域長には“99999”が設定されます。
- ・ 一括設定機能の「日本語項目属性の領域長を1/2に変更」を実行すると、領域長が奇数になる場合があります。
「N-日本語」項目の領域長が奇数である場合、正しい変換ができないことがありますので、注意が必要です。
- ・ 一括設定機能の「日本語項目属性の領域長を1/2に変更」を領域長が奇数である「N-日本語」項目に対して実行した場合、1/2に変更した領域長の値は、小数点以下を切り上げた値となります。
- ・ 一括設定機能の「日本語項目属性の領域長を2倍に変更」または「日本語項目属性の領域長を1/2に変更」を実行した場合、相対位置は先頭項目から振り直されます。
また、相対位置の振り直しは、「N-日本語」項目の有無に関わらず行われます。
- ・ マルチレイアウト定義の場合、一括設定機能の「相対位置の振り直し」、「属性を“項目なし(-)”に変更」、「日本語項目属性の領域長を2倍に変更」および「日本語項目属性の領域長を1/2に変更」は、画面に表示されているレイアウト定義にのみ適用されます。

マルチレイアウトを扱う場合の注意事項

- ・ **マルチレイアウト**として扱うことができるレイアウトの数は100件までです。
- ・ 可変長マルチレイアウト(各レイアウトのレコード長が異なる)ファイルの場合、ファイル属性は可変長しか選択できません。
- ・ 入力が一般ファイル形式の場合、データの途中で改行(CR+LFまたはLF)が存在すると、そこをレコードの区切りとみなされ、意図した変換ができません。
- ・ マルチレイアウトの**COBOLファイル**を取り扱うためには、COBOLランタイムシステムが可変長の入出力に対応している必要があります。
- ・ レイアウト定義テンプレートの最小値および最大値において、文字列指定(ダブルクォーテーションで括る指定)で比較される文字コードは、シフトJIS固定となります。
- ・ レイアウト定義テンプレートでは、フィールド位置とフィールド長で比較対象を指定することにより、項目の属性は意識せずに、単純なコード値の比較を行います。そのため、数値属性の項目に符号や小数点が含まれる場合は、最小値および最大値の文字列指定(ダブルクォーテーションで括る指定)はできません。
- ・ 新規レイアウトの挿入および新規レイアウトの追加で、既存レイアウトの取込を行う場合、入出力のデータ形式を、既存のレイアウト定義に合わせる必要があります。

レイアウト定義ファイルについて

- ・ レイアウト定義ファイルは、直接エディタなどで編集しないでください。

7.3.3 DDL文出力について

DDL文出力には、以下の注意事項があります。

- 階層構造について

DDLテーブル定義は階層構造に対応していないため、DDL文の出力対象は、階層“0”かつ項目定義がされている項目となります。階層が“0”以外の項目や、集団項目は、出力されるDDLテーブル定義には含まれません。

- CSV形式における桁数について

データ形式がCSV形式の場合、必ずしも領域長の指定は必要ありません。領域長の指定がない場合、DDL文の桁数はデフォルト値“1”が出力されます。

- 日本語項目について

日本語項目(N)、可変長日本語項目(Y)の場合、出力されるDDL文の桁数は「文字数」であるため、領域長の半分の値となります。

表7.6 属性とRDBMSのデータ型の変換表

レイアウト情報の属性		RDBMSのデータ型			備考
データ型	略語	Symfoware	Oracle	SQLServer	
英数字	X	VARCHAR	VARCHAR2	varchar	1バイト系キャラクタの格納形式
日本語	N	NCHAR	NCHAR	nchar	日本語(2バイト系)キャラクタのみの格納形式
混在	M	VARCHAR	VARCHAR2	varchar	1/2バイト系キャラクタ混在の格納形式
char型	C	CHAR	CHAR	char	NULLで終了する文字列
可変長文字列	R	VARCHAR	VARCHAR2	varchar	先頭2バイトに有効データ長を持つ文字列(※)
可変長日本語	Y	NCHAR VARYING	NVARCHAR2	nvarchar	先頭2バイトに有効データ長を持つ日本語属性の文字列(※)
外部10進数	Z	NUMERIC	NUMBER	numeric	COBOL独自のゾーン形式
内部10進数	P	NUMERIC	NUMBER	numeric	COBOL独自のパック形式
2進数	B	NUMERIC	NUMBER	numeric	COBOL独自のバイナリ形式
COMP-5属性	5	NUMERIC	NUMBER	numeric	COBOL独自のバイナリ形式(※)
short型	S	INTEGER	INTEGER	int	16ビットで表現されるバイナリ形式(※) -32,768~32,767
long型	L	INTEGER	INTEGER	int	32ビットで表現されるバイナリ形式(※) -2 ³¹ ~2 ³¹ -1
数値文字列	V	NUMERIC	NUMBER	numeric	数値をキャラクタ表現した形式(符号や小数点も文字で表現される)

備考の欄に、(※)の付いているものは、[基本情報設定]画面の[バイナリをビッグエンディアンで扱う]の指定により、内部形式が異なります。Windows上では、[リトルエンディアン](#)形式です。

7.4 データ加工機能に関する注意事項

データ加工機能に関する注意事項を、以下に示します。

7.4.1 レイアウト定義ファイルについて

データ加工機能では、以下のいずれかの方法で、**レイアウト定義ファイル**を作成することができます。

- ・ [入出力情報設定]画面の[レイアウト定義ファイル生成]ボタンをクリックして、既存のCOBOL登録集(コピー句)を指定します。
- ・ [入出力情報設定]画面で[加工後コピー句]を指定して、加工処理(コピー句生成除く)を実行します。

データ加工機能におけるレイアウト定義ファイルには、以下の注意事項があります。

- ・ 加工処理の実行で作成されるレイアウト定義ファイルは、「連続実行」の設定の有無に関わらず作成されます。
- ・ 以下のレイアウト定義ファイルは、データ加工機能では使用できません。
 - ー 入力/出力のデータ形式が「データファイル形式」以外のレイアウト定義ファイル
 - ー 複数の階層の項目が存在するレイアウト定義ファイル
 - レイアウト定義画面で集団項目/反復項目を定義した場合
 - レイアウト定義画面の[設定]メニューの[COBOL解析オプション]で、集団項目の扱いを「有効」として解析した場合
 - MDPORTLCコマンドで、集団項目の扱いを「有効」として(オペランドに“p yes”を指定して)解析した場合

なお、データ加工機能では、上記の対象となるレイアウト定義ファイルは生成されません。

- ・ ファイル種別は、レイアウト定義画面の[設定]メニューの[COBOL解析オプション]の設定内容に依存します。そのため、データ加工機能を利用する前に、当該画面設定のファイル種別を[COBOL登録集]にする必要があります。

ファイル種別をYPSインクルード仕様書に設定すると、データ加工機能でレイアウト定義ファイルを作成する際に解析エラーが発生します。

- ・ データ加工機能は、項目名の多重定義に対応していません。

また、COBOL登録集(コピー句)からレイアウト定義ファイルを作成する場合、集団項目の解析は無視されるため、集団項目で修飾して項目名が一意であったとしても、同一の項目名が存在する場合は対応していません。

7.4.2 JOINについて

JOINには、以下の注意事項があります。

- ・ JOINのキー項目は、同じ属性の項目を選択する必要があります。
- ・ 以下のいずれかのキー項目でJOINを行う場合のみ、「ソート済ファイルの指定」が設定できます。それ以外のキー項目で「ソート済ファイルの指定」を設定した場合は、処理することができません。
 - ー 英数字: X(n)
 - ー 日本語: N(n)
 - ー 符号なし外部10進: 9(n)
 - ー 符号なし内部10進: 9(n)
 - ー 符号なし2進: 9(n)

7.4.3 データ加工機能エラー表示について

データ加工機能エラー表示には、以下の注意事項があります。

- ・ 環境設定で、エラーファイル表示エディタを指定した場合、コマンドラインに**データ加工機能エラーファイル**名を設定して起動されます。
このインターフェース以外のプログラムだと正常に実行されません。

7.4.4 ログファイルについて

データ加工機能のログファイルには、以下の注意事項があります。

- ・ データ加工機能では、起動時に一度だけ、MDPORTのレジストリからログファイル名の情報を取得しています。
そのため、データ加工機能の起動中に、文字コード・ファイル形式変換の**環境設定**画面の**[バッチ実行時のログファイル]**の設定内容を変更すると、データ加工機能のログ出力に矛盾が生じます。
ログファイルの設定変更は、データ加工機能を終了してから行ってください。
- ・ ログファイルへの出力は、既存のログファイルが存在すれば追加書きとなり、存在しなければ自動で作成されます。
同じログファイルへの追加書きを繰り返して、ログファイルの容量が**4GB**に達した場合、ログファイルへの出力ができなくなります。
そのため、**4GB**に達する前に、利用者側でログファイル名を変更するか、ログファイルを退避してください。
- ・ [ツール]メニューの「コピー句生成」の処理の履歴は、ログファイルへ出力されません。

7.4.5 加工指示ファイルについて

データ加工機能では、加工指示により設定した内容を**加工指示ファイル**として保存することができますが、以下の注意事項があります。

- ・ 加工指示ファイルは、**レイアウト定義ファイル**や入出力ファイルをフルパス名で情報管理しているため可搬性がありません。
例えば、加工指示ファイルを開いた際に、加工指示ファイルを保存したときのレイアウト定義ファイルが削除/移動されていると、エラーが発生します。
- ・ 加工指示ファイルは、直接エディタなどで編集しないでください。

付録A 利用者定義変換テーブル

利用者定義変換テーブルにより、利用者定義文字(外字)や拡張文字の変換仕様を任意に指定することができます。

利用者定義変換テーブルは、テキストファイルとして、Windows標準のメモ帳等を使用して作成します。

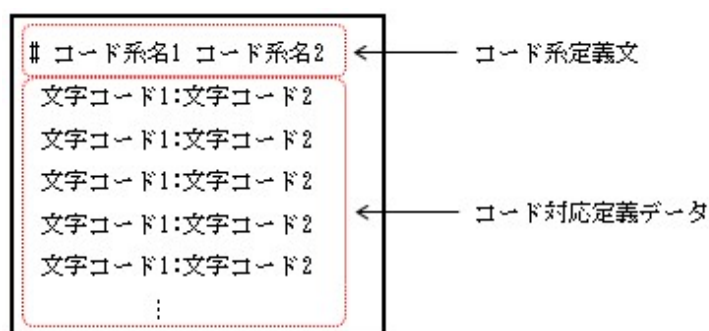
A.1 利用者定義変換テーブルの書式

利用者定義変換テーブルは、コード系定義文とそれに従属する1つ以上のコード対応定義データで構成されています。

それぞれは、行の1カラム目の内容(“#”または空白)で識別されます。

1カラム目が“*”の場合は注釈行とみなされます。

図A.1 利用者定義変換テーブルの書式



注釈行は任意の場所に入れることができます。

コード系定義文(コード系名1/コード系名2)およびコード対応定義データ(文字コード1/文字コード2)について、詳しくは以下の説明を参照してください。

コード系定義文

- 「#コード系名1 コード系名2」の形式で指定します。
- 1カラム目には“#”を指定します。
- 利用者定義変換テーブルで定義されたコード対応情報は、双方向で有効となります。
つまり、1つの利用者定義変換テーブルで、コード系名1からコード系名2への変換、およびコード系名2からコード系名1への変換でそれぞれ有効です。
- コード系名1とコード系名2に、同一のコード系名を指定することもできます。
その場合、以降のコード対応定義データは、入力側:出力側の順序で記述します。
- コード系名は、以下のように指定します。

表A.1 コード系名

文字コード体系	コード系名	備考
シフトJISコード	SJIS	
EUCコード	EUC	
JEFコード	JEF	JEF(カナ)の場合
	JEFA	JEF(ASCII)の場合

文字コード体系	コード系名	備考
JISコード	JIS	
Unicode	UCS2	UCS2ビッグエンディアン、UCS2リトルエンディアン、UTF8の場合
	UTF16	UTF16ビッグエンディアン、UTF16リトルエンディアンの場合
	UTF32	UTF32ビッグエンディアン、UTF32リトルエンディアン、UTF8_4の場合
その他	コードID	指定する他社コード変換の具体的なコードIDについては、「第5章 変換仕様」の「5.1.4 他社コード変換」を参照

コード対応定義データ

- 「文字コード1:文字コード2」の形式で指定します。
- 文字コード2は省略できます。
- 文字コード2を省略した場合、そのコード対応定義データは指定しなかったものとみなします。
- 1カラム目には半角空白を指定し、文字コード1と文字コード2の間にコロン(:)を指定します。
途中で空白があってははいけません。
- 文字コードは16進で、2桁、4桁、6桁、または8桁で指定します。

EUCコードの場合、コードセット3(G3文字)は“8F”を付けて6桁で指定し、半角カタカナのコードセット2(G2文字)は“8E”を付けて4桁で指定します。

Unicode(UCS2ビッグエンディアン,UCS2リトルエンディアン,UTF8)の場合、UCS2ビッグエンディアン4桁で指定します。

Unicode(UTF16ビッグエンディアン,UTF16リトルエンディアン)の場合、UTF16ビッグエンディアン4桁で指定します。ただし、UTF16のサロゲートの範囲は、UTF16ビッグエンディアンのサロゲートペア8桁で指定します。

Unicode(UTF32ビッグエンディアン,UTF32リトルエンディアン,UTF8_4)の場合、UTF32ビッグエンディアン8桁で指定します。

- 出力側の文字コードに“NO”を指定すると、対応するコードがないとみなされ、コード変換エラーとして出力されます。
入力側の文字コードが“NO”の指定は無効となるため、変換結果への影響はありません。
- 同一の入力側コードに対して変換規則が複数存在する場合は、最後に記述されている指定が有効となります。
- 文字コード1および文字コード2には16進コードで、2桁(1バイト文字)、4桁(2バイト文字)、6桁(3バイト文字)または8桁(4バイト文字)のいずれかが指定できます。6桁指定はEUCコードのみです。8桁指定はUTF32コードです。
- 半角文字については、通常、2桁で指定します。ただし、以下のケースでは対応するコードを4桁、または8桁で指定します。

特殊な半角文字	指定方法
EUCカナ(コードセット2)	8EA1～8EDF
UCS2(半角文字)	0000～007F または
UTF16(半角文字)	FF61～FF9F
UTF32(半角文字)	00000000～0000007F または 0000FF61～0000FF9F

- 4桁、6桁(全角文字)、または8桁(全角文字)を指定する場合、文字コードとして認識できない範囲を指定することはできません。(一部、指定可能な範囲あり)
- 「[A.3 指定できないコード範囲](#)」に記載されているコード範囲を指定することはできません。

参考

具体的な定義例については、「A.2 定義例」を参照してください。

A.2 定義例

利用者定義変換テーブルの定義例

定義例を以下に示します。

なお、“*”から始まる行は注釈行(コメント)で、定義として必要な行ではありません。

- 定義例1 (2バイト系コード、1バイト系コード、“NO”の指定)

```
* JEF-シフトJIS間の変換
# JEF SJIS
47C9:92CB
00:5F
5B:NO
```

利用者定義変換テーブルを定義することによって、任意の文字に変換できます。

通常はコード変換エラーとなる文字についても、コード変換エラーを出さずに変換することができます。

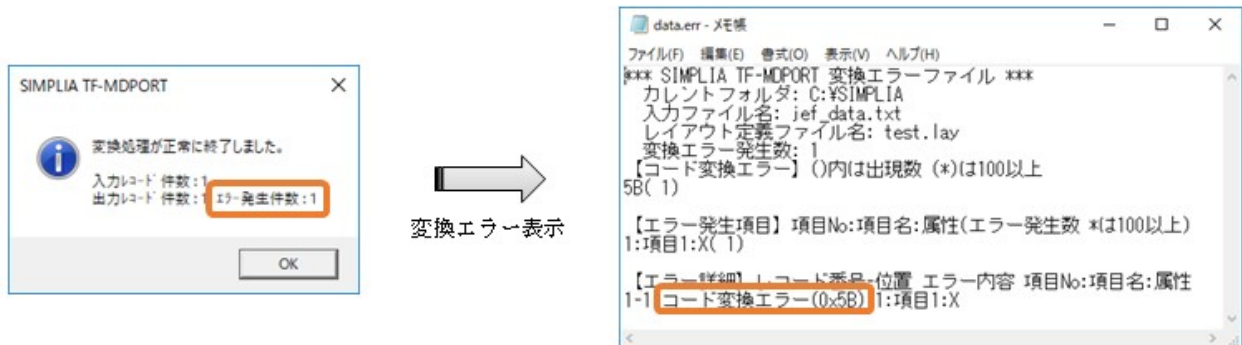
それとは逆に、利用者定義変換テーブルの文字コードに“NO”を指定することによって、通常はコード変換エラーが出ない文字について、コード変換エラーにすることができます(詳しくは、以下の参考情報を参照してください)。

参考

文字コードに“NO”を指定した場合の動作について

例えば、JEFからシフトJISの変換において、利用者定義変換テーブルに上記の定義例1にある「5B:NO」を定義すると、入力ファイルに“0x5B”の1バイト文字が存在する場合はコード変換エラーとなり、1カラム系代替コードで出力されます。

図A.2 エラーの表示例



- 定義例2 (EUCコードの変換)

```
* シフトJIS-EUC間の変換
# SJIS EUC
```

```
EB40:F7A1
EB41:8FA1A1
B1:8EB1
```

EUCコードのコードセット3(G3文字)や、半角カタカナのコードセット2(G2文字)の定義をすることもできます。

- 定義例3 (Unicode(UCS2)の変換)

```
* JEF-UCS2 (UCS2B, UCS2L, UTF8) 間の変換
# JEF UCS2
C4CD:FA10
F1:0031
```

利用者定義変換テーブルの定義としては、UCS2リトルエンディアンやUTF8の場合も、UCS2ビッグエンディアンで指定します。

- 定義例4 (Unicode(UTF16)の変換)

```
* シフトJIS-UTF16 (UTF16B, UTF16L) 間の変換
# SJIS UTF16
8AE3:7FEB
81A1:D801DC37
```

利用者定義変換テーブルの定義としては、UTF16リトルエンディアンの場合も、UTF16ビッグエンディアンで指定します。UTF16ビッグエンディアンのサロゲートペア8桁での指定も可能です。

- 定義例5 (Unicode(UTF32)の変換)

```
* JEF-UTF32 (UTF32B, UTF32L, UTF8_4) 間の変換
# JEF UTF32
71FA:000201A2
73FC:0002099D
```

利用者定義変換テーブルの定義としては、UTF32リトルエンディアンやUTF8_4の場合も、UTF32ビッグエンディアンで指定します。

- 定義例6 (変換規則が複数存在する場合)

```
* JEF-シフトJIS間の変換
# JEF SJIS
C4CD:FA9C
C4CD:92CB
```

JEFからシフトJISへの変換の場合、上記の例では、JEFの0xC4CDは、シフトJISの0x92CBに変換されます(下側の指定が有効)。

利用者定義変換テーブルの雛形

MDPORTインストール先フォルダの[Sample]フォルダ配下に、以下のファイルを提供しています。

表A.2 利用者定義変換テーブルの雛形

ファイル名	説明
JEF_SJIS.cnv	JEFとシフトJISの変換で、 字形重視 変換 + 縮退変換 が行えます。

ファイル名	説明
KEIS_SJIS.cnv	KEISとシフトJISの変換で、標準変換では変換可能な文字が、Charset Manager変換時に変換できなくなる5文字について定義しています。
IBM_SJIS-78jis.cnv	IBMとシフトJISの変換で、既存領域を78JISベースで変換します。 また、83JISベースで追加された領域に新字体を割り当て、90JISで追加された2文字を追加しています。
IBM_SJIS-83jis.cnv	IBMとシフトJISの変換で、83JISで追加領域に再割り当てされた旧字体4文字と90JISで追加された2文字を定義しています。
Unicode_SJIS.cnv	UnicodeとシフトJISの変換で、V70系以前と非互換のある13文字について、V70系以前と互換性を保った変換に対応付けています。
Unicode_EUC(S90).cnv	UnicodeとEUC(S90)の変換で、V70系以前と非互換のある9文字について、V70系以前と互換性を保った変換に対応付けています。

備考) 詳細は、上記ファイル内のコメント文を参照してください。

A.3 指定できないコード範囲

利用者定義変換テーブルのコード対応定義データに、以下のコード範囲を指定することはできません。

表A.3 指定できないコード範囲

コード系名	1バイトコード	2バイトコード	3バイトコード	4バイトコード
SJIS	81～9F E0～FC	1バイト目が 00～7F,A1～DF	-	-
EUC	8E,8F A1～FE	1バイト目が00～7F 1バイト目が8Fで 2バイト目がA1～FE (G3の 1,2バイト目)	1バイト目が 00～7F,8E	-
JEF JEFA	28,29,38,30	左記コードで始まる2バイト	-	-
JIPE	3F	左記コードで始まる2バイト	-	-
JIPJ	1A	左記コードで始まる2バイト	-	-
KEIS	0A,30	左記コードで始まる2バイト	-	-
IBM	0E,0F	左記コードで始まる2バイト	-	-
JIS	1B	左記コードで始まる2バイト	-	-
AVX	2バイト文字の1バイト目 04,06,08～0A, 14,17,1A,1B, 20～25,28～2C, 30,31,33～36,38～3B,3E, 57,59,62～66,6A, 74～79,80,8B, 9B,9C,A0,A1,AB,	1バイト目が 05,40～56, 58,5A～61, 6B～6F,7A～7F, 81～8A,8C～9A, 9D～9F,A2～AA, AC～AF,BA～BF, C1～C9,D0～D9,	-	-

コード系名	1バイトコード	2バイトコード	3バイトコード	4バイトコード
	B0,B2～B9,C0,CA～CF, DA～DF,E1,EA,EB	E0,E2～E9,F0～F9		
UCS2	-	2バイト(4桁)定義以外	-	-
UTF16	-	2バイト(4桁)定義以外 ただし、4バイト(8桁)で定義 したサロゲートの範囲を除く	-	サロゲート範囲でない 4バイト(8桁)定義 (上位サロゲート D800～DBFF、下 位サロゲートDC00 ～DFFFのサロゲート ペアでない定義)
UTF32	-	-	-	4バイト(8桁)定義以外 ただし、4バイト(8 桁)定義のうち、 00000000～ 0010FFFFが定義 可能範囲

また、シフトJISコードまたはEUCコードの場合、利用者定義変換テーブルのコード対応定義データに、以下の範囲で始まる1バイトコードと2バイトコードの両方を同時に指定することはできません。

表A.4 1バイトコードと2バイトコードに同時に指定できないコード範囲

コード系名	1バイト目
SJIS	80 A0 FD～FF
EUC	80～8D 90～A0 FF

なお、同一の「表A.4 1バイトコードと2バイトコードに同時に指定できないコード範囲」で始まる1バイトコードと2バイトコードの定義が存在した場合は、最後に記述されている定義が有効となります。

例えば、以下の変換規則を定義した場合、「80:001A」の定義は有効とならず、「80A0:NO」の定義が有効となります。

- 誤った定義例

```
* SJIS-UCS2間の変換
# SJIS UCS2
80:001A
80A0:NO
```

A.4 利用者定義文字の領域(参考情報)

参考情報として、利用者定義文字のコード範囲を以下に示します。

表A.5 利用者定義文字の領域 (2バイト)

文字コード	コード範囲(上位バイト)	コード範囲(下位バイト)	文字数
JEF	80～A0	A1～FE	3102
EUC(U90)	DD～FD	A1～FE	3102
EUC(S90)	F5～FE	A1～FE	940
R90(sjisdos)	F0～F9	40～FC	1880
シフトJIS(sjisms)	F0～F9	40～FC	1880
Unicode(UCS2/UTF16)	E0～F8	00～FF	6400

表A.6 利用者定義文字の領域 (4バイト)

文字コード	コード範囲	文字数
Unicode(UTF16) ※サロゲートペア	DB80DC00～DBBFDFFD DBC0DC00～DBFFDFFD	131068
Unicode(UTF32)	0000E000～0000F8FF 000F0000～000FFFFD 00100000～0010FFFFD	137468

EUC(U90)の利用者定義領域は、コードセット3の領域(G3領域)です。したがって上位バイトに“0x8F”が付きます。

Unicode-JEFフォントを利用する場合、“0xF001～0xFFFF”はJEF拡張文字の領域に割り当てています。

付録B 代表的なエラーの紹介

MDPORTの使用時に発生する代表的なエラーについて、主な原因と対処方法を説明します。

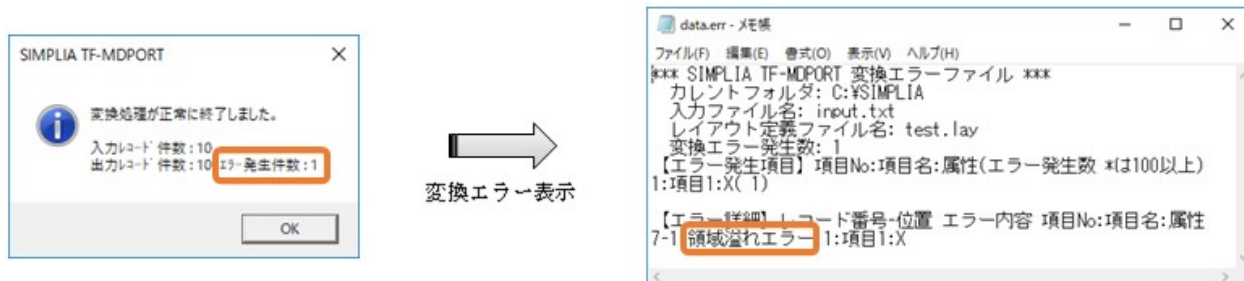
- ・ 領域溢れエラー
- ・ コード変換エラー/正しく変換されない
- ・ 数値部エラー
- ・ 符号部エラー
- ・ 利用者定義変換テーブルに関するエラー
- ・ マスク機能に関するエラー
- ・ 既存資産取り込み時のエラー
- ・ レイアウト定義内容の誤り

B.1 領域溢れエラー

データファイル変換で英数字、日本語、混在、可変長文字列、可変長日本語項目のコード変換を行うと、1項目の入力データ長と出力データ長が異なる場合があります。

出力側の項目に指定した領域長よりも実際出力データ長が大きくなる場合、変換時に領域溢れエラーが発生します。

図B.1 エラーの表示例



表B.1 領域溢れエラーが発生するケース

No	原因	説明	具体例
(1)	文字コード間のバイト数の違い	EUCでは、半角カタカナ(見た目上は1バイト)が2バイトのコードセット(G2文字)で表現されます。	半角カタカナの「ア」について、シフトJIS(0xB1)やJEF(0x81)からEUCへ変換すると、1バイトから2バイト(0x8EB1)になります。
		Unicode(UCS2)では、すべての文字が2バイトで表現されます。	半角数字の「1」について、シフトJIS/EUC/UTF8(0x31)やJEF(0xF1)からUnicode(UCS2/UCS16ビッグエンディアン)へ変換すると、1バイトから2バイト(0x0031)になります。
		Unicode(UTF16)では、すべての文字が2バイトまたは4バイトで表現されます。	半角カタカナの「ア」について、シフトJIS(0xB1)やJEF(0x81)からUnicode(UTF8)へ変換すると、1バイトから3バイト(0xEFDB1)になります。 また、ひらがなの「あ」について、シフトJIS(0x82A0)やJEF(0xA4A2)から

No	原因	説明	具体例
			Unicode(UTF8)へ変換すると、2バイトから3バイト(0xE38182)になります。
		Unicode(UTF32)では、すべての文字が4バイトで表現されます。	ひらがなの「あ」について、シフトJIS(0x82A0)やJEF(0xA4A2)からUnicode(UTF32 ビッグエンディアン)へ変換すると、2バイトから4バイト(0x00003042)になります。
		EUC(U90形式)では、拡張文字コード領域が3バイトのコードセット(3(G3文字))で表現されます。 JEFの拡張漢字/拡張非漢字をEUC(U90形式)の混在項目へ変換すると、拡張文字コード領域として2バイトから3バイトになります。	「俚」という文字について、JEFの0x41FB(2バイト)をEUC(U90形式)の混在項目へ変換すると、0x8FA1FB(3バイト)になります。
(2)	シフトコードの付加	シフトJIS/EUC/Unicodeの混在項目をJIS/JEF/他社コードへ変換すると、シフトコードが付加されます。	混在項目の「12あ34」のデータを入力した場合、入力のシフトJISが0x313282A03334(6バイト)なのに対して、出力のJEFは0xF1F228A4A229F3F4(8バイト)になります。 シフトコードが付加される分だけ、データ長は大きくなります(JEFのシフトコードは0x28、0x29)。
(3)	CSV形式からデータファイル形式への変換	CSV形式では、各項目の入力データの長さは可変のため、変換後のデータ長と出力領域長が一致しない場合があります。 変換後のデータ長が出力領域長に満たない場合は、項目属性により1バイトまたは2バイトの空白を埋め込み、超える場合は、文字単位に切り捨てエラーを出力します。	CSV形式からデータファイル形式への変換において、出力側の領域長を「10」と定義した項目に対して、12バイトのデータを入力すると、領域溢れエラーが発生します。
(4)	出力ファイルのレコード長不足	出力ファイルのレコード長に、レイアウト定義のレコード長より小さい値を指定すると、変換後のレコード長が指定した値を超える場合があります。	レイアウト定義の出力レコード長が「500」の場合に、「MDPORT変換指示ウィザード 4/5」(出力ファイル情報の指定)で、出力ファイルのレコード長に「498」を指定すると、領域溢れエラーが発生する可能性があります。

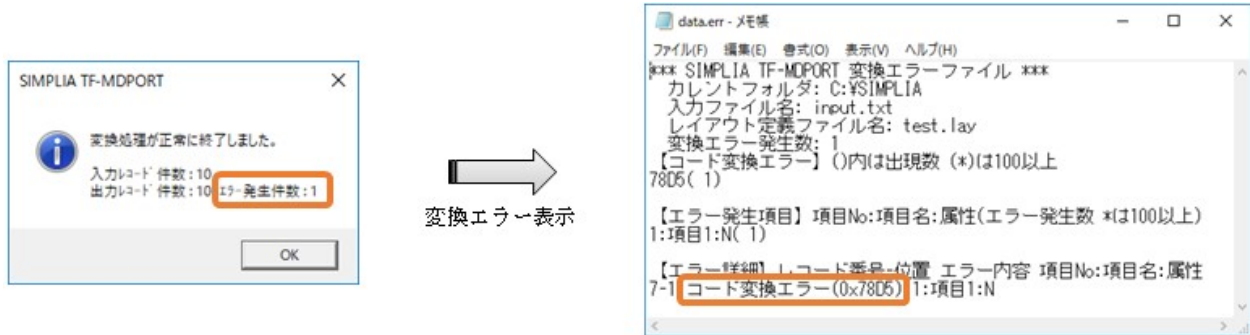
表B.2 対処方法

No	対処方法
(1)~(3)	レイアウト定義で、出力側の各項目の領域長を増やしてください。
(4)	MDPORT変換指示ウィザード 4/5(出力ファイル情報)で、レイアウト定義に合わせたレコード長を指定してください。

B.2 コード変換エラー/正しく変換されない

コード変換パスおよび入力データによっては、変換時にコード変換エラーになったり、正しい変換結果が得られなかったりする場合があります。

図B.2 エラーの表示例



表B.3 コード変換エラーが発生するケース

No	原因	説明	具体例
(1)	拡張漢字/拡張非漢字、外字	MDPORTの標準変換では、83JISに準拠し、第1/第2水準漢字、非漢字(JEFでは基本非漢字)を規則的に変換するため、JEFの拡張漢字/拡張非漢字や外字をシフトJISに正しく変換することができません。	JEFの(株)(0x78D5)や(有)(0x78CF)をシフトJISに変換すると、コード変換エラーが発生します。
(2)	LOW-VALUE、HIGH-VALUE	MDPORTはLOW-VALUEやHIGH-VALUE、JEFのデバイス制御コードを文字と認識しないため、正しく変換することができません。	LOW-VALUE(0x00)やHIGH-VALUE(0xFF)を変換すると、コード変換エラーとなり代替文字に置き換わります。

表B.4 正しく変換されないケース

No	原因	説明	具体例
(3)	改定文字	JEFからシフトJISへの変換において、MDPORTの標準変換は83JIS準拠であるのに対して、JEFコードは78JIS準拠のため、一部の文字(83JISでの改定文字)について同一の文字へ変換されません。	「塚」という文字について、JEFの旧字体(0xC4CD)は、シフトJISの新字体(0x92CB)に変換されます。 また、JEF拡張の新字体(0x47C9)をシフトJISに変換すると、コード変換エラーが発生します。

表B.5 対処方法

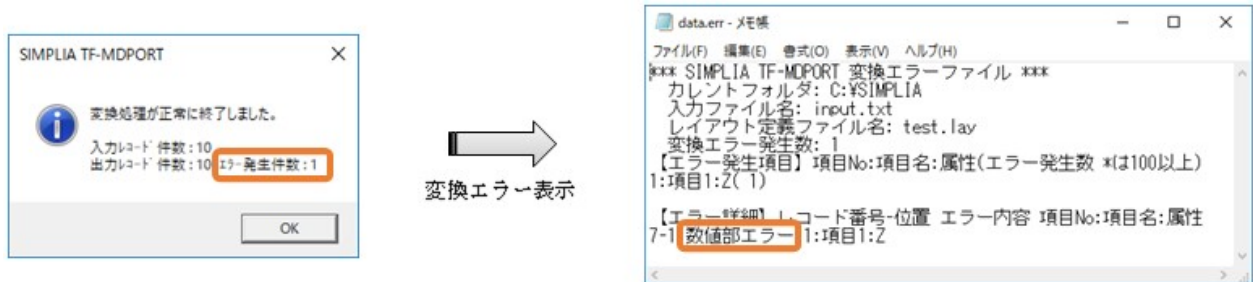
No	対処方法
(1), (3)	<p>JEF拡張漢字/拡張非漢字の変換や、83JIS改定文字を考慮した変換を行うためには、以下の2通りの方法があります。</p> <ul style="list-style-type: none"> Charset Managerを使用する方法 Charset Managerの字形重視変換を行うことにより、変換が可能です([Charset Manager環境の設定]画面のiconv_openのキーワード:jefaugkana→sjisms)。 変換できるのは、変換先のシフトJISとして存在する文字になります。 利用者定義変換テーブルを使用する方法 利用者定義変換テーブルで対応表を作成することにより、変換が可能です。 MDPORTインストール先フォルダの[Sample]フォルダ配下の「JEF_SJIS.cnv」に対応表を提供していますので、必要に応じて利用可能です。 他社コードについては独自に作成する必要があります。

No	対処方法
	JEF固有の拡張漢字や外字を変換する場合は、シフトJISのユーザ定義領域にコードを割り当てて対応関係を作成する必要があります。
(2)	利用者定義変換テーブルで対応表を作成してください。 例) # jef sjis 00:00 FF:FF

B.3 数値部エラー

データファイル形式の外部10進/内部10進や、CSV形式の数値属性の項目に、数値以外のデータが存在する場合は、変換時に数値部エラーが発生します。

図B.3 エラーの表示例



表B.6 データファイル形式で数値部エラーが発生するケース (ASCIIコード系での例)

属性	符号	COBOL表記	入力値(16進表記)	出力値	エラー有無
Z(外部10進)	なし	9(4)	31323334	1234	なし
			3132333A	1230	あり
	あり	S9(4)	31323344	+1234	なし
			3132334A	+1230	あり
P(内部10進)	なし	9(4) COMP-3	01234F	1234	なし
			012B4F	0	あり
	あり	S9(4) COMP-3	01234D	-1234	なし
			012B4D	-0	あり

表B.7 CSV形式で数値部エラーが発生するケース

属性	符号	COBOL表記	入力値	出力値	エラー有無
V(数値)	なし	9(4)	1234	1234	なし
			ABCD	0	あり
	あり	S9(4)	-1234	-1234	なし
			\$1234	+1234	あり

表B.8 対処方法

対処方法
数値として正しいデータを指定してください。

 参考

外部10進のゾーンビットに不正なデータが存在する場合も、レイアウト定義の項目定義で、拡張設定の[入力チェックを行う]をオンにした項目については、上記の数値部エラーが発生します。

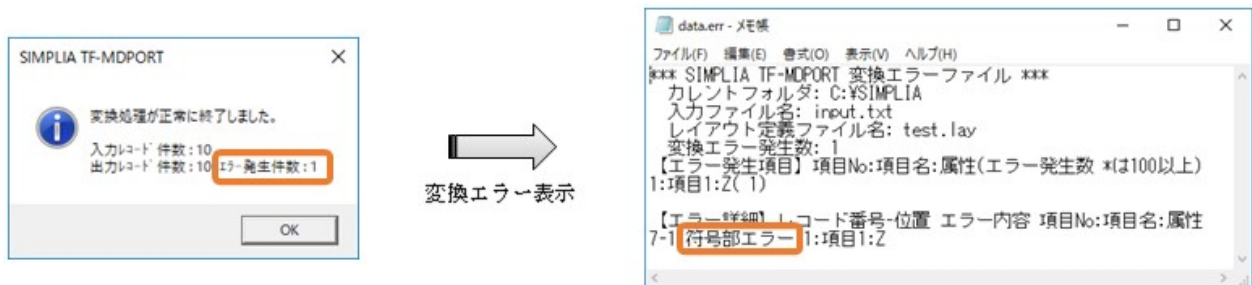
- ・ エラーとなる入力データ例: 0xA1F2F3 (EBCDICコードとしては0xF1F2F3が正しいデータ)

B.4 符号部エラー

データファイル形式の外部10進/内部10進の項目について、符号部に不正なデータが存在する場合、符号部チェックを行うと、変換時に符号部エラーが発生します。

符号部チェックを行う場合は、レイアウト定義の項目定義で、拡張設定の[入力チェックを行う]をオンにする必要があります。

図B.4 エラーの表示例



表B.9 符号部エラーが発生するケース (ASCIIコード系での例)

属性	符号	COBOL表記	入力値(16進表記)	出力値	エラー有無
Z(外部10進)	あり	S9(4)	31323344	+1234	なし
			31323354	-1234	なし
			31323334	+1234	あり(符号部が4、5以外はエラー)
			313233C4	+1234	あり(符号部が4、5以外はエラー)
P(内部10進)	あり	S9(4) COMP-3	01234C	+1234	なし
			01234D	-1234	なし
			01234F	+1234	あり(符号部がC、D以外はエラー)
			012344	+1234	あり(符号部がC、D以外はエラー)

表B.10 対処方法

対処方法
符号部に正しいデータを指定してください。

 **参照**

外部10進におけるEBCDICコード系とASCIIコード系の相違

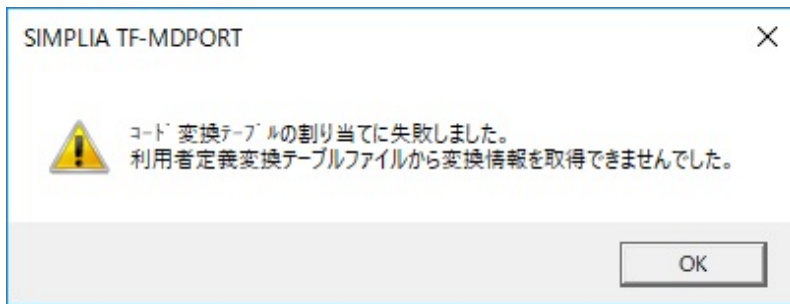
EBCDICコード系とASCIIコード系では、外部10進の数値データ属性において、符号部の内部表現が異なります(内部10進では相違はありません)。

詳しくは、「第5章 変換仕様」の「5.3 数値の変換」を参照してください。

B.5 利用者定義変換テーブルに関するエラー

利用者定義変換テーブルを利用する際、変換時にコード変換テーブル(利用者定義変換テーブル)の割り当てに失敗する場合があります。

図B.5 エラーの表示例



表B.11 コード変換テーブルの割り当てに失敗するケースと対処方法

原因	対処方法
指定した利用者定義変換テーブルが存在しない場合、エラーとなります。	「MDPORT変換指示ウィザード 5/5」の[利用者定義変換テーブル]で指定した場所に、利用者定義変換テーブルを格納してください。
利用者定義変換テーブルの書式の誤りにより、エラーとなる場合があります。	正しい書式で定義してください。
利用者定義変換テーブルに定義されているコード情報の誤りにより、エラーとなる場合があります。	コード系毎に指定できないコード範囲があります。 指定できないコード範囲に該当する定義がある場合は、定義を削除、またはコード値を変更してください。

 **参照**

- ・ 利用者定義変換テーブルの書式については、付録Aの「A.1 利用者定義変換テーブルの書式」を参照してください。
- ・ 利用者定義変換テーブルの指定できないコード範囲については、付録Aの「A.3 指定できないコード範囲」を参照してください。

B.6 マスク機能に関するエラー

マスク機能を利用する際、変換時に続行不可能なエラーが発生する場合があります。

図B.6 エラーの表示例



表B.12 続行不可能なエラーが発生するケースと対処方法

原因	対処方法
マスク指定した項目名に対応したマスクデータファイルが存在しない場合、エラーとなります。	MDPORTのインストール先フォルダ配下に、マスク指定した項目名に対応したマスクデータファイル(項目名.csv)を格納してください。
マスクデータファイルの1行目に、マスク指定した項目名が存在しない場合、エラーとなります。	マスクデータファイルの1行目に、マスク指定した項目名を入力してください。

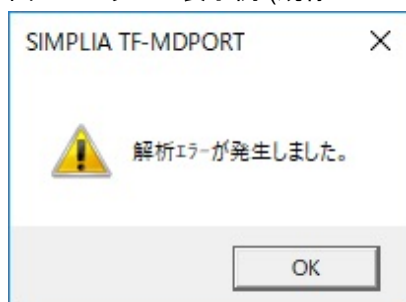
参照

マスク機能の利用方法については、「第3章 操作説明」の「3.2.5 マスク処理」を参照してください。

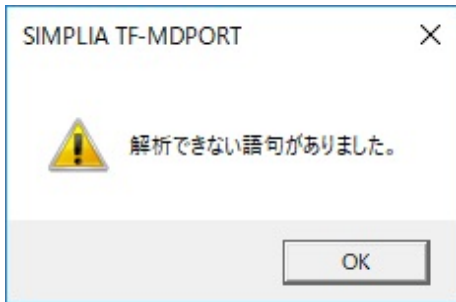
B.7 既存資産取り込み時のエラー

既存資産の取り込みを行う際、取り込み時に解析エラーが発生する場合があります。

図B.7 エラーの表示例 (既存COBOL資産)



図B.8 エラーの表示例 (既存C言語資産)



表B.13 解析エラーが発生するケースと対処方法

原因	対処方法
既存資産内に解析不能な構文がある場合、正しく解析できません。	既存資産の内容を確認し、必要に応じて、内容を修正してください。
資産解析オプションの設定と既存資産の内容相違によって、正しく解析できない場合があります。 例えば、レイアウト定義画面の[設定]メニューの[COBOL解析オプション]画面で、[正書法の種類]の“可変長”を選択した状態で、固定長書式の既存COBOL資産の取り込みを行うと、正しく解析できません。	取り込む既存資産の内容に合わせて、資産解析オプションを設定してください。
COBOL資産で仮原文(括弧等)を含む場合、REPLACING句の指定を行わないと、正しく解析できません。	COBOL資産で仮原文(括弧等)が指定されている場合は、レイアウト定義画面の[設定]メニューの[COBOL解析オプション]画面で、[COPY文への付加文字列を指定する]のチェックをオンにして、[文字列]欄にCOPY文への付加文字列を指定します。 指定例) REPLACING ==() == BY ==AA==

参照

.....

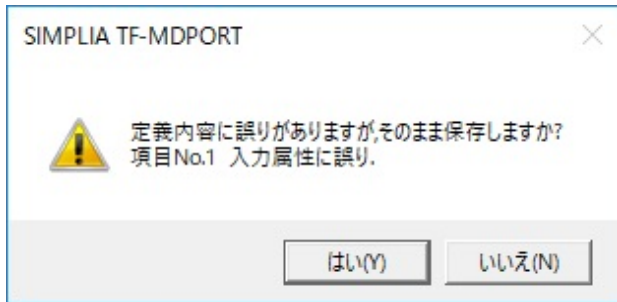
既存資産の取り込み方法および取り込み時にエラーが発生した場合の対応については、「第3章 操作説明」の「3.3.3 既存資産の取り込み」を参照してください。

.....

B.8 レイアウト定義内容の誤り

レイアウト定義ファイルを保存する際、「定義内容に誤りがありますが、そのまま保存しますか？」という警告メッセージが表示される場合があります。

図B.9 警告メッセージの表示例



表B.14 警告メッセージが表示されるケースと対処方法

原因	対処方法
レイアウト定義の内容に誤りがあります。 具体的にどの項目がどのように誤っているかは定義内容によって異なるため、警告メッセージの内容を確認してください。	警告メッセージに表示されている項目について、定義内容を修正してください。 項目定義の編集は、入力誤りを防ぐため、直接入力よりも、項目定義テンプレートによる編集方法がお勧めです。 必要に応じて、レイアウト定義画面の[編集]メニューの[一括設定]の機能を利用してください(一括設定メニューには、相対位置の振り直し等、入力の負担を軽減する機能があります)。
	既存資産がある場合は、既存資産の取り込みによってレイアウト定義ファイルを作成することができます。 設定ミスを防ぐため、既存資産の取り込みの利用をお勧めします。

例

- 「項目No.1 入力属性に誤り。」という警告メッセージが出た場合
項目番号:1の項目について、以下の可能性が考えられます。
 - 入力側の属性が未入力
 - 入力側の属性に不正な指定がされている
 - マルチレイアウト作成時に、空のレイアウトがある(1つのレイアウト定義ファイル内に複数のレイアウトが存在する場合、すべてのレイアウトについて定義内容のチェックが行われますので注意してください)
- 「項目No.3 階層に誤り。」という警告メッセージが出た場合
項目番号:3の項目について、以下の可能性が考えられます。
 - 階層が0から始まっていない
 - 階層が連番になっていない(例えば、階層0の次に階層2を指定している)
 - 階層に8以上が指定されている

注意

警告メッセージを無視して保存したレイアウト定義を、文字コード・ファイル形式変換で使用することはできません。レイアウト定義内容の誤りを解消してから、文字コード・ファイル形式変換を行ってください。

付録C 使用例

MDPORTの使用例について説明します。

注意

MDPORTは一切の通信機能を持っていないため、汎用機やUNIX機上のファイルを扱うには、利用者がファイル転送機能等を利用して、Windows上に持ち込んでくる必要があります。

C.1 文字コード・ファイル形式変換

適用パターンを挙げて、文字コード・ファイル形式変換の使用例を説明します。

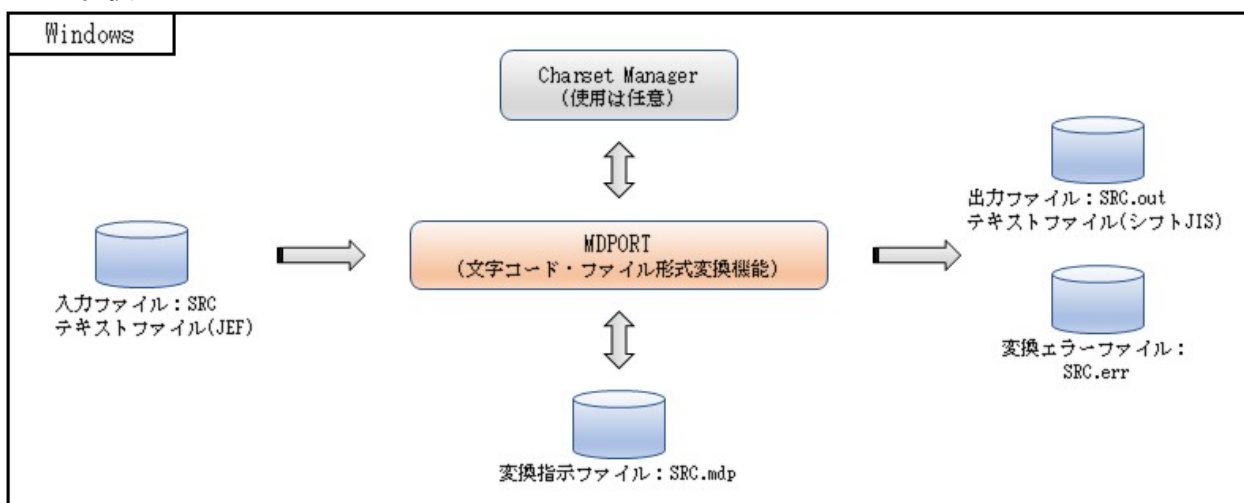
- ・ 汎用機上の一般ソースからのテキスト変換
- ・ データファイルからWindows上のCOBOLファイルへの変換
- ・ データファイルからRDBローダ型(CSV)ファイルへの変換
- ・ RDBローダ型(CSV)ファイルからデータファイルへの変換
- ・ 他社汎用機上のデータファイルからRDBローダ型(CSV)ファイルへの変換

C.1.1 汎用機上の一般ソースからのテキスト変換

要件

EBCDICおよびJEFコードで記述されている固定長80バイトの一般ソースを、Windows上のテキストファイルへ変換します。

図C.1 変換のイメージ図



実行例

MDPORT変換指示ウィザードで、「表C.1 MDPORT変換指示ウィザードの指定例」の内容を指定して、変換実行を行います。

表C.1 MDPORト変換指示ウィザードの指定例

MDPORT変換指示ウィザード	項目名	指定内容(例)
基本情報 (1ページ目)	ファイル変換モード	テキスト変換
入力ファイル情報 (3ページ目)	コード体系	JEF
	ファイル名	SRC
	レコード属性	固定長
	レコード長	80
出力ファイル情報 (4ページ目)	コード体系	シフトJIS
	ファイル名	SRC.out
	レコード属性	可変長
	レコードの区切り	改行コード(CR+LF)
変換仕様/エラー情報 (5ページ目)	Charset Managerを使用する	チェックボックスをオン(Charset Managerを使用する場合)
	変換エラーファイル名	SRC.err

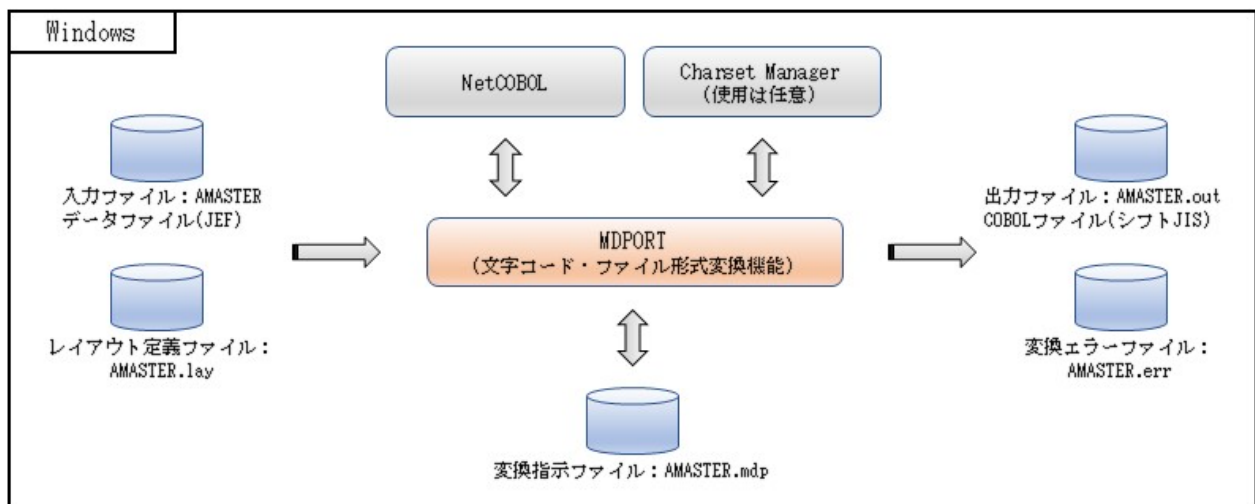
MDPORT変換指示ウィザードでの指定内容は、[変換指示ファイル](#)(SRC.mdp)として保存できます。

C.1.2 データファイルからWindows上のCOBOLファイルへの変換

要件

EBCDICおよびJEFコードで構成される固定長順編成ファイルを、Windows上のCOBOLレコード順ファイル(シフトJIS)へ変換します。

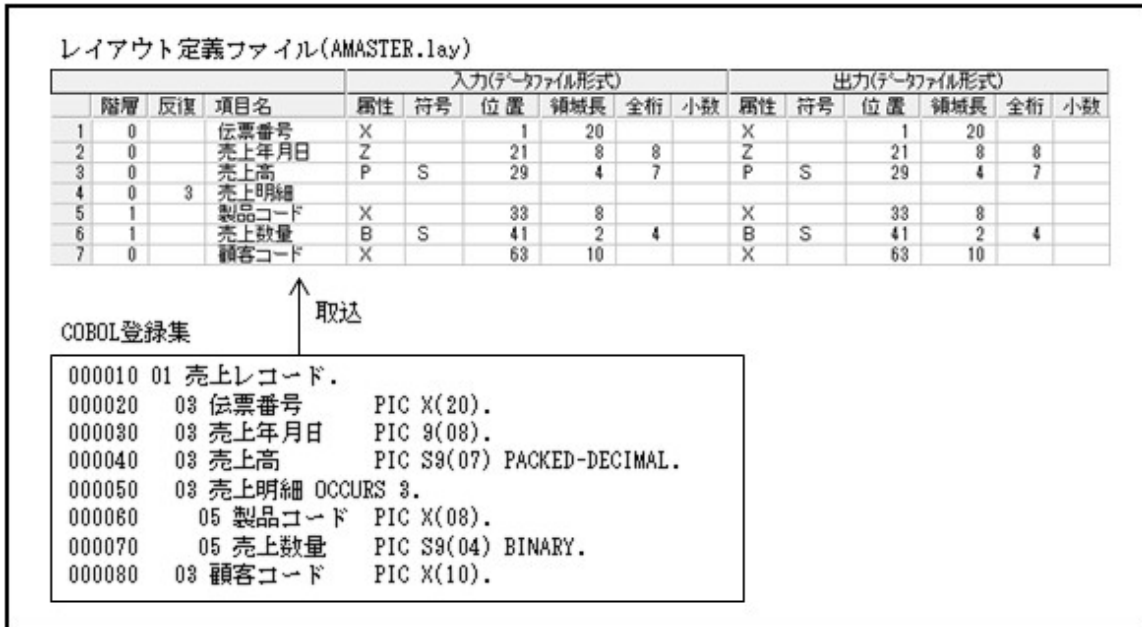
図C.2 変換のイメージ図



実行例

入力ファイルおよび出力ファイルに対するレイアウト定義を作成します。

図C.3 レイアウト定義のイメージ図



MDPORT変換指示ウィザードで、「表C.2 MDPORT変換指示ウィザードの指定例」の内容を指定して、変換実行を行います。

表C.2 MDPORT変換指示ウィザードの指定例

MDPORT変換指示ウィザード	項目名	指定内容(例)
基本情報 (1ページ目)	ファイル変換モード	データファイル変換
レイアウト定義情報 (2ページ目)	レイアウト定義ファイル名	AMASTER.lay
入力ファイル情報 (3ページ目)	コード体系	JEF
	ファイル名	AMASTER
	ファイル形式	一般ファイル
	レコード属性	固定長
	レコード長	72
出力ファイル情報 (4ページ目)	コード体系	シフトJIS
	ファイル名	AMASTER.out
	ファイル形式	COBOL85順ファイル
	レコード属性	固定長
	レコード長	72
変換仕様/エラー情報 (5ページ目)	Charset Managerを使用する	チェックボックスをオン(Charset Managerを使用する場合)
	変換エラーファイル名	AMASTER.err

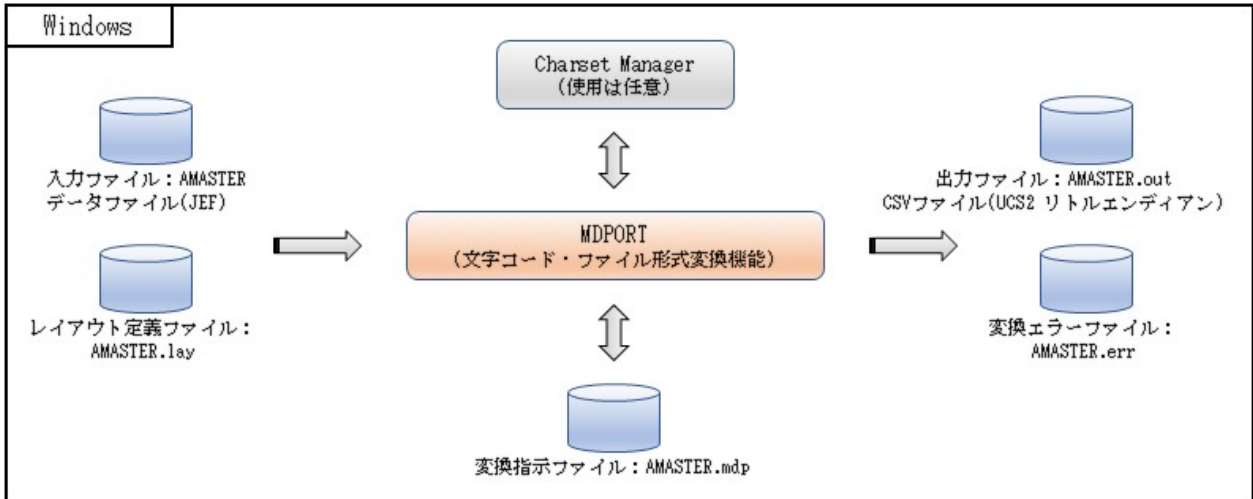
MDPORT変換指示ウィザードでの指定内容は、変換指示ファイル(AMASTER.mdp)として保存できます。

C.1.3 データファイルからRDBロード型(CSV)ファイルへの変換

要件

EBCDICおよびJEFコードで構成される固定長順編成ファイルを、Windows上のSymfowareローダ型(CSV)ファイル(UCS2リトルエンディアン)へ変換します。

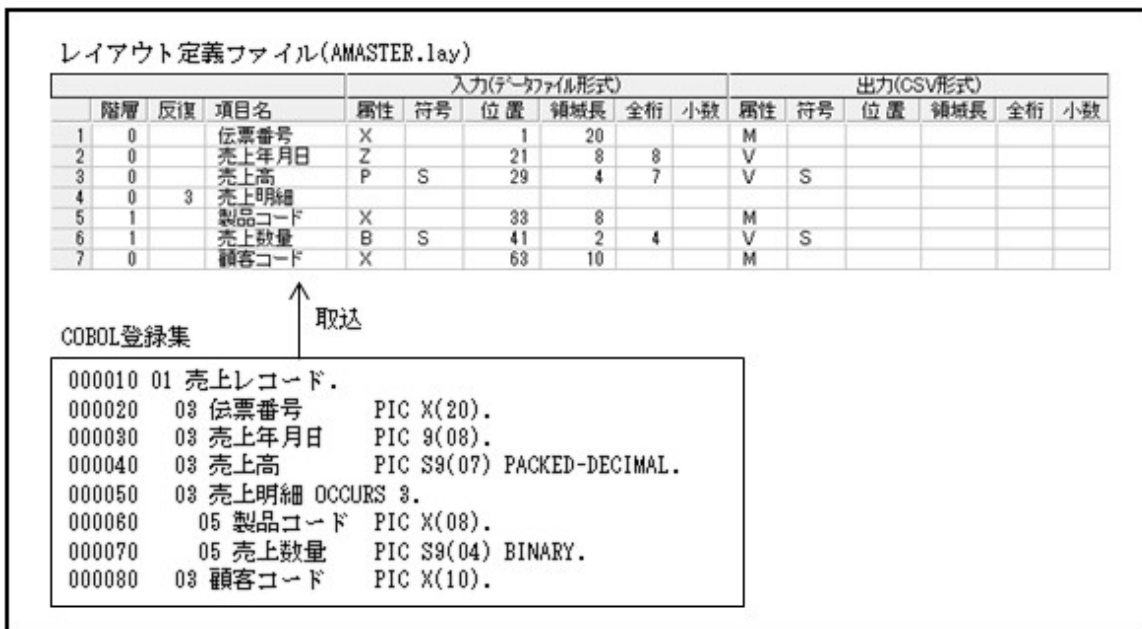
図C.4 変換のイメージ図



実行例

入力ファイルおよび出力ファイルに対するレイアウト定義を作成します。

図C.5 レイアウト定義のイメージ図



MDPORT変換指示ウィザードで、「表C.3 MDPORT変換指示ウィザードの指定例」の内容を指定して、変換実行を行います。

表C.3 MDPORT変換指示ウィザードの指定例

MDPORT変換指示ウィザード	項目名	指定内容(例)
基本情報 (1ページ目)	ファイル変換モード	データファイル変換
レイアウト定義情報 (2ページ目)	レイアウト定義ファイル名	AMASTER.lay
入力ファイル情報 (3ページ目)	コード体系	JEF
	ファイル名	AMASTER
	ファイル形式	一般ファイル
	レコード属性	固定長
	レコード長	72
出力ファイル情報 (4ページ目)	コード体系	Unicode
	ファイル名	AMASTER.out
	CSV形式の詳細	[参考設定]ボタンの「(3) Symfoware」を選択
	(Unicodeの詳細) 種別	UCS2
	(Unicodeの詳細) エンディアン	Little
	(Unicodeの詳細) シグネチャを省略する	チェックボックスをオン
	レコード属性	可変長
	レコードの区切り	改行コード(CR+LF)
変換仕様/エラー情報 (5ページ目)	Charset Managerを使用する	チェックボックスをオン(Charset Managerを使用する場合)
	変換エラーファイル名	AMASTER.err

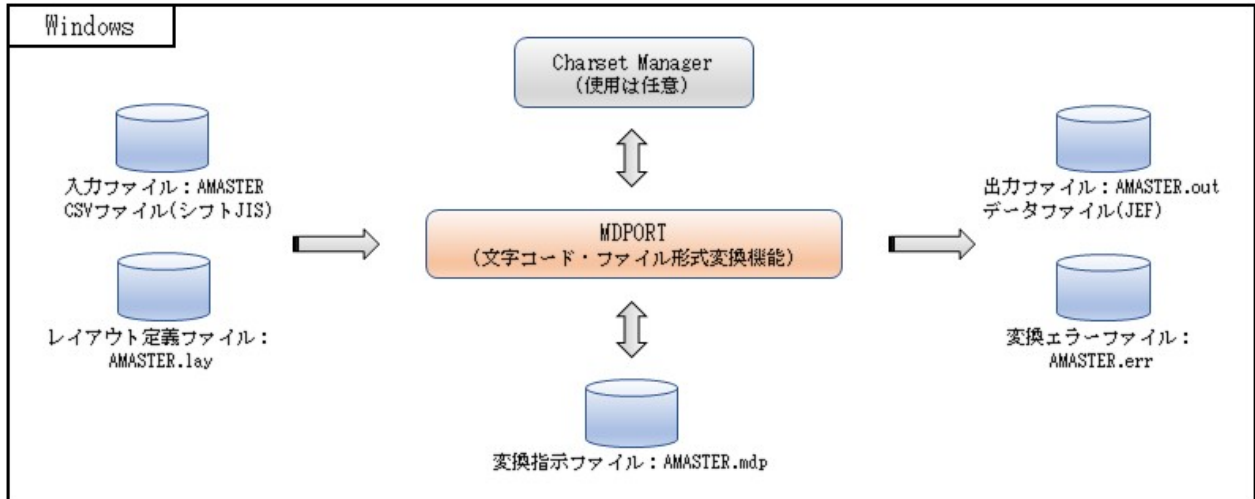
MDPORT変換指示ウィザードでの指定内容は、[変換指示ファイル](#)(AMASTER.mdp)として保存できます。

C.1.4 RDBローダ型(CSV)ファイルからデータファイルへの変換

要件

Windows上のRDBローダ型(CSV)ファイル(シフトJIS)を、EBCDICおよびJEFコードで構成される固定長のデータファイルへ変換します。

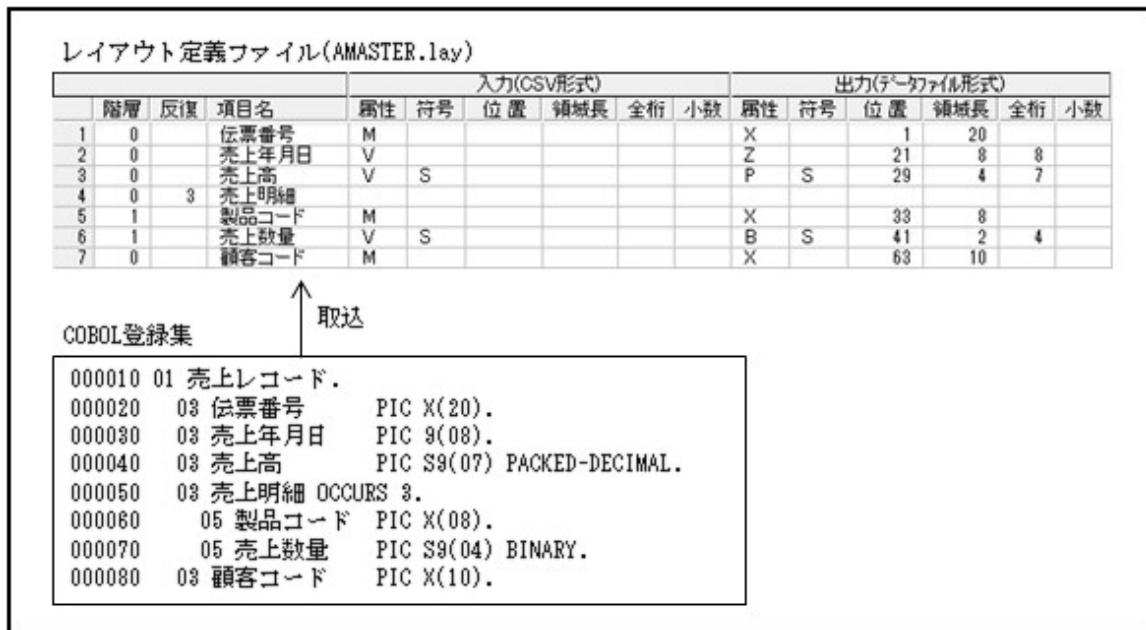
図C.6 変換のイメージ図



実行例

入力ファイルおよび出力ファイルに対するレイアウト定義を作成します。

図C.7 レイアウト定義のイメージ図



MDPORT変換指示ウィザードで、「表C.4 MDPOR変換指示ウィザードの指定例」の内容を指定して、変換実行を行います。

表C.4 MDPOR変換指示ウィザードの指定例

MDPORT変換指示ウィザード	項目名	指定内容(例)
基本情報 (1ページ目)	ファイル変換モード	データファイル変換
レイアウト定義情報 (2ページ目)	レイアウト定義ファイル名	AMASTER.lay
入力ファイル情報 (3ページ目)	コード体系	シフトJIS

MDPORT変換指示ウィザード	項目名	指定内容(例)
	ファイル名	AMASTER
	CSV形式の詳細	入力とするRDBローダ型ファイルの形式を指定
	レコード属性	可変長
	レコードの区切り	改行コード(CR+LF)
出力ファイル情報 (4ページ目)	コード体系	JEF
	ファイル名	AMASTER.out
	ファイル形式	一般ファイル
	レコード属性	固定長
	レコード長	72
変換仕様/エラー情報 (5ページ目)	Charset Managerを使用する	チェックボックスをオン(Charset Managerを使用する場合)
	変換エラーファイル名	AMASTER.err

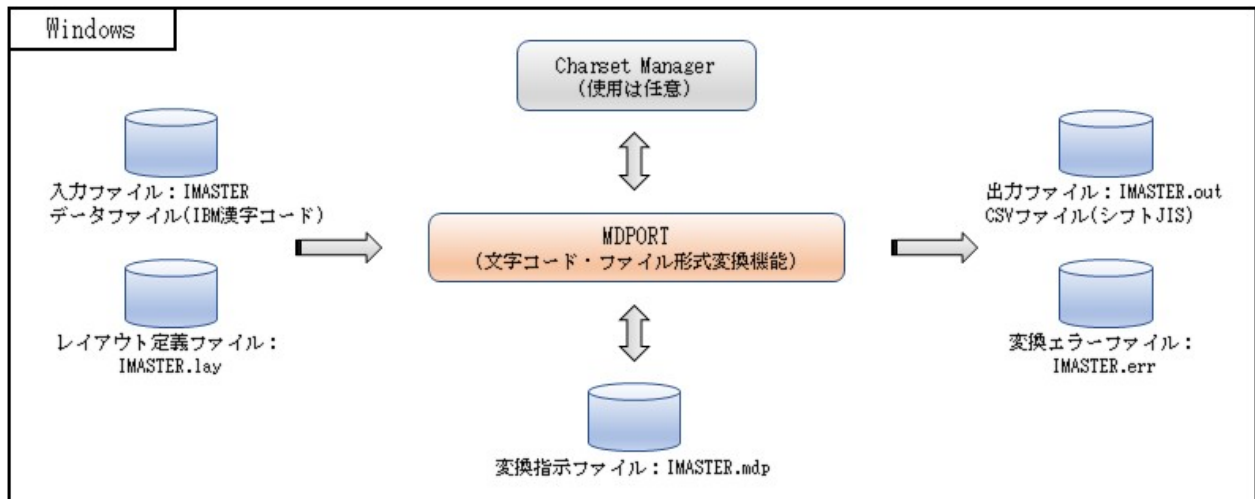
MDPORT変換指示ウィザードでの指定内容は、[変換指示ファイル](#)(AMASTER.mdp)として保存できます。

C.1.5 他社汎用機上のデータファイルからRDBローダ型(CSV)ファイルへの変換

要件

IBM漢字コードの固定長データファイルを、Microsoft(R) Excel が標準サポートするCSV形式へ変換します。

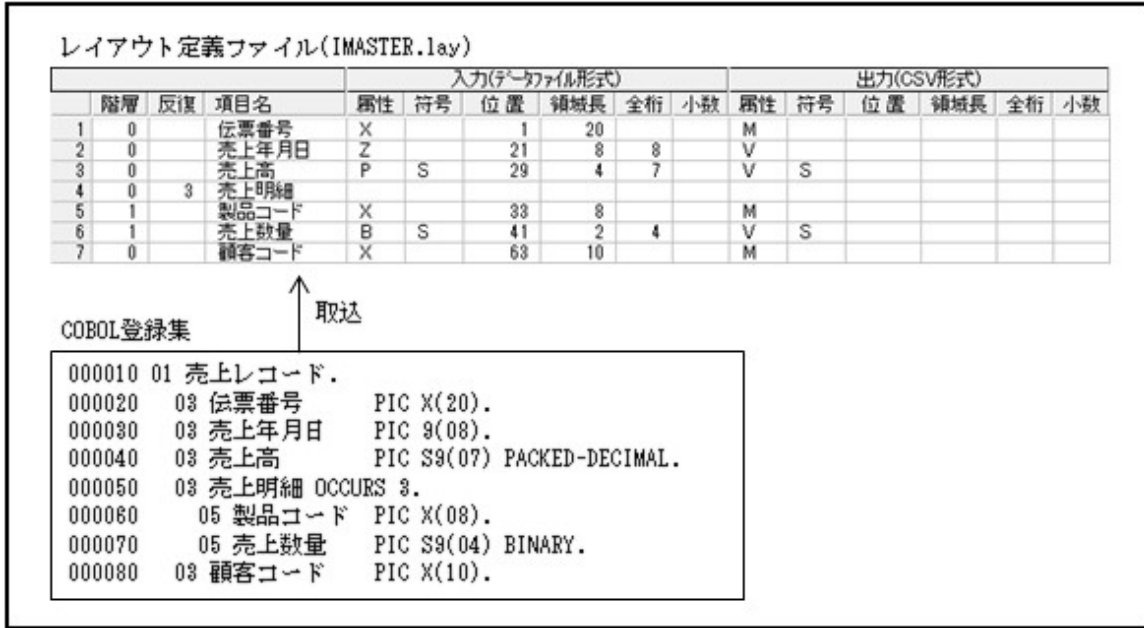
図C.8 変換のイメージ図



実行例

入力ファイルおよび出力ファイルに対するレイアウト定義を作成します。

図C.9 レイアウト定義のイメージ図



MDPORT変換指示ウィザードで、「表C.5 MDPORT変換指示ウィザードの指定例」の内容を指定して、変換実行を行います。

表C.5 MDPORT変換指示ウィザードの指定例

MDPORT変換指示ウィザード	項目名	指定内容(例)
基本情報 (1ページ目)	ファイル変換モード	データファイル変換
レイアウト定義情報 (2ページ目)	レイアウト定義ファイル名	IMASTER.lay
入力ファイル情報 (3ページ目)	コード体系	その他
	コードID	IBM
	ファイル名	IMASTER
	レコード属性	固定長
	レコード長	72
出力ファイル情報 (4ページ目)	コード体系	シフトJIS
	ファイル名	IMASTER.out
	CSV形式の詳細	[参考設定]ボタンの「(5) Excel」を選択
	レコード属性	可変長
	レコードの区切り	改行コード(CR+LF)
変換仕様/エラー情報 (5ページ目)	Charset Managerを使用する	チェックボックスをオン(Charset Managerを使用する場合)
	変換エラーファイル名	IMASTER.err

MDPORT変換指示ウィザードでの指定内容は、[変換指示ファイル\(IMASTER.md\)](#)として保存できます。

C.2 データ加工

加工処理の種類毎に、データ加工の使用例を説明します。

- ・ 項目移動
- ・ 項目追加、削除
- ・ 形式変換
- ・ マスク機能
- ・ JOIN
- ・ 追加結合
- ・ コピー句生成(項目結合)
- ・ コピー句生成(項目分割)

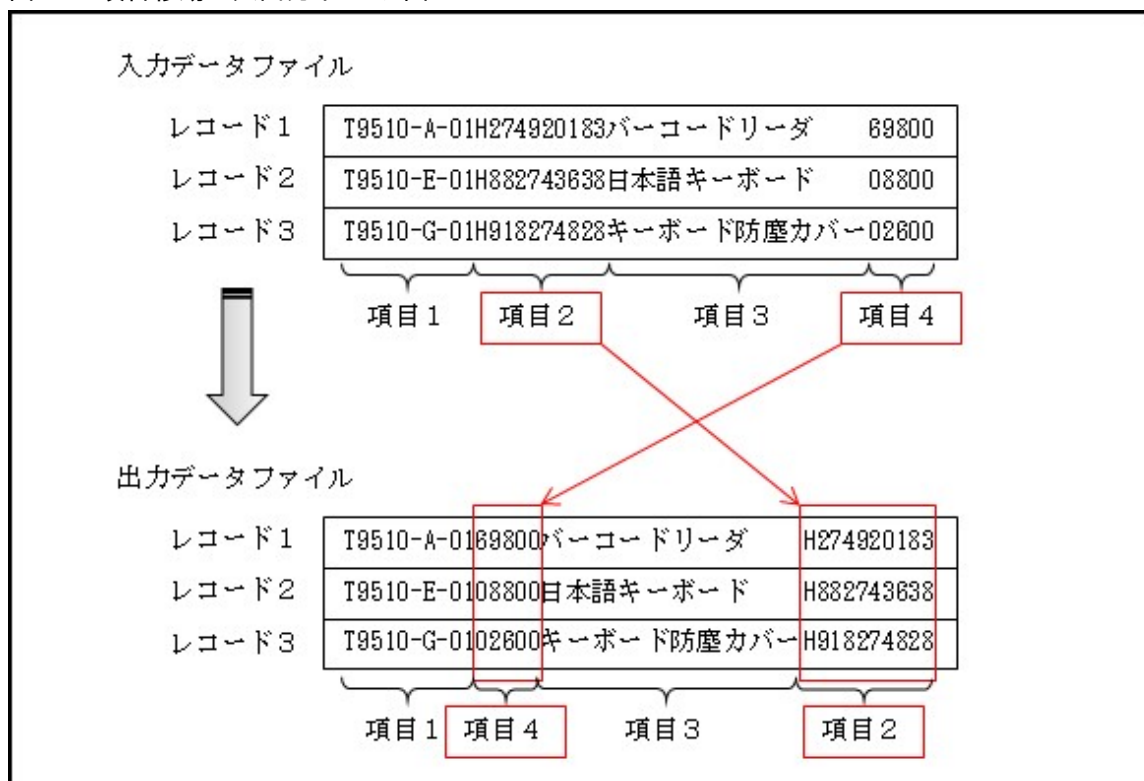
C.2.1 項目移動

要件

項目の順番を並び替えます。

ここでは、項目2と項目4の順番を入れ替えて出力します。

図C.10 項目移動の入出カイメージ図



実行例

「項目移動」の加工指示メニューから、「[図C.11 入出力情報の設定](#)」および「[図C.12 項目移動の設定](#)」をして、加工処理を実行します。

図C.11 入出力情報の設定

入出力情報設定 (データ加工: 項目移動)

レイアウト定義ファイルの設定

レイアウト定義ファイル名(L): C:\MDPORT\input.lay 参照(R)...

新規にレイアウト定義ファイルを生成する場合: レイアウト定義ファイル生成(C)...

レイアウト定義のレコード長:

入力データファイルの設定

ファイル名(M): C:\MDPORT\input.dat 参照(S)...

出力ファイルの設定

ファイル名(N): C:\MDPORT\output.dat 参照(T)...

加工後コピー句名(O): C:\MDPORT\output.cob 参照(U)...

OK キャンセル ヘルプ

図C.12 項目移動の設定

項目移動

レイアウト定義ファイル名: C:\MDPORT\input.lay

入力項目一覧(移動前)

項目名	属性
項目1	X(10)
項目2	X(10)
項目3	N(10)
項目4	Z(5.0)

出力項目一覧(移動後)

項目名	属性
項目4	Z(5.0)
項目3	N(10)
項目2	X(10)
--- 最下位行 ---	

上移動↑(U)

下移動↓(D)

OK キャンセル ヘルプ

設定した内容は、[加工指示ファイル](#)として保存できます。



参照

項目移動の操作手順については、「第3章 操作説明」の「3.4.3 項目移動」を参照してください。

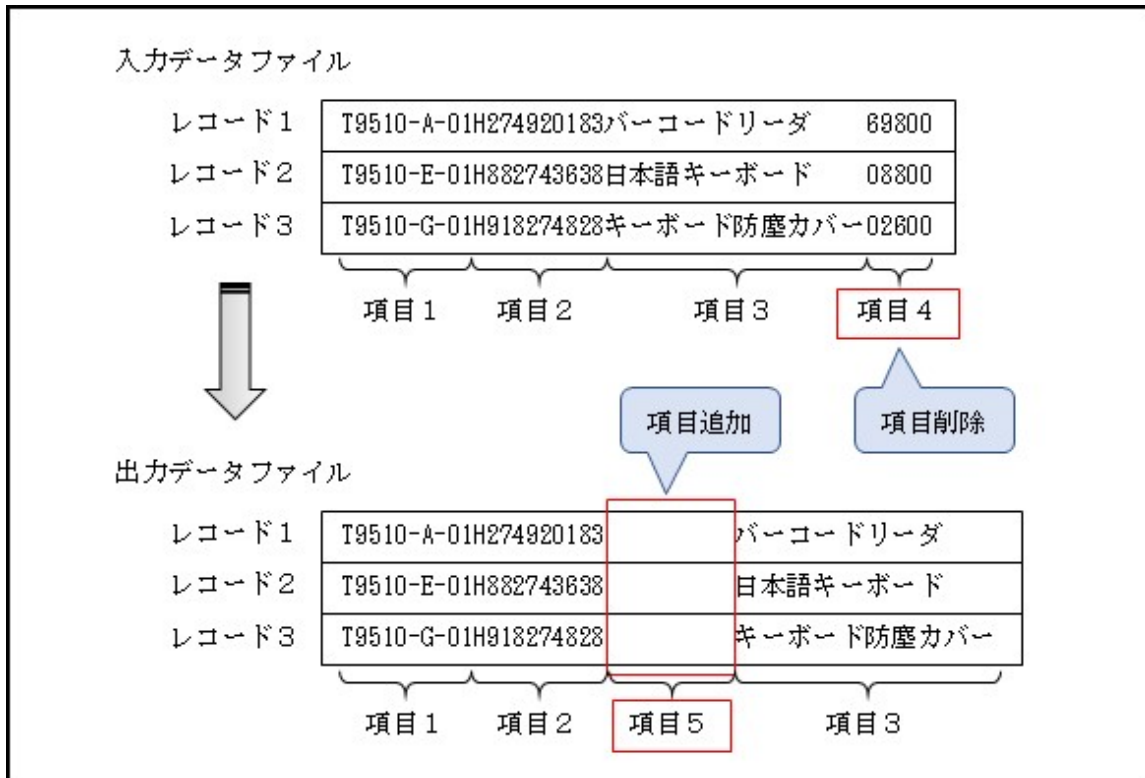
C.2.2 項目追加、削除

要件

項目の追加、削除を行います。

ここでは、項目2と項目3の間に項目5を追加し、項目4を削除して出力します。

図C.13 項目追加、削除の入出力イメージ図



実行例

「項目追加、削除」の加工指示メニューから、「図C.14 入出力情報の設定」および「図C.15 項目追加、削除の設定」をして、加工処理を実行します。

図C.14 入出力情報の設定

入出力情報設定 (データ加工：項目追加、削除) ×

レイアウト定義ファイルの設定

レイアウト定義ファイル名(L) : 参照(R)...

新規にレイアウト定義ファイルを生成する場合 : レイアウト定義ファイル生成(O)...

レイアウト定義のレコード長 :

入力データファイルの設定

ファイル名(M) : 参照(S)...

出力ファイルの設定

ファイル名(N) : 参照(T)...

加工後コピー名(O) : 参照(U)...

図C.15 項目追加、削除の設定

項目追加、削除 ×

レイアウト定義ファイル名 : C:\MDPORT\input.lay

項目の新規追加

項目名(N) : 追加(A)

属性(T) : 領域長(E) :

符号(S) : 全体桁数(Z) : 小数部桁数(V) :

項目一覧(L)

状態	項目名	属性
	項目1	X(10)
	項目2	X(10)
追加	項目5	T Z(8,2)
	項目3	N(10)
削除	項目4	-
	--- 最下位行 ---	

設定した内容は、加工指示ファイルとして保存できます。



参照

項目追加、削除の操作手順については、「第3章 操作説明」の「3.4.4 項目追加、削除」を参照してください。

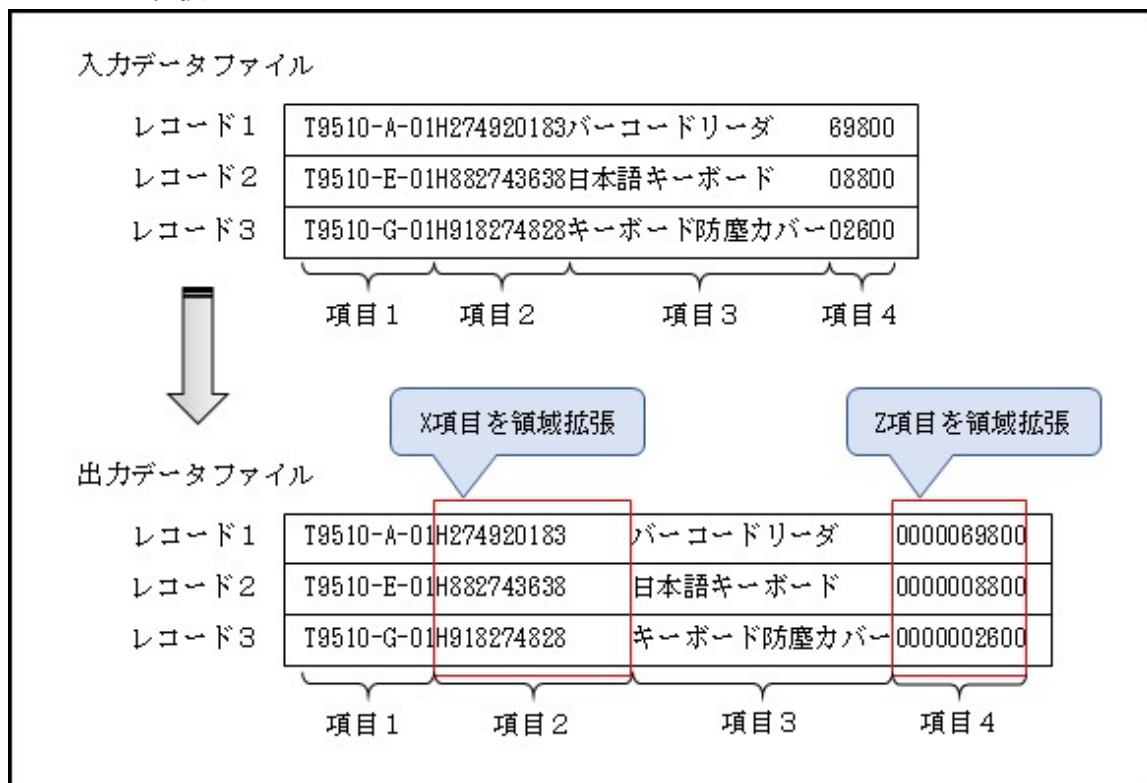
C.2.3 形式変換

要件

項目の領域拡張を行います。

ここでは、項目2と項目4の領域を拡張して出力します。

図C.16 形式変換の入出力イメージ図



実行例

「形式変換」の加工指示メニューから、「図C.17 入出力情報の設定」および「図C.18 形式変換の設定」をして、加工処理を実行します。

図C.17 入出力情報の設定

入出力情報設定 (データ加工：形式変換)

レイアウト定義ファイルの設定

レイアウト定義ファイル名(L) : C:\MDPORT\input.lay 参照(R)...

新規にレイアウト定義ファイルを生成する場合 : レイアウト定義ファイル生成(C)...

レイアウト定義のレコード長 :

入力データファイルの設定

ファイル名(M) : C:\MDPORT\input.dat 参照(S)...

出力ファイルの設定

ファイル名(N) : C:\MDPORT\output.dat 参照(T)...

加工後コピー句名(O) : C:\MDPORT\output.cob 参照(U)...

OK キャンセル ヘルプ

図C.18 形式変換の設定

形式変換

レイアウト定義ファイル名 : C:\MDPORT\input.lay

形式変換項目

項目名(N) : 項目4

旧属性

属性 : Z

領域長 : 5

数値属性

符号 :

全体桁数 : 5

小数部桁数 : 0

新属性

属性 : Z

領域長(E) :

数値属性

符号 :

全体桁数(Z) :

小数部桁数(W) :

数値 → 文字変換(C)

形式変換対象項目一覧(L)

項目名	旧属性	新属性
項目2	X(10)	X(15)
項目4	Z(5.0)	Z(10.0)

追加(A) 削除(D)

OK キャンセル ヘルプ

設定した内容は、加工指示ファイルとして保存できます。

参照

形式変換の操作手順については、「第3章 操作説明」の「3.4.5 形式変換」を参照してください。

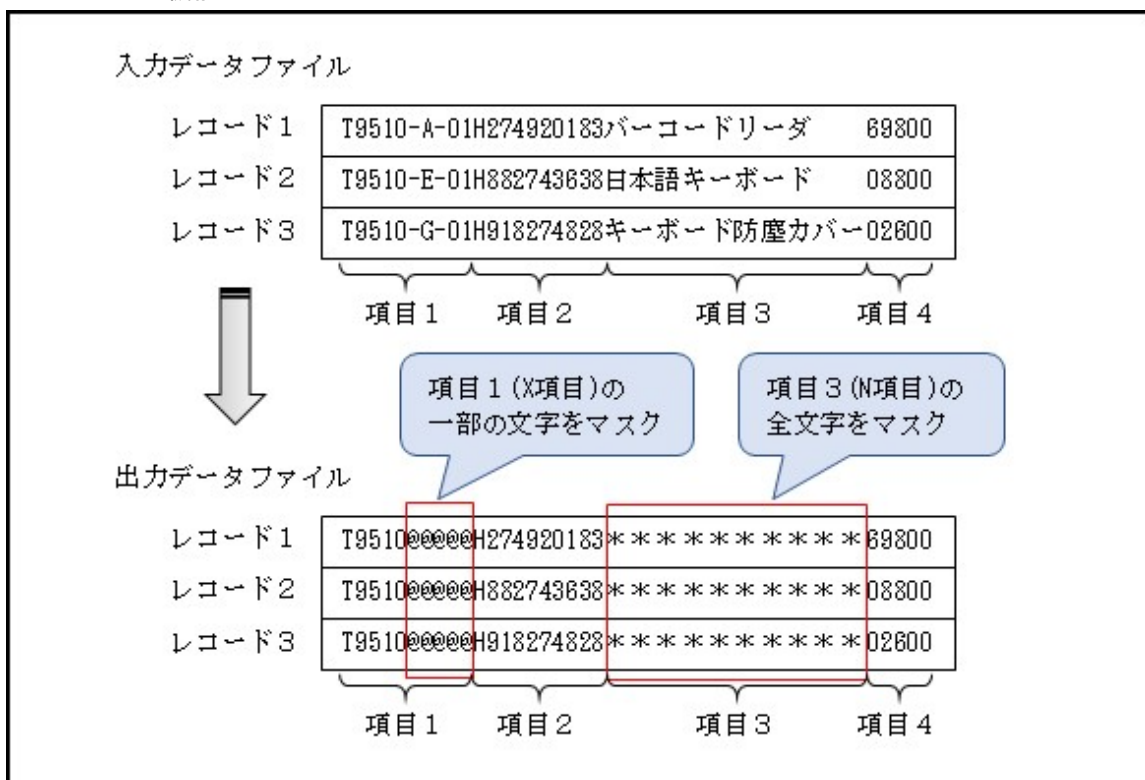
C.2.4 マスク機能

要件

データファイルのマスク処理を行います。

ここでは、項目1の一部の文字と、項目3の全文字をマスクして出力します。

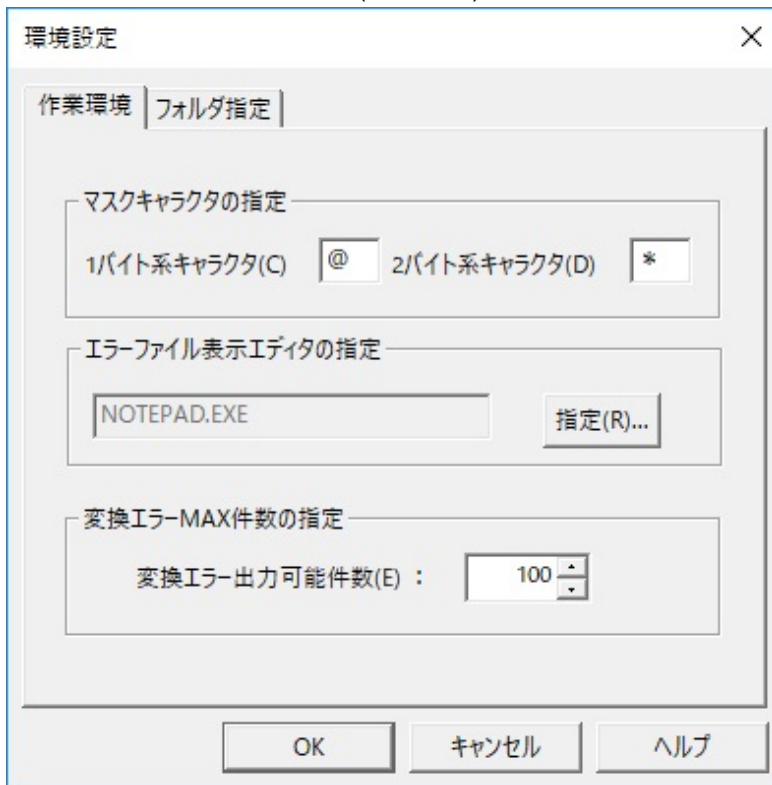
図C.19 マスク機能の入出力イメージ図



実行例

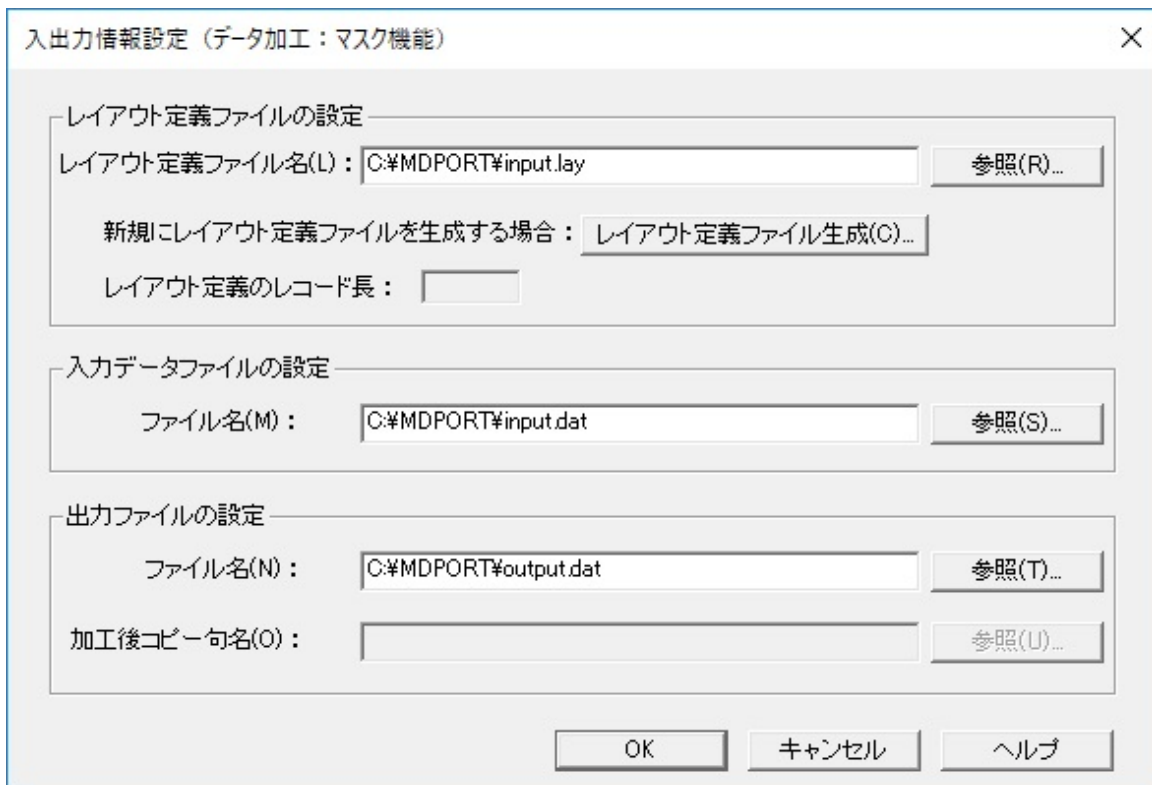
まず、データ加工機能の[環境設定]画面で、[マスクキャラクタの指定]を行います。

図C.20 マスクキャラクタの指定(環境設定)



その後、「マスク機能」の加工指示メニューから、「[図C.21 入出力情報の設定](#)」および「[図C.22 マスク機能の設定](#)」をして、加工処理を実行します。

図C.21 入出力情報の設定



図C.22 マスク機能の設定

マスク機能

レイアウト定義ファイル名： C:\MDPORT\input.lay

マスク項目

項目名(I)： 項目3 追加(A)

属性： N 領域長： 20 文字位置(M)： 1 ~ 10

マスク項目一覧(L)

項目名	属性	文字位置
項目1	X(10)	6 ~ 10
項目3	N(10)	1 ~ 10

削除(D)

OK キャンセル ヘルプ

設定した内容は、加工指示ファイルとして保存できます。

参照

マスク機能の操作手順については、「第3章 操作説明」の「3.4.6 マスク機能」を参照してください。

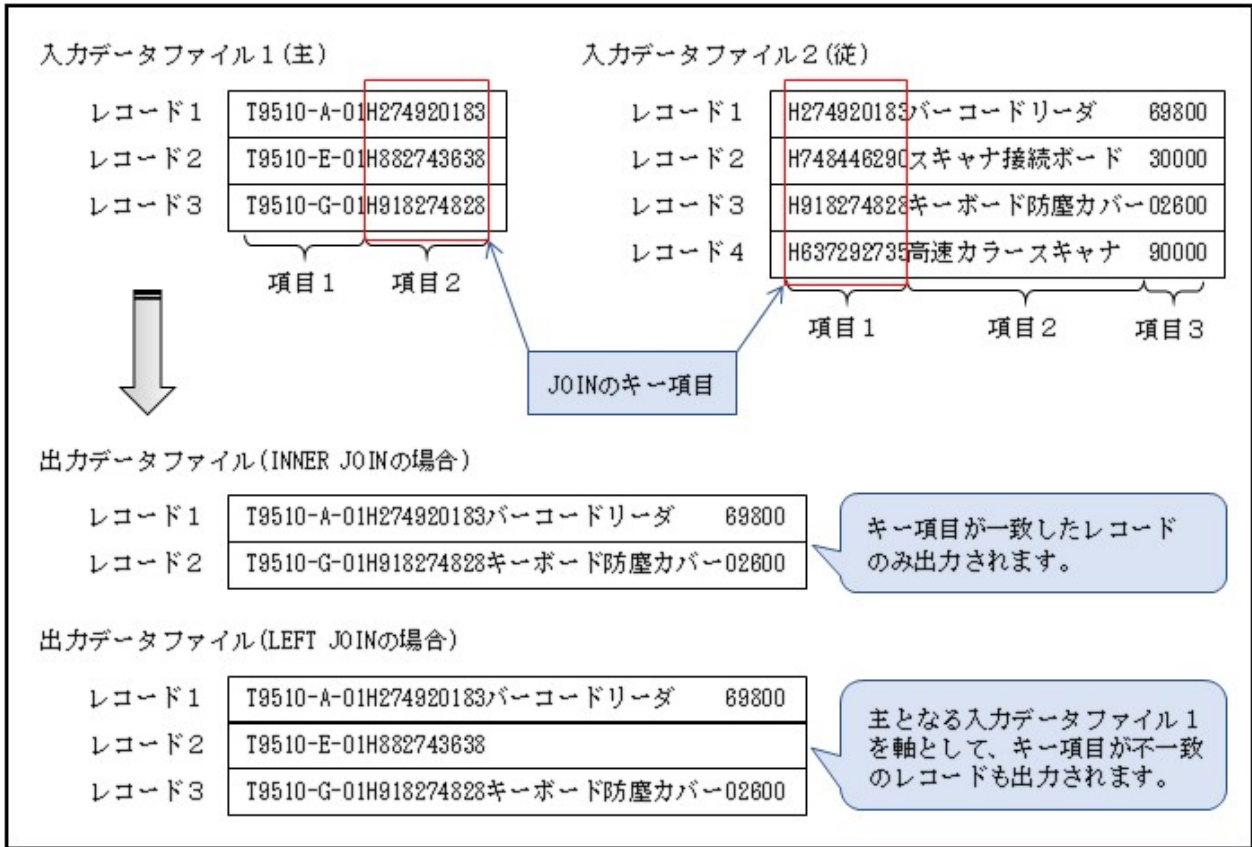
C.2.5 JOIN

要件

2つのファイルをキー項目でJOINします。

ここでは、ファイル1の項目2とファイル2の項目1でJOINして出力します。

図C.23 JOINの入出カイメージ図



実行例

「JOIN」の加工指示メニューから、「[図C.24 入出力情報の設定](#)」および「[図C.25 JOINの設定](#)」をして、加工処理を実行します。

図C.24 入出力情報の設定

入出力情報設定 (ファイル加工: JOIN) [X]

レイアウト定義ファイルの設定

レイアウト定義ファイル名1(L): 参照(R)...

新規にレイアウト定義ファイル1を生成する場合:

レイアウト定義のレコード長:

レイアウト定義ファイル名2(M): 参照(S)...

新規にレイアウト定義ファイル2を生成する場合:

レイアウト定義のレコード長:

入力データファイルの設定

ファイル名1(N): 参照(T)...

ファイル名2(O): 参照(U)...

出力ファイルの設定

ファイル名(P): 参照(V)...

加工後コピー句名(Q): 参照(W)...

OK キャンセル ヘルプ

図C.25 JOINの設定

備考) 結合方式(INNER JOIN または LEFT JOIN)は、この画面で選択します。

設定した内容は、加工指示ファイルとして保存できます。

参照

JOINの操作手順については、「第3章 操作説明」の「3.4.7 JOIN」を参照してください。

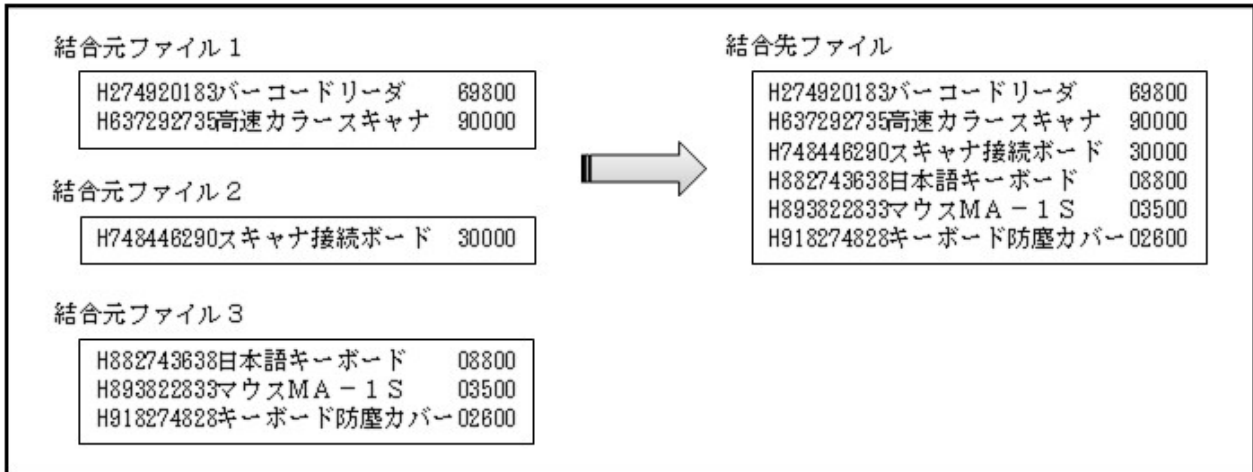
C.2.6 追加結合

要件

複数のデータファイルをそのまま結合します。

ここでは、3つの結合元ファイルを結合して、結合先ファイルを出力します。

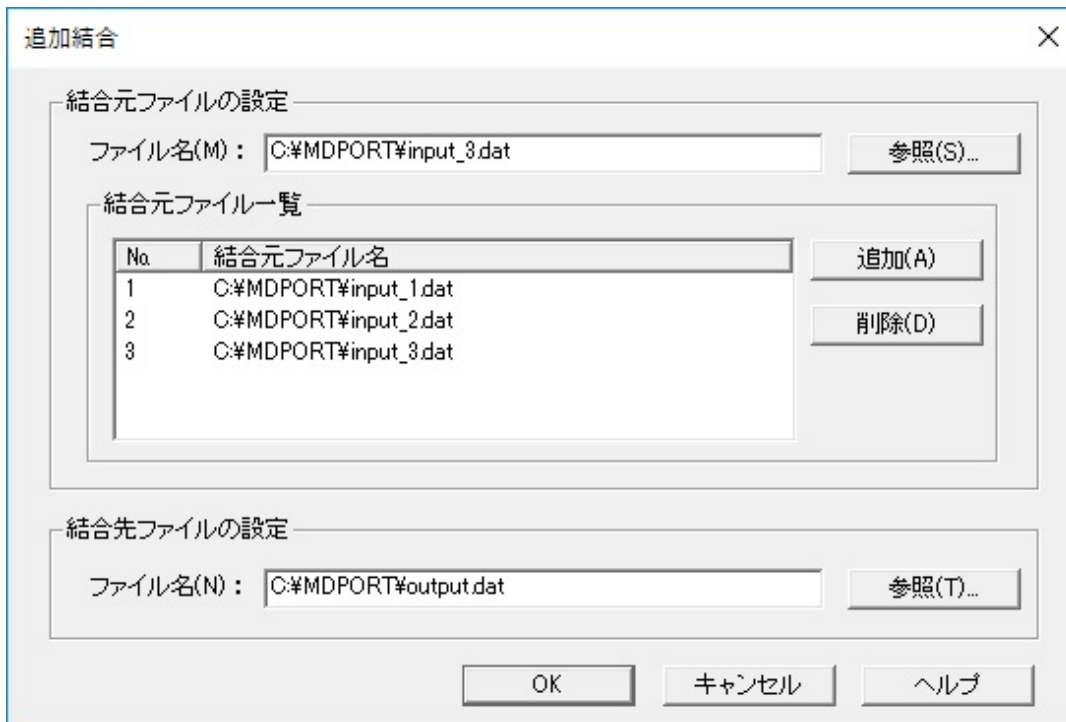
図C.26 追加結合の入出カイメージ図



実行例

「追加結合」の加工指示メニューから、「[図C.27 追加結合の設定](#)」をして、加工処理を実行します。

図C.27 追加結合の設定



設定した内容は、[加工指示ファイル](#)として保存できます。

参照

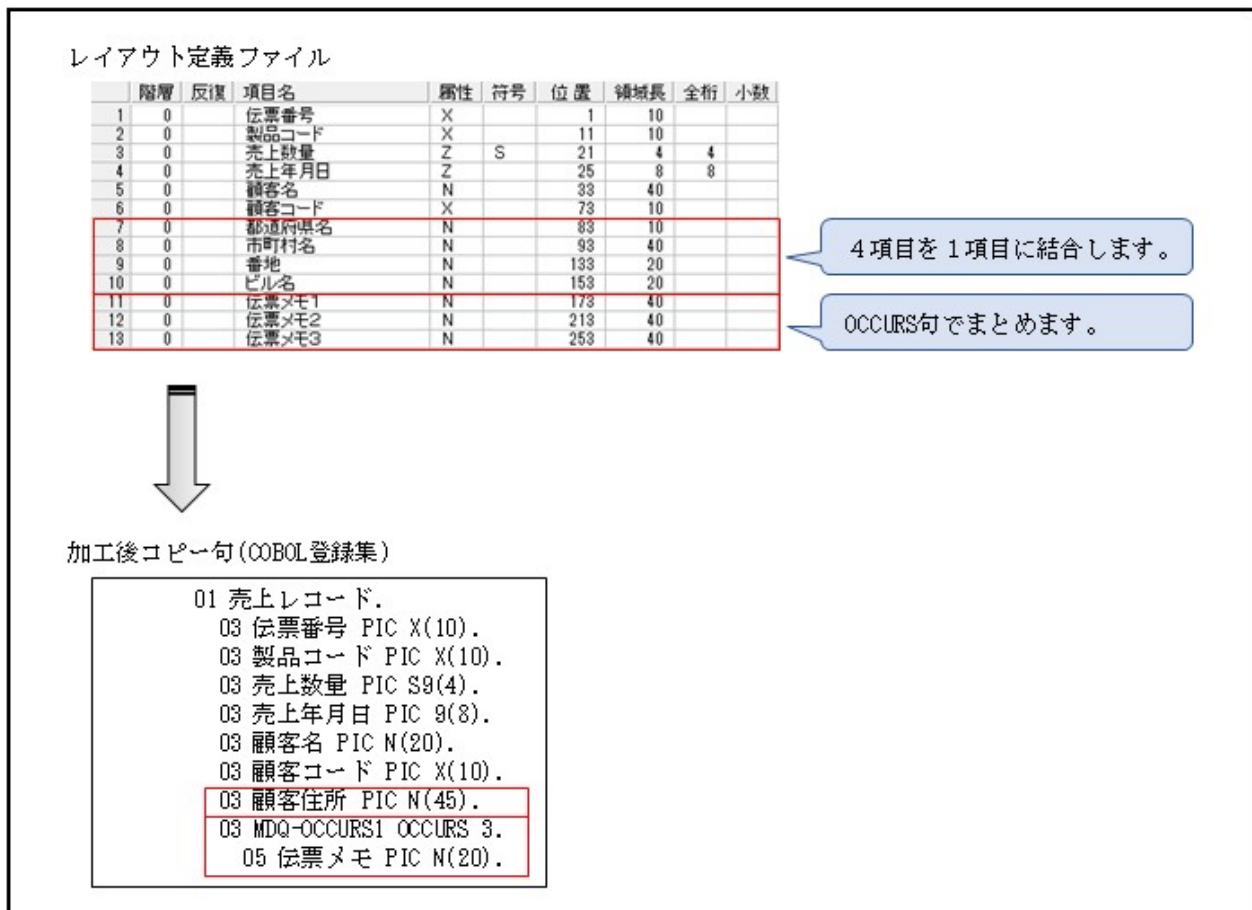
追加結合の操作手順については、「第3章 操作説明」の「[3.4.8 追加結合](#)」を参照してください。

C.2.7 コピー句生成(項目結合)

要件

レイアウト定義ファイルを入力として、項目の結合を行って、加工後コピー句(COBOL登録集)を出力します。

図C.28 コピー句生成(項目結合)の入出イメージ図



実行例

「コピー句生成(項目結合)」のツールメニューから、「図C.29 入出力情報の設定」および「図C.30 項目結合の設定」をして、加工処理を実行します。

図C.29 入出力情報の設定

入出力情報設定 (コピー句生成: 項目結合)

レイアウト定義ファイルの設定

レイアウト定義ファイル名(L): C:\MDPORT\combing_input.lay 参照(R)...

新規にレイアウト定義ファイルを生成する場合: レイアウト定義ファイル生成(O)...

レイアウト定義のレコード長:

入力データファイルの設定

ファイル名(M): 参照(S)...

出力ファイルの設定

ファイル名(N): 参照(T)...

加工後コピー句名(O): C:\MDPORT\combing_output.cob 参照(U)...

OK キャンセル ヘルプ

図C.30 項目結合の設定

項目結合

レイアウト定義ファイル名: C:\MDPORT\combing_input.lay

入力項目一覧(結合前)

項目名	属性
顧客名	N(20)
顧客コード	X(10)
都道府県名	N(5)
市町村名	N(20)
番地	N(10)
ビル名	N(10)
伝票メモ1	N(20)
伝票メモ2	N(20)
伝票メモ3	N(20)

出力項目一覧(結合後)

項目名	属性
伝票番号	X(10)
製品コード	X(10)
売上数量	S Z(4,0)
売上年月日	Z(8,0)
顧客名	N(20)
顧客コード	X(10)
顧客住所	N(45)
繰返し項目1	3
伝票メモ	N(20)
--- 最下位行 ---	

項目結合(O)...

OCCURS句作成(O)...

OK キャンセル ヘルプ

 参照

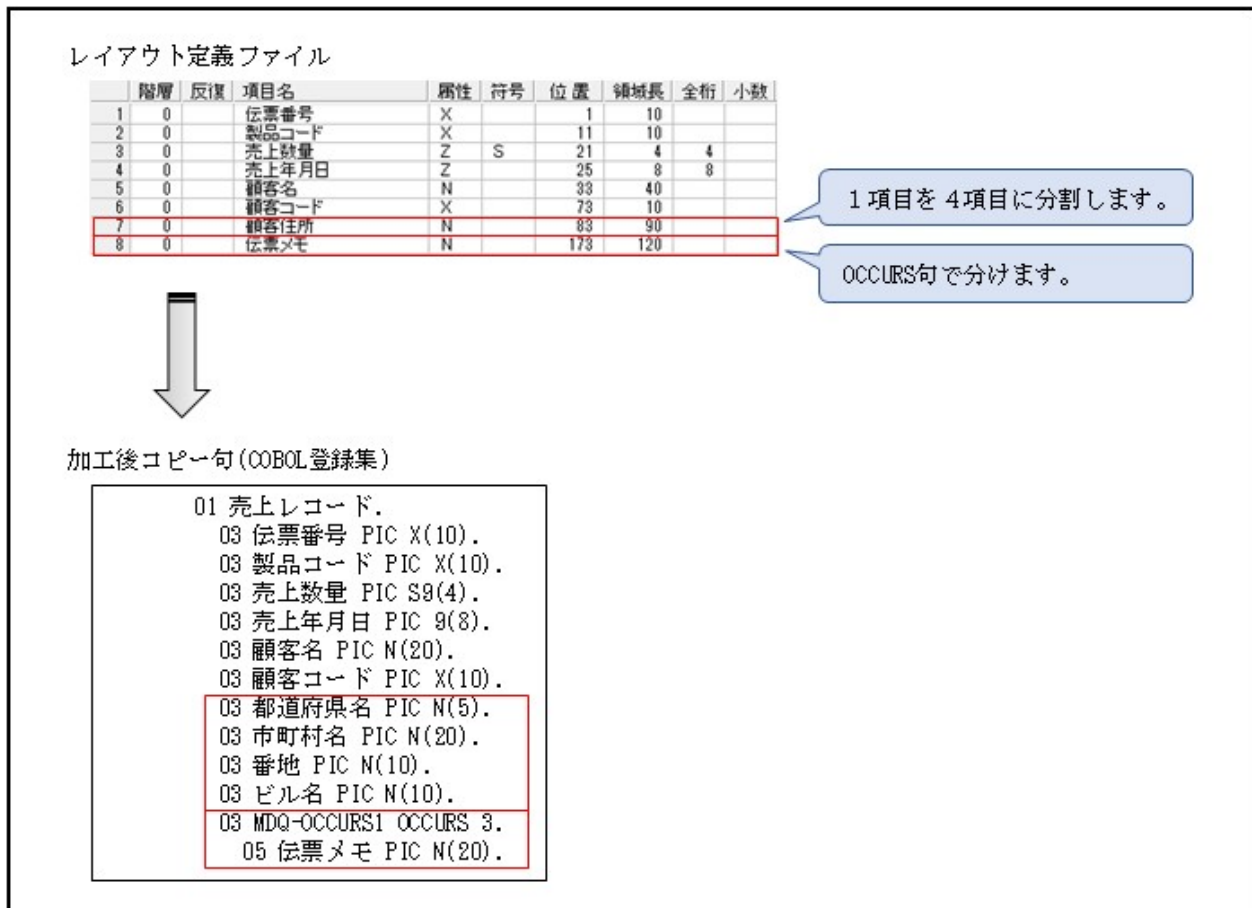
コピー句生成の操作手順については、「第3章 操作説明」の「3.4.9 コピー句生成」を参照してください。

C.2.8 コピー句生成(項目分割)

要件

レイアウト定義ファイルを入力として、項目の分割を行って、加工後コピー句(COBOL登録集)を出力します。

図C.31 コピー句生成(項目分割)の入出イメージ図



実行例

「コピー句生成(項目分割)」のツールメニューから、「[図C.32 入出力情報の設定](#)」および「[図C.33 項目分割の設定](#)」をして、加工処理を実行します。

図C.32 入出力情報の設定

入出力情報設定 (コピー句生成: 項目分割)

レイアウト定義ファイルの設定

レイアウト定義ファイル名(L): C:\MDPORT\division_input.lay 参照(R)...

新規にレイアウト定義ファイルを生成する場合: レイアウト定義ファイル生成(O)...

レイアウト定義のレコード長:

入力データファイルの設定

ファイル名(M): 参照(S)...

出力ファイルの設定

ファイル名(N): 参照(T)...

加工後コピー句名(O): C:\MDPORT\division_output.cob 参照(U)...

OK キャンセル ヘルプ

図C.33 項目分割の設定

項目分割

レイアウト定義ファイル名: C:\MDPORT\division_input.lay

入力項目一覧(分割前)		出力項目一覧(分割後)	
基本項目名(分割前)	属性	基本項目名(分割後)	属性
売上年月日	Z(8,0)	売上年月日	Z(8,0)
顧客名	N(20)	顧客名	N(20)
顧客コード	X(10)	顧客コード	X(10)
顧客住所	N(45)	都道府県名	N(5)
		市町村名	N(20)
		番地	N(10)
		ビル名	N(10)
伝票メモ	N(60)	繰返し項目1	3
		伝票メモ	N(20)

項目分割(D)...

OCCURS句作成(O)...

OK キャンセル ヘルプ

 参照

コピー句生成の操作手順については、「第3章 操作説明」の「3.4.9 コピー句生成」を参照してください。

用語集

Charset Manager

富士通標準コード変換を提供しているWindows上のソフトウェアです。

動作保証しているCharset Managerのバージョン・レベルについては、MDPORTの「ソフトウェア説明書」を参照してください。

Charset Manager変換

Charset Managerを使用した変換を、MDPORTではCharset Manager変換と呼んでいます。

詳しくは、「ユーザーズガイド 画面操作編」の「5.1.3 2バイト系コード変換」を参照してください。

COBOLファイル

Windows上のCOBOLアプリケーションプログラムでアクセスするファイル形式です。

ファイル編成の種類として、レコード順ファイル、行順ファイル、相対ファイル、索引ファイルがあります。

COBOL登録集

COBOL言語で記述された、レコード記述項のCOPY原始文ソースを指しています。

CSV形式

項目間をカンマ(区切り文字)で区切った形式のテキストファイルを指します。

MDPORTでは区切り文字がカンマ以外でもCSV形式と呼びます。一般的に変長レコードです。

CSV形式であれば、表計算ソフトや各種RDBロードファイル、awk等のユーティリティへと応用することができます。

DDL

RDB(リレーショナルデータベース)のテーブル定義文です。

Data Definition Languageの略です。データ定義言語ともいいます。

Informix

IBM社のリレーショナルデータベース管理システム(RDBMS)です。

IBM社が買収した企業(Informix社)が開発したことが起源となっています。

NetCOBOL

富士通が開発した、Windows上におけるCOBOLプログラムの開発環境製品です。

MDPORTでは、COBOLファイルを扱うために必要なソフトウェアです。

動作保証しているNetCOBOLのバージョン・レベルについては、MDPORTの「ソフトウェア説明書」を参照してください。

Oracle

オラクル社が開発したリレーショナルデータベース管理システム(RDBMS)です。

RDBMS

RDB(リレーショナルデータベース)を管理するソフトウェアです。

1件のデータを複数の項目の集合体として表現し、データの集合をテーブルと呼ばれる表で扱います。

番号や名前等の情報をキーとして、データの抽出・結合・削除を行うことができます。

Relational DataBase Management Systemの略です。リレーショナルデータベース管理システムともいいます。

SQL Server

マイクロソフト社が開発したリレーショナルデータベース管理システム(RDBMS)です。

Symfoware

富士通が開発したリレーショナルデータベース管理システム(RDBMS)です。

アライメント

プログラムをコンパイルする際、コンパイラはそのコンピュータやアプリケーションが最適に動けるような位置に構造体のメンバーを配置します。

そのときは次のような規則が成り立ちます。

次に配置するメンバーのデータ型のサイズと指定されたアライメントサイズのうち、小さい方の値の整数倍の位置に配置します。

また、構造体のサイズ(sizeof関数で求められる)を決定する際にも、次のような規則が成り立ちます。

構造体のメンバーにおいて、最も大きいデータ型のサイズと、指定されたアライメントサイズのうち、小さい方の値の整数倍の値が構造体のサイズとなります。

MDPORTではアライメントにより項目(メンバー)間に隙間が発生する場合、@DUMMYという項目を追加して対応しています。

アライメントサイズ

データ領域を割り当てる際、そのコンピュータやアプリケーションが最適に動けるよう、ある値の整数倍のアドレスに変数や構造体メンバーが割り当てられます。

そのときのある値というのがアライメントサイズで、アプリケーションのコンパイル時に指定します。

通常、1バイト、2バイト、4バイト、8バイト、16バイトのうちのいずれかです。

デフォルトは8バイトです。

インクルードファイル

C言語で記述された、構造体定義のヘッダーファイルを指しています。

エンディアン

多バイト(2バイト以上)のデータをメモリ上に配置する方式の種類のことです。

ビッグエンディアン(big endian)とリトルエンディアン(little endian)の2種類があり、マシンやOS、プログラム言語によって形式が異なります。

シグネチャ

Unicodeのエンディアンを示すためにファイルの先頭に付加される数バイトのデータです。

シグネチャにより、UCS2/UTF16(リトルエンディアン)、UCS2/UTF16(ビッグエンディアン)、UTF32(リトルエンディアン)、UTF32(ビッグエンディアン)、UTF8のどれなのかを識別することができます。

BOM(Byte Order Mark)と同じ意味です。

シフトコード

1バイト文字と2バイト文字の切替えのための制御コードのことです。

データファイル形式

レコード上の相対バイト位置で項目を区切るデータファイルの形式を指します。

COBOLプログラムで作成されたファイルはこの形式です。

データファイル変換

複数の項目で構成されたレイアウトを意識したファイル変換モードです。

一般的にアプリケーションでの処理対象となるデータファイルを変換する場合に指定します。

CSV形式ファイルを対象とする場合も、データファイル変換を使用します。

データ加工機能エラーファイル

データ加工機能の処理でエラーが発生した場合に、エラー情報が出力されるファイルです。
テキストファイルの形式で、Windows標準のメモ帳等で内容を参照できます。
拡張子は“.err”です。

テキスト変換

ソース等のテキストファイルを変換するファイル変換モードです。

ヌル表示域

各項目の先頭に付加される2バイトの領域です。
この領域の内容が0xFFFFの場合、その項目はNULLであることを示し、0x0000の場合はNULLでないことを示します。

ビッグエンディアン

低アドレスのバイト位置が上位桁を表す形式です。
SPARC等のUNIXマシンではビッグエンディアンです。

マスクデータファイル

マスク機能で、置き換えたい架空の値を指定するファイルです。
ファイル名はレイアウト定義におけるマスク対象の項目名で、拡張子は“.csv”です。

マルチレイアウト

1つのファイル内において、複数のレコードレイアウトが存在することを指します。
MDPORTでは、1つのレイアウト定義ファイルに対して、複数のレイアウトの適用条件を設定することにより、マルチレイアウトのデータを変換することができます。

リトルエンディアン

低アドレスのバイト位置が下位桁を表す形式です。
Windows上のプログラムはリトルエンディアンです。

レイアウト定義ファイル

レイアウト定義機能で作成するファイルです。
データファイル変換を行うには、レイアウト定義ファイルが必須となります。
データ加工機能では、追加結合以外のデータ加工処理で、レイアウト定義ファイルが必須となります。
拡張子は“.lay”です。

一般ファイル

Windows上のCOBOLファイル以外を、MDPORTでは一般ファイルと呼びます。
一般ファイルとしては以下のものが挙げられます。

- ・ 汎用機・オフコンやUNIX機上から移入されたバイナリファイル
- ・ 汎用機・オフコンやUNIX機上へ移出するバイナリファイル
- ・ Windows(DOS)やUNIXで扱うテキストファイル

加工指示ファイル

データ加工機能の加工指示内容を保存するファイルです。
保存した加工指示ファイルを開くことにより、保存時の内容で繰り返しデータ加工処理を行うことができます。

加工指示ファイルを使用する際に、入出力ファイル名等の内容を変更して実行することも可能です。
拡張子は“.mdq”です。

解析エラーファイル

既存資産の取り込み時に解析エラーが発生した場合に、エラー情報が出力されるファイルです。
テキストファイルの形式で、Windows標準のメモ帳等で内容を参照できます。
既存C言語資産の取り込み時に解析エラーが発生した場合、インクルードファイル名の末尾に拡張子“.txt”が付加されたファイル名で作成されます。

字形重視

字形を重視した変換です。
文字がJIS領域にあるか拡張域にあるかには関わらず、新字体は新字体へ、旧字体は旧字体へ、同じ字体のコードの変換を行います。

縮退変換

両方向への変換と片方向への変換を両方持つコードが存在する変換のことです。
例えば、新字体と旧字体の両方を持っているコード系から、新字体しか持っていないコード系へ変換する場合に、縮退変換になります。

他社コード変換

MDPORTの他社コード変換テーブルを参照、またはCharset Managerを使用することによって、富士通以外の他社コード体系を扱うことができます。
詳しくは、「ユーザーズガイド 画面操作編」の「5.1.4 他社コード変換」を参照してください。

代替文字

コード変換エラー等で、変換先のコードに変換できなかった文字の代わりに出力される文字です。

抽出漏れファイル

レコード抽出機能で、条件に合わないレコードを出力する設定にした場合に、条件に一致しなかった入力レコードが出力されるファイルです。
抽出漏れファイルには、MDPORT変換前のデータが出力されるため、再度レコード抽出処理を行う際の入力ファイルとして利用することができます。

標準変換

Charset Managerを使用せずに、MDPORT内部の算術式に従ってコード変換を行う方法を、MDPORTでは標準変換と呼んでいます。
詳しくは、「ユーザーズガイド 画面操作編」の「5.1.3 2バイト系コード変換」を参照してください。

変換エラーファイル

変換エラーが発生した場合に、エラー情報が出力されるファイルです。
テキストファイルの形式で、Windows標準のメモ帳等で内容を参照できます。
拡張子は“.ert”です。

変換指示ファイル

MDPORT変換指示ウィザードで指定した変換指示内容を保存するファイルです。
保存した変換指示ファイルを開くことにより、保存時の内容で繰り返し変換を行うことができます。
変換指示ファイルを使用する際に、入出力ファイル名等の内容を変更して実行することも可能です。
拡張子は“.mdp”です。

利用者定義変換テーブル

利用者定義文字(外字)や拡張漢字/非漢字を任意の文字へ変換するための、コードの対応づけを行うテーブルファイルです。
拡張子は“.cnv”です。

領域重視

JIS領域を重視した変換です。
字体が新字体であるか旧字体であるかには関わらず、JIS領域の文字同士の変換を行います。

*(項目名)

ポインタ型の項目の場合、項目名の先頭に“*”が付加されます。
レイアウト定義が生成される際、無変換が指定されます。
また、データ形式がデータファイル形式からCSV形式に変更された場合、この項目の属性は“なし(-)”に変更されます。

@DUMMY

アライメント“WORD_ALIGNMENT”による項目間の隙間に対応させた項目です。
レイアウト定義が生成される際、無変換が指定されます。
また、データ形式がデータファイル形式からCSV形式に変更された場合、この項目の属性は“なし(-)”に変更されます。